

奇譚クラブ

1957年 3月号

創 陶雲の悲歌「続・潰滅の前夜」
作 「花と朔風」

北原純子 土路草一



3月号

昭和三十一年三月二十八日印刷 (第十一号) 三月号 (毎月一回一日発行)
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

奇譚クラブ

昭和三十三年三月号

奇譚クラブ

昭和三十三年三月二十八日印刷 三月号 (第十一号第三号)
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

定価二百円

(税別八円)

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



IBM. 2805

〔奇譚クラブ最近号主要目次〕

完全なる異國	坂本
戦慄怪談屋敷	岸本
体臭日記	青柳
葉土やしき(異常体験記)	相沢
おそい目覚め	足立
灰色のノット	矢崎
箱の鍵	多山
奴隷に与える手紙	森山
撫子の花散りぬ	北川
奇妙な花	森
貞めとフェチズム	加野
魔の白鳥	加野
生理の研究(二)	須藤
紅魔殿	佐次
陰花への憧憬	青川
悲風磨上原	瀬川
玉稿落穂集	瀬川
アブノーマル・モノローグ	竹谷
拷問に笑う女	辻村

○六月号(復刊第五号) 定価二百円(¥8円)

美貌の屈辱	四馬
孤島の捕われ人	アメリ
佐賀美智子ボーズ集	曼陀羅
深夜のホール	須川
修道院の神室	宮崎
赤い花は泣いている(第三回)	藤井
幽霊の自己愛について	門田
流馬の自己愛について	門田
悲風磨上原	瀬川
奴隷に与える手紙	森山
私のアイディアと回想	菅原
サデイズム小説の魔力	林
コルセツトの魔力	林

変った切腹の提	山中
マソ・スクラツツ帳より	青木
日美なる被虐の幻想	沢
脱腸に対する私見	伊藤
小説の唐妻日記	竹谷
現代マソヒズム芸術時評	原
お仕置遊戯	松井
フェチズムの文学ノット	S・T
緊縛女性体考	青木
「輝」先生	青木
最近の縛り時代映画から	須藤
お膳の研究	須藤
玉稿落穂集	瀬川
映画に現れたムツキ	赤井
虐げられる娘	藤井
ナチスの暴虐	藤井
娘の告白	東
サデイズムと女の素足	由木
サデイズムとツクシな漫画	藤木

○七月号(復刊第六号) 定価二百円(¥8円)

執束服の装束	四馬
道化者の集まり(アメリカ雑誌より)	アメリ
オルソン集	二丁拳銃
女士官	木製の兵
新人モデル紹介	花坂
パイアの馬	北原
馬を御す全嬢	北原
大衆文学に現れたための描写	北原
若歌の自己愛について(二)	門田
幽霊の自己愛について	門田
お膳を据えた女の魅力	岩井
赤い花は泣いている(第四回)	松井
少年姿体美進法	鹿谷
私のコレクシヨンより	角田
「め」の芝居雑考	山口
少年雑誌	山口

奇妙な倒錯の恋	(新聞雑誌通信)
女火	雪俊
活稿集	青木
玉稿落穂集	瀬川
被虐の切腹幻想	高村
女性の下着マニアの告白	高村
或る下着マニアの告白	高村
或る軍婦人の死	古井
マソヒズム断想	土路
H氏の奇妙な告白	佐藤
サデイズム小説の魔力	北谷
私はおしめマニア	多磨
乙女の腹切抄	鳴竹

○八月号(復刊第七号) 定価二百円(¥8円)

美しい床の間	四馬
すべりた	秋恵子
米誌にみた緊縛面欧米式新スタイル	北原
華々しき私刑	北原
大衆文学に現れた責めの描写	藤井
無惨なマニア	京
二等兵時代の思い出	高村
縛りある中を	近東
縛りある中を	近東
光りある中を	近東
一読者としての公開状	川
元太の腹切り	川
歴史に現れた三人の美少年	西村
幽霊の自己愛について	門田
目決する軍看護婦たち	東
赤い花は泣いている	松井
最近の縛り映画から	角田
私のコレクシヨンより	山口
統一少年雑誌	山口

K誌編集方針に就いて	佐藤
酒後の夜	千路
緊縛映画速報欄	白
最近の映画から	白
春田ルミ様まいる	白
私の蒐集帖(絹草紙より)	緒
玉稿落穂集	瀬川
新聞紙上に出た切腹実話	藤井
探偵小説新考	東
倒錯の英雄、織田信長	笠
とりこの白人娘	藤井

○九月号(復刊第八号) 定価二百円(¥8円)

美しい飼育物の調教	四馬
吊りを加味したアイデア	北原
緊縛フォト二題	須川
ナイフ投げの的	北原
女学生	北原
欧米式新スタイル二題	北原
寄生虫	壬生
恋の脱殻	松井
へんしゅう余滴	本
飯場往來なぐりこみ	二
家畜化小説の登場を喜ぶ	沼
紅蓮(くれん)	青
光りある中を	近
文学に現れた同性愛	藤
私の「ふんどし」	松
被虐の自己愛について	門
マニアの女性の手記	池
奈子の自己愛について	門
沼正三の手帖	沼
お膳を据える女性雑誌	松
映画に現れた拷問場面	左
現代マソヒズム芸術時評	東
探偵小説新考	本
芝居の責め	由



奇譚クラブ 復刊第十三号 三月 号 目次	
新着フオト紹介 (アメリカ)	四馬 孝・厘
スクリーンで縛られた女性たち	栗原 伸・画
晦冥の悲歌 (続・潰滅の前夜) より	(萩 千恵子嬢)
習作	栗原 伸・画
浴槽の新妻	栗原 伸・画
森の小径で	(萩 千恵子嬢)
大映映画『魔の花嫁衣裳』より (スチール)	
我が異常性の記	南 時夫 18
切抜紹介二題	須藤 律夫 22
花と朔風	北原 純子 24
『花のバリの裏話』	坂口 利夫 32
髪と絵	荒尾 譲介 34
レポート	春木 俊野 40
マゾヒズム、見たたり聞いたりためしたり (2)	嵯峨美也子 43
正月映画を中心の「縛られ映画」	本田 由郎 44
あぶり責め奇聞	阿川 準 50
フエチに関する切抜きから (3)	中谷 冷一 52
『捕われの令嬢についての一私見』	沼 正三 54
ある夢想家の手帳から	佐々木ツトム 58
『悪魔の勝利を夢みる男』	



クムチ打ち々とク緊縛々補遺	間島 真一 65
体験記 或る女装マニヤの記	森本 信一 66
流腸レポート	島 直樹 69
特異な角度から (2)	九雅 節夫 70
トリコモナス	
私のふんどし (4)	松原三千代 79
燃ゆる男装	藤山 秀緒 82
或るアブ・マニア告白	東 一郎 88
映画速報欄	千葉 栄市 90
女同志の吊り責め	岸本 青柳 92
未来幻想 家畜人ヤプー (第四回)	沼 正三 96
マゾ小説 刺青の朝	鳴山 能平 10
禪美悲願	加藤 千春 12
ある女給の体験 (2)	日下 絹子 14
研究発表 相撲美論	東 一郎 130
サジスチンの半生記 (4)	鷹野めぐみ 132
「流腸に」関する告白	島 直樹 135
女装好きな男	
虐待された女中	佐原 弘 138
少女の切腹	中康 弘通 140
電気責に関するノート (続)	甲斐 仁参 141
映画速報欄	
邦画もシネスコの縛り映画へ	嵯峨美也子 146
手帳雑報欄	沼 正三 148
続・潰滅の前夜	土路 草一 148
スクリーンで縛られた女優たち	千葉 栄市 165

〔奇譚クラブ最近号主要目次〕

最近の映画から	白石 春夫
「切腹の歴史」	菅原 春夫
私のコレクシヨンより	角間 莊吉
五種の責	失念 生
なめくじ	大谷 絢子
玉稿落穂集	編集部
最近の縛り映画から	嵯峨美也子
○十月号(復刊第九号)	
口絵	定価二百円(十8円)
北原純子十月集、壊れ易き獲物	
刺青師の部屋、和蘭彫屋敷の謎	
現代マゾヒズム芸術時評参考資料	
引廻し、春日ルミ嬢、伊吹真佐子嬢	
米誌に見た緊縛写真吹米式新スタイル	
サディズム・シオン詳察	藤木 仙治
お灸の女王コンクール	岩瀬 洋一
天は知つてゐる	宝塚 三三夫
光りある中を	近東 規矩也
大衆雑誌と貴族	青山 三枝吉
捨犬	青葉 眞一
私の洗滌プレイ	ラッパマン
受刑生活の思い出	福村 光治
現代マゾヒズム芸術時評	原 忠正
寄生虫	壬生 すみ子
「家畜化小説を喜ぶ」に共鳴	山生 和夫
「ますらお派出夫」の犯罪	青山 三枝吉
泥棒に縛られた話二件	池田 正一
エスキモー娘の切腹	本間 正宏
ある夢想家の手帖から	沼田 正三
「洗滌」に関するレポート	沼田 正三
締めつけられた女優達	古賀 信司
泥棒に入られた南田洋子	古賀 信司
責め絵の今昔	伊藤 晴雨
「一男色者の手記」	矢野 重八
なめくじ	大谷 絢子
私のアイディア「晒し台」	羽村 京子
緊縛映画速報欄	千葉 栄一
探偵小説新考	東 栄一
サジスチンの半生記	鷹野 めぐみ

「同好和服マニア会」	逸名 居士
黒女皇	沼田 正三
読・乗馬ズボンの女腹切	藤山 秀緒
最近の映画から	白石 稔
○十二月号(復刊第十号)	
口絵	定価二百円(十8円)
新着フォト紹介(一)	
「いでゆ」より	北原純子・画
拘束服とマスク、欧米式新スタイル	
或るポーズ	(雲井久子)
現代マゾヒズム芸術時評	
濡れい子素描集	滝い子・画
文学に現れた責めの描写	藤見 重八
新橋で米兵同性心中	矢野 重八
私のふんどし(二)	松原 三千代
異性より同性に興味	畑村 一提供
コルセットへの魅力	東 規矩也
スカーフトへの魅力	山口 幸一
「少年期(母と子の手紙)」	山口 幸一
年獄の花嫁	鳴山 能平
黄色オラミ誕生	真木 不二夫
和装女の縛り責め展覧会	岸本 青柳
美女決闘場面のアイディア	小西 鉄二
光りある中を(完結篇)	近東 規矩也
麗毛礼賛	南 俊夫
女武者自刃	藤山 秀緒
黒女皇	沼田 正三
ある夢想家の手帖から	沼田 正三
醜態への幻想	淡島 美一郎
玉稿落穂集	編集部
魂を病む人	北原 純子
「F4」の独り言	近藤 純一
私の告白二題	青葉 眞一
家畜人ヤプー	沼田 正三
女性化願望と女性ホルモン	古井 真哉
系姫の体験	高橋 よしえ
麗日記	久留木 栄
最近の映画から	白石 稔
美とワイセツの限界	柳沢 吉保
緊縛映画速報欄	千葉 栄一

防声具使用による窒息死	近藤 純一
マゾ・クラブの結成を望む	山田 正男
バスガールに硫酸	東 規矩也
告白責めとフェチの自画像	越野 義郎
現代マゾヒズム芸術時評	原 忠正
昭和三十三年	
○一月号(復刊第十一号)	
口絵	【定価二百円】(十8円)
新着フォト紹介(アメリカ)	(2)
花嫁受難二題	北原純子・画
「ボウニー分岐点」の一場面	
呪門の妖鬼(水戸黄門漫遊記第十話)	須川 令子
ADESUGATA	北原純子・画
お灸せめ	
欧米式新スタイル(5)	藤見 重八
文学に現れた責めの描写	北原 純子
花と幽霊	阿川 純子
フエチに関する切抜きから	阿川 純子
天は知つてゐる	宝塚 三三夫
黄色オラミ誕生(第二部)	木真 不二夫
大奥深女決闘	京 斐子
電気責めに関するノート	甲斐 仁三
ある夢想家の手帖から	沼田 正三
女性切腹の体験(上)	田谷 敬生
ある女給の体験	日下 慎子
麻酔切腹	青葉 眞一
遊女八重路の責め	本門 由郎
女性の角度から(折檻と拷問)	長門 睦郎
特異な素足礼賛	九雅 秀緒
続々・乗馬ズボンの女腹切	藤山 正三
家畜人ヤプー(第二回)	沼田 正三
舞踊家師匠の責めの実験	岸本 青柳
少年期(母と子の手紙)(2)	山口 幸一
戦地での同性愛	東 規矩也
赤いネオンのアイディア	高井 与志夫
読者提供のアイディア	鷹野 めぐみ
サジスチンの半生記	弓矢 崇
「魔海の業火」	

児童雑誌にみた惨虐性	東 規矩也
玉稿落穂集	編集部
映画速報欄	藤山 秀緒
ヴェールを脱いだ肢体美	須川 令子
「ムチ打ち」と「緊縛」	千葉 栄一
緊縛映画と雑誌の挿絵	千葉 栄一
○二月号(復刊第十二号)	
口絵	【定価二百円】(十8円)
新着フォト紹介(アメリカ)	(3)
洋画スチール名場面集(四場面)	
北原純子責め集「捕われの令嬢」	「庭
先でのお仕置	
猿轡を嚙まれた女優たち	
欧米式新スタイル(6)	
我が異常性の記	南 規矩也
オーストリアの女腹切	須川 令子
赤い魔城	青葉 眞一
ある夢想家の手帖から	沼田 正三
姫君に手を出すな	本門 由郎
花と幽霊(二)	北原 純子
マゾヒズム見たたり聞いたり	春木 俊夫
私は街の道化者	丘 与志夫
サジスチンの半生記(三)	鷹野 めぐみ
秀緒の告白	藤山 秀緒
家畜人ヤプー(第三回)	沼田 正三
サディズムの芽	甲斐 仁三
女教員の責め折檻	岸本 青柳
異人屋敷の裸女	本門 由郎
お灸の女王コンクール	京 斐子
現代マゾヒズム芸術時評	白田 忠正
話の屑籠	辻 隆
フエチに関する切抜きから(2)	阿川 純子
白衣の傍観者	高井 与志夫
読者提供のアイディア	鷹野 めぐみ
「スロース・クラブ会則」	並木 新一
私の「縛り美五原則」に就て	月岡 地
洗滌とおむつ(二)	松原 三千代
秋のふんどし	

新着フォト紹介 (アメリカ)



られた女優たち



1. 女優名（花柳小菊） 映画の名題名（薩摩飛脚）



2. 女優名（若水美子） 映画の題名（人喰い狒々）

||||| スクリーンで縛



3. 女優名（長谷川裕見子）映画の題名（風雲将棋谷）



4. 女優名（月丘夢路）映画の題名（黄金弁天）

・ 晦冥の悲啾 (続・潰滅の前夜) より

四馬孝・画





習 作

栗 原 伸・画

浴槽の新妻



栗原 伸・画

森の小径で

モデル (萩 千恵子嬢)



大映映画 「魔の花嫁衣裳」 より

〈南左斗子と高松英郎〉



(詳細の解説は本誌31年10月号一三三頁「緊縛映画速報欄」△千葉栄市▽参照のこと)

新しい文献研究誌

奇譚クラブ

1957年 3月号

(第十一卷 第三号 通刊第九十三号)





「体験告白手記」

我が異常性の記

南 時 夫

フエティシズム

Ⅱ フラジャヤヘーの狂想Ⅱ

私は前回の手記により女装マニアの一人であることを告白致しました。男娼でもない私が女装して東京の街を歩いてみた経験は、もう今後その様なことは、その実現が殆んど不可能であると思われるだけに貴重な体験でした。女装愛好者がそのまゝ女性の下着愛好という奇妙な性癖を持っているということは当然なことでありましょう。女装するにはまず女性の衣類が必要です。

それも完全な女装をする為には下着から揃えねばなりません。私の前述の体験はその意味からいって余りにも不完全なものでした。それは季節が冬であったので出来得たことで、その他の時期ならばごまかすことは至難であつたろうと思います。冬であれば女物のオーバーと靴（下駄でも結構）それにネッカチーフでも揃えればズボンのまゝで外出しても可笑しいことはないのです。でも女装マニアが欲するのは他から自分が見られたいと思うことはもとより、自分自らも女であると錯覚すること

に依る妖しげな陶醉に陥ることなのです。そのために矢張り直接肌に触れる下着から女性の感触を要求するのも当然でありましょう。パンティ、フラジャヤ、シユミーズといった女性特有の下着を着けることによってその異様な感触に酔うのです。それはその着用が外部からは見えなくとも、それによつて起る異様な快感は女装愛好の、又下着愛好の者のみが感知し得るものなのです。男が女の下着に憧れそれを身にまとい、恍惚たる表情をする。異常性格の中でもこれ程異常なことはありません。

サディズム、マゾヒズムその他の形態は確かに異常性格の一つであるけれども、しかしながらそれは常人に比してその傾向が量的に又質的に強度であるというのだけに過ぎません。何故ならば心理学的に云ってもそれらのものは普通人にも潜在しているからです。私はそれ故サディズム、マゾヒズムを決して「変態」であると思っていません。しかしながらフェティシズム即ち異性の下着を愛好し煩ずりをし、はては身に着け、その感触に狂喜するということは如何に理由づけ様としても「変態」という名を冠せずにはいられないものと云えましょう。所謂ノーマルな人の中でもデパートの下着売場の製品等に興味を持つ人はおられます。でも異性が一旦身に着けた物は嫌悪！とは云わないまでも自分の着ている下着と同様に、早く洗って綺麗にしておけばいいのに」と思うのが常態であると思われまゝ。下着愛好者はこれと全く逆な感覚をもっています。全然新しい製品より一度女性が身に着けた物を喜ぶ。一度よりも二度、一週間よりも二週間、はては女性の汗にまみれ、体臭に染り、汚れに汚れているものをより狂想する。彼等に新品ともう汚れて不用になったものを選ばせれば躊躇なく後者を採るであります。デパート

へ行けばいくらでも購入出来るのに、敢てモデル諸嬢の着用したものを注文する奇く誌上の読者通信をみても、そのことは十分想像がつくのです。下着にたゞ憧れるというのではありません。それを己が身に着けてはそれを口中に含み、それで猿轡をはめられることを無上の喜びとする。自分の全感覚、全触覚を総動員して異性の体臭を吸収しようとする。この一事からして異常性格の最たるものと云えましょう。女性緊縛の傾向の人は多少勇気を出せば、そして酒の勢でも借りれば自分のこの性を口外することも不可能ではありませんまい。しかしフェティシストだけはその変態の殻の中に閉込めて自分の孤独の世界にのみ徘徊せねばならないのです。それがフェティシストのはかない宿命でもあるのです。

私がこの様な手記を載せ、限られた人達に対してにせよ自分のこの異常さを打明け得るのも奇くというこの特殊な分野を扱っている雑誌があるからこそ出来得るのであって、そうでなかったならば私も一生、自分一人の暗い秘めた殻の中で懊悩せざるを得なかったと思われまゝ。私の下着愛好は女性緊縛、女装愛好といった性癖と同時に生じたものであることは当然であり、特に女装に異様な興味を持てばその必然的結果

として女性の下着に執着することも又当然といえましよう。しかしこの私の下着愛好欲を敢て発表したかったのは、これまでの奇くにみられたこの種の記事を読んで自分の趣味が一寸変っている点に気がついたからです。この分野の代表的なものは和装ならば腰巻、洋装ならばパンティ、ズロース等への狂想でした。二つとも女性の下半身を覆うものとして女性の体臭を最もよく吸収する可能性をもつ下着であることからして合点のゆくものだと思います。私は「女装」の項で述べた様に洋装を好みます。そのことからして腰巻というものには余り興味がないのです。お腰をまとったとて単に巾広い布を巻いたというだけで下着としての価値が薄い様な気がするのです（腰巻狂想の人は「下着」というより、そこからの女性の体臭を吸収することが主なる喜びなのではないかと思えます）。

私は洋装に関する限り、女の人が身につける一切の衣類に興味をもちます。種々のアクセサリ、ワンピース、スカート、ストッキングその他外部から見えるものとはより、ジュミーズ、パンティ、ズロースブルーマ、ブラジャー等々。（近頃は女の人の下着も複雑になって身体の線を整えるために各種の下着も工夫され、それぞれに

名称がある様ですが、どうもそこまで勉強することは出来ず、この点御容赦下さい。こう書けば何等一般の下着愛好者と變りないとお思いでしょう。ところが私はこれ等の下着の中で最後に挙げたブラジャーに自分でも判らなくなる程の異常な執着を覚えるのです。一般のフエティシストならその種類も余り問わないでしょう。又は「腰巻」「パンティ」という物の方がより愛着を感じるでありましょう。私は最も肌に近いパンティとブラジャーを比べて、前者に五の興味を持てば私は後者には十の、或いは二十、三十、それ以上の興味をもつのです。パンティは確かに腰巻と同様、女性の体臭を吸収する意味で最も大きな存在でしょう。しかしそれは男性のパンツとその形の上でも、その着ける意味も大差ありません。男性がパンツをぬいで女性のパンティもしくはブルーマをはいたとしても、そう大して可笑しくはないと思います。ブラジャーに関してはこれと全然違う意味をもっています。男がブラジャーを着けたとしたら可笑しいというより、まさに狂気でありましょう。それは男性には何等それを着ける効用がないからです。乳房と云う女性にだけしか存しない女性のシンボルと云えるものに対してのみ効用をもちうる下着。

私の異常な感覚はこの一点に集中されざるを得ないので。『女装』の項で記した様にマニアは女装して女になりたいと思う。自分は女になったのだと思いたい女としてみられたい。この心理を押し進めてゆけば女性にだけあるもの、女性にだけ必要な下着に憧れ、それに狂想する心理も又必然であることは論をまちますまい。ブラジャーを着けその中に何かを挿入し、女性のシンボルたる乳房のふくらみを作り、それをなぜかすって、嗚呼私は女になったのだ。このふくらみを見たら人は女と思うだろう。こう考え、身をくねらせ、限りなき陶醉に浸ることが私の下着愛好の特有さなのです。乳当てⅡブラジャー嗚呼!!私のはあの形、あの圧迫、あのふくらみを想像しただけで異様な快感が体内を馳せ廻る。私のこの異常性は多少極端であって他の下着、例えばパンティ等に比してその興味の持ち方が何倍もの上であることは前述しました。私はストリップ演劇を観ても所謂「全裸」には限られた興奮しかありません。乳房を見せると呉れる必要は無いのです。乳首に小さな紙その他を着けて出てくる踊り子にも満足しない。市販されているブラジャーをそのまま着けて出て来ればより満足なのです。下半身はパンティでもスカートでも結構で

す。海水浴に行っても女性のシングルの水着には興味無く、ダブルの、それもはつきりと分離したもの(近頃のものでは前後どちらか一方が連っているものがあるため)が好きなのです。私の、ブラジャーに対する注文は多少むずかしく、吊りひもはある方がよく、それも細い方を。背に廻っている部分もなるべく巾の狭い方がいいのです。最近ではブラジャーとコルセットとが連結している様なもの、又はイブニングドレス用の吊りひもがなく胸から下を全部連結して覆う様なものが多々あり女性間でも多く用いられている様ですが、私にはあくまで上下分離したプリミティブなものが好きなのです。パンティ並びにスカート等の下半身とブラジャーを着けた胸の間に女性特有のなめらかな肌が多く露れている方が良いのです。

私のこの趣味は一見その満足を得る機会が簡単に得られるものとお考えになられる方もおありでしょう。でも私は舞台等の踊り達が着けている種々着色された模様のあるものより、あくまで原始的(?)なものを欲するのです。舞台用のもの又は海水着、それを見る時、下着としてでなくあくまで上着として意識するからでしょう。勿論普通のシユミーズ姿よりこのダブルの海

水着姿の方がより良く感ぜられる点は微妙ですが。私が欲するのは、ブラジャーそのものなのです。この要求は余り実現されないのは事実です。街中をブラジャーだけで歩く女性は居ないでしょう。そうであれば下着のファッションショウにでも行く他は満足が得られますまい。しかしながら、この私の欲求を満足させて呉れる機会が皆無だとは申せません。それは盛夏の女性の服装にはほぼそれに近い姿を見出すことが出来るからです。盛夏の、そしてじりじりと照りつける太陽のもと、私は労をいとわず街中を往き来する。それは以上の様な私の要求を幾分でも満足させて呉れる女性を見付けるためなのです。

近頃は女性の服装もやかましくなり特に夏の下着は完全なものになりつつあります。特に流行の先端をゆく銀座の街をゆく女性達は頭から足の先まで、特に下着には特別の注意を払っていることが見られるのも世の中が多少なりと落着いて来て、身だしなみに眼を向ける余裕が出来た証拠でありましょう。しかし時にはハツとする程の姿をした女の人を見掛けることもあるのです。下半身は勿論スカートを着けているので透いて見えることはありませんが、上半身特に私の狂想するブラジャーが鮮明に見

えることがあるのです。あのナイロンのブラウスが流行っていた当時（現在は余り流行らなくなりましたが）はこの様なことは多くありました。上半身はブラジャーだけでその上から極めて薄い、それこそ肌を露出していると思われる程のナイロンブラウスを着て歩いている女の人。私はその様な人を見付けると非常な興奮と共に何処までもついて行きたくなるのです。背後から見ると上半身裸体（？）の中に横に一本だけ細い帯が入っている姿。私はそれを見ただけで押え切れない喜びに湧くのです。

しかしいくらナイロンブラウスでも前の方は色々な飾りその他があつて直接肌が透いて見えない様になっています。それ故、前からは私の欲求満足は無理でもあります。余り飾りのないブラウスで前からも、ブラジャーとその人のスカートとの間の肌が透けて見えることは珍らしいのです。現在では下着がすっかりしてきてブラジャー一つの下着で外出する女性は殆んど見られず、その上から少くともシユミーズを着ています。常人の眼からすれば極めて好ましい傾向でありましょう。しかし異常な私の眼からはどうも物足らなくなりました。駐留軍の滞在している地方では所謂「基地の女」が多く見られます。彼女等の服装は極めて

刺激的でブラジャーだけの上半身にショーツパンツといった姿に接し私の眼を楽しませて呉れます。又、フェイシスト共通の心理として私も物干台に異様な注意を払いますが、そこにブラジャーが掛っているのを見出した時の喜びは無上のものであります。

同じブラジャーでも乳房の型によって、それぞれ用い方が異なるそうですが私はなるべくぐつと吊り上げた、女性のあのふくよかな肌を、豊満な乳房を強く締めつけたもの、特に胸から背に廻った部分が脇の下あたりの肌に喰い込んだ様に着けているのが最も好しいと思うのです。（これはサディストであるからでもあります）男性がブラジャーを着けてもこの様な喰い込みが少いのは仕方ありません。下着愛好者はその下着類を集めねばなりません。私とてこの欲求の強さはもとよりですが、はっきり云えば、これといったものは持合せていないのです。入手する方法も無いし高価な金額で購ひ受ける資力もありません。

デパートに行けば購入も易しいでしょうが、前に述べた様に新品よりある程度着古した物を欲するのも恥しいながら真実なのです。私は自分でブラジャーを作ったことがあります。吊りひもの部分は環にして

(新聞通信)

切抜紹介二題

須藤 律 夫

首を入れる様にし、背後は自分で縛ることにして、乳房にあたる部分に綿をつめて作り上げたこの即製ブラジャーはよく私の女装プレイに役立ちました。でも私は矢張り本物のブラジャーが欲しい。奇巧誌上に見られる様に物干竿から盗むとか、何か非法な手段で集めてくるということは到底私には出来ないし、又したくありません。古着屋に行ったとて、着古したブラジャーを売っている筈ではないでしょう。ましていくら親しい女友達に対しても、貴女のしているブラジャーを譲って下さい。なんて云えるものではありません。

だから筆箒一ぱいに女性の着古した下着を集めた等の記事を見るにつけ、そう云う事が実際に出来るものかと思議でならぬのです。正直に云って私が所持しているブラジャーは姉の捨ててあるばかりのものと自分の自分で作ってみたものの二つであり姉の分はいくら異常な私でもそれを身に着けようとは思いません。しかるべき機会に捨てるか行李に返えしておく積りです。両親兄弟に対しては私はあくまでノーマルな人間でありたい。でも自分の恋人のもの、又はそのうでなくとも姉以外の他の女の人のものならば私は真に喜んで着けるでしょう。これは私の変な潔癖の現れでもあります。私はこの文章を通して読者の中の女の方やモ

デルの皆様が私のためにブラジャーを譲って下さらないかなあーと、はかない望みを持つのも以上の様な理由からです。

私は女の人が身につけていたそのブラジャーを着け、女装して縛られたい。その体臭の浸み込んだブラジャーで自分の鼻口を覆ってみたい。この異常さ、この変態性格を一人の自分は絶えずいながらも、もう一人の自分はその実現の早からんことを叫び続けているのです。

ブラジャー！ 嗚呼私はブラジャーが欲しい。

(第二回終り)

十人寄れば気は十色——とか、落語家の枕ではないが世の中には単に、事物の好き嫌いの外にも様々な習癖とか性癖とかのあるものだ。斯く云う筆者も、御多聞に洩れず、或は「人間」と云う最大公約数の中に、辛くも含まれているのかも知れない。扱、奇譚クラブには毎号様々の切抜が紹介されて、益々本誌の文献的価値を高めているが、私も最近のスクラップから面白いと思う二題を拾って見届けたいと思う。一つはパンティに対する執拗なフエティシユであり、他の一つは足首とお臍に対する興味ある「ナルティシズム」とでも解

す可きであろうか。

稀代のパンティ泥棒

半年で千五百枚盗む

(十二月十四日附内外タイムス)

女のパンティを盗む痴漢泥棒は最近よくあるが、つい先日カリフォルニア州オークランド市で逮捕されたハンス・ブランドという四十五才の男は、実に盗みも盗んだり、千五百枚のパンティを半年間に盗んだのだった。一日十枚のパンティとはまさに世界記録である。さて、千五百枚のパンティを持主に返す事になってその旨を公告したが、さすがに誰も受け取りに来ない。仕方なく警察でブランドに聞いてみたところ、この男、異常性格者のためか非常に記憶力がよく、盗んだものと盗んだ家をはっきりと分類出来ると答えたので「犯人を連れて各人の家に分配して廻るから、この数日は家をあけないように」と市民に警察が公告した。ところが当日は逆にほとんどの家が留守になってしまった。だがただ一人だけ、グローリア・ローズという女優の卵が敢然と警察に自分で受け取りに出頭して来た。調べると彼女の被害数は十八枚のパンティだった。彼女はサツ詰の記者に取り囲まれて「ねえ、私のこと、宣伝して」とニコリ微笑んだというから、上には上があるもの。

次は同紙十二月十日附「人生カルテ」欄より(解答豊島順三郎氏)

足指をしやぶる娘

自慰か? お臍も悪戯して満足げ

【問】一人娘の悪癖に悩む母親です。娘は小学校三年になりますが、ヒマさえあれば右足の中指をしやぶるクセがごさいます。ちやうど猿がノミをとるような恰好で人前もはばかりず平気で行うのです。そしてよく注意いたしますと、片方の手を衣服の下につこんでへそ穴からあのゴマをさかんにかき出し、満足げな表情をしております。たびたびがめるのですが、注意された時だけ気がついてやめ、やがて無意識的にくり返すのです。そのため足の指のその部分だけ湯上りのように真白く、おへその周囲が赤くなっております。思春期の男女によくあるといわれる自慰ではないかと心配しています。しかし学校の成績もよく、運動など屋外では活発に行っていて陰気なところは少しもないのですが、治す方法をお教え下さい。(世田ケ谷T子)

【答】手や足の指をしやぶることは、注意してみると生れて間もなく多くの子供たちに見られることで、決してめずらしいことではありません。このことを学問的に初めて研究

したのは一八七九年で、こんど事件のあったブタペストの小児科医リンドナーという人です。もちろん性的なものです。性欲というのは思春期になって初めて起るものではなくて、生れるとすぐあるものです。しかしはじめのうちは異性を求めるような形のものではなく、自分のからだの中で快感のある場所を探して、それを刺激して満足する程度のもです。これを自己色情といいます。その場所は口唇尿道、肛門、へそ、グランス、クリトリスなどの発情帯です。あなたのお嬢さんの場合は口唇の快感を求めているもので、それを起す助手としてたまたま足の指を使っているものです。そのうえ快感をいっそう強くする為にもう一つの発情帯のおへその刺激をしているわけです。これをやめさせる方法に西洋では厚い靴下をはかせたり、おへそに布をあてホータイをしたりしておりますが、あまり効果はないようです。注意さえすれば自然に治ります。変態性欲ではありません。(開業医、医博)

【お断り】

○年末より年始にかけて郵便ストのため大変郵便物の到着が遅延し、そのため度々の督促を頂くなど色々とお迷惑をお掛けして申し訳ありませんでした。当方は確実に発送いたしておりますから何卒御諒承願います(発送係)

花と朔風

北原純子

★
健は裏木戸にもたれて誰かを待っていた。
道子を見ると不機嫌な顔をして

「何だ？」と詰問口調で言った。

ふと、傍の身丈以上もあるあじさいの花叢が揺れ出して、中の一部が崩れ伏したかと思う程の白さで、ヒロミが姿を現した。派手な花柄のアロハに、白いシヨート・パンツで、白いエナメルサンダルを履いている。

道子は此の少年と顔を合わせる度に、訳もなくドキリとした。好意では勿論ないが、さりとて敵意からでもない。

「何処へ行く？」

と健がきいた。

「先生こそ、何処へいらっしやるのですか？ お揃いで」

青い月光に濡れた黒髪が、白い額に乱れかかって、悩ましい限りである。

「ボクの事ではない。君は何処へ行く？」

「さあ？何処にしようかと思って……」

道子には二人の会話は、まるで楽屋の判っている舞台を見るように白々しく思われた。

健は飢えた狼のような貪婪な目で、ヒロミの息づいている白い胸を見据えた。

——ああ、此んな目射しを、かってあたしは受けた事がなかった——

と道子は感じた。

ヒロミの耳朶は見る間に染って紅の花が咲いた様であった。ヒロミは目のやり場に困って、苦しうに自身の肩に顔を俯向けた。

おそらく今の道子でなければ、それとは気が付かない程の巧みな誤魔化し方で、そのまま肩にアゴを埋めて、クスクスと笑った。

「何がおかしい？」

「だって、先生ったら、そんな恐い顔をしてボクが夜遊びでもすると思っておいでなので

しよう。大丈夫です。ボク、不良になんかなりませんから」

人知れず媚びて誘いかけるような、濡れた唇を見ていると、健は魂も痺れてしまいそうな狂おしい気持になった。健は二人だけに通じる流し目でヒロミに答えて置いて、急に道子に言った。

「あとから直ぐ行く」

道子がためらっていると、健は声を荒くして「早くッ」と、急き立てた。

道子がもとの場所に来て見ると、健もヒロミも居なくなっていた。さすがに道子もつくづく情なくなつた。そのまま引返しもならず辺りを探し廻って見た。

怪我をした子を連れて来た、新聞販売店の親父は

「俺あ、金なんかが欲しくて言ってるんじやね

えんだ。人から預ってる子に怪我を
さされて此の家の旦那にも逢わねえ
で帰れねえよ」

と坐り込んで、どうでも動こうと
しない。子供はキヨと交番の巡査に
連れられて、近くの医者へ行っ
てしまった。

道子は、健って何だかとても性悪
のダダ子みたいだなと思った。

裏木戸の直ぐ傍に、雑用兼運転手
の木村の住いが建っていた。木村は
何時も社長代理の桂を乗せて、殆ん
ど一日中忙しくしているの、住い
は大抵灯が消えていた。

その軒下の暗闇で人の気配がした
大人しい道子にも、理性を置き去り
にする時はあった。道子は夢中で、
炭俵や薪の積んである蔭に身を隠し
た。今更になって、此んな浅ましい
盗み見をして見てもどうなるもので
もあるまいに、と自嘲する気持も強
く仿っていた。

ヒロミの白いショートパンツの股
と、派手なアロハの裾が、時偶軒の
闇から月の光りの中へはみ出して、
蝶のように漂った。まとまった言葉は何一つ
聞かれないで、健の野獣のような荒い息遣い
と、ヒロミの悶えるように悩ましく囁く声が



イヤ、イヤと抗っているだけであつた。
不思議と道子には、驚愕も嫉妬も湧かなか
つた。今までから何度も疑っては見たものの

此ういう異常な心理を真から理解する程、道
子は世間を知ってはいなかったから、珍しい
ものを見る興味の方が先に立っていた。道子

は何よりも、今此の耳で聴く、健の荒々しい男の息遣いにうっとりとなつた。此の同じ男が、自分に向つては、あれ程にも冷たいかという、此の比較は余りにも残酷すぎた。

道子の胸に徐々に嫉妬が湧き上つて来た。そつと、その場を離れようとした道子は、つい過つて薪の束に手をかけた。束は端から崩れた。はずみで道子は地面に膝をついた。道子にとってその音は、地球の崩れる程にも大きい音に聞えたのだ。

健がゆっくりと月明りの中へ出て来た。道子を見据えてフボンと鼻で笑つた。

道子は思わず後ずさりした。

「泥棒猫のような真似を誰がしろと言つた」「いいえ。あたくしは、あなたをお呼びするために——」

健はニヤリとした。

「そこで何を見た?」

道子は詰として立ち上つた。

「そんな事はあなたの胸にお尋ねになつて」「見ていてどんな気がした? 少しは妬けたか」

道子は顔を外向けた。その目の先に、ヒロミが夏菊の一茎をもて遊びながら、涼しい顔をして道子を見ていた。羞恥の一かけらすらも見られないその鉄面皮な頬が、健に見詰められただけで、消え入る程にも染まるのは、何という不思議であろうと、道子は気味が悪

くなつた。

健は庭下駄で道子の脛を強く蹴つた。崩折れる道子の肩を踏みつけた。糊の匂いのする浴衣の肩に、黒々と下駄の歯型がついた。

「さぞかし道子。得意だろう。此の憎い男を取り押さえる事が出来てな」

「何と仰言るのです」

「だまされて口惜しいって泣きわめいたらいいじゃないか。明日からは早速ふれて歩け」

「そんな事を、あたくしが……」

「なる程。する筈がなかったわけね。お前は仲々貞女だからな」

「あたくしは貞女でも何でもありません。あなたの妻ですワ。あたくしは妻として、あなたから何を与えられているでしょう」

「理窟なら俺は何でも知っている。君から説教されるまでもない。」

健は手招きしてヒロミを呼んだ。

「ロミ、おいで」

ヒロミは一寸含羞んだ様な目をして寄つて来た。健はその肩を抱き寄せて、耳朶に口づけした。ヒロミはくすぐったそうにクスクスと笑う。

「今夜は君のところに泊ろうか? 久しぶりで、此の温い胸が恋しくなつた」

健はヒロミの脹らんだ胸に、そつと手を当てる。

「あんな事を言つて……」

ヒロミは困つたような目をする。此れもお芝居である、と道子は思う。健は道子に向つて言つた。

「帰つて寝ていい。ボクは今夜部屋へは帰らない」

「だって怪我をした子が来ていますのに」

「何時までその事を言っている。ボクが行かなくても話が付きそうなものだ。もう直ぐ桂が帰つて来るだろう。桂に言いなさい」

健は威張つて言う、ヒロミを伴つて、庭の繁みの中へ去つて行つた。

此んな事があつてから間もなくの或る日。

健はヒロミを連れて、新宿の盛り場を歩いていた。目的の一つは、ヒロミに合の背広を新調してやる事。もう一つは、何となく道子の外出が目立つようになったとキヨに告げられたため、前に聞いた須田の話とも思ひ合せて、何か此の辺に道子の秘密が転がってでもないものかと、面白半分で出かけて来た訳である。見付けたら最後、徹底的に懲しめてやる必要があつた。

「何か冷たいものでも飲もう」

健がヒロミを振返つて言つた。ヒロミはニコリと頷いた。ヒロミは人前では何時もつましく静かであつた。喫茶ムジカ。

二人が窓際に近いソテツの蔭の椅子に腰を下すと、

「よオ！ 珍しいねえ」

と声をかけて須田が寄って来た。

「須田さんは常連ですね」

健が言うと

「仲々どうして、此ういうスペシヤルは俺の柄ではない。……ところでね」

須田は何うように辺りを見て、健の鼻先に顔を近づけると、

「ホラ。此の間、話した男ね。道子さんと歩いてた男だよ。彼処に居るんだ。もっと隅だよ、スタンドの一寸横。青いポロシャツの……。どうだい、一寸した男だろう。此の辺りに勤めを持つ人間らしいよ。それにしても堅

氣じやないね、どう見ても」

女が注文を訊きに来た。

「レモンスカッシュ。須田さんは？」

「それを頼むよ」

須田が言った。

健は氣のなさそうな表情で、チラッと一瞥して置いて、

「あなたも暇人だなあ」

と笑った。

「此れ位い注意力が仇かないと絵は描けないよ。併しね。君、奥さんに訊いて見た？」

「いや、訊くだけの事もないでしょう」

健は澄して言った。

「ウーン。君がそう言うものを、何も事更荒立てる事もないがね。確かに、あの時の二人

は唯の仲とは見えなかったよ。いや、ボクはね、厭がらせて健ちゃんに此んな事を言うんじやないんだよ。実を言えば、ボクは披露宴の時、盛装の道子さんを見て以来、憧れみたいなものを持ってたんだ。横しまな考えなんか毛頭ないがね。他愛ないと思うだろう。併しホントなんだから仕様がな。それだけに實際、あんな場面を見るのは意外だったよ。大袈裟に言えば幻滅したね。」

「ホウ！ 須田さんがね。ボク一寸妬けるですよ」

健はおかしそうに笑った。

「冗談じやないよ君、しっかりしてくれよ」

須田は人の良さそうな、少々おせっかいのような顔を曇らせて言った。ヒロミは聞いてない様な顔をして、須田の話を残りなく聞いていた。

青年は立ち上った。タバコに火をつけると口にくわえて、両手をズボンのポケットに突込み、健達の卓の脇を通ってふらっと出て行った。

ヒロミは涼しいグラスに口をつけながら、

目尻で青年の顔を見極めた。

「ところで今日は？ 買物かい」

氣を変えた様に須田がいった。

「まあ、そんなところですよ」

健はあいまいに笑って誤魔化した。

健は妻にはウラウス一枚も買ってやるだけ

の氣が付かなかったのに、ヒロミには惜しげもなく物を買ひ与えた。

「ヒロミ君は幸せだなア。大磐石のパトロンを持って」

と、須田は察しの付いた様な顔をする。

ヒロミは赤くなって俯向いた。

「ヒロミ君には、御両親はなかったんだってね。お兄さんがあるとか聞いてたけど——」

「は。あの、居ましたけど、死にました」

「亡くなったの？」

「は、いいえ。そうです。亡くなったんで」

珍しくヒロミは狼狽の色を見せて、しどろもどろに答えた。

ヒロミの過去については健も詳しく知らなかった。健はふっと、ヒロミが自分と知り合った当時、何かのついでに、兄は九州の方に居ると言った様な氣がしたが、氣に止める程の関心事でもなかったので、忽ち別の事に紛れてしまった。

ヒロミは厳格な司法官を父として、育ったのだという事であった。

健は妻のもとへ帰らない夜が多くなった。

「なまじっか、君に触れる事は、君を侮辱する事になる。ボクは清潔ではないからね」

そういう厭がらせをいつて、道子を遠ざける事に務めた。勢いヒロミへの執着は以前にも増して深いものとなって行った。

ヒロミはその様な健の愛情を、健が大切にあればある程、却って恐れた。

或る時、健はヒロミに囁いて言った。

「ボクに妻が出来た事で、ヒロミは前よりもセンチティブになったね。ボクはそれがたまらないと思うよ」

「イヤ！ そんな言い方」

ヒロミは大きく頭を振って、健の目の色を読み取ろうとする様に、見詰めながら、

「それだったら弄ばれているのと同じよ。それとも試されているの？でもボク、そんな愛情はとっても哀しい。お願いだから、ボクの心まで玩具にしたり計ったり

しないで、それでなくてもボクは可哀想なんですのに。ボクは幾らケンに愛されたって

ケンの愛情を受け取る事は出来ても、それを形にして、ケンに捧げる事は出来ないじやありませんか」

「深刻な顔をして、何の事だい。一体？」

「ケン！ ドンカンねえ」

ヒロミは身をよじる様にして、ケラケラと笑って、健の背をビシヤンと叩いた。

鳥かごの文鳥がキキ、と寝言をいった。



ヒロミは一寸肩をすくめて鳥かごを見た。健の耳に口を寄せて、

「女の人は誰だってみんなそうなる。——ね。判った？」

「赤ん坊の事かい？ そんな事ならボクにだっていえるよ。君の今いった事とそっくりそのまま、ぼくだって哀しいさ」

ヒロミはブツと吹き出して

「ケンがそんな事をいうと、鬼だって笑い出してしまふ。ケンはタフなんだもの」

そう云いながら、ヒロミは涙ぐんだ様な目をした。

ヒロミは女はみんな憎かった。殊に美しい女を見ると憎悪で身体が震える程であった。自分がその女よりも美しいと自信が持てた時は、初めて溜飲の下る思いがするのである。

女になりたいと絶えず意識して行動するために、却って本ものの女よりも女らしくなった。併しヒロミは時代がかったオーバーな仕草の女にはなりたくなかった。ヒロミがなりたいと希望する女は、波濤にも似てスピーディでリズムカルな、それでいて退き際には、微かな哀愁も覗かせて見せる。そんなニュアンスを持った女性になりたかったのである。

此うしたヒロミの心の悶を見ているのも、健には楽しい事であった。

三十才になったヒロミを想像すると、健もいささかうんざりした。併し捨てる気持は毛頭なかった。捨てるには余りにも健はヒロミのために金を使い過ぎた。高価な人形は簡単に捨てるには忍びない。先ずその白い肌から……電気マッサージに、女性ホルモンの注射、コルセットによる腰部の整形、ダンスとバレエに依る全身美容と。あらゆる手を尽して、此の五年程の間に

ヒロミの身体を作り変えた。
ヒロミは毎日、キュツキュツ
と鳴る靴を履いて、実はバレ
ー学院へ通っている。

「ヒロミは俺の芸術品さ。だ
からこそ、ヒロミの身体には
俺は責任がある。道子だって
子供を産めば、身体が変わっ
て？ そんな俺の知った事
か。動物の生態であるとい
うに過ぎんじゃないか」

と、本気で信じている。

併し、その健も、今日は一
寸ばかり、ヒロミに腹を立て
ていた。

健が蔵に入る時、干物をし
ていたキヨが言った。

「またクラでございますか？
坊ちやまを誘惑して貰っては
困ると、ヒロミさんに申して
置かなければ——」

「心配するな。誘惑するのは俺の方だ」

健はすかさずやり返した。

「口ではとても叶いません」

キヨは感心して言った。

健が入口で、ビューッと口笛を吹くと、ヒ
ロミが二階から降りて来て、網戸の鍵を開け



た。

ダンスや戸棚などの蔭になった暗闇の中に
健の白いセーターと、ヒロミの白いカスリだ
けが浮いて見える。健はヒロミには殆んど和
服を着せている。洋服の場合でも、必ずと言
っていい位、胸の開くものを着せていた。

何時でも自由に、ヒロミの身
体のあらゆる部分に、手を触
れなければいけないという
執拗な慾望を持っていたから
である。

ヒロミは足もとの箱に足を
取られて、健の腕にすがり付
いた。ヒロミの身体はもう、
健に翻弄される期待で疼くよ
うに熱かった。

健はポケットのズボンから
懐中電燈を出して照らした。
階段を上ると、とっつき
の三畳程に、机や長持ダンス等
数々の道具類がぎっしりと詰
っていて、ヒロミの部屋とは
真紅のカーテンで仕切ってあ
る。

ヒロミの部屋は綺麗な調度
品で飾られて、何となく寝室
めいた、なまめかしい雰囲気
が漂っていた。

ピアノにはレース編みの清潔なカバーがか
かっている。紫外線をフンダンに含んだ初秋
の陽が、高処の窓から射し込んでいた。

健は一寸まぶしそうに目を細めて、窓際の
寝椅子にかけた。

「ロミは、ボクに隠している事があるね」

健は窓外に目をやったままで言った。ヒロミが返答をするまでの瞬間に、ゆとりを与えてやるかの様に、何げない表情をしていた。

ヒロミは瞬間、顔色を変えたが、直ぐ笑い出して

「ワア、怖い顔。でもケンはそのような顔も、一寸ステキね。ダニエル・シエランみたい」「誤魔化す積りかい？」

健の目に怒りが浮いた。

ヒロミは健の腕に飛び込んで行った。

「ン、イジワル。どうしてそんな、ボクを困らせる様な事を言うの」

健はその肩をつき飛ばした。ヒロミは畳に転がった。

「ボクは余りにも君に甘すぎたんだ。此れからは考えを変えるよ」

ヒロミは転がったままで、女の子のようにしやくり上げて泣いた。

「誰がケンに言い附けたのか、ボクには判っている。ボクの事を悪く……」

「バカを言うな。人から言われて気が付く程ボクはロミに対して不注意ではない」

事実、健は誰からもヒロミの事について告げ口は受けていなかった。チャ子は目下、如何にすればヒロミの仮面をひっぺがす事が出来るか、秘策を練っている最中で、誰にも例

の手紙の事は話して居ない。

「それなら何を証拠に」

ヒロミは受け取った手紙を、抜け目なく焼却してしまっている。

「ボクが此処で、一々証拠を示さなければ、本当の事を言わない積りだね」

「だって知らない事を——」

「あくまでも、言い切れるね」

健は念を押した。ヒロミは一生懸命哀しい事を考えて、此の場には関りのない涙を流した。子供の頃の辛かった思い出や、将来の不安な運命を心に描く事に依って、涙は後から後から湧いた。

健は何時までも黙っていた。それでもヒロミは泣き止まない。

健はつくづく呆れて

「よくも涙が尽きないものだね。君って一体どんな育ち方をした奴なんだろう」

と溜息のように云った。

ヒロミは涙の顔を上げて

「ボクがこんなに泣き虫になった事は、育ち方のせいじゃない。ケンに愛されるようになってからよ。だってボクは、何時だって哀しいんですものね」

「よそ事を言うな。質問に答えるだけでよろしい」

健はつい微笑を洩らした。此奴には負けてしまふ、と思った。ヒロミは確かに健よりも巧緻だったかも知れない。

ヒロミは畳に両手を突いて、足蹴にされれば、そのまま崩れてしまいそうな憊わな姿で項垂れて言った。

「そりやボクだって、何でもみんなケンに話したいけれど、ボクだって矢張り、ホンのちよっぴりでも、誇りを捨てたくない気持はあるじゃないの」

健はその生え際の美しいヒロミのこめかみに足を掛けて、蹴り倒した。

「此うされる事は、誇りを捨てる事にはならないのかい？」

ヒロミの首を足で押さえた。

「その矛盾をどう説明する？ 言ってみろ」

ヒロミは目を閉じた。

「此うしてボクが誇りを捨てる事も、ボクが健に言いたくない気持も、ケンに愛されたいからよ。ボクの気持に変わりはない」

健はポケットからピンクの紙切れを取り出して、ヒロミの顔に投げた。紙は顔の向うへ落ちた。吸取紙であった。

「言いたくなければ、此ういうへまな事はするな。頭は緻密でなきやいかんよ」

ヒロミが手を延して取ろうとするのを、健は素早くヒロミの胸に馬乗りになって、両手を膝頭で押さえつけた。

「さあ、どうやって取る？」

嗜虐に燃えたぎった目が、ヒロミの視界一杯に広がった。胸の重みは、命を託しても尚余りある程頼母しかった。

ヒロミは首を一杯に延ばして、顔をねじ向けて紙を口で取ろうとした。二つに折り畳まれた吸取紙は、折目が手前になっていて、僅かにまくれた紙の端は向う側にあつて、どうしても口が届かない。必死になって嚙えようとすると、頬に血が昇った。

健の重みで胸が圧迫され、膝で押さえつけられて、手首が痺れ始めた。睡魔のように陶酔が襲つて来た。

偶々窓から吹き込んだ俄な風が、思い切りよく吸取紙を吹き飛ばした。

健はシマッタという様に笑い出して

「天、我れに味方せずか」

そう言つて立ち上ると、タンスを開けて、長襦袢を取り出して、ヒロミの胸に放り投げた。

「着換えろ」

ヒロミは立ち上つて、言われるままに、下着も全部脱いで素肌に冷たい綸子の長襦袢を着た。足の甲が隠れる程長かった。健の義母が生前用いた外出着である。牡丹に御所車を配した派手なものであった。

健は、道具類の中から古い机を持ち出して来て、

「よし、此れで行こう」

と言つた。責めは、まだまだ終つてはいない。ヒロミの手を取つて、机の上に仰向けに寝させる。ヒロミの足を開かせて、両足首を

机の足にそれぞれ縛りつける。腰も机に縛りつける。荷造り用のロップは、幾らでもあった。上半身は机からはみ出して折れ曲つた。垂れた両手首を背の後で縛る。赤い帯あげで口も掩つた。

腰骨が机の縁で擦れて、耐えられないのでヒロミはヒイヒイ呻いた。

頭に血が上る。だからと言って、頭を持ち上げて、起す事は叶わないのだ。陽が真向からヒロミの顔にふりかかるので目を開けてはいられない。

健は吸取紙をヒロミの顔に突きつけて、

「読め！」

と言つた。吸取紙には、ハッキリと、一つの文章が反対を向いて印されていた。

——もう許して——

と、言う積りが、言葉にはならないで、呻きを繰り返す。

「此の文面からすると、君の兄さんは生きてゐる。刑期を終えて、目下入院中だね。大至急金がいると——。此れだけの事じやないか。どうしてボクに言えなかつた？ 此れだけの事が」

「あ、あ、」

胸の喘ぎにつれて、衿がはだけ、柔かい長襦袢は深いシワを作る。婀娜な美しさ。

健は此の日本的な美がたまらなく好きだった。それを美しい少年に着せて、心までも女

に作り変えてしまう事。健は倒錯の快楽に我を忘れた。ヒロミはそんな健の熱い目を痛い程感じた。

健は机の引出しを開けた。引出しの中にはドライバー、ペンチ、釘抜き、折れ釘、といったガラクタの類が入っていた。

健はそれらを引き廻して、レンズを取り出すと、露わになった胸に光りを当てた。更に引出しの中から新聞の切れ端を取り出して、胸の上に広げた。その切れ端には、ベッタリと黒の塗り潰しで、広告カットが印刷されていた。レンズの中心の光りの目を段々と小さくして、健は其処で手を止める。

ヒロミは絶望と恐怖におののく目をして、必死に頭を振った。今までから如何に責められる時でも、まだ身体を傷つけられる事はなかった。健はヒロミの白い肌を「ボクの白いバラ」だと、自分の身よりも大切に、ヒロミ自身の過失から、かすり傷一つ拵えても、跡のつく事を恐れたのである。

それなのに、もうダメだ、と思った。

ヒロミの目から、偽らぬ絶望の涙が溢れ出した。ヒロミは必死になって呻いた。

——ケン、ボクが厭になつたのね。飽きてしまつたの？——

と言いたかつたのである。

健はニヤニヤして

「今に此の鳩のようにふくらんだ柔かい胸が

らケムを吹くよ。それまで止めないからね。イヤだって言ってもダメだよ。だってロミはボクに殺されたって嬉しいと言ったのではなかったのかい？」

ヒロミは、尚も無駄なあがきを暫らく繰り返したが、段々と頭が重く、視界が暗くなっていた。

新聞紙がくすぶりはじめた。ヒロミの身体が激しく痙攣した。

健はレンズを畳の上に放り投げた。火の付いた新聞紙は傍の花壺に押し込んだ。

「さ、ロミ、解いてやろう。苦しかったかい？」

健はヒロミの頭を手で支えて胸を調べた。

「少し色が変わってる、でも此れはヤケドじゃないよ。拭けば取れるネ」

網を解かれて自由になると、ヒロミはぐっ

久し振りで奇クを拝見し、何とも云えない喜びでした。小生、サド、マゾ、フェチの傾向を持って居り、大好きな奇クの復刊は、此の上もない朗報です。併し復刊以来、一年以上も知らなかったとは、返す返すも残念。

所で最近、女装への憧れ、女性化願望（十二月、一月号を手に入れましたが）が見られましたので、次の雑誌から抜書きして見ました。少し長いですが、小生も女装には強い関心を持ち、小学生時代から家人の留守に、よ

たりとして、健の腕に抱かれた。柔かいセーラーの下に堅い男の胸があった。

「ケンを裏切る気持なんかなかったの。ボクがどうして兄さんの事を、ケンに言えなかったか……」

「もういい、判った。」

ヒロミはその堅い胸に縋りついていても縋りついてても、尚足りない程切なかった。健はその背を優しく撫でながら、古机の隅に目をやると、ついと手を延して、何かを掬い取るようにして。

「ロミ。あーんとしてごらん」

ヒロミが媚びた目で微笑みながら、口を開けると、健はその口へ掌を押しつけた。

「ウツ」と言う間もなかった。乾いた細い枯れ草の茎の様なものが、モソモソと舌の上を動きまわった。

く女のズロース、ストッキングをはきスカートをはいたりして、鏡を見たのを覚えて居ります。と云って、男子には同性愛と云うものは感じません。ナルチシズムの芽生えといった気持だったと思います。女装をして鏡を見たり、又女性の方から女装をさせられて、いじめて貰い度いと云う気持が、女性をいじめたい縛りたいと云う気持の、裏の感覚としてある様な気がするのです。そういう私の性癖から興味深く思ったのが、以下の文章と、水も

クモ！と感じた時、ヒロミは口を閉じられてしまった。ヒロミは夢中でさるぐつわの赤い帯あげを取ろうとする。健はその手を掴んで振上げた。

「ウウツ！」

ヒロミは呻く。舌がちくりと痛んだ。

「あッ、噛んだ！」

ヒロミは健の胸に顔を埋めた。

健はその肩を、力一杯自分の胸に押しつけて、

「怖いかい？ 可愛い奴」と笑った。

健の胸には、ヒロミの移り香の、ジャスミンが浸みていた。

恐怖を口に含みながら、愛しい人に抱かれて、その高鳴るお互いのコドウを聞いている官能的な一瞬。ヒロミは幸せであった。（続）

したたる許りの写真である。

別冊週刊サンケイ

新春スリルとロマンス特集号

（別冊週刊サンケイ八一九五六年十二月二十五日発売）
「六頁より九頁まで」
「ムッシュ・パリ
ジエンヌ」
「これが男かしら」
「わたしたちは男よ」から）

最初のグラビアに美女？ 五人の写真がのって居り、これが男かしら、わたしたちは男

よと説明がついている
 我国にも男娼とか男色
 喫茶は存在するが、な
 んと云つてもこの道の
 本場はフランス、そこ
 に二軒キヤバレー・カル
 ーセルとキヤバレー・マ
 ダム・アルチュールが
 ある。同性愛の場合、
 大抵片方が女性的役割
 を演ずる様になる。オ

カマは商売上女装するのではなく、女装に愉
 悦を感じる男たちを集めてキヤバレーを経営
 しているのが「カルーセル」と「マダム・ア
 ルチュール」である。狭い入口のドアを押
 すと、タバコと酒と人いきれの生温い雰囲気
 中年の女給仕人が妙なシナをつくって案内す
 る。真紅のビロードを張った壁が、薄暗い電
 灯に怪しく映える。三、四十人で一杯になる
 ソファを並べた客席の正面に、五、六坪の小
 さな舞台。そこでは半裸の女性が体をくねら
 せて、ダミ声でシャンソンを歌っている。客
 席は舞台より五十センチほど低くなっている
 その舞台では濃艶な姿態で、腰を振り身もた
 えしながら小歌を口ずさむ年増、アラビヤ風
 の踊りを踊りまくる美女、肩もあらわなデコ
 ルテを纏い、長いホルダーでタバコをくゆら
 しながら恋の歌をうたうマダム。オーケスト

(フエチ通信)

『花のパリの裏話』

坂 口 利 夫 提 供

ラに合せて雪肌を惜し気もなく露わしている
 ストリップ・テイザー。きわどい身振りで客
 を笑わせるコメディアンヌ。出てくる女すべ
 てが正真正銘の男である。そして入口で外套
 をぬがせてくれた中年の女給仕人も、酒を運
 んで来た大柄の女もみんな男なのである。ハ
 イヒールをはいた足の線がスラリと長く、男
 の気をそそる。そしてその牝鹿のような足を
 空中高くあげてフレンチカンを踊る、バレエ
 も踊る。しかも中には、どう見ても水もした
 たる美人としか見えない女形が数人はいた。
 媚態というか、いわゆるコケツトリイは全部
 女以上で、流し目に捕えられた男はフット溜
 息さえ洩らしたくなる。ことにこうした場所
 に出演している連中は、又一様に露出癖とか
 化粧癖とかのマニアである。自分の美しさを
 他の男性に見せたくて仕方がないと同時に、

女らしく装うことに一
 種の性的快感を覚える
 のだという。だから彼
 等は出演料など余り問
 題にしない。出来るだ
 け人目につくような舞
 台を勤められるなら無
 報酬でもいいくらいに
 気持でいる。年令的に
 は舞台がつとまらない
 ような時がきても此の
 巢には執着して、酒場の
 パーテン、給仕人等
 になつて好きな女装はやめない。

午前一時頃ともなると、想像もされない様
 な光景が薄暗い客席のテーブルにかくされた
 ソファで展開され、シヨウが終れば女形た
 ちは、女装のまま客の招きに応じソファに降
 りてくる。ドレスを着た女形が、ふくいくた
 るパルフアンの香をさせて寄ってくる。「坐
 っていい」「いいよ」注文してやったシャン
 パンを、おちよぽ口で受けてニッコリ笑う。
 きれいな顔、切れ長の青い眼、とび色の巻毛
 そのうちに彼の身体がジリジリと迫ってくる
 とみる間に、そのシャンパンにぬれた唇が私
 の顔に近づいてくる。私の手を弄んでいた彼
 の手が、腕から肩に肩から背に廻わされた。
 そしてもう一つの手が我の男性のシンボルで
 ある地帯に伸された。

髪 と 絵

荒
尾
讓
介

荒尾讓介、俺は今、冷い独房の片隅で未決囚として判決を待っている男である。読者諸氏は、この世の中に俺のような男もいたということを知って頂ければ俺も本望である。

俺は自分の三ツ口を幼い頃から何程悩み通したか知れない。家は川越にあった。ここに吉見百穴といって、山の側面に人の入れる位の穴があり、又、その穴の入口が数知れずあって、穴から穴へ続いていてまるで迷路のようであった。穴の中には、彫刻のようなものが所嫌わず彫られてあり、ローソクの火などで見ると、想像もつかない得体のしれない物が無気味に浮き上ってくる。一体、何千年経っているのか、或は太古の穴居時代の遺物

なのか俺にはわからなかった。

親爺はねっからの鳶職で荒尾万助といったが「荒万」で通る、飲む、打つ、買うと三拍子揃った底知れず者で、若い者は二十人余りもいた。俺はその一人息子だった。

俺は物心覚えた頃から、女の髪と縛り絵に興味を持った。縛り絵と女の髪の長い絵は、色々ためたものだ。パーマのかからない房々した女の毛髪を見ると、俺は物に憑かれたようになった。映画館や人ごみで長髪の女やおサゲの女学生を見ると、さわって見たくもあり、又、髪の匂が鼻にくると夢遊病者のように、じっとしておれず女の傍へ寄り、ふりむかれて、その度に逃げ出された。

俺の顔が猫の口みたいになり三ツ口になっていて、その上ギョロリと大きな目が飛び出して

いるといった、誰がみても気持ちのよい顔ではなかったからだ。その上、親爺の素質を受けて、飲む、打つ、酒グセが悪く向う見ずで当り散らすので仲間は誰も親身になって相手にしなかった。仕事は主に東京方面に出て、この方は誰にも負けぬ位にやった。

俺の隣町に「香福」という小飲み屋があった。「香福」の娘で二十三になる信子という可愛い女があった。信ちゃん信ちゃん、と客からも可愛がられていた。然し、俺のこの信子という女を見る眼は、普通の者とは違っていた。信子の髪は実によい髪だ。顔は十人並だが髪が腰ぐらい迄あり、正月とか、節分とかに島田に結ったり、桃割れに結ったりした時は、二十前の娘に見えた。

俺は、信子の何よりも髪にひかれた。逢いたさ見たさに、無理算段して通っては見たが全然相手にされない。なんとか、きっかけを作って近づいてみるが「いやな人」といって離れてゆくばかり。俺は、どうすればいいんだ。自分で自分がわからなくなり、酒、酒、酒、浴びるような酒に心をしばれさせ、もう仕事は手につかない。

毎夜、夢を見て、うなされた。

髪の毛の山をころがったり、

五尺余もある髪の毛をかかえて踊ったり、居ても立っても、居られない気持ち。髪々、信子の髪、どうしても忘れられず、俺は神経

衰弱になってしまった。俺は飲んだら向う見ず者かもしれないが、仕事にかけては、鋭利な剃刀のような味を示し、仲間も舌を巻いていた位だったが、俺は情ない男になった。信子が髪をといている姿、クセのないやわらかな黒髪が目について仕方なかった。

十月の下旬、秋風のさわやかに肌に触れる日、俺は朝家を出たきり帰らず、二ヶ所、三ヶ所と場所を変えて飲み歩いてた。俺は半ばやけくそになり、何処へ行くというアテもなく、「髪、髪、髪」とつぶやきながら、足は自然と香福に近づいていた。今日は相当酔っているナ、と自分でもわかる。信子を二、三日見ないが、と香福の店の前で躊躇していると、香福の時計が六時をうつのが聞えた。入ってみれば何んとかないと、俺は暖簾をくぐって中へ入った。俺は途端に呆然として佇んでしまった。信子が洗髪姿で客の相手をしてたのだ。

客が三人、その中、顔見知りが一入。

「兄貴は飲んで来たね」

知り合いが言ったが、俺はそれに答えず、大きな目で信子を見つめた。洗ったばかりの房々とした黒髪が、海藻のように背中に残っている。湯上りの顔には、ほんのりと薄化粧してふるいつきたいような艶姿、客に冷やかされて笑っていたが、近づいてきた俺を見ていやな顔で横を向いてしまった。

俺は空いている席へ腰を下した。信子の方が気になり無意識で願ってみる。髪の手、化粧の匂いが鼻にくる、と俺はじっとして居られず、席から立ってカウンターへ足が向いた。そのままカウンターへ寄りかかる筈の俺だったが、その時の俺の行動は自分でも、はっきりとわからない。気がついた時は、店が騒々しくなっていた。俺は信子の髪にしがみついていたのだ。鼻にくる髪の手、忘れられない髪の手、俺は無我夢中だった。みんながとめた。店の主人が出てきた。

俺は息切れし、信子は真青になって奥へ逃げ込んだ。ガヤガヤ騒いでいる時、駆け込んできたのが家の若い者。

「兄貴、こんな所で又飲んでいたんか、探していたんだ、早く帰っておくんなさい。」

店の主人が顔を出して、「話のケリをつけないでは帰さない」と云う。若い者は、

「それは後で話をつけにくる。兄貴には召集令状が来たんだ」

俺は二度呆然とした。

時に昭和十七年十月十日

二

それから三年余、

俺は憲兵を志願して憲兵伍長に任官していた。地方に居る頃と同様に、仕事の上では俺の右に出る者が無い位に頑張った。

俺は支那大陸に転属になり、防牒方面を担当した。若い女、髪の手長い女とみれば、スパイ容疑で否応なしに拘引しては詰問した。或る時、四十に近い年令だったが、髪の手長い女を拷問にかけたことがあった。

たしか、連長とかの女房で、いい肉附の一才目には三十二、三に見える女だった。乳房から胸、下腹、太股にかけてむっちり張りきっているばかりか、豊かな黒髪が蛇の様にドグロを巻いていた。

女は半裸にされて、後手に縛られ転がっている。女を梁から吊り下げてみた。良い髪だ。両手で押えていると、ぬくもりがある。髪も生きている。この女、我慢強く悲鳴を上げそうにもない。補助動上等兵に水を浴びせさせた。たれ下った髪が地を這って、まるで黒蛇のうごめきを見るようだ。その時の髪の手が忘れられない。

俺は機会ある毎に、髪の手長い女を半裸にして「鼠責」「松葉いぶし」「引伸し責」「吊し上げ」「擦り責」等々の恐るべき拷問にかけた。面倒な調べは荒尾伍長に限るときめられた。あれ程悲観していた三ツ口などは忘れた。宇頂天になっていた事は言う迄もない。

何を聞いても、「知らぬ存ぜぬ」と不敵な面魂で、責めて責めて、責め続けても言わぬ女もいる。裸にして杭にしばりつけ、煙草の火をつけたり、爪の間に針を突き立てたり、

ありとあらゆる問い方をしたが、白状しない女もいた。流石の俺も、勝手にしろと匙を投げた強情我慢の女もいた。子供が生きた蛙を弄ぶ、あの惨虐さだった。

二、三日、頭痛で休んでいると、同僚がきて、強情な女がいる。と告げた。行ってみよ

うと、俺は濡手拭で鉢巻をして見に行った。年は二十七、八だというが、小柄で五つ位も若く見える小肥りの女だ。農家の納屋に急造した調室には、梁へ吊り上げられた女の肌に縄目が喰い込んでいた。吊り下げられた足の長さと同じ位に髪も長い。俺は手出しをし

ないで見ていた。女の呻めき声が次第に高くなり、容赦なく叩かれる鞭に、見る／＼うちに尻の皮が破れ血がにじみ出し、それと共に梁から下げられた縄の先の腕がゴックゴックと音を立てた。髪が波うっている。俺は傍へ寄って髪ばかりを見つめていた。

途端に信子のことを思いうかべた。髪だけは信子に似ているが、信子はどうしているかな、と思った。女は顔面蒼白となり脂汗が額にジリジリと一杯浮き上った。しかし、それでも何にも言いそうにない。驚いた強情さだ。すっきりと伸びた二本の肢が、真ッ白く輝やいて見える。胸、下腰、太股まで、ビーンと一本の線を描いていた。

中国人の密偵が三人、この拷問の手助けをしていた。その中の一人が割竹で叩いた。女の腹部が波うつように痙攣すると、グッタリと伸びてしまった。とうとう何事一言も言わずに気絶してしまったのだ。

調べは明日又続けることにして密偵達に女を吊置場へ戻させた。その夜、俺はどうしても寝つかれ



ず女の髪が気になった。

俺はむっくりと起き上ると、スリッパのまま、留置場への階段を下りていった。監視兵に鍵を出させると、昼間拷問した女の房へ入った。女は折檻に疲れ果てて、コンクリートに敷いたアンペラの上へ、つぶたれたようにころがっていた。俺の手さぐりに髪がさわった。俺は髪をたぐって、一握りの束にして根本からぶつりと缺で切った。髪を丸めてポケットにした俺は、そそくさと、その留置場をあとにしていた。

やがて

日本の敗戦を迎えた。

捕虜生活二年余、然し、国府、中共の争乱渦中が幸いして、戦犯にもならず、その年の最後の引揚げで、日本内地の土を踏むことが出来た。

時に、昭和二十二年十月五日

三

東京もすでに秋風が立っていた。

召集になってから五年目。俺は東京に帰ってきたのだ。何にもかも変っている。着のみのままで人間のぬけ殻みたいになって、ふらつと内地の土を踏んだ。病氣にもならず敗戦後のあの混乱の大陸での労苦にも負けずよく生きて帰れたものだ。自分ながら度性骨の強いにはあきれかえるばかりだ。腰の雑

糞には、憲兵隊の留置場で切った女の黒髪が一房、貴重品のように入っている。

これだけは、三年間、俺は肌身離さず、人にも疑われず、よく持っていたものだ。

両親からは一向に便りが無い。どうしているのか、その日、十一時に品川の引揚寮へ入ったが、落ちつかず、寮の方へは、一言の断りもせず、かくれる様に雑糞一つを肩にして川越の家へ帰った。俺の家は一軒ぼつんと離れた二階建、道行く人と会っても知った顔はない。家の前まで来たが、ひっそりとしている。俺が家に居た頃は、出入りも多くいつも賑やかだったが、と、戸を開けて玄関へ足を踏み入れたが、人の気がない。空家になっているのではあるまいかと、奥の間へ入ってみたが、誰もいない。

奥の部屋は八帖二間だが、どうも様子が変わっている。置かれてある調度は女物ばかりできれいに整頓されている。女の白粉の匂いや髪の油が鼻にきた。俺はあたりを見廻しながら、どうも、この家には女が居るらしい。まさか親爺が女を入れて居るのじやなからう。でも、母は一体どうしたのだらう。

時計が五時を打った。間もなく足音がして誰か来たらしい。自分の家だから恐れる事はないが、あたりのただずまいが他人の部屋のように落着かないので、その八帖を出て、自分の部屋だった六帖の間へ入り、戸のすき間

からのぞくと、二十才くらいの女、真赤なオパーに白のマフラー、口紅を真赤につけて房々としたパーマの髪は肩にかかっている。玄関に脱いだ俺の軍靴を見て口をかしげているが、奥の間へ行っただけ替えをしている。口笛を吹いている。俺はじっと息をこらして見ている。

と、また一人の女が入ってきた。着物の着流しで風呂帰りらしい二十四、五の年増、無造作に束ねた黒々とした濡髪、なんとなくキリリとした女だ。あの髪は長いな、色もぬけるように白くて別嬪だ。

「静、帰ったの？」

言葉をかけて奥の間へ入った。娘が「変な靴があるの」

と言ったが、返事もせず、年増は鏡に向って化粧をはじめた。豊かな髪をといっている。まるで匂うようなくわしさだ。俺の頭は、もう髪のこと一杯になった。狂いそうだ。

年上の女も静と呼ぶ娘も大した女だ。爪まで赤く染めている。何をしているか、商売女かな。化粧している女の白粉の匂いが、髪の匂いが俺の鼻に迫ってくる。

「姉さん、あたし、これから一寸、お買い物に行ってくるわ」

そう云って、パーマ娘は下駄の音を立てて外へ出て行った。姉さん、と呼んでいるところを見ると、この二人は姉妹なのか。

姉は、黒髪を梳いている。今の中だ、この女を縛ってやれ、と、いう悪魔の囁きやが、俺の耳許でする。俺の頭は、カーッと燃え上った。女の後姿、梳いた髪が腰のあたりまである。座った足のそばに腰紐がある。いきなり飛び出して、女の髪を握って押えつけ、腕を後手に縛り上げたい衝動を押えきれない。

「あれッ、誰かきてッ」

女の悲鳴が俺の耳の奥底でかすかに聞えたような気がする。俺は腰に下げた汗くさい手拭へ思わず手が走った。これで猿ぐつわをしなれば、女の悲鳴をきいて人がくる。足がバタバタするので足も縛った。

折角の化粧も髪も乱れた。俺は髪を手にして匂いをかいだ。いい髪だ。いい匂いだ。俺は暫くその髪を抱いて放さなかった。

四

奥の八帖二間に中廊下をへだてて、俺がいつも使っていた六帖の間がある。その隣りは土間になっていて、隅に二階へ上る梯子段が架っている。二階は八帖と十帖の二間で、若い者の部屋になっていて、いつも威勢のいい若い衆の三人や四人は、ごろごろしていたものだ。

俺は六帖の間を眺めた。俺がこの部屋を使っていた頃とは、部屋の様子も大分変わっている。俺は隅に置いてある戸棚を開けた。ウイ

スキーの角瓶が一本ある。俺が外地におった頃、時々慰問品として貰ったヤツと一緒だ。

酒に目のない俺は、グイと喇叭飲みにつきついやつをあふった。腸にしみ渡る酔心地、久方ぶりのアルコールに俺の五体の節々のゼンマイがもどけたような気持だ。

だが、俺の親爺とお袋は一体どうしたって云うんだ。そうだ、さっきの娘ッ子に聞いてやろう。俺は立ち上ろうとして、腰へ手をやったとき、汗くさい手拭がないのに気がついた。

いつの間にか、静は帰っていた。ウイスキーの瓶を片手に、俺は静の買ってきた佃煮と天ぶらをばくついていた。

「助けて、誰か来てッ」

静が叫んだのが、俺の耳にそう聞えたのか俺の頭には、只、髪のことばかりが充満していた。

「この家の親爺はどうしたんだッ、知らねえかよッ」

叫んだような気がする。俺は聞きたい事、わからない事、然し、今更そんなことはどうでもよい。大陸での思い出が蘇ってきた。ウイスキーを飲んだ。天ぶらを食った。いい気持ちになって、俺は戸じまり大事と、ふらつく足取りで雨戸をしめて部屋へ来た。

二人は、互いに寄ってふるえている。

「どうしたって言うんだ。俺は泥棒でも強盗

でもねエ、外地引揚のこの家の息子だぞ」

——肌に喰い込んだ縄、ふつくらとした乳房が縄目の間から飛び出している。絶望的な悲鳴、のたうつ黒髪。

俺はウイスキーを飲み、佃煮を喰った。

俺の真赤になった顔は、鬼にも見えたらう。鬼が髪を弄んでいる。パーマのかかった赤茶けた髪より、やっぱりクセのない黒髪の方がよい。匂いをかいだ、女の髪の匂い。

人間の頭髪は八万本以上もあるそうだが、女性の魅力は髪につきる。信子はどうしたかな？ 俺の初恋の女、いや、初恋というより一番最初、髪の毛にひきつけられた、長髪の女。今でも香福に居るかナ、あれから五年。二十八だ。もう人妻になったらう。髪もパーマをかけているとすれば、さ程、信子を恋しいとは思わない。

姉の髪の毛は畳の上に長く伸びている。俺は髪の毛を見つめ、その先を手で掴んで引っぱった。

俺は右手に姉の髪の毛、左手に静の毛を引っ掴み、首に雑糞から取り出した長い髪の毛を巻いて立っていた。全部一緒にして匂いを鼻にした。髪の匂い、俺はたまらない気持ちになった。

俺は髪の上を走り廻り、ころがって廻りたかった。いつかの夢、身体中に女の髪の毛が巻きついた夢が実現しそうなものだ。

この満足感。俺はいつしか、往年の鬼憲兵
伍長、荒尾譲介になっていた。

そのまま、疲れと酒の酔でいつしか眠って
しまった。何時間寝たものか、あたりが騒々
しくなっているのを、夢うつつの中で聞いて

モモ切り魔捕わる

総武線の中で女のオーバーやスカートを
切っていた中学生(二五)が万世橋署員に捕
まった。

二十五日午前八時三十分ごろ総武線秋葉
原駅で江東区深川南砂町一事務員藤生容子
さん(二四)のオーバーとスカートが切られ
た。藤生さんがそばにいた同区南
砂町三、某中学三年M(二五)とい
い争っているのを警乗中の万世橋
署員が不審に思いMを同署に連行
した。

Mは二十六日朝になって次のような同線
内のスカート切りを自供した。

去る十月三十一日午前八時ごろ総武線車
中で千葉市山田町五、美容師(一九)のオー
バーの上からカミソリで切りつけ一週間の
傷を負わせたのはじまりで十一月一日、
同十六日。同二十六日、十二月二日同三日
同二十五日の藤生さんまで七件、若い女性
ばかりねらってスカートやオーバーを切っ

いると、ゆり起された。

警官が三人、それにオーバを着たメガネの
男が一人立っていた。

「貴様、なにしていたッ」

どなっているのを聞いたようだが、俺は手
ていた。

M少年は女の下着が見えたり、驚く女の
様子に興味があったといっているが、いず
れも通学途中の行為である。

(三十一年十二月二十六日付毎日新聞)

着飾った乙女に硫酸

浅草、四人の晴れ着台なし

レポート

約百万の人出でこった返す二日午後一時
四十五分ごろ台東区浅草公園六区映画館電

気館Ⅱ小野長憲支配人Ⅱ三階で映画をみて
いた埼玉県北足立郡上尾町、東邦レース株
式会社従業員小畑勝子さん(一九)同渡辺行
子さん(三三)同田持初江さん(一九)栃木県

下都賀郡国府村、看護婦中田すみ子さん

(三三)が着物のタモトのあたりがベトベト
するのに気がついてみると四人とも着物の

首に手錠をかけられた時は、まだ寝むけが、
はつきりと覚めていなかった。

ハテナ、あの二人の女はどうしたかな、
俺は、まだうすぽんやりした頭の中で、女
がいないのを不思議に思っていた。(終)

タモトのすそが焦げ、穴があいていたので
浅草署に届出た。

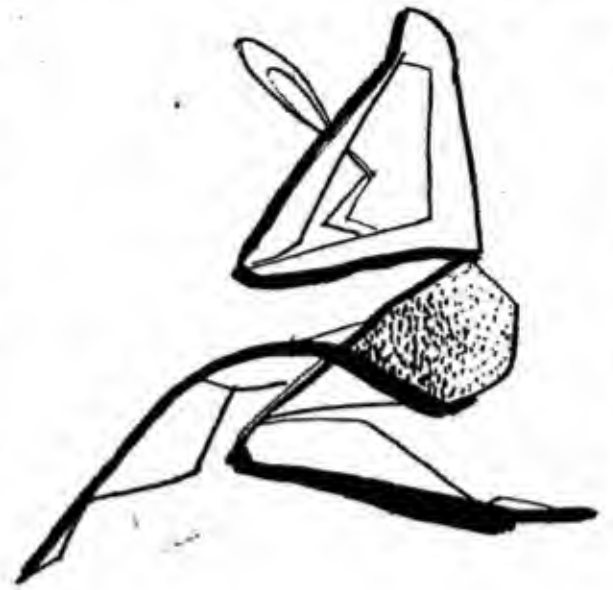
調べたところ約一時間半前の午後零時五
分ごろ四人が三階中央立見席で映画を見て
いたさい後から硫酸ようの薬をつぎつぎと
タモトに振りかけられたものとわかった。
同署では気飾った女性をねらう変質者のい
だずらとみて捜査している。なお小畑さん
は薬のついた着物に手をふれたさい左手に一
週間の火傷を負った。

誰も気づかなかつた

渡辺行子さんの話 電気館の三階の立見
席のまん中付近で手すりにもたれながら映
画を見ているさい後から薬をかけられたよ
うです。でもみんな気がつかず席に座って
小畑さんが大変だと騒ぎだしたのでやっと
気がつきました。

(三十二年一月三日付毎日新聞)

東 一郎 記



マゾヒズム見たり

聞いたりためしたり

春 木 俊 野

メルボンでのオリンピックも無事幕を閉じたが、ベルリン大会以来、儀式の一ツとされた点火の式——即ち聖火リレーの一駒にマゾヒストの好む場面がある。

今をさる二千七百三十年前、ギリシャの西部、オリンピアの森で古代ギリシヤ人は技と力を競ったが、聖火を戴く時、古代ギリシヤの服装をした女性、即ち女神によって渡されるが、走者は女神の前に跪いて聖火を受ける。国際的な此の儀式と云うか、人類最大の祭典にもやはり女性が最高として女神と奉られる処に、マゾヒストは単に美しい女性から責め苛まれる喜びだけではなく、ほのぼのとした嬉しさを感じるものである。

オリンピックの話の序に、体操競技に出る各国の女性の逞さはどうだろう。威圧される様なポリュームを身体中にみなぎらせて、各種競技に火花を散らす壮観さは、全く恍惚となる以外何ものもない。空想にふける事は自由だから、私は彼女等から馬乗りに跨られてこれでもかこれでもかと責めつけられたり縛られて引き廻されたり、果は火の接吻……などと考えていると、しまいには空想のみの充されぬ満足にがっかりしてしまう。

十二月一日附、産経時事新聞夕刊に掲載された大映スター若尾文子の思出ばなしの中に（これは連載されているものの一つ）一寸面白いものがあつた。全文を紹介すると

うっし絵 ③⑥ 若尾文子

私の歩んで来た道

それは死ぬ苦しみのトロッコ二時間便乗記である。

一日の撮影が終つて、さてトロッコで帰途につこうとしたら、ミサちゃんの姿が見えない。やむなく出発を中止してもらつてミサちゃんを探しに出掛けたのが、失敗の原因である。

トロッコのまわりでミサちゃんの名を連呼していた私は、折からの夕景に氣を取られ、その瞬間に、トロッコ線路わきの小川にドブソと落っこちてしまった。もちろん、ビショ

濡れになってしまった私は、都合よく持参してきた宿屋のドテラには着かえなければ、身体は冷えきってしまったのだ。

さて、それからのトロッコ道中の辛かったこと、初秋の北海道は内地の晩秋に匹敵する涼しさ。その大気の中を加速度でスピードを増すトロッコ、それだけでもトロッコ上の私達の冷え具合は想像いただけたと思うけれど、まして下着までビショ濡れの私は、骨の髄まで凍るともいった思いである。そして当然のことに私はある種の生理現象を予想した。

いささかお品のない話で申し訳ないけれどもこうした現象を経験された方は多いことと思うし、十分にご同情はいただけたと思うのだけれど。

予想はやがて実感となって私の身体を責めはじめた。といってもこのトロッコを途中でストップさせることはきわめて危険、よほどトロッコの後部に行つて、生理現象の東ばかり感から解き放たれようと願ったけれど、そこはそれ、行儀正しき日本女性の一員として、いささかためらわざるを得ない。

かくて二後間、死ぬ苦しみのトロッコ旅行は続いた。ついに悪感で身をふるわせるあわれな私だった。

終着駅はついに来た。停止したトロッコを飛び降りた私は一目散に暗闇の方に歩いた。

その時、はるか彼方の汽車の灯がパツとついていた。私は思わず「消して！」と絶叫した。実はこの絶叫のために、私は自ら私の苦境を一同に白状したような仕儀になってしまったのだ。それ以来「無法者」のスタッフの方には頭の上らぬことになっている。

以上で、此の中で何となく微笑ましく感じられるのは、勿論此の純情美人スターのおしっこである。汚物嗜好症と云うといかにもヘンタイだが、愛する女の、又、女神へ奉仕する奴隷としての恋愛至上、或は美への憧憬の究極として、そのネクターを飲むと云うのはどうだろう。記事中の場所にそういう人がいたら恐らくそのくさむらの蔭にぬれた処へ顔を埋める事だろう。そして又、石にも土にも草にもなりたいと思うだろう。

東京は山手線E駅の公衆便所で痴漢として捕った男があったが、その男は「覗き」専門らしく常に紙コップを持っていたそうだ。女性便所を覗くのは勿論だが、美しい女性の場合には如何に苦心してそのコップを使ったのか判らないが、飲んでいた事は確からしい。然しこう云う輩は、健全なる我々M族に対して許すべからざる侵害だ。我々は文明人としてのマゾヒスト、社会人としてのマゾを楽しむ人間である。私は時に苦笑する事がある。それはマゾヒストは女性を大切にするが、各

人各様条件があると思う。フェミニストを自ら認め女性のしもべとなるを喜ぶも、女性とはあくまでも若く美人でなければいけないのであるまいか。肥った女性を好む者もあるだろうし和服の女性のみ憧れる人もある。まさか梅千姿の *Yume* をと云う人はあるまい。とすると、マゾヒズムのための自ら認めるフェミニストかと苦笑する。

或る物語

(私はまだ処女だ!!)

太平洋戦争がガダルカナルの日本軍の敗退によって逆転し、米軍が圧倒的に大攻勢に転じ始めた頃、日本の或る輸送船が南方海上で撃沈され、兵隊、乗組員は海のもくずと消えたが、その中の一人だけが奇蹟的にも流されて地図にもない小さな孤島に打上げられた。

その男は召集兵で元は芸術家だった。よれよれの軍服に髭むじやな顔はどうもうな男を思わせたが、決してそんな男でなく、むしろ優男の部類に入るものであった。処が、その無人島に先客があつて、やはり戦禍の犠牲者である白人の美しい女がたった一人打ち上げられ、独り息を吹きかえして孤島に嘆き悲しみ氣を狂わんばかりだったが、島に繁茂している果実や湧き出る清水を飲んで生きていたのだった。

彼女は日本の飛行機によって撃沈された連合軍側の病院船の看護婦であつた。女は今

陽に焼け身にまといつてゐるのは、汚れた布を腰に巻き、僅かに乳房をかくしていると云う裸身で、髪だけが妙に長く肩に垂れ下つて美しかった。孤島に打ち上げられた男は全く死んだも同じ姿だった。女は男の身体を興味悪そうに眺めていたが、やがて手をかけて胸に耳をあててみた。生きている、ただ此の男は日本人らしい。誰もいない此の島に男女の二人、彼女は淋しさから解放される人間が現われたものの、そのあとに来る何かを考えた。と彼女は腰に巻いた布を細く破り切るとその男の両手を後手にして固く縛りあげてしまった。そして彼女が作った自分の小屋へ、男の肩を抱いて引きずっていったのだ。男はひどく弱っていたが、やがて気がついた。女は甲斐／＼しく水を飲ませたり果実の汁を与えたが、男の縛しめは解かなかつた。男は次第に元氣になり、片言まじりの英語で二人の意志は通じあつた。それでも女は男の身体を束縛したままで二人の生活は始められたのである。女性とは云え、男を自由に出来る立場にあるのが今の彼女なのだ。然し永い間に彼女は、男のやさしい心根が判つて縛しめを解いたのだ。けれど男は従順だった。死んで生きかへった瞬間が、女性に自由を束縛された男であり、生命を救ってもらつたと云う大きな感謝の気持があつた。そして緊縛されて暮している裡に、女王と奴隷の精神が植えつけら

れてしまつていたのだ。或は彼はマゾヒストだったのかもしれない。二人は愛情を芽生えさせ乍ら、女王と奴隷で生きていたのだ。愛情が強くなる程、二人はますます／＼そういう風に生きて行つた。やがて二人はA軍に救助され彼女の国A国に行つた。そして戦争は終つた。二人の奇蹟的な生還は、国中にセンセイションを起したが、中には二人の愛慾を主題としたものまでも表われ始めた。民族を越えての現実的な結婚は、自由な国でもなか／＼至難の事だった。二人の不思議な愛情は強かつたが、当然別れねばならない運命にあつたし、又そうなつてもかまわない二人の関係の筈であつた。——が世間の目はそうでなかつた。遂に彼女は真相をぶちまけ、女王と奴隷の生活を發表した。処女である事を医者も証明した。二人が如何なる女王と奴隷の生活をしたかは御想像に任せよう。

私が東京へ来た頃——昭和二十四年頃のことだ。有楽町駅のそばで、三十二、三才位になる奥様風の女性から声をかけられた。

「ね、遊ばない？ 貴方おとなしそうね」

私は随分変つたパン／＼だな、素人かと思ひ乍ら、

「うゝん駄目だよ、金がない」

と云うと、女は答えた。

「あら、そんなもの要らないワ。私の云う通りにして下さつたらお小遣位あげるわよ」

それで私は一寸好奇心をそゝられて従ひて行つた。旅館で風呂に入り乍ら、私はどうも此の女はクロウトじやないと気づき始めたのだつた。そして床につく頃、女は黙つて私に数枚のお金を出して云つた。

「ね、今から三十分、私に飼われて頂戴。私の云うなりにされてよ。ね、これはその御礼よ」

「いゝよ、嫌な女にひつかゝると困るので、金はないと云つたけど少しならあるから」

「うゝん、いゝの、お願いだから私の云うなりになつて」

女はそう云うと、私を押し倒して胸の上に馬乗りに跨つた。私はあつけにとられて、その白いむっちりした内腿に顔を火照らせたが彼女はやがて私の顔の上にべつたりとお尻をのせてしまった。

「男の熱い息がお尻をくすぐるでしょ。それが好きなの、ヘンタイね、ふゝゝ」

彼女はそれだけ云い残すと、先に帰つてしまった。その後いくら探しても彼女は見出せなかつた。

【告知板】

○真木不二夫氏作「黄色オラミ誕生」は作者の御都合により中絶いたしておりますが、原稿到着次第継続掲載する予定ですから何卒御諒承願います。

正月映画を中心に、最近の「縛り映画」を眺めてみよう。

正月映画の中の白眉は、東映アゲフアーカラーの「七つの誓い」最後の解決篇の、桜姫らの火あぶりシーンは色つきだけに大したもの。扮するは千原しのぶ、哀艶極まりない。千原と加賀は本縄をかけられ、馬に乗せられ引かれてくる。

首には「悪女である」という木札をぶらさげられて……。一寸いたましい。

色つきだが、火刑シーンには薪と桜姫の間があきすぎ、ロングではパークマンの「ジャヌダーク」のようなせいそう味はない。だが火にむせびながら身もたえをするシーンは大いに頂ける。

敵方にスパイに入り、捕えられる侍女の楓がこれまた縛られ女優の三笠博子。吉田義夫の沙漠の鬼オングに捕われ拷問される。これが見もの。

新東宝の正月作品、美空ひばりの「鬼姫競艶録」(監督渡辺邦男)で筑紫あけみが山の娘になって縛られる。彼女も新東宝の中では宇治みさおと共に縛られ女優だろう。かつてのスター花岡菊子もひばりの乳母として縛られ、拷問される。オバチヤンでは余り魅力が

正月映画を中心の「縛られ映画」

嵯 峨 美 也 子

嘉津子)それにお京(宇治みさお)もさらわれて、最後は船に運ばれ、太縄で縛られてあわやという所を佐七に救われる。近ごろは新東宝映画に「縛られ映画」が多くなった。

松竹作品では、角田喜久雄の「酔いどれ牡丹」で、浅茅しのぶのお賀津が最初から山中で猿ぐつわをはめられ、後手に縛られ、転がされている。大谷友右衛門に救われるが、途中でまた永田光男の親の仇、播磨屋弘蔵に捕えられ、しごきようのものでぐいと縛られる。胸をしめつけられている緊縛シーンは一

ない。人形佐七捕物帖「妖艶六死美人」は残酷な美女の殺され方が見ものだった。特に、女絵師宮川采女——ニューフェイス、三重明子——が殺人容疑者として縛られて番屋へ連れてこられ、その次には半裸にされて、天井から吊されて殺されている。その豊艶な乳房をのぞかせながら……。一寸ギクッとさせ、秀逸。芸妓のお駒——山下明子——は風呂の中で殺され、ラストには佐七の女房お峯——日比野恵子——女優者桜田春太夫(若杉

寸頂ける。そして熱いキセルを耳の後ろにおしつけられるといったサジステイックなもの。ラストで紫千代の玉枝がカゴの中で縛られているが大したものではない。原作では雪代敬子の雪姫も半裸で責められるシーンもあり、サジステイックなものだが、映画では大したことにはなかった。原作通りならただけのだからね。

松竹では、「まだら頭巾剣を抜けば、乱れ白菊」で山鳩くるみの菊姫が雄呂地谷で十字架のハリツケにかけら

れる。寒風にさらされながら数時間縛られっぱなしで、相当こたえたらしい。女優もまた苦しいかな。「その女に手を出すな」でも密

輸のボス、龍崎一郎に捕えられ、ハンケチで後手に縛られ自動車で運ばれ、地下室で洋服の背中のフラスナーをはずされた。あわやというとき高橋貞二に救われる。嵯峨美智と高橋貞二のラブシーンは見ものだった。よく縛られいじめられていた嵯峨ちゃんがこのごろ余り縛られないのは淋しい極みだね。洋画では、メトロ映画「ボウニー分岐点」のエヴァガードナーの縛られ姿は大いに頂ける。

あぶり責め奇聞

本田 由郎

「親分さん、今晚は、ひさしぶりであぶりをやってみせましょうか」

お辰はあさんの声に、この附近を縄張りを持つ貸元で、二足わらじと評判の良くない元三は、

「うん、面白い、若い人妻の苦しむ姿は、こたえられねえ、若返りの妙薬よ、それにあなたのお連とか云う阿まあ、若いに似あわず強情な阿まあだ、あぶりで充分音を上げさせてやるかい」

元三は油切った顔に、にたりと笑を浮かべて、お辰はあさんに目でなにか知らせる。

「へへ、じゃ、さっそく、あぶりのしたくをしてまいります」

お辰は、万事私が知っております、と三下の若い者、二三人に手伝わして仕度をととのえ始めた。まず始めに、庭の松の木を枝ぶりの良さそうな木の又に太い綱がかけられ、木の根元には枯葉やたき木が山の様に積まれた「親分さん、用意が出来上りました。お連をつれてきて下さい」

「よし、お前達、お連をしょっぴいてこい」元三は三下に命令した。ばたばたと奥へ行って、お連を庭へ連れてきた。美しく結った島田の髪は乱れ、二三本が顔にはらりとたれ下り、その面は月光に映じて神々しいまでに美しかった。元三はこのお連に年がいもなくぞっこん惚れこんでしまった。こうなると是が

非でも自分の物にしなければ、中年男の気が晴れなかった。お上から十手と捕縄をあずかる身分を悪く利用して、お前の良人信吉に御用の筋から詮議がある」と、信吉が用事で三日ばかり家をあけた、留守の間にうまうまと、連れ出してしまった。お連を自分の家へ連れてくると、元三は口説き始めた。

「お連さん、御用の筋とは、うそっぱちなんだ。俺はお前に惚れこんでいるんだ。困い者になれの妾になれて云うんじやねえ、只の一回きりでいいんだ、なあお連さん。二人で口ぬぐっていいれば信吉だってわからない。たのしい思いが出来るじやねえか」

と、じわりとお連にせまっていた。お連は強情にこぼみつづけた。明日は信吉が家を出てから三日目、今晚お連をものにしなければと元三はやっきとなっている。

「お連さん、強情を張りとおすからちいと痛い目を見てもらおうかい」

元三はこう云ってから、この美しいお連を責めるのが惜しいのか、未れんらしく、

「お前さん、どうしても俺の想いを通しちやくれる気はないのか」

お連はおし黙って、首を縦に振ろうとしな

い。元三は可愛さ余って憎さ百倍。

「お連の身体を痛めつけてやれ」この声に、そばにいたお辰はあさんは、

「親分さん、さっそくあぶり責めにしますか

「そうかい、じやわかったらうね、今晚は長い時をかけて、この阿まあの苦しむところを親分さんに充分見物してもらうのだから、そのつもりで、私に手助けしてくれよ」

「ね」
「すぐ、あぶりにしちや曲がねえ、お連のうんと苦しむ姿を見物してからだ。せかずにじっくり責め上げてやれ」
「お前さん達、今の親分さんの言葉を聞いたかい」
「へーい、良く」
三下達は答えた。



三下はうなづいて
「時に、お辰さん、一休どんな手で責めましようか」
「そうだね、着物をぬいで裸になってもらお

おろした。お連は背を地面にして仰向けにおろされてしまったので、湯文字の裾が乱れ、合わせ目から白い膝頭が見えてしまう。あわてて裾の乱れを直そうと手を湯文字にもって

うか、着物を着ていたんじや、責め甲斐がないからね」
「へーい、裸にいたしやさんで」
「着物をひんむいておやり」
お連の身体は、三下達の手でその場にどうと横だおしに春とは云えひえびえとした地面に転がされ、帯、着物、長襦袢と、鳥の毛をむしる様に一枚々々ぬがされ、湯文字一枚のしどけない姿にされてしまった。三下達は、お連の人妻ながら脂の乗切った身体に見惚れてしまった。

「馬鹿野郎、なにを見とれていやがるんだ、とっととその阿まあの松の木の下に連れていけ」

お連の身体を手どり足どりして、木の下にどしんと

ゆくと、お辰がその手を逆にとり、松の枝から下っている太い綱に、手を頭の上に一緒につないでしまった。

「そんなに、裾の乱れを気にすることは、ないわね、もっと、はずかしい目をみせてやるんだよ。それ、二人で綱を引上げておやり」

お辰は三下に云った。お連の清いえり足、肩や腰の弾力ありげな、脂の乗り具合、元三はお連の痛々しい姿に好色な目をはしらせていた。三下達は綱を引上げ始めた。お連の体は仰向きのまま地面をひきずられて、遂には手が、胴が、尻が、地面を放れてゆき、今では足さえも地面から放れていた。吹く風に湯文字の裾が乱れ、白い素足が好色な元三の目にさらされる。お連は必死になって、裾の乱れを直そうとして二本の足を動かすが、それが反対に前にも増して湯文字が乱れた。

「ほうら、もっと力を出して引上げねえか」

「へえー、この女、思いのほか重いですぜ」

「ぶつぶつ云わねえでどんどん引上げなよ」

お連は松の枝から宙ぶらりん両手を上に吊されてしまった。お辰は三尺ばかりの青竹を片手にお連に近づいていた。青竹でどうしよう云うのか、

「お連さん、私や、さっきお前さんにもっと恥ずかしい目にあわせてやると云ったろう、これから始めてやるから覚悟をおし。お前たち手伝っておくれ」

お辰は三下達に手伝わせ、お連の両足の足首を青竹の端と端にゆわいつけた。人妻のお連としては、人前にこんな恰好で肌をさらすことは、夫の信吉に対して死んでわびても、わびきれない思いだった。

「お連さん、なにを考えているんだい、信吉のことかい、信吉は助けにきやしないよ、今時分は親分の手下に斬られてしまつているころだよ」

元三は、お連が自分になびかないのは、信吉がいるからだ、信吉を殺してしまえば、お連の一人ぐらい、どうにでも料理できると考え、お連を拷問にかけける以前に、手下を斬りにたたしたのだ。

これを聞いてお連は——私のために夫を殺してしまったのか、私も元三の手で責殺されてしまうかも知れない。夫の信吉がこの世にいない今、私の命に未れんがあるう、死んであの世で好いた同志が仲よく暮そう——こんなお連の気持をお辰は女の敏感さで、早くも感じとった。

「親分、この阿ま、死ぬ気ですぜ」

元三の方に向きを変えて云った。

「面白いやねえか、そっちがその気持ならこっちもこっちだ、責殺してもかまわねえから、長いこと苦しませて見ねえよ」

「お連あん、聞いたかい、親分の言葉を、たとえと苦しませてやれとよ、親分様に礼を云つておおきな」

「じやいいね、始めるよ、いいかい、お連さん、いくら死ぬ気でもお前の身体は生身なんだよ、それを忘れないでくれよ、ねえ」

お辰は、ふところから画師が使う大きな筆を出して、吊られたお連の足の裏をくすぐりだした。両足首を青竹の両端にいわかれていたから逃る術はない。お辰の筆は心憎いまで巧妙に責め続けた。お連にとっては痛みはないが、その擦つたさほどの様に我慢しても我慢できるものではなかった。

「うー」「うー」

うめさながら身体をよじった。お辰は筆で同性のみの知る足の裏の、土ふまずや指のつけ根の感受性の強い部分だけを執拗に責めつづけた。お連は足の指をくの字に曲げて必死にこらえた。上半身の白い肌が苦しさに、汗でぐっしりと濡れ、月光に映えている。吊された両の手首に太い綱が食いこみ、血がにじむ。

「暴れやがって、思う場所が責められないから静かになつてもらうよ」

お辰は三貫目は充分有ると思われる大きな石を拾って、吊されたお連の足下に置いた。「ほら、そこにある大きな石をもう一つ持っておいで」

お辰は自分が持ってきたのより大きな石を持って来させてお連の足下に置かせた。

「親分、ちっと面白い事して見せますから」
「お辰ばあさん、石なんか運ばせて何を始めるつもりだい」

「云わぬが花ですよ」

三下に着いて、お連のひらいた両足首に大きな石が吊された。

「うーうあ」

お連は悲痛な声をあげた。両足で六貫目の重みはあるだろう。お連の身長が「ぐうっ」と一寸近く伸びてしまったかと思われるくらい。

「これでよし、静かにしているんだよ。又この筆でお前さんの一番心持のよくなる場所をこのお辰さんが撫でてやるからね」

くすぐり責がお連に加えられていった。両足に六貫目もの石を吊されているから、どうあがいても、下半身は動かすことが出来ない。不自由ながら上半身を動かして、筆の先を逃れようとする。上半身を動かすには、松の枝から吊られた両の手首が承知しない。かすかに動かす、その動きでさえ、手首に綱が食いこんでいく。お連は本当にこのまま責め殺されるのだろうかと思つた。吊された手首の綱が、どうして私の首に巻いてないのだろうか。首に綱が巻いてあれば、こんなに苦しまなくても死ねるだろうに、今はもう眼の前にいる憎い元三の顔さえ、おぼろげにしか見えない私はこのままで死んでしまう。

「ひいー、ひいー」「ううううー」

お連は本能的にうめいた。

二回目の時には、失いかけた気を完全によりみがえらせた。それはお辰が皮の鞭でお連の上半身を目がけてムチ打ったからだ。石の重みで動くことの不自由な、お連の身体は思うさまムチ打たれ、肌には数本の鞭の痕が痛ましく盛り上っている。

「私や責め疲れしましたよ、親分自身が変わってあの肌を責めてみませんか」

「うん、そうかい」

元三はお辰の鞭を受け取ると、顔に苦笑を浮かべながらお連の前に立った。

「お連、こんだ俺が変わって責めてやろう、お辰ばあさんともがって、ちいとばかり痛いから身にしてみるぜ」

皮の鞭は、風を切ってお連の肌の上で不気味な音をしている。

「びしりびしり」「うあー」

お連の姿は、吊りあえいでいる。手に喰ひこむ綱、この世の責地獄とは、まさにこの事をいうのだろうか。

「びしり」

鞭がお連の肌に鳴るたび、首と乳房だけがあることを示す。乳房が息づき胸が波うっていたのは数分前のこと。今では、「ひーっ」と悲鳴を上げる度に、首と乳房が、びくびくと動く。

「親分、いよいよあぶりを始めますかい」

「そうさな、あんまり生の悪い魚であぶりをするんじやあな。この辺が手ごろのころだろうな、時に表の方が馬鹿にそうぞうしいじやないか」

「そうですね、私がちいと様子を見て来ましょう」

お辰が、あわててかけもどった。

「親分、大変だ、信吉の野郎が斬りこんできましたぜ」

「だらしない野郎だ、四人して信吉一人がたたっ斬れねえのか、信吉一人だ、皆で斬っちゃえ」

命を捨てた気で暴れる信吉の刀はよく冴え打ちこんでくる相手を右に左に、自由自在にかわして敵を倒し、見る見るうちに数人を斬り倒してしまった。勢に乗じた信吉の刃先を防ぎようがなく、信吉は座敷を斬り抜け、縁先から庭先の松の木を見て驚いた。可愛い恋女房が松の枝から湯文字一枚の姿体で吊されているではないか。足は大の字に開かれ、その両足の間は青竹が渡され、両端には大きな石まで、まるで分銅のように吊されているのだ。

「うん、畜生、外道め」

信吉は縁先を跳び下り、切っ先鋭く元三に斬りつけた。元三はかなわぬとみてか、逃げ出した。信吉は追いかけざま、元三の後から

「だー」と斬りつけた。このまま切つ先がもう一寸伸びていれば、少なくとも元三は傷ついたろう。が、横手から、親分の大事とばかり乾分の一人が刀を突き出したのでガチッと信吉の刀とかみ合った。その刀を信吉は外して、横に切りかえした。ずんと信吉の刀に手応えを感じて「うわー」血しぶきをあげて、どうと乾分は倒れた。この隙に元三は、お連が吊られている松の木の本へ逃げていってしまった。

「お連、今少しの辛抱だ、必ず助け出すから待ってくれ」

信吉は斬りまくった。凄じ強さ、手下達も只、信吉の周りを遠まきにしていただけだ。

信吉が一步出せば一步退く有様、業をにやした元三は、

「信吉、これを見ろ、お連の命が欲しければ刀を捨てろ」

ひきようにも、吊られたお連の胸もとに元三は、白刃をつきつけている。

「うん畜生、ひきようだぞ」



「なにをぬかす、刀を捨てなければ、ほれ」

白刃はお連の胸をすうっと撫でた。

「うーう」

お連の豊かな乳房から血が流れた。

「今一回やるかい」

白刃は又乳房の上にあてられた。

「やめてくれ」

「やめるから刀を捨てろ」

「仕方ねえ」

信吉は思い切りよく刀を投げ出した。

「さあ、刀を捨てた。約束だ、お連を助けてやってくれ」

「馬鹿野郎、今のはでたらめよ、いい気になりやがって刀を捨てたお前が悪いのだ」

「なに、畜生、一ぱい食わしやがったな」

「ワハハ、ざまあ見やがれ」

刀を捨てた信吉は忽ち手下達に自由を奪われてしまった。

「お辰、信吉の眼の前でお連の身体を責めさ
いなんてやるかい」

元三は後にいるお辰に話しかけた。

「そうですね、信吉の前で今一度責めてやり
ますかね」

「信吉、手前の女房が責められる姿をよく見
物するがいいぜ、お辰、構うことはない、こ
っぴどく責めてやれ」

「それじや思い切り、この皮のムチで打って
みましょう、信吉さん、自分の女房が人の手
で責められる所を見物させられるのはつらい
だらうけど、私のこのムチをじかに受けるお
連さんはもっと苦しく、もっと痛い筈だ。夫
婦の間だ。そのよしみで苦しむ姿を静かに見
物してみなさるがいいよ」

お辰は、吊られたお連の身体にムチの雨を
降らしている。素肌で鳴るむごたらしいムチ
の音があたりの静けさを破って鳴りつづけ
た。信吉は痛ましいまでのお連の姿を見かね
て、顔をうつむけてしまっている。

「信吉さん、こんどはお前さんの可愛い恋
女房の乳房をムチでたたいてやるから、顔を
あげてよく見なよ」

お辰のムチは、女の生命である乳房へと、
蛇の様に伸びていった。

「ビシッ」

ムチが乳房を打つ。

「うーう」

お連の身体は、電気にうたれた蛙の様に全
身を痙攣させた。たまりかねた信吉は、

「お連を助けてくれ、たのむ、俺はどんな目
にあわされてもかまわないから、お連だけは
助けてやってくれ」

必死の思いをかけて、元三に頼んだ。

「馬鹿野郎、今更このお連を助けて呉れとは
虫がよすぎるぜ、手前みてえな三下野郎には
用はねえが、だけど今なんとかぬかしやがっ
たな、どんな目にあってもかまわねえとか。
その願いだけは聞いてやろうじやねえか。信
吉もお連と一緒に松の枝から吊し上げろ」

信吉は手どり足どりされ、下帯一本の姿で
お連の吊されている同じ松の枝に吊されてし
まった。

「親分、日本一の良い眺めですね、夫婦そろ
って裸のまま吊されたかつこうは、いくら高
い木戸銭を出したって、そうざらには見られ
る見世物じやございませんな」

「そうよ、お辰、こんな面白い芝居や見世物
小屋が大道に転がっている訳がないものな、
どれ二人並べて吊したところで、ぼちぼちあ
ぶりを始めるか」

「では親分、あぶり始めましょうか」

「始める前に、たき木に水をかけて置け、そ
うすれば火のつきが悪いから、少しは長く苦
めるだろう」

「親分、それは良い考えですよ、水をかけて

置きますよ」

「お辰、水をかけたら、ぼつぼつ始めてみて
くれ」

お辰の手でたき木に火がつけられた。木は
水で湿っているから、煙をもくもくと出して
いた。お辰は大きなウチワで煙を、二人の方
へあおぎつけている。煙はお連達の足元から
雲の様に這い上り、やがて、二人の全身は煙
の中に消えてしまった。お連も信吉も煙にむ
せて、今はもう死の苦しみ。

「お連、お前一人を殺しやしない、俺も死ぬ
時は一緒だ」

信吉は煙の中で、これだけをやっとの思い
で云った。

「すいません、私のためにこんなことになっ
て、お前さん」

「なにを二人でぶつぶつ云っていやがるんだ
い、いま少しで火であぶられて、照り焼きに
なっている世からおさらばしようというのに
呑気なもんだ。お辰、どんどんもやしてやり
な、二人共嬉しがっている様だぜ」

「親分、もやしますよ、二人が炎の中で苦し
むさまを早く見たいですからね」

「じゃ、早くしねえ」

お辰は、ウチワであおぐ手を止めて、たき
木を手に持ち、早く火が出る様にかきまわし
た。

「ぼーっ」

お辰がとびのくのより早く、炎が上った。

煙にかくされた二人の姿が焰の中で浮かび上った。お連は湯文字一枚で足首を思い切りひるげ、青竹にいわかれ、石が吊され、信吉は下帯一つ。炎がようしやなく二人の肌に悪魔の舌でなめずり出した。お連の足に吊った石の縄に火がつき、縄が切れて火の中に落ちた。その勢で火の手が一どきに強くなり、お連の下半身は炎の中に没してしまった。火の手が落ちると、お連の湯文字に火がうつり、湯文字の裾は燃えちぎれ、炎と共に空に舞いあがって、お連の上半身を赤々と染めた。肌の焼ける臭気があたりにたちこめる。

「親分、このままじゃ、もうすぐ二人共伸びてしまいますよ」

「そうかい、じや伸びないうちに、もう少し苦しんでもらおうか」

元三は部屋からヤリを持ち出してきた。

今回は、また最初にかえって、新聞、雑誌特に比較的新しいもののなかから、御紹介してみよう。

①「画報近代映画」昭和31年4月号

御苦労さまマニヤーニ嬢

『左におめにかけるのは、伊映画界切つての油っこい演技派、アンナ、マニヤーニが、映画「バラの刺青」に演ずるコルセットしめの熱演』

「親分、そのヤリでどうするつもりです。」
「これでお連の五体を一寸だめし、五分だめしだ」

「じやこのヤリでお連を突くつもりで」

元三はヤリでお連の乳房、胸、腹と所きらわず突きまくった。

「うーん」

炎の苦しさに失神しかけると、元三のヤリ先が肌にささり、その痛みで失神することも出来ない。お連の肌は、ヤリの突き傷で、全身血でおおわれ、血だるまとなった。

「これで最後だ」

元三のヤリはお連の乳房の下をぐすりと突きさした。血が噴き出した。

「お前さん」

悲痛な声で最後の言葉を残してお連の息が絶えてしまった。信吉はこの悲痛な言葉を聞いて自らの舌を噛み切つて、お連の後を追つ

こう説明がついている。「バラの刺青」を御覧になったかたは、御存知のこと、と思うがこの映画でマニヤーニは、夫に先立たれる女セラフィナ・デレ・ローゼに扮する。セラフィナが娘の卒業式にでかけるために、久し振りにコルセットをつけようとする。併し身体が肥りすぎてしまつて、どうしてもはめられない。映画は期待して観たが、そのシーケエンスは割合軽く片づけられていた。

て死んでいった。

この後、この松の木から幽霊が出るといううわさが立った。間もなく元三は高熱を發する奇病に悩まされ、

「信吉が殺しに来た、お連がお連が俺の首をしめる」

などとあらぬことを口ばしり、狂い死にをしてしまった。お辰さんも買物の帰り道の土手で物盗りの手にかかり、土手を朱に染めて殺されてしまった。近所の人々は、元三もお辰もあんまり悪い真似ばかりしたので、誰かのたたりだと云いあった。

そんなことはよそに、夜々松の枝から湯文字一枚で拷問される姿をみたとか、女のうめき声を聞いたなどという、うわさが語られていた。

(終)

この誌上にのつた写真は、多分宣伝スチールからとつたものである。マニヤーニが黒のスリッパを着た上へ、白のコルセット(ウエスト・ニッパの部類)を胸にあて、前部にある釣フックをかけようと、一生懸命胸をしめつけているところ。両足を開いてスネを幾分まげ、尻をうしろへつき出した格好で立ち、歯を喰いしばり顔をしかめて、ニッパをしめつけているのが二枚。ヤツと一番上

のフックがかゝったものゝ、余りに締め上げた苦しさでか、大きな口を開けて絶叫しているのが一枚。

印刷がまずいのが、

何よりも惜しまれるが

さすがマニヤーニの芝

居だけあって大したもの。自虐フォトの傑作というべく、奇巧のフォト紹介も、この程度のものをと望みたくなる。是非一見をおすすめする次第。

⑱「装いの泉」昭和31年8月

特集「こゝろの衣裳—下着—」

最近婦人雑誌はもとよりのこと、週刊雑誌に至るまで、女性の下着に関する記事？

写真を扱ったものが多くなっているが、これは、グラビヤ四頁、その他六頁に亘る特集、

1、まず坊く人のために、2、お金をかけた下着のおしゃれ、3、話題となった五つのブラジャー、4、細く見せるための下着？

5、からだと下着、6、他人の目に直接みえないけれど———こういう六つの項に分けてグラビヤも美しくなかなかなるらしいもの。

⑲「暮しの手帳」第34号

“人生最初の衣裳”

こういう見出しで、世界各国のおむつがグ

フエチに関する切抜きから (3)

阿 川 準

ラビヤによって、実にケンランと紹介されている。おむつ趣好のかたは、必ずおよろこびのものと信じます。

⑳「別冊週刊サンケイ」

昭和31年10月25日号「裸女天国」

七頁に亘るグラビヤは、女湯の脱衣場の生態写真。スリッパをスッポリ頭から脱いでいるのや、上半身裸でスカートのワキ明きをはずしているところ、或いは湯上りであろう、しやがんでまず第一番にブラジャーのなかにお乳の隆起を取めているところなどと、不真面目でなしにとにかく捨て難い感じである。

㉑「サンデー毎日」

昭和31年11月11日号「下着教室」

モデルによる九態のグラビヤで特に珍らしくもないが、たゞ一枚——細紐式のウエストニッパ―をしめた紐のついた背面を写したのがあり、ぐっとクビれたウエスト、緊張して九つのハトメにしめ上げた紐、紐の下にみえ

る腰の皮膚にしわが出来て、極端にしめられているのがわかり、相当の迫力。

㉒「週刊東京」

昭和31年11月3日

号「下着の魅惑」

グラビヤ二頁、七態の写真が、黒サテンのスリッパを着けたのがなかなか美しい。

㉓「主婦の友」昭和31年新年号別冊附録

「洋裁と洋装下着の正しい着方」

㉔「女性美」第2号

「おしゃれ売ります」

何れもグラビヤ二頁、モデル装着のものだが、特に眼につくものでもない。

㉕「週刊サンケイ」昭和31年10月21日号

「ヴェールを脱いだ肢体美」

これは先に本誌一月号で畑晃一氏により紹介済のとおりのものである。

× × ×

以上は、最近のものですが、以前のものにも御紹介したいのが、まだ残っています。整理がまずくて号数など、出所がはっきりわからないのがあって、非常に残念に思います。

「捕われの令嬢」

についての一私見

△二月号の北原純子女史画の口絵より▽

中 谷 冷 一

昭和32年2月号を見て思わず快心の微笑を浮かべました。北原純子女史画くところの、「捕われの令嬢」のすばらしさ。いままで、これ程、私をひきつけた絵は全くこれを置いて他にありません。どういうわけか、和装には全く関心がありません。洋装の着衣の上からの緊縛（勿論、その絵の被縛者が男性であり、女性に依って強制的に女装させられているという想定のもとに見るのですが）これは私が久しく望んでいたものであり、且つこの系統の写真なり絵なりは、これまでにも時には見せていただいていたが、どれも私の好みにぴったりしたものはありませんでした。それでは何故に、この度の絵がそんなに私にアッピールするのか、これに就いて少しく

述べてみたいと思います。

(一)、第一に何んといつても、その着衣が背中て締めあげる（とめるという事）フアスナー付きのワンピースであったという事（実際には背部が現わされていませんから、背中の開きの部分がフアスナー式になっているかどうかはわかりませんが）にあります。

私は久しい以前から女性着に使用されるフアスナー（以後Fと略称します）には非常な愛着を持っていましたが、特にそれが頭からかぶるワンピースの背部に付けられた場合には

(1) Fで頭部まで、それを締め上げるとき、それが頸部に近づくにつれて次第に昂つてくる緊縛感と、その金属性の「シュー」という

音からくる連想。

(2) Fの位置が背中にあるために自分では手が届き難く、——例えば女性がワンピースを着て背部のFを締める際、介者に締めてもらわないと、自分では非常に苦勞する、という事からも明らかですが——不自由であり又、ワンピースを脱ぐ時にも、おいそれと、直ぐには脱げません。身体を前後左右に曲げ両手を後にまわして苦勞しなければならず、丁度囚衣を着せられ勝手には脱ぐことが出来ない様に錠を掛けられた様です。かてて加えてFは金属性ときています。

このような想像の中にも、何か云うに云われぬマゾヒスティックな感じが含まれている様です。以上の事は私達のM—Sプレイに於いて私がワンピース型の囚衣を着せられる時、背中のFを締めあげられるだけで、非常な興奮を伴うことから云えます。

(3) 尚ここでは是非とも付け加えておかねばならぬ事は、「ワンピースは頸まであるものが好ましい」という事です。（ワンピースには夏型のもので頸部、肩や胸の一部まで露出した型のものもありますが、これはどうもいたできません。）即ち頸部まで、きっちり締め上げられるものゝ方が何倍かすばらしいのです。これも、やはり私の体験するところでもあるので、囚衣を着せられて、背中の開きをFで頸部まで締め上げられるときには、丁度

首縄をかけて後手をつりあげられた時の様な戦慄を覚えます。(勿論、私の囚衣は、その頸圍が私の頸圍にピッタリに作られてあり、囚衣と頸の間には殆ど隙間を作れない状態ですが)又、オシメマニヤ等にとっては、ヨダレカケを付けられたかの如き連想も生じてくるのではないでしようか。

(4) 同じ事は袖に就いても云えることで、肩までのものよりは、少くとも肘関節部以上の長さは欲しいものです。すっぽりと女性衣につつまれる、女性衣で全身を完全におおって締めあげるところに妙味があると考えます。

(二)、前述の様に背中に開きのあるワンピースでは、当然その前面(胸部側)には開きめの無いものです。この感覚は、先に「半公刑」で篠原氏が描写していられるセーラー服をウシロマエ(後前)に着せられた感覚と一致するもので、更に男性の洋服の様に、そのどれもが前開きになっているものしかない状態では、本当に囚人になって女性衣で緊縛されたという気を起さすこと必然です。

(三)、次にワンピースに用いられている布地ですが、私がこの「捕われの令嬢」で感じた良さの一部は、やはりここにあるのです。即ちこの絵からはワンピースの布地がナイロンか絹地かを思わせます。しかし私が云わんとするのは、その薄さに就いてではありません。

その光沢に就いてです。外人が女性が身に付けた革製衣にひかれるのも、一つには、その革のかもしれない一種独特の光沢にあると思いますが、私はそれと同じことを布地に云いたいのです。

ナイロン、絹ボブリン、更にはタフタ、サテンといったピカピカ或はテカテカと光った光沢(上記の布のもった滑る様な感じも含まれますが)の魅力。それは私達がサーカス等でよく見る女曲芸師が着ているピカピカ光った衣裳、又、女猛獣使いがつけているテカテカ光った服に通じ、そこから来る一種の威圧感につながるものかもしれません。しかしこゝで云って置きたいのは、私のいう光沢(ツヤ)とは、あくまでも布地そのものの光沢について云っているものであって、よく舞台等で見る色々のカザリ物、金具等を布の上にもりばめたピカピカ光る服を云っているのでは無いということです。あの様なゴテゴテしたものは却って魅力をそぐ以外の何物でもありません。

(四) 以上の外、この絵でプラスになっている事は、着衣のワンピースが非常に女性らしい弱々しさを感じさせるものであること、即ちこの絵で云うと襟が女性衣だけにしかない丸襟であるという事であり、女装愛好の人々にとっても、いくら女性衣といっても男性衣にも似た型のある角襟(角襟なら男性のカッタ

ーシャツもそうである)その他よりは、女性にしかない型のものを着せられる方が、より嬉しい事だと思えます。この事に関しては、同じく32年2月号本誌23頁で南時夫氏が、少し触れて居られますが、私が和装より洋装を好むのもやはり一部はこの点にある様です。

(五) 又、この絵の令嬢の示す「表情」の良さを書き落すわけにはいきません。実際、その表情一つによって絵は生きもし、死にもします。「捕われの令嬢」のそれは、いままでは誰をも見下していた気位の高い女が恥も外聞も忘れて今にも泣き出しそうにしている情景をまざまざと現しています。

(六) 最後に少しく希望を、即ち、緊縛に用いる縄の太さは、此の絵に画かれているよりはもう少し細目のものを用いて、更に強く身体に喰い込ませる様にしていたきたいし、用いる縄はやはりこの絵の様なものか、或は麻縄を用い、普通の紐はなるべく避けていたきたい。更に望めるものならば、被縛体を背面から画いて、背中に締められたF、及びねじ上げられ緊縛された後手のはっきりしたものを一度お願いしたいものと思えます。又、女性の海水着を着た上からの緊縛も、背中をFで締めるということ、ズロース型のスソが太腿に喰い込むところの良さを充分に表して、是非御願したいものです。

ある夢想家の手帖から

沼 正 三

第百五項 わがドミナの便り

手帖では私個人に關することは原則として書かぬつもりであったが、前項に關連して、私がある白人女性から頂戴した手紙二通を紹介することしよう。

仲介に立つて下さったのは、奇巧の寄稿家なる××氏である。白人女性への私の奴隸的思慕を知って、氏の親しい知人であるこのドミナへの手紙を取りもって下さることになった。私は勇躍して、奴隸の手紙を書いた。長文のもの二三通を差し上げた。私の性向その他をはっきり記載したことは勿論である。

それに対して、大分後になってから返事が来た。これは伊太利文であったので、仲介××氏に訳出して戴いた——但し原文の解釈について二三意見を異にする点があり、後記の訳文は氏のそれと同じではないことを、氏の為にお断りしておく——。

(一)

妾のヌマよ

何度も躊躇したあとで、妾はこの手紙を書いている。色々な制約から、妾は今日まで、お前に詳しい手紙を書くことができなかったんだよ。神経質な××の仲介で、妾は紆余曲折の後に、お前からの手紙を受け取ることができた。

云うまでもないことだけど、妾の頭の中にあるお前の幻影は、決して完全な人間の像じゃない。それは正しくマラルメの詠った半獣人の虜囚の姿なんだよ。

私は、自分から求める立場には居らず、何であるよりも先に压制者である。このことを、間違えない様におし。特に、妾がお前の Pene———こういう低劣な言葉は、普通の男性に対しては慎しむのが当然なんだけど———に関心を持っているなどと誤解してはいけないよ。

お前の希望は、鞭撻や足蹴フルスミタ カンゼキを受けることよりも、精神的に屈辱的な立場に置かれるにあること、そしてお前は妾の踏台ベダナになりたいて願っていること、更に、お前の関心がトイレットに、特に汚物に存すること———こういうことを妾は知った。

こうした基礎的知識を得た上で、妾は、お前にどんな行為をさせようかと、夢想を繰り返したことだ。お前は家畜として取り扱われたいと望んでいるけど、かりにお前がそう希望しなかったとしても、お前が醜悪なる黄色人種であるということだけでも、お前を家畜扱いするには充分な理由なんだよ。

妾がいつか絵に描いたサーカスの場面（のように、お前を犬にして芸をさせること）は、一番妾の気に入っているけど、見物人が沢山居ないんじゃない。もっともサーカスでの衣裳というものには、妾は大変興味を持ってるわ。お前は、一人のスタアに名声を得させる為に、彼女が美しい衣裳をつけて舞台で演ずる間彼女の微笑にもかかわらず、苦痛と叱責の中で、浅ましい姿を見せ続けなければならぬんだよ。微笑は人間の為に、鞭と足蹴とはお前の為に。

妾はこの手紙を女友達の家で書いている。妾はもう人間達の処に帰らねばならない……

お前の調教師たるE・R

x x x

スラベン・ブライフ
奴隷の手紙は大抵長文で、綿々と書き続けられているのに反し、女主人のそれは「短く突慥で、頼むということをし、命令したり禁止したりするばかりである」（ヒルシュフェルト、性病理学）といわれる。従来この手帖で「返事」と題して紹介して来たものにもその特徴は見られたと思うが、ここに紹介したものにもそれがよく現れている。「妾は求める者でなく、圧制する者だ」(Non sono una pretendente, Io sono una pressorola pette.)という一句は正にヒルシュフェルトの指摘した通りのことを表現しているわけである。

Pene については、この貴婦人は、普段口に出したり、字に書いたりすることは、殆んど絶対にならないわけである。羞恥心からする禁圧がある。然し、又マよ、お前に対しては、そんな禁圧は無用だ、お前に話し掛ける時、どんな不作法な言葉を使つたって、妾は恥かしく感じる必要はない、お前は人間じゃない、家畜なんだから——然し、妾が無遠慮にその単語を口にしたからといって、自惚れてはいけないよ、お前の肉体になんか妾は何の関心も持っていない。お前は家畜として妾の関心を惹くだけで、男性としては存在していないのだから……パラフレーズすればこうなるであろう。

然し、その家畜視が、女サド対男マゾという観点からのみ来ているのなら、別に特に新奇な価値をもつとは云えない。この手紙の特に注意すべき点は、「醜悪なる黄色人種なるが故に家畜だ」としている彼女の論理にある。サド、マゾ関係が白色人種対黄色人種の関係に転換包摂されているのだ。前項と同じ部類に属するけれども、唯前項では、性的関係を生じてそれを獣姦視し人格同志の関係と見ないから構わない、という考え方が一つ被さっていたのに反し、ここでは、全く Pene が問題にならぬ純然たる家畜待遇が構想されている点を注目すべきである。

家畜待遇として彼女の考えているのは、サーカスの花形たる男装の美女によって演技をさせられる犬である。奇ク三〇年四月号巻頭「残酷な女性達面集」中に、シルクハットにタキシードの白人の女調教師が裸の日本人を犬にして、片手に鞭、片手に頸輪の紐を握つて、満員の観客の前でチンチンをさせている絵がある。（同号二九九頁の解説参照）。「妾がいつか描いた」とはこの画のことなのである。私が黄色人種であることが丁度この画の中の人物に適合する彼女の考は定った、彼女が私に与える役目は、こういう人間犬となつて舞台上で彼女に駆使されることによって、調教師としての彼女の人気を引き上げることなのだ。彼女は白人の観客に対しては、ひ

どく愛想がよい。決してサド女性でない。唯馬や犬に対して厳格な仕込みをするというに過ぎない。微笑は人間の為に、鞭と足蹴はお前の為に……

そして最後には、この手紙を女友達の部屋で書いたとある。私の手紙が彼女達の話題となったことが推測され、私を昂奮させる。

「こんな手紙を寄越した日本人がいるのよ」

「どれどれ：フーン、変ってるね、貴女の犬になりたいってのね」

「それから踏台になりたいってさ」

「随分汚らしいことも書いてるじゃないの」

「厭らしい。肌の黄色い奴でこんなこと考えてるのかしらね。本当に厭ね」

「返事出した？」

「ウウン、相手にする気がしないもの」

「出しておやらないさいよ。功德よ。そりや普通に相手にするのは馬鹿らしいけど、望みどおり犬にしてやったら良いじゃないの。犬に話し掛ける様にして書いてやりや良いのよ」

「そうね。喜ぶわね、きつと」

こんな対話のあと、彼女は僅かの時間をこの手紙を書くのに割いて呉れたのだろう。好奇心と侮蔑……だが、友達の机を借りて、これを書き終った彼女は、もう何時までも人間犬にかかずらってはいない。もっとまともな話をした女友達の方に向き直る。彼女は「人間達の所に帰らねばならない」 (Bisogno che io vado alla casa dei UOMINI) のだ……

私この手紙を貰ってどんなに喜んだかは想像して戴けよう。

俄仕込の伊太利語で、下手糞な伊太利文のカタコトを綴って、早速返事を差し上げた。カタコトと云っても、文法書や字書を用いる労苦が新たに要求される。然しその労苦が私には楽しいマゾ的快感

を伴うのだった。書いものがカタコトに過ぎないことは分っていたが、そういうみっともなさを示すことが、これ亦快感を生じる一因となった。

やがて、彼女から第二の手紙が来た。独乙文であった。

(二)

お前の手紙は、妾の好奇心に訴えたばかりでなく、妾の心内の残酷さをも刺戟した。お前がイタリー語なんか理解らない癖に妾の肉筆の手紙をひどく欲しがるのが、妾にはとても可笑しい。家畜は言語の分らぬもの、妾達は、普通、人間の語彙の数パーセントにあたる単語しか家畜には教えない。(お前のイタリー語が丁度それなのだよ。)

妾が今この手紙をドイツ語で書いているのは、これが少しはお前にも理解できる国語だからさ。命令や叱責というものは、命令され叱責される者にいつでも判然した印象を与えなければならぬものなんだからね。然し、(結局の処) 家畜は心に納得して行動するものじゃない。そうでなく、飢と鞭とで行動に追い立てられるもの、それが家畜なのだ。

お前をどんな風に罰してやるか、その処罰の種類や方法を説明してやったら、お前はさぞ昂奮することだろうね、だけど、妾はお前の直接(の肉体)現象を見るのなんか胸糞が悪い。そんなお前の Pene 鞭の先からみつかれることになるだろうよ。そしてイタリー語で刑罰のことを *la pena* と云うのと、発音上、面白い偶然の一致が、この二つの単語の間にある原因をこれによって理解するだろう。

それからお前は「令嬢ジュリーレ」——妾の異常性の先達である××の好む作品——の中で彼女の犬がさせられた芸をすることになるのだよ。

今日は余り時間もないから、妾の家畜との面白い対話も、この位で切り上げよう。

お前は、返事は一切、お前の母国語で——何故って、それこそ犬の言語なんだから——お書き。

妾との手紙の往復がお前に春を与えることを期待している。

お前の女主人なる

E · R

相変らず、短く、そっけない。そして私が一生懸命書いた伊太利文に対して、嘲笑的に揶揄している口吻である。

「人並なくちをきこうなんておしでない。犬は犬らしく、犬の言葉を喋っておれば沢山」——この侮辱が私にはたまらない快感をよぶのだ。私の伊太利語に対する侮辱ばかりでない、私の母国語である日本語一般に対する侮辱でもあるわけだが、その故に益々楽しいのである。（私が「家畜人ヤブー」の中で日本語を家畜人の言語として、人間の言語より易しく、白人には容易に理解しうる下等語であることにしたのも、彼女のこの手紙が契機となったのである。）

彼女は私の日本語を解しうる。だから、犬の私に無理な伊太利語の知識を要求したりしないのだ。そして、この手紙では例外的に私に理解し易い独乙語を使ってくれているのだが、実際に彼女が私を扱う時には、彼女は伊太利語しか使わない。私は彼女の命令が分らない。そこで私は馬が犬がそうであると同じく、飢と鞭で仕込まれるのだ（Von Hunger und Peitsche beherrscht und bewehrt werden）。伊太利語の社会においては私は馬や犬と同じ言葉の解らぬ獣（taubstummer Tier）で、人間の言葉の数パーセント（einige prozentige Worte des menschen）しか知らないのである。伊太利語と日本人との関係が、人間の言語と畜生との関係に転化してゐるのだ。

令嬢ジュリーの犬の芸とは、横にした鞭の跳び越しである。前信のサーカスでの演技と同様趣向で、やはり性的使用は念頭にない、もし私が性的興奮など示したら、不逞の代物は鞭で一撃やれ、PeneとPena との二語の類似を身を以て味わされることになるのである。

私は早速又長い手紙を書いた。今度は犬の言語（Sprache des Hundes）と彼女の罵った国語で。——返事は未だに來ない。私の方が彼女からの來信を極度に重大視し、それに対して返信しないことなど到底考えられない程度の精神状態になるのに対して、彼女は「飼犬からの便り」として好奇的に眺めるだけのこと、返事するしなは全く彼女の気まぐれ次第だ。この所暫く彼女は人間界の仕事が忙がしいのに違いない。——ふと、何かの機会に彼女が私を思い出した時、又、手紙を書いてやろうという氣に彼女がなることを私は心から望んでいるのである。

北原純子 賣画傑作選

四枚一組 五百円

〈ハートの的〉／＼女体洗滌室

外国文献——分譲——

大中判印画紙焼付

二枚一組 三百円

〈緊縛ヌード十六ポーズ〉

大中判印画紙焼付

二枚一組 三百円

（以上、二組にて、五百円）

〈女学生の羞恥責め〉

大中判印画紙焼付

「血紅」「凄惨」

女体切腹フォト

代理部分讓品総目録に発表してあります。

僕の告白の断章

題して

『悪魔の勝利を夢みる男』

佐々木ツトム

(一)

文化の日、菊花ランマン咲き乱るる此の日は、僕にとって永遠に記念すべき幸福な日となりました。全く思いがけない幸福感につまれた日です。しかもその幸福感が、其の一日だけで終る短いものではなく、それからずっと長くいつまでも続くであろう予感がする、素晴らしいものでした。長い間灰色にとざされていた僕の胸に、妖しいまでも美しい甘美な花が一ぱいに咲きほころびたのです。此の日の菊にも負けない程、豪華絢爛たる妖花が咲いたのです。

思えば昨年の五月特大号以来、巷の書店か

ら急に姿を消してしまった我が恋人「奇譚クラブ」。どんなに痛恨の念にたえなかった事でしょう。世のかたくなノーマルをもって任ずる人々は狂気の如く片っぱしから、狼が群羊を狩るが如く手当たり次第に、其の牙にかけ足で踏みこみに行きました。我が恋人も其の犠牲となり、巷のものの例外ではなかったのです。僕は恋人の無惨な最後を思うと泣きました。何たる無惨——何たる非常識でありましょう、あの雑誌は淋しいアブ族にとって唯一のなぐさめでありましたのに——。みそも糞も一しよにして玉も石も見さかえなく、馬鹿の一つおぼえのように「悪書の一掃」「エロ本、不良出版物のボク滅」とお題目の様に唱え、何んでもかんでも刈り取ってしまったば

それで社会が明るくなるとでも思った輩のやった事でしよう。一体我が恋人のどこが悪いのか？

奇譚クラブが世の中にいかなる害毒を流したのか？ 事実は害毒どころか、全く逆の偉大な功績を上げつゝある奇クでした。よく研究もせず、ろくに調べもせず、事実や真相がどこにあるか、その実体も見きわめもせず、表面だけの現象や一節分だけの動きに神経をとがらし、それを捉えて来て全貌であるが如く錯覚して、その錯覚の上に打ち建てた論理を楯に「不良図書ボク滅」の旗印のもとに半ば恐怖にかられた彼等は、実は聖書にも似た奇譚クラブを、他のくだらないエロ本と共に亡ぼしてしまったのです。

奇譚クラブが、決して彼等の思う様な悪書でない証拠は幾らでも上げる事が出来ます。例えば、あの可憐な表紙を見ただけでも、その事がいえるのです。同じアブノーマルな現象を取扱っていた「F紙」という本を見ますとそれが一そう判つきりわかります。「F紙」の表紙は、いずれの号も無気味なガイコツが躍っています。或は蛇がのたうっていたりします。蛇やガイコツの表紙は何を意味するのでしょうか？「アブノーマル族よ、お前達は間もなく滅亡するのだ。今の内にせいゝゝ楽しんでおくがよい」という警告であり宣告であり、嘲笑と見るより他はありません。ガイコツは死と滅亡の表徴です。蛇やシルクハットをかぶったクチバシの尖った馬の表紙は呪とケイベツの意味です。つまり「F紙」はアブ族を嘲笑ハイセキしていながら、そのくせアブノーマル族をくいものにして利益を上げていたのです。いかにアブノーマル族でもこんなに踏みにじられてよいものでしょうか？、こんな雑誌こそ不良出版物でなくて何んでありましょう。そんなものと奇譚クラブを一しよに扱われてはたまりません。奇クが決して其の様な雑誌でない事は、先ず第一にあの可憐なほゝえましい表紙が表徴しているのです。奇クの表紙は、アブ族の滅亡を意味してなぞいけません。希望と微笑とが含まれています。ですからあの表紙を見ると、僕は孤

独の淋しさから解放されるのです。自ずと微笑が湧いて来ます。それから内容を見て驚倒するのは、物凄く豊富に読者の希望や願望を取上げて、直ちに誌上に反映させ、非常に沢山の頁を読者のため開放している事です。交歓室だけでも大変ですのに、告白手記や創作随筆等まるで読者の手によって成立っているかのように感じられます。それ程読者に愛されているのです。又それ程奇クは読者を暖く抱擁していました。正にアブ族の恋人といつて過言ではありませんまい。こういう種類の雑誌は他に僕は見た事がないのです。僕は奇クを恋人のように思っていました。其の奇クが突然姿を消したのです。それは恋人に失踪された者の悲しみ、やるせなさでした。一時はまるで食事ものに通らず、夜も眠れないのです。愛酒家が酒を取上げられ喫煙家が煙草を奪われたようなものです。それでもやがて氣を取直した僕は、せめて奇クフアンを探し出し連絡をとり、失った恋人に対する思出話等語り合い、互に心をなぐさめ合わんと色々努力を始めました。しかし困った事には、奇クフアンがどこに居るのか皆目わからないのです。これは秘密な願望に関する事柄です。奇クフアンがたやすく見つかる筈はありません。ところが、或る日の事です。「実話雑誌」という本が発行されていますが、その雑誌の読者交歓室に春日ルミ嬢のフアンと名乗る九

州の乙女の投書を発見しました。春日ルミ嬢といえは奇クフアンをわかったモデル嬢です。正に此の時の僕は飛立つ思いでした。早速情熱の便りを差上げた処、十日程した或る日、返事が来たのです。その全文を原文のまゝここに御紹介しておきましょう。

(二)

お便り有難うございました。とても興味のあるお手紙で、時々微笑致しました。御想像の通り私も奇クは、長い間愛読して参りました。奇クが発禁になってから、私達が集って会を作ったのです。芸術趣味会といって会報を出しておりますので、御参考までにお送り致します。よろしかったら御入会下さいませ。私にお便り下さった方も何名かございました。私にけれども、中々永續きする方がないのです。小説等お書きになつていらつしやる御様子ですけれども、芸苑(送られて来た個人誌)に御寄稿下さいませんか、色々な方がいらつしやいますので、とても経験させられます。でもあまり浮気なさいてはいや。私はマゾもサドもあるの。それに同性愛が大好き、困った事ですのね。でも会員の方は、大いサジストの方はマゾを持っていらつしやいます様です。矢張り一つの性格に限る事は出来ませんのね。貴方は其の上、大変美しい方のよ

うですのね。御自分でおつしやるようですか
ら素晴らしい方ね。是非お写真拝見したいわ
このお便りに必ず同封して下さいね。私の事
でしたら色々お知らせするわ。お写真もそん
なにきれいな方に、こちらから先にお送りす
るのは気がひけますので此の次にしてね。ク
イズにお答え申しましょうか。私だったら両
足の間に其の方の首を挟んで首しめにして差
し上げてよ。プロレスなら何をしてもよろし
いのですから、首をしめ乍ら顔を息が出来な
いように太股で押しつぶしてしまいたいわ。
そしてそのまゝじつとしてゐるの。私は海水
着、その方はサポーターよ。この後をつけ加
えて下さいませ。これが私の出題？

最後に私の身の上の事ですけど、経済的に
はそれ程ではありませんが、時々会員の方に
お逢いした時、お小遣を戴きますけれど足り
ないわ。そして時々は何となく自己嫌悪にな
る事があるの。出来たら私に一層の満足をあ
たえて下さいませね。貴方は何となく、私に
とって新しい経験を与えて下さる方の様な気
持がいたします。では御返事お待ちしております
ます。取り急ぎ

〇〇様

〇代

(三)

此の返事と共に同封されて来た「芸苑」な

る本は、ガリ版ずりの葉紙、まことに粗末
な本でしたが、定価は二百円。僕はあいにく
勝手元不如意だったので、いづれ入会するか
らという手紙を差上げました。写真をそえて
送ったのです。けれども彼女の手紙はあとに
も先にもこれっきりでした。其の後、原稿も
送りまし、会員申込票に一部の金額をそ
えて送りましたが、矢張り何んの返事もなく
さては氣まぐれか、一ぱい喰ったかとひどく
失望しました。すると其の後、今度は戸破貞
子という名を同じ実話雑誌で発見しました。
戸破貞子といえば、かつて奇巧の交歓室で素
晴らしい投書を発表し、多くの愛読者をわか
した方です。そうか戸破さんは高岡の人だっ
たのか。僕は喜びにふるえ乍ら、実話雑誌
の交歓室の住所をたよりにお手紙を差上げま
した。しかし意外にもこの情熱のレターは、
沢山の符箋がついて戻って来たのです。あん
なに実話雑誌の交歓室で「連絡を乞う」とか
「お便り下さい」とか、二度も三度も投書し
ていた戸破さんの住所が出鱈目であったとは
——。しかもこの秘密にすべきレターは、こ
ちらの局では開封されているのです。これは
僕の方も軽卒でした。僕は封筒に女装の時の
名を書いて差出したのです。局では受取人も
差出人も不明なので、開封してしまつたので
す。中身は僕の正確な住所が書いてあつた事
はいうまでもありません。しかし何という事

でしよう。せまい田舎の街の事、僕の事は局
内でも知っている人ばかりです。それ等の人
には、僕は自分の秘密をあらういざらに知ら
れてしまつたのです。

「お前は、とんでもない手紙を書いて呉れた
のねえ」

母は青い顔をして僕に言いました。

「お前はあんな子だつたのかい！」

とも言われました。始めて知る我が子の世
にも怪奇な慾望に、母は呆れてろくに口も聞
けない程でした。僕は全く消え入りたい位で
した。生れて始めての罪の意識に恐れおのの
きました。此の時以来、僕は噂の的になつて
まいりました。でも僕はあきらめておられま
せん。それから此の附近で、それらしい趣味
の女性を実話雑誌の交歓室で発見し、こりも
せず又、手紙をそつと差出しました。ところ
が此の人は、僕にコン／＼と意見のお便りを
下さつたのです。全然、物の考えが根本的に
違つてゐるのですから、議論しても始まりま
せんが、その方は好意的にお便りを下さつたの
に違いありません。その他、書店で拾い読み
した雑誌の広告をたよりに、試みに送金して
見ましたが、いづれも奇巧には似ても似つか
ぬ只のお粗末なエロ本でしかありませんでし
たので、僕の心はなぐさまないので。こん
なわけで、どれもこれも僕を満足させて呉れ
るものではなく、少しも氣が晴れないのです。



僕はどんなにもがきのたうった事でしよう。何故奇クが休刊にならない前に、一度でもよかったのに告白記や、創作なりを投稿しておかなかったのかと、今更悔やんでもおつきませんでした。あの頃は僕はもう読むだけで充分満足でしたから……。まさかこの本が発

禁になろうなんて考えていなかったのです。夫婦雑誌やあまとりあが、そろ／＼見えなくなり始めた頃、奇クもと、薄々予感のしない事もなかったのですが、まさかこんな目に会うとは夢にも思いませんでした。しかし奇クが休刊になってからは、奇クに関する事は一

切あきらめました。幸いに割合に多趣味だった僕は、映画に、文通に、読書に、クイズ、創作と色々の事に没頭し始めました。

(四)

しかし、どれも極く表面だけの楽しみしか味えないのです。奇クのように身心共にゆさぶる感激は少しも湧かないのです。殊に僕の手記や告白文、創作等、奇クでなければ通用しないものばかりです。それでもたった一度だけ短い作品が「笑の泉」の最近号に載せられました。さすがに、その時だけは久し振りに嬉しかったのです。クイズの方では「読切小説読物」なり、小雑誌の「風流マンガボ大学」なるトンチクイズの解答をよく出しましたが、既に四篇採用されました。ところがこの雑誌社は読者に約束した事は守らないのです。応募規定には「優秀なる者には美しいアルバムをお送り致します」とあり、その翌月号には、「掲載された方を優等生とまとめます」とあるにかゝわらず、四篇を採用しながら何も送ってこないのです。妙な雑誌社もあったもので、

こんな事をして読者をだましてよいものなのではないか？。その他、映画を見ても大した事はなく、恋人も女性の友も妻子もなく全くの孤独の僕です。折角、恋人らしい女性にめぐり逢い親しくなっても、僕の切なる願いを聞くに及ぶと、例外なくいずれも逃げ出し遠ざかってしまうのです。僕の切なる欲望はそれ程いやらしいものなのでしょうか？。

しかし考えて見ると、世にも怪奇な欲望なのです。一口にずばりといえば、僕は「悪魔の勝利を夢見る青年」なのです。これは奇くでなければ理解出来ないらしいのです。そういえば、小説にだって未だ僕のような主人公の登場はありませんでしたし、さすがの奇くも未だこのような風変りな欲望を取扱っては居りませんでした。似たものはあるのですが、之は広い世界に僕一人だけの特別異常な欲望なのではないか？ いゝえ、決してそんな事はありません。きっと同志の人があるに違いない。と、そうでも思わなければ、僕は一人ぼっちになります。「悪魔の勝利を夢見る男」については稿をあらためてくわしくしたためますが、此の度は極く簡単にその片鱗だけを説明するにとどめます。

(五)

現在、性は解放されたと言われて居ります

が、成る程広く解放されました。「さあ、どなたもごらん下さい」といつているようです。その実、奥までは見せないのではありませんか。僕は「悪魔の勝利を幻想する男」の実態を余すところなく、ここに暴き出してみたいと思うのです。しかし、それを実際に実行にうつすのは、大変な冒険がいりますし、僕は破滅してしまうかも知れません。今まで奇くがあったからこそ、僕の怪奇な欲望は少しづつはけ口を見出して、爆発せずにすんだのです。奇くは僕の爆発せんとする衝動に對して素晴らしい安全弁の役割を果していました。少しづつ流れる水は美しい平和な眺めとなりませんが、一度にどつと流れ出す洪水は、家も畑も人も押し流してしまします。人間の欲望もこれに似ています。如何なる人も欲望はあります。そしてその欲望は、建設的な生の本能だけではなく、破壊的な死の本能も多分にあります。僕の切ない欲望は、死の変形にすぎません。しかし、ありふれた死の本能でないのです。女性を引っぱたりして喜ぶ単純な欲望なら、何もこの告白文を書かずにすむのです。甚しく異色ある風変りな、未だかつて何人も書いた事のない願望です。怪奇小説で有名な江戸川先生でさえ、取り扱わなかったものです。しかしこの欲望に似たものや、極く単純なものなら、誰しも抱くありふれたものにすぎません。その単純なものを

一つだけあげておきましょう。どんな恋人同志でも情熱に燃えて来ると、殺し文句というものを口にします。その殺し文句は、誰も御存知のように色々な形式のものがああります。其の中で次のようなものを一つ考えて見て下さい。

(六)

『あなたは悪魔よ……私をこんなにしてしまつて……』

可憐な乙女が、愛する美青年の耳に熱い愛の吐息と共に、こうささやくではありませんか。彼女は口では青年を非難しています。しかし心の底では反対なのです。彼女はこの時自分を天使にはなぞらえて、相手を悪魔に見立てています。しかしこの悪魔は何となく好しい悪魔でありましょう。彼女は悪魔に征服された天使を幻想し、不思議な陶醉を感じ恍惚となつています。これは相手を悪魔に、自分を天使になぞらえて、色々空想し幻想する例ですが、その反対の事もあるのです。即ち自分を悪魔に相手を天使にするのです。

『あなたは天使よ、かわいい天使……あたしは悪魔よ、もう絶対に逃がさない』

『あたしは悪い女ねえ。あなたをこんなにしてしまつたわ。でももうだめよ、あたしは悪魔になったんだから……。かわいい天使さん

今夜はあたしのものよ。』

いずれも妖艶なマダム等が、年下の純情な青年を相手に、くどく情熱の悩ましい殺し文句です。前者も後者も共に悪魔の勝利を夢見ているんです。こう考えて来ますと、悪魔の勝利を夢見て不思議な陶醉を感じるのは、僕だけではないようです。しかしこの程度の願望ですめば、それは微笑ましいたわむれにすぎません。僕のはもっと深刻で複雑なのです。僕に必要なのは年上の妖艶なマダムでもありません、年下の可憐な女性でもありません。必要なのは二人の女性です。これは一人は清らかな乙女、もう一人は妖艶な女性。或は一人は白人の娘、他の一人は日本娘。又は自分の嫌いな女性と好きな女性。或は両方共、勝気なサジズムに富む女性……等。こう申し上げたら

「ハハハ……判ったぞー」

奇クフアンの賢明な読者なら、ハタと膝をおたたきになるかも知れません。僕の欲望の正体がお判りになったかも知れません。しかし、そうでないかも知れません。早合点は禁物です。以上の女性同志のものが一つ。次は「美男と美女。醜女と美男」等。最後に之は「僕と醜女」或いは「反感敵意を感じる美しい女性」又は「大女」又は「蛇のように執念深い女」等。以上がこれまでの僕のいわゆる「悪魔の勝利を夢見る」ための材料でした。

ところがそれだけに止まらないのです。僕の欲望は果しなくひろがって枝葉をのぼして行き、益々怪奇複雑さを加えて来るのです。そしてこの究極こそ、僕を破壊にみちびく恐ろしい断崖なのです。この究極の悲願こそ、未だどんな書物にも見出されなかったものなのです。僕一人だけなのでしょう。考えるとたまらないのです。あゝ、とにかく奇クがもう一度この世に出現しない事には、どうにもならないのです。僕は恋人奇クと再会する日を、どんなに待ちこがれていたことでしょうか。

(七)

僕はそれまで人形を用いて、人間のかわりとして楽しんでいました。それで強い欲望も幾分か緩和されていきました。しかし最近では人形では満足できなくなっていたのです。いかに人形が美しく精巧に出来ていても、物はいわず表情は変らず、こんなに幻想をたくましくしても、幻想はぶちこわれてしまします。どんな人形を取扱っても、其の口元の平和な微笑が浮んでいるだけです。その美しい口から、すさまじい悲鳴も絶叫ももれてはこないのです。

「えゝい、だめだー こんなもの。」

僕は時々かんしゃくを起して人形をたゞきつけます。美しい人形も見るも無ざんにこわ

れてしまい、腕もとれ、首も飛んでしまい、みにくい物となります。そのやるせなさ、物足りなさ、畜生めー。僕はもう人形では我慢が出来ません。幸い僕の家は工場を経営していますので、女工を数名使っています。大して美しくもないのですが、人形よりはましです。僕の熱っぽい目は女工達にそゝがれました。だが、いざとなると母や弟が目に見えてきて、その幻影が僕の欲望に水をかけるのです。しかしこのまゝでは発狂してしまいそうでした。夜毎、床の中で僕は色々な事を考え、幻想をほしきまゝにしました。しかし、それだけではどうにもやり切れなく悶々の情をいだき、久し振りに新潟の街を歩きました。その日は文化の日です。露天の古本屋でも漁って見ようかと思いましたが、一人の若いいきのいい兄ちゃんがたたき売りしていました。その声を頭上できゝ乍ら、僕はしやがんで古本の山をかき廻してしまいました。するとふと目にとまった懐かしい五文字。『奇譚クラブ』

「おや、奇クがこんな所にー」

ほこりにまみれた沢山の古本の下で我が恋人が……。そっと引き出した時、僕は泣けてきました。恋人のあわれな姿が僕の心を悲しませたのです。「奇クもこうなってはなあ」と考えつゝ表紙に目をやりました。「九月号！」「白っぽい表紙に黒一つの絵です。おやー妙な奇クだぞ……ニセモノかな？ それと

も余程古いのかな？ 僕はかなり以前からの奇クの愛読者ですので、大ていの奇クとは顔馴染です。しかしこの奇クは全く見るのが初めてです。ほこりにまみれているとはいえ、その表紙は新しいものです。決してかび臭い匂ではありません。僕は急に胸が妖しく高鳴って来るのを感じました。昂奮をおさえず、最終頁をのぞいて見ると、果してこれは三十一年度発行のものです。「あつ！」と僕は

叫ぶところでした。奇くはよみがえったのか？。不死鳥のように却火の中から華麗な羽ばたきを見せ、たくましくもけなげによみがえっていたのだ。いつの間に？。これは奇クの復刊号だったのです。僕はもう宙をふんでいるようでした。どこをどうして家にたどりついたのか、まるで覚えがない位に夢中でした。気づいた時は自分の部屋にとじこもって机の上に再会した我が恋人をそっとのせて、しみじみ眺めている自分だったのです。あゝこの喜び！ ようこそ奇クよ、よみがえって呉れたね！ それにしてもあの火の中からどうして？有難う、有難う、有難う。編集部の皆様、いばらの道を切りひらき、苦難の山を

本誌一月号に発表しました小生のハラジオテレビ通信Vに対し、東京の或る読者の方から編集部を通じてお手紙を頂きましたので、読者の皆様にお知らせいたします。貴重なお

乗り越えて定めし大変な御苦勞であつたことでしょう。

(八)

ようこそ、我が恋人を炎の中よりよみがえらせて下さいました。もとより昔の豪華な奇クには及ばずとも、よみがえった奇クは、さながら天然真珠の様に輝いています。一冊の古びた奇クは、僕を破滅の一步手前から救い上げて呉れました。奇クよ！ 我が恋人奇クよ！ 我は御身を永遠に愛しましょう。手ばなさないぞ！ どこへもいつて呉れるな、奇クよ！

之からどしどし投稿させて頂いていただきます。幸い資料も体験も幻想も無限な程豊富です。何から書いてよいか判らない程、あり余る材料を持ち乍ら、惜しむらくは僕の筆力がそれにとまわらない事です。御覧の様に凄腕の乱文で書くべきところを落したり、どうでもよい事をくどくど並べたり、しどろもどろの拙文です。でも僕は渾身の情熱をそそいで書いています。こんなに張りきり、こんなに元気にな

知らせを頂いたのは、(十月三十日、ラジオ東京テレビ「ゼリア・プレゼント・ショウ」より)「ムチ打ち」と題した通信の中で、濠州人男女二人に依って行われた曲技的ダンス

ったのは生れて始めてです。これは僕の胸に妖花が咲いたからです。復刊号の奇クが僕に花を咲かせたのです。僕等のようなアブニストは、宗教でも友の意見でも救われないのです。其の根元は宗教より遠い所にあり、友や母の愛情より深い所にあり、自分でもわからない謎につまみまれているからです。あゝ！ほこりにまみれた一冊の奇クが、僕をこんなに元気づけて呉れました。その功績は僕にとつて無限です。奇クの存在は僕にとつて神以上です。こんなにも僕は奇クに惚れ切っています。全国には僕のように奇クで救われた人がどの位あるか、実はわからない程沢山存在しているのではないのでしょうか？もしそうすると、奇クは悪書どころか宗教もなし得なかつた偉大な力の持ち主です。世の中にはあつてもなくても、どうでもよい本が存在しています。如何に名作でも傑作でも、そいつがないなら破滅であるという程、必要かくべからざるものではありません。ところが奇クのような本は、なければ僕はどうかなくなってしまいます。悪魔の勝利を夢見る僕は、空想を実行にうつしてしまつたかも知れないのですから。

について、でありまして、その文中、「この二人のダンサーの名前はショウの最初にしか名前が出なかつたので書き洩らしてしまつたが御存知の方がいたら是非知らせて戴きたい」

と書いたことに対して早速の御教えの便りを寄せて下さったのです。一月号の小生の『通信』の補遺として、ここにその全文を掲げておきます。

〔ラジオ・テレビ通信〕

“ムチ打”と“緊縛”補遺

間島真一

拝啓、年の瀬も押し寄せ、何かと御多忙な毎日を送りになって居られること、拝察いたします。さて、奇譚クラブ一九五七年一月号誌上に御執筆になった「ラジオ・テレビ通信」の「ムチ打ち」と「緊縛」を大変深く拝見いたしました。それにつきまして、知って居ることがありますので早速ペンを取った次第です。お尋ねのオーストラリア人男女の踊りは「マーガレットとモリス」と云うデュエットです。ヨーロッパ、北米、オーストラリア、パンコック、マニアを経て香港のリック・クラブに出演中のところ、焼けた赤坂ラテン・クォーターの経営者に招かれて来日しました。

御覧になった踊りは、彼等の得意のレパトリの中ホイツ・ボレロ（ムチのボレロ）です。最後に口にくわえたタバコをムチで切る曲技が加えられてナイトクラブのステージで好評でした。近日中に日劇に出演する

かも知れません。本月の七日から二十日まで沖繩へ行って来て、クリスマスには銀座のキヤバレー・Mで一日二回のショーをやりました。

彼等は社交ダンスの世界チャンピオンでもあったのですが、最近ばかり踊りませんが、素晴らしい踊り手です。何故、私が彼等を知って居るか、一寸お知らせしましょう。

彼等が香港から持参した衣裳をラテン・クォーター火災の時に、半分以上焼失し、残ったものも使用出来ない様になってしまったのです。そのとき私が新しいコムチュームのデザインと制作を依頼されました。以来、十組程のコスチュームを既に作り、目下一組制作中で、もう一組のデザインをもやって居ります。同封の便箋は彼等のものですが、これも私がデザインしました。

こんな訳で彼等について深く交際して居り

ます。麻布四の橋に住んで居ります。四部屋のアパートで仲々つまましい生活です。いろいろ面白いことを見たり聞いたりしますが、亦次の機会にお知らせしましょう。彼等のビザ（査証）が一月中に切れるので、コーマ・シヤル・ビザに切換えられる様に手続きして居ります。下りれば六カ月滞在する訳ですからT・Vにも再出演するものと思います。思いつくまゝに誌しました。乱筆御許し下さい。

・間島真一様

草々

以上の通りであります。小生の疑問がすっかり解けたばかりでなく、それ以上の新しいニュースを豊富にお知らせ頂き、大変嬉しく思いました。資料を提供下さいました方に誌上を以て厚く御礼申し上げると共に、更に変わった話題のお知らせを期待して、ペンをおきます。

尚、序でに、同封された便箋を一寸御紹介しますと、右側三分の二は白、左側三分の一はピンクに染められたシツクなもので、右側の白地の上部にはMargaret and Mauriceと印刷され、左側のピンク地の上部には、蛇の様に輪になったムチを握った右手拳、ムチの輪の中には、踊る二人の両身を小さく出しています。

「体験記」

或る女装マニヤの記

森 本 信 一

二月号にのった南時夫さんの『我が異常性の記』を読みまして、私の様な性格の方が他にもいらつしやるのを嬉しく思うと同時に、その記述に色々と不満も感じましたので、以下私の体験を書き綴り乍ら、南さんや私と同じ様な女装願望に悩んでいる方々の手びきとしたいと思います。

南さんは『女装マニアの方の中でも深夜ひそかに女装してみる位でそのまゝ戸外に出るというような事を経験された方は数少いでしよう』と書いておられますが、私はその数少い経験者の一人です。いや私の場合は白昼でも公然と女装のまゝ外出することさえありますから、それこそ本当に数少い一人なのかもしれません。勿論そうなる迄には私も随分苦

心しました。南さんが『今でも下着一切からアクセサリーまで完全に揃ってあれば』と書かれた様に頭の先から足に至る迄の一切のものを完全に揃える事は完全な女装への不可欠の条件といえましよう。たゞ南さんは種々の条件が満たされない為に二十七歳の現在では女装を中止されていられる様ですが、私がこの文の冒頭で不満があると云ったのはこの点なのです。ひと通りの女の衣類、装身具、化粧品などを揃えるにはかなりの資金が要るのですが、これは若さの溢れる十台から二十二、三歳では特殊な環境にある人を除いては調達が困難でしょう。又南さんによれば、洋装は年令的制限があるからとの事でしたが、昨今の様に洋装が一般化されてみれば、着こなし

の楽な点、費用のかゝらぬ点等からいっても和服に勝っていると思います。故に私は三十になつても、四十に手が届いても女装は可能であると云いたいのです。若さがなくなる弱味は、衣裳や化粧の進歩で補えます。現に私は三十歳を一寸越しているのですから。

さて私が如何なる方法で、女装用の品々を手に入れたかを記してみましよう。女装マニヤの人達が屢々入手に非常な勇気を伴うという下着類は、私の場合、某婦人雑誌社の通信販売を利用し勤務先の附近のなじみの本屋に女名前前で送って貰うことよって簡単に解決しています。もっとも最近ではメンスバンドやパソナイ等を求める時の快感を味いたくて女装してデパートなどに行く事が多くなりました。洋服は矢張りデパートで、田舎の親戚の娘に上京出来ないから頼まれたんですが、という口実で大体の寸法を示して作ってもらいます。この場合のコツとしては最初は細部の寸法の余り必要でない様なゆったりした型の服を選ぶことであつて、スーツ等は一、二着作らせてからにする事です。こうして作った衣服を私は冬スーツ一、合着ワンピース二、オーパー一、夏ワンピース二、ほど所持しています。靴は勤務先で自分の靴を作らせている店に足型を示して作らせました。最初の注文の時、背も大きい、足も大きな娘だると云いました所、いや近頃の娘さんはこの位の足の

人が（註サイズは十文三分です）ちよいといますよ、と別に怪しむ風さえありませんでした。一番頭を悩ましたのはかつらの問題です。私は女装用の品物を揃える時、これだけ金をかけるからには、どこに出ても完全な女性で通る位に凝ってみようと決心しました。で、かつら屋も随分方々を当って、やっと適当な所をみつめました。念の為に申し上げますが、この場合演劇映画会社向けのかつらを作っている所は不適当だということです。やっとみつけたその店には、空襲で半分ほど禿になった親戚の娘のかつらを頼まれたからと切り出しますと、初めは、御本人に一度来ていたゞいて頭の寸法を計ってからにしたい、と断られました。勿論この答は予期したものなので、それが本人は人前に出るのをいやがってどうしても上京しないのだが、と重ねて頼み、それでは頭の寸法を詳しく計ってくれればいゝ。という事で解決しました。勿論初めはあちこち具合の悪い所がありました。二、三度手を入れて内びつたりして、今ではかぶっている事すら忘れる位で、新しい髪型が発表になると、自分に似合いうようなのをみつけて、時折セットをしながら貰うのが私の楽しみのひとつになっています。所でこれだけの品物を保管する場所が私のたったひとつの悩みの種なので、自分の住んでいるのは親戚の家ですから置くわけに

ゆかず、只今の所は季節に合う物は大型トランクに詰めて先に書いた憩意な本屋さんに預け、季節外の品物は東京駅のロッカーを利用してあります。同じ趣味の方で預けてもよいという方がありますればお預けして、その方にも利用していただいたらとも考えております。

私が女性に変身する時は、都心の中程度のビルのトイレを選びます。大ビルでは男子女子の区別がはっきりしていますから駄目で、駅や共同のWCは不潔であり、又たえず利用者が待っている様な所は、余り長いと不審に思われる等の理由から落第です。中型ビルのトイレでも都心のものは凡ね清潔で、然もスペースも広く着がえたり化粧をしたりするに

一九五五年十月 於赤坂見付（筆者）



それでは外出した時の体験に移ります。私が初めて都心に出たのは、今から二年ほど前の秋の初めでした。冬から始めたかった最初の計画がかつらの完成がのびのびになった為に狂ったのは少し不安でしたが、思いきって出てみることにしたわけです。九月の初めの事としてスリープレスのワンピースなので、腋毛や腕のむだ毛は前日のうちにきれいに始末しておき、ひる前に丹念に顔を剃ると、期待におどる胸をおさえて会社を出、用意してあ

った旅行鞆をさげて銀座のAピルのトイレに入りました。こゝで化粧の事に一寸ふれますが、クレンジングで洗顔レコールドで拭いた後には一度液状白粉(例キスミーフアンド)をぬり、その上をクリームパフか粉白粉で仕上げると、ひげの剃りあともかくれてきめの細かいお化粧が出来上る様です。こうして化粧を終ったあと、カップを二つ宛入れたブラチャ―(こうすると普通の女性の乳房に相当する胸が作られます)とナイロンパンティの上からコルセットをつけ、落下傘スタイルのベチコートの上からワンピースを着ました。これだけの支度に約四十分位かかりました。云い忘れまし

たが私は男性の象徴を意識しない為にも女装の時は常にメンスバンドを着用することにしています。たゞ最近流行のズロース型は夏などむれやすいので、以前からあった前後の三角型の布をゴムバンドでとめる型のを選んでいきます。こうしてすべての支度を終え、一時間ほどして鼓動のする胸を抑え、そつとトイレの扉をあけたとたんハツとしました。自分の支度に夢中になって外の物音に気がつかないでいる内に、娘が一人化粧なお

一九五六年十二月 於 豊島園 (筆者)



しの最中だったのです。然し今更トイレに引込むわけには行かず勇をこしてその娘の側に立ち手を洗いました。娘はちらっと横目で見た様でしたが、すぐ又自分の唇にルージュを塗り始めました。胸をなで下ろすという気持はこんな時を云うのでしょうか。Aピルを出た私は、男物の入った鞆をY駅の一時預けに托しました。こゝでも若い駅員にじろく見られた様でしたが、私は成べく下を向き、のどぼとけをかくす為にあたえず手にしたハンケチ

で顔の汗をおさえるしぐさをくりかえしてしまいました。こうして鞆をあずけてしまうと急に心細さが押し寄せてきます。何かとりかえしのつかない事をしてしまった様……。そんな気持をふり切る様に私は銀座通りへ向って歩き出しました。足には白いパンブス、手にも白い真新しいハンドバッグをもって。華かな衣裳をまとい、美しい魚の様に人波をかきわけてゆく女達の中に私もいると考えただけで全身がふるえる様なときめきをおぼえます。しばらくして私はT劇場に入りました。入口の案内ガールがどんな目で私を見たかは、うつむいて急いで通りすぎた私にはよくわかりません。それから南さんがした様に私も婦人用トイレに入りました。休憩時間をねらったので内部はかなり混雑しており女性の甘い体臭が満ちていました。その中で私は化粧をなおし、スカートをまくってストッキングをなおしさえしたのです。

その後現在に至る迄、月に五回乃至七回位は女装して外出し、その度になるべく女性が集りそうな場所に行くことにしています。更にこの楽しみを倍加させるものに写真があり

一九五六年十二月 於 豊島園 (筆者)



ます。夜間のみの外出の時は別として、昼間外出する時はカメラと三脚を携えてゆき、神宮外苑や宮城前、その他都心をはなれた公園や郊外に出かけて女としての自分の記録を残しておりますが今迄に三十枚位の写真がたまりました。そのうちの三枚ほどをおめにかけます。その後の外出についても色々書きたいような異常な体験がありますが、それは機会を改めて書くことに致します。

最後に私が今年あたりから始めてみたいと

人達の間で衣裳や装身具等の交換をしたり(勿論和洋装のどちらでもよい)好きな女装をしている(な)楽みを味わたりたいのです。又私は十六ミリの撮影機も持っており、男性がきらびやかな女性に変わってゆく過程なども撮影してみたいなど思っており、私の考えに御賛成の方がいらっしゃいます。したら、お便り下さる様お願いして、拙い筆をおくことに致します。

考えている事について一言します。それは女装同好会といった様なグループの結成です。云う迄もなく私達は一面に於ては普通の社会人としての生活を送っているのですから職業的男娼の人々とはあく迄も一線を劃したいのです。そして集った

(浣腸レポート)

島直樹

『主婦と生活』という婦人雑誌に毎月、「娘と女学生の生活記」という読者投稿欄があります。その当選作「我が愛すべき父と母」と題する星智恵子という方の作品の中に、浣腸のことが出ていますのでお知らせします。二年あまり中風の為に、病床にある父親をめぐっての、母親と娘三人の生活をスケッチ風に描いたもので、最後の部分に浣腸のことが出てくるのです。

『——父は今も「酒を飲みたい」と言っているに叱られ、日に浣腸を三回もせがんで娘たちに笑われながら、再起不能も知らず、皆を旅行に連れて行くことを日に幾度も約束して、その父の夢とともに吾が家は明るく明け暮れています。』

(「主婦と生活」昭和31年3月頃339頁)

浣腸に関することは、これだけの叙述ですが、これを読んだ時、私は婦人雑誌の読者投稿作品の中に、しかも、若い女性の書かれたものに、たとえ、一言にもせよ「浣腸」という言葉の出てくることは珍しいことであり、父親が日に三回も浣腸をせがんで娘達に笑われるところから、おそらく、毎日母親が娘に浣腸されているであろう光景を想像し更に若い三人の女性が浣腸ということ、どういう気持ちで考えているかと、浣腸される父親よりも、娘達のことを、あれやこれやと想像し、興味深く読んだものです。



臨床と羞恥 (その一)

一、川端康成「虹」

その静かさの中を、花子はふらふら寝台へ這ひ上った。蒲団のなかへ入り込んで(自殺した)銀子にしがみついた。そしてまた激しく泣きじやくった。

「検屍ってものがあるのね。検屍って、どんな風に調べるもの?」と、(綾子は)なにかに憑かれたように声をふるはせて、花子とは反対側から、花子と同じやうに寝台に入って銀子の胸から裾までそつと撫でてみたが、乱れのないことを知ると、この人は寝相がいつもよかったと思ひ出した途端、なぜかなにもかも分ったやうで、わつと銀子に抱きつい

○図書、雑誌通信○

特異な角度から

(2)

九 雅 節 夫

た。

名作「虹」の終章。ニヒルな美しくしさを漂わす、踊子、銀子が自殺した場面。筆者としては、綾子の「検屍ってどんな風に調べるものなの?」という独白と感慨に、目の覚めるような、一つの感覚を覚える。そこに、注意を向けたいたのである。例によって主題を暗示する、序曲として、最初に挙げてみた。筑摩版「現代日本文学全集」角川版「昭和文学全集」などに収められており、角川文庫、河出新書でも手に入る。

二、久津多恵子「いのち守る日々」

お母さまに、お丈夫でないから下剤など無理だったのも知れませぬね。不自然ですから。

今度便秘なさったら、浣腸の方がいいと思います。

薄幸の美少女の遺した書簡集の中より引用した。鎌倉の海岸に近い某カトリック系病院のテーベの床から母に送った手紙である。この書簡集などは、愛の書としてもっと広く知られてもいい。新潮社版の小型本で、新刊本の棚の中に、今日でもまだ残っているのを見る。

三、夏目漱石「道草」

彼女(「道草」の主人公の妻)は、自分が長女を生む時に、同じ悪阻で苦しんだのと照し合わせて見たりした。もう二、三日食物が通らなければ、滋養浣腸をする筈だった際どい所をよく通り抜けたものなどと考へると生き

ている方が却って偶然のような気がした。

「女は詰らないものね」

実はこの「道草」に着眼したのは、大分前の本誌上で、花村恵美子氏の指摘されたのに教えられてで、筆者はたゞその本文をこゝに御紹介致すだけである。勿論刊本はいくらもある。

強いて、平静な調子で語られてはいるがこの内的独自の意識の下には、各種の性科学書が教えるような、特殊の意識もかくされて居よう。

四、滝井孝作「トシコ」

①妻は、座蒲団を二枚並べた上に長くなっていた。不思議に痛まなれないと思ひ、流腸をしたら陣痛がはじまった。

②妻はそう木では斯うしてやりましょう、といつて紙然にオレフ油つけて、赤児のお尻へ一寸程挿しこんだ。下剤や流腸は好ましくなけれど、紙然につけたオレフ油少し位はさわるまいからと毎日つゞけて居た。

前回にも御紹介した「トシコ」から、再び二ヶ所、挙げる。内容は殆ど、私小説であつて、主人公の恋女房が、トシコという女兒を産み、その成長を淡々と記した短篇である。「妻」は、助産婦を職として居る、ということもつけ加えておこる。尚、老婆心までにもう一つつけ加えるなら、オレフ油の紙然は、病院の小児

科に注意されて止めたとある。

河出文庫「滝井孝作集」に収められている。

五、滝井孝作「結婚まで」

腸洗滌ということや食塩注射やヒマシ油やヒマシ油は口に入れるとツキあげて傍の者まであぶらだらけだが、ルリ子さんは色々に云つていやがった。次は再び腸洗滌で笹島さん（看護婦）が器具を手に持ち上げるのだつた。

同じく、滝井孝作の私小説。最初にあげた川端康成の文章とは正反對に、連想という鑑賞法を意識的に拒否するかの如き文体だが、これだけの文章の中にも、連想を妨かす余地は、読者に残されてゐる。この「結婚まで」は、性の問題を淡々としかも赤裸々に描破した、滝井氏の代表作で、筑摩版「現代日本文学全集」の他、角川文庫「結婚まで」及び、前記「滝井孝作集」その他に載せられてゐる。

尚、一寸裏話を申し上げると、この「笹島さん」が、第四項の「妻」と同一人物なのであり「ルリ子さん」は志賀直哉氏の令嬢をさしている。

六、徳田秋声「徴」

寝たまゝ便をとらせたり、痛い水銀流腸をとにかくきゝわけて我慢する程に（以下略）

ぬるま湯の流腸が再び水銀流腸に後戻りでもすると（以下略）

笹村は、流腸をやったり体温や脈搏などを取りにくる看護婦（以下略）

悪い盛りに、流腸をする看護婦の手を押除けた頃の（以下略）

引用は断片的になつて了つたが、センテンスの長い、主語がなく、しかも意味上の主語が、絶え間なく移動して行く、厄介な秋声の文章では、煩をさけるためにはこの方法しかなかった。掲載したのは「徴」の後半主人公、笹村の子が入院してから退院するまでの四、五頁の経緯から抜粋したものである。

残念なことに、秋声文学には明るくふつきたれた所、笑ひも救ひもなく、いわば、影ばかりで、明暗がないが、しかし、私は機会があれば、秋声全集を読み、秋声文学を特異な角度からスクラップしてみたい。

尚、この作品は、角川、岩波、新潮の三大文庫に入っているから、いつでも、手に入れることが出来る。新潮版には、舟橋聖一氏の秀逸な解説がついている。秋声については、「仮装人物」にも言及したいが、第二十六項に再説する。

七、平林たい子「治療室にて」

「北村光代に注射一筒、午後八時半」「はー

い」よく透る女の声。

注射器の箱の蓋をしめる、パチンというばねの強い音。

患者達の肛門に差し込む、百目蠟燭のような浣腸器が、看護婦の執務台にのっている。

「一寸、日勤の看護婦さん。今日は浣腸が願えるんですか。まあ嬉しい」

サドコ・マゾヒスティックな、施療病室の内部が、初期のプロレタリア作家らしい強烈なタッチで描かれ、思わずドキリとさせられる。一九二〇年代に作者が満鮮を転々とした、その時の体験であろう。出産がすみ次第に、監獄へ送られる政治犯の女が過す、植民地の慈善(?)病院の生活。その日々の一コマである。このサドコ・マゾ的な雰囲気、この短篇には充滿しているのだ。御一読をすめる。河出版「現代日本小説大系」第四十三巻にも選ばれており、新潮文庫その他にも刊本がある。

八、川端康成「万葉姉妹」

「浣腸されるときが、いちばんいやだわ。もうなにもしないでよ」

次に挙げたのは、プロ派から一転して、少女小説から選んだ。前回の「打檻と拷問」の第四項と同じく作者は名匠川端康成。たった一句だが、実に端的に、可憐な美少女の羞恥心を衝いている。千万言

にまさると云いたい。ことという表現を用いず——されるときが嫌だと云っているのは、そのときの羞恥を訴えているわけなのであろう。

ポプラ社版。

九、川端康成「雪国」

内湯から上ってくると、駒子は安心して静かな声で、また身上話をはじめた。こゝで初めての検査の時に、半玉の頃と同じだと思つて、胸だけ脱ぐと笑われたこと、それから泣き出してしまったこと。

そんな事まで云つた。「雪国」は、こゝに引用したゞけの部分を見ても、余りにも美しい。しかし、その異常な美しさにかくれて、こんな微妙な設定を見失う人もいるかも知れない。

「雪国」については、説明する迄もない。手に入れるのも簡単である。

尚、第八項から第十二項までは、続けて川端氏の小説を紹介する。

十、川端康成「東京の人」

弓子は十三で初潮を迎えた。その時は始末も手あても敬子にまかせきりにして、自分は平気で少女雑誌を読んでいた。

盲腸の手術の時も、シヤウカステン室で看護婦に可愛いものを剃られながら、弓子は、はにかまなかった。

弓子は、虹の如く小説「東京の人」を彩

るヒロインで、高校生である。こゝに引用したのは、美人の母親敬子の回想に現れる弓子の姿だ。この引用は、裏返しの意味でこの稿のテーマにもっともピッタリする、文章かも知れない。

新潮社版。

十一、川端康成「続東京の人」「続々東京の人」

①朝子はまた傷つけられて、じつところえた婦人科医、内診台、メス、麻薬、内臓抓把。そつと読んだ婦人雑誌の記事が、朝子をおびやかしている。蛙をひっくりかえした恰好になるだけでも、勇気のいることであつた。

②いったん診察室に入ってしまうと、医者意志通りにしたがう、無力な患者の一人になるほかはない。

この頃は面変わりしているのが自分でもわかる初診の日、翌日の手術のために、朝子からは、なにかの準備を受けたい。(中略)(翌日)十二時半、朝子は約束の時間通り病院についた。

「白井さん(朝子の姓)」と、看護婦が入口に顔を見せて小声で呼んだ。

朝子は下着を脱ぐ手がふるえた。(中略)痛みもなかった。

朝子が意識を取り戻したのは、明るい病室のベットの上だった。手術室から運ばれて来たのも知らなかった。

白井朝子は、第十項に紹介した、弓子の姉。悪い意味でも近代的な、エゴイズムの娘として描かれており、作者は朝子のヒステリーとエゴイズムと意地の醜さに手を焼いて手術をうけさせ、うつぶんをはらしているようだ。この「東京の人」は西日本他数紙に連載、五百回、枚数は二千枚近いと云われる大作で、現代物としては殊にみる長篇である。

しかし、それだけに、内容的には、以前の作品のテーマの寄せ集め、水ましの感もあるのである。例えば本項②のテーマは、新感覚派時代の秀作、次項に引用する「水晶幻想」のテーマのむしかえしである。

新潮社版。

(この部、未完)

成熟と未熟 (その一)

一、中野重治「あかるい娘ら」

わたしの心はかなしいのに、ひろい運動場には白い線がひかれ、

あかるい娘たちがとびはねている。

わたしの心はかなしいのに、娘たちはみなふつくらと肥えていて、

手足の色は、

白くあるいはあわあわしい栗色をしている。

そのきやしやな踵なぞは、ちようど鹿のようだ。

例によって、テーマをサチエストするような内容のものを選んで、プロローグとする。こゝで歌われているのは、小学校か女学校か、の運動会の風景。いずれにせよ、未熟な少女の、健康な美にピントが合わされている。

最近の中野氏は、ハンガリー問題などでもソ連に盲従して、強弁をふるい、私なども憤激というような感情をすら抱くのであるが、彼にもこんなリリックな詩を作っていた時代もあるのである。

この文章でも、私はしばしばプロレタリア文学作品から引用するつもりだが、プロ文学も戦後は、野間宏「真空地帯」徳永直「静かなる山々」タカクラテル「ハコネ用水」などを例外とし、既にほろんだというのが、正直な感想である。

「中野重治詩集」は、戦前のプロ文学が遺した逸品である。

新潮文庫、岩波文庫にも収録され、各種のアンソロジーにも選ばれている。

二、マリアンヌ・ベツケル

「クラクラの日記」

昨夜従妹のリリーが、あたしの部屋で泊った。彼女は妊娠九ヶ月だ。服をぬぐのを手伝わされた。なんという恐ろしいこと。いまにも破裂しそうな大きな醜いお腹よく自分で恐ろしくなって死なないことだ。

これは、少女クラクラの日記というスタイルのフイクション、クラクラは十七歳だ。この文章は、可憐な少女の思春期のおのゝき、反射的な羞恥心と、ひそかな好奇心をみごとに捕えた。そこに又、筆者がこゝに収載した意義も存するのである。

人文書院版。訳は大岡昇平となっているが、実は、大岡氏の翻訳でございませう、とは云えぬはず。

三、林美美子「風琴と魚の町」

(本文省略)

少女が棧橋の上から海の中へ放尿している、そして自分の股間を覗きこんで感慨するという条りを引用したかったが、遠慮しておこう。好奇の士は、直接本文に当たって頂きたいと思うのである。

新潮文庫にも収められ、新潮社版「林美美子全集」「同作品集」にも入っている

四、林美美子「女家族」

①私はバリーに着くなり、月の病氣になってしまったのです。私は狭いベッドに腰を下して、トイレットを探す心配で胸のなかが、激しく動悸を打っていました。

私は体の始末に困りはて(中略)腰のものと靴下があつく濡れて来て私は暫く坐っていました。

(やがて下宿のお婆さんが入って来る)

お婆さんは、部屋の隅の小さい箱机の下から、平べったい蓋つきのお井を持って来てくれました。私に、そのお井を足の下へ、お婆さんは当てがってくれるのですけれども、私はとても、そのお井の上にかぐみこむ勇氣はありません。

②（奥様は）私に裸をおみせになっても平気で、部屋つきのお風呂からあがっていらして、バスタオルで、濡れた体を、私にお拭かせになるのです。私は吃驚しましたけれども黙って、奥さまの軀を拭きました。奥様は平気で股を開いて、私のバスタオルが、そこへ行くのを待っていらつしやるのです。私はわざと前の方をさけてすんなりした脚の方を拭きました。奥さまは怒ったような小さい声で「こゝ拭いて」とおつしやるのです。十七歳の私は真赤になって震える手で、そこを拭きました。そして一つ一つ、私のまだ見た事もない、ピンクの絹の下着をはかせてあげなければなりません。そのところが、私には、何だか羚羊のひげのような感じでした。いまから考えますと、私は、本当に、何も知らない小娘だったのです。

③私は底の方にたまった湯の中に、幾度も軀をまはしながら、一人で坐ったり寝たりして見ました。私の股間の丘は、海藻のように黒く光っています。薄青い湯の底に、そこだけが異様な感じで、私はピンクのタオルで幕を

おろして、長い脚を折り曲げてみました。奥さまの薄い羚羊のひげよりもねい、うな気がして、私は自分が野蠻人のようにも思えました。湯から上って、私は穴椅子の上に立ちました。

大分長く引用したが、それでも、省略があるし、他にも引用したい箇所があるくらいである。たゞ代表的な三つの部分を挙げたに止まる。

「私」は引用文中にもある如く、十七歳の小間使で「高貴の奥様」に仕えてパリに行ったときの思い出、という体裁の小説である。

この小説は昭和二十六年に「中央公論」に連載されていたが、同年六月の林氏の急死で未完に終わったものである。

前記（三項）「全集」にも入っているが角川文庫版で入手するのが最も手易い。御一読をおすすめてみたい。

五、林美美子「晩菊」

化粧の途中で、きんは膝をまくって、太股の肌をみつめた。びっちらりと太股が合っている。風呂では、きんは、きまって、きちんと坐った太股のくぼみに湯をそそぎこんでみるのであった。湯は太股の溝へじつと溜っている。きんは股をひらいて、そっと内股の肌を人ごとのようになでてみる。

「晩菊」は昭和二十三年、「別冊文芸春秋」

秋」十一月号に発表されて、同年の「日本女流文学賞」を受け、のち、成瀬己喜男氏の手によって映画化された。流転と虚無の人生観に立つ名短篇と云えよう。第三項に記した「全集」二十三巻の内に収められている他、各種の刊本があり、読者の鑑賞にも便である。

（この部、未完）

折檻と拷問（その二）

（承前）

十三、西条八十「越後獅子の唄」

今日も今日とて親方さんに

芸がまづいと叱られて

撥でぶたれて 空見あげれば

泣いているよな昼の月

元詩人、西条八十の低俗な歌で恐縮だが、例によってイントロダクションとして挙げた。この歌が、万城目正作曲、美空ひばりの哀調で、一世を風びしたことは先刻御承知のことと思う。

十四、川端康成「浅草紅団」

「これを買うー私秘訣を知ってんの。売場へ新聞を一枚そつと渡すと面白いでしょう、それをね、売子がすばしっこくゾロオスの中へかくして、お礼にうんとまけてくれるのよ。」「この間、十一人いるって聞きましたわ。読みのものが主人にみつかる、と、出どころを厳く

詮議されるの。白状しつこないわ。だもんでみんなを並ばせといてね。びたびた、順々になぐるって話ですわ」

「鋭い、そしてこぼれやすい刃物のようなゆううつ」(川端康成選集「あとがき」)を作者は、浅草の少女たちに感じている。しかし、このエピソードは、人なつかしい、いゝ話だ。

「川端康成全集」「同選集」(新潮社版)の他、新潮文庫、角川文庫で刊行されている。

十五、吉田甲子太郎訳 (題未詳)

(本文未詳)

昭和二十一、二年頃「少年」か「少年クラブ」に掲載されていた、名作物語の内の一篇、いずれは高名な小説なのだろうが、浅学にして、まだ、何も判らない。厳格な寄宿舎が舞台なので、ドイツの小説だろうか。

脱走した生徒が、退学か体刑かの二者選一を迫られ、講堂の壇上で、体操の教師から、裸の尻に鞭打ちの罰をうける経緯を描いた小説。これは是非、原文のまゝでおめにかゝりたいものゝ一つだ。

十六、徳永直「太陽のない街」

——知らないんです。妾、何にも知らないんです——

疑いもなくお加代(ヒロイン)の声である高枝(その姉。姉も妹も、捕えられている)は身体をかたくした。

——ア、アーツ、痛い。

腕でも捻じ上げるのか、お加代は悲鳴をあげた。(中略)

お加代は一晚のうちにまったく違った様子になっていた。

この小説が、映画化されたときは、この場面は、やゝ違つて演出(山本薩夫)されていたが、それを紹介するのは、今、私の責ではない。

たゞ、私が一言こゝで附記したいのは、日本の特高警察がいかに残酷であったかそれはスケールこそ違えナチスの悪虐にもおとらぬこと、そして、我々は、特高警察の復活するような動きは、徹底的にぶつぶつしてしまえ、ということである。本書は、角川版「昭和文学全集」、筑摩版「現代日本文学全集」河出版「現代日本小説大系」に収められているが、文学的にどうこういうような作品ではない。ルポルターシュとして優れているという所である。他に各種文庫版もある。

十七、許広平「暗い夜の記録」

(本文省略)本誌一月号、四十六頁参照。岩波新書版。

十八、デイクソン・カア「火刑法廷」

アドリアンヌ・ドーブリーは娘に写真を見せ、昔話を語って聞かせたりしました。そして娘を罰するときには、その昔、自分の先祖たちが受けたと同じように、漏斗と水との責苦を与えたり、火傷を負わせたりしたのですデイクソン・カアは私は探偵小説の歴史を通じての最大最高の作家であると思つている。元来この稿では、興味本位の時代小説、大衆小説、探偵小説の引用はしないつもりであつたが、探偵小説も、この作品ぐらいになると、純文学以上に「文学作品」になり切っている。断つておくが、これは正に現代のミステリアスな出来事なのだ、引用は断片だが、本書は必ず諸兄にある種の感銘を与えるだろう。早川書房版。(この部、未完)

「附記」

一、痛烈で健康なサディズムを満足させる書がないのは、同好の士と共に私も、残念なのですが、新潮文庫に最近、加えられた「スラインベック短篇集」中の「殺人者」という短篇小説は、いくらか、私たちを満足させます。但し、鞭打の前後が描かれるきりで、鞭打そのものの情景のないのが残念です。しかし、それにしても、不義の妻を罰するに、これほど痛烈な豪快な皮鞭の痛棒を喫せしめながら夫が妻に愛情を失わずにいるのは、いかにもアメリカ西部風な——というよりは、スタイ

ンベックのヒューマニズムでしょう。

これはいずれ、マークトウェインの「トム・ソーヤ」などと共に本文中に紹介しますが、さし当って題名のみ挙げておきます。

二、河出書房版「世界性学全集」全十二巻も、昭和三十年末までに、七回の配本を終えました。これは、将来、入手し難い稀購本となるのではないのでしょうか。エリス「性の心理学的研究」を初め、ヴェルデの「アイディアル・マリッヂ」、「女性の美」、「変態性慾心理学」、「性解剖学図譜」、「戦争と性」ヒルユフェルトの「女性の冷感症」などが現在までに出ています。こういうものは、本文には挙げぬ予定ですので、特に同好の方の注意をよびおこしたいと愚考いたして、御紹介しました。

三、「婦人画報」新年号に、素晴らしいカ

ラーの女性下着写真が出ています。

四、「小説新潮」新年号、南条範夫の「被虐の受太刀」はマゾヒスト必読の小説です。

五、「知性」三十年八月号には、修正、隠ぺいのない、全裸少女の前景写真が出ております。

「後書」

(以上)

一、私の雑文を読んで下さった方にお願ひがあります。

石川達三の「深海魚」に、浣腸場面があるようですが、同書を御所持の方がありませんら御紹介下さい。私の文献集のさゝやかなコレクションに加えさせて下さい。

二、同じく。

田山花袋のものに、浣腸場面のある小説があるようですが、なんとという小説でしょうか、心当りをお持ちの方はどうかお教え下さい。

三、同じく。

花村恵美子氏の「往復文書」によると、芦沢光治良「巴里に死す」長田幹彦「青春物語」に浣腸行為が描かれているそうです。しかし私が、各々、角川文庫版、新潮社版単行本に当たってみた所では、見つかりません。どなたか、私の疑問を晴らして下さい。

四、同じく。

森鷗外かの、滞欧日誌に、ドイツの母親が、娘を毎晩、答で叩いている、という記事があるようですが、原文御存知の方はお教示下さい。

五、同じく。

「図解看護法教本」という本を、数年前、ある病院でチラと見たのですが、発行所、御承知の方は、どうか、私に知らせて下さい。

(以上)

(雑誌通信)

トリコモナス



(「文章クラブ」昭和29年5月号より)

——(前略)——

その時看護婦が、

「汐野さん」

と呼んだ。かすれた声で返事して、十七、八の娘の向き合い側から立ち上ったのは、色黒の瘦せた若い人だった。此処を訪れる誰もが一度は坐らされる椅子にちんまりと坐らされて、極めて職業的に不愛想に質問する看護婦に対しては、彼女が、恰も先生に叱られている生徒のようである。

「初経は？結婚したのは？妊娠の経験は？ふん、一年二カ月。……それで一度も始まらないので此処へ来られたんですね。結核その他の病気の経験は？えーと勿論中絶、流産等なしと。はい、次、白藤さん……」

今度は眼鏡をかけた冷たい奥様風の、中年婦人が立ち上った。

そのうち私は呼ばれて診察室へ入った。指定通り扉をあけて、一番の検診台へ入る。この時私がきまって思うのは、女に生れたという事は天が与えた最大の侮辱に外ならないということだ。うーんとお腹に力を入れようとしても、あまりに惨めな自分のさまに、お仕置きを受ける罪人のように力が抜けてしまふのだ。痛くとも痛い！と口に出せずに、薄い垂れ幕のこちらで目に涙をにじませて耐える情なさ。やっと処置を了え、身仕度を整えている間に、もう次の患者が入ってきた。私

と同時に呼び込まれた十七、八の人である。私は髪を撫でつけながら急いで扉をしめた。

「すぐ下穿きとって下さい」

背の低い方の看護婦が、事務的に云う。

「あの……どの程度まで……」

「全部ですよ」

早口に突けんどんに云う看護婦の声は、冷笑に似ていた。私はこの看護婦に憤りを感じると同時に、その患者に同情を覚えた。

もう一つ扉を押しあけると、カクテルを拡げていた医師が呼んだ。

「石津さん、こちらへ」

私が近付くと、

「どうです？膀胱の方は……」

医師は柔和な目をぱちつかせて、私の顔を覗き込んだ。

「まだ癒らない？ふーん、じゃあね、ここで注射を続けてるよりもね、泌尿器科へ行つて膀胱鏡でよく調べて貰いなさい。僕が簡単な紹介状を書いてあげますから。ね」

私は肯いた。それから云った。

「あのう、トリコモナスってなかなか退治できないものでしょうか……」

「えー、それがねえ、正直なところ現在の医学では、全部の菌、いや子宮に巣喰っている一種の虫ですがね、全滅させることは不可能なんです。現在のところ、殺しきろうとすれば、あんたの軀がまいつてしまうようなわけ

でねえ。残念だが或る程度まで治ったらよしとするんです。発生の原因もはっきりわからないんですが、前にも云った通り性病などではありません。この病気は随分多くの人が持っているものです。ええ」

「それでは又いつかふえるでしょうか？」

「人によりけりですがね、ふえたら又治療する手はないんです」

「私、三四日都合で来られないかも知れないのですが……」

「メンスか？なるべく続けた方がいいんですがねえ。やむを得なければ薬を持って帰って、自分で挿入してみますか？自分では深部迄入らないで不満なんだが……」

すると傍にいた背の高い方の看護婦が、「結婚してらっしゃる方だと都合がいいのですけどねえ」

と口をはさんだ。私はと端に顔がかうと熱くなって困った。まるきり初心だわ、というように看護婦が微笑したので、私は益々赤くなり、逃げるように廊下へ出た。

泌尿器科へ入って行って、私は驚いた。私が最初にこの病院の婦人科を訪ねた時、カルテの係りをしていた若い医師が、もう一人のマスター格らしいやはり若い医師の隣りに、いかにも助手的存在でございというふうな、ものうげな様子で坐っていたからだ。

私を見たとき、医師の方でも一瞬妙ちくり

んな顔をした。私はちらと彼を見たきりそ知らぬ振り、もう一人の医師の示す椅子に腰かけたが、くすぐったい笑いが頬に這ってきて困った。というのは、私が最初訪ねた日、婦人科の背の高い看護婦とカルテ係りの助手的医師とが、それぞれ病気で暫く休んだ為、この泌尿器科の医師——平山先生が手伝いで行っていたものとわかった。ところがその日婦人科の水原先生が私を診察中、トリコモナス菌の存否をこの平山先生に問うと、顕微鏡を覗いていた彼は菌はいないと答えた。おかしいな、といって水原先生がもう一度確かめてくれというと、彼は又全然いないと云った。そこで水原先生自身覗いたところ、「居る居る。君いるじやないか。ほれ、三角のやつが……」

ということになって、漸く水原先生はほっとしたらしかったが、平山先生の方は専門外とはいえ、へっばこの看板かけたようなもの。男前も少々下って見えた。

泌尿器科のマスター格の椿先生は、真面目くさったようであり、どこかひょうげた感じのする人である。云われた通り私がコップにとってきた尿を、口をとがらして少し揺すったりして眺めながら、

「大したことなさそうだな。でも濁ってることは濁ってるね。——君はストレプトマイシンなんか使ったことない？ 特別寒いおもしろ

た？ うんと神経質なんかな？ ふーん、じゃあ、赤ちゃんの時いつ迄もおむつ当ててた？」

首をかしげては訊く彼は、何となく子供っぽい。私は笑い出してしまった。

「そんな昔のことは知らないか……」

ふんふん、と椿先生は首をふりながら目だけで笑っている。

膀胱鏡にかかる為、又私は検診台上でお仕置き。看護婦と医師二人が執行人である。細い管を伝って硝子の器に落ちる私の尿が、遠いところでこぼこぼと哀れな音を立てているのを、私は情ない気持ちで聴いていた。

「僕はもう腹ぺこだ。今日は朝飯も抜いちゃったんだ」

と平山先生。全くお気の毒様です。やっぱり炎症をおこしていると云ってから、椿先生はやたらに私の腹部を押して、

「ここ痛くない？ 此処は？ それにしても随分張ってるねえ」

と云う。押される度に私が緊張するので、愈々お腹は固くなるのだ。お仕置台を下りた時には、もう恥かしいやら情ないやらで、私は虚脱した人のようにげんがりしてしまった最初の診察室に戻ると、看護婦が垂れ幕の中の寝台へ私を呼び、尿道へ硝酸銀液を注入し何やらべたべたした軟膏を周囲一面に塗りつけた。それから私は医師の前に坐らされ、念

のためにと採血された。

「採血の結果は二週間ばかり待って下さい」ということで、ようやく私は解放され、会計を済ませてクレゾール臭い病院を出た。これから暫くの間、こんな毎日が続くのかと思うと、つくづく厭になった。

——(中略)

すると、前夜の夢のことを思い出した。私の子宮の中のトリコモナスが、私の軀中の血を吸いつくし、肉という肉全部を喰い尽して、私はもそもそしたトリコモナスの袋になる。そのうち皮膚が破れて、あちこちから奇妙な虫が顔を出す——そんな夢であった。

小池智恵子「ものうい日々」の一節

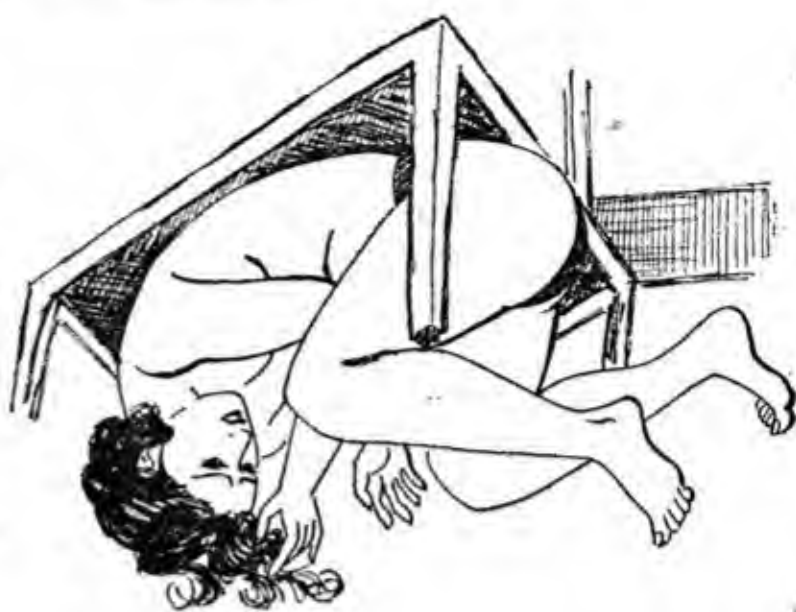
(解説) 選者田宮虎彦氏は、こまかい手法で成功してはいるが、題材がトリコモナスなのでどうもキタナイ感じであると評されているが、私はそう取れない。此れはむしろ受け取る方の感じ一つであると思う。

最後の二節、悪夢のイメージも中々である小池嬢はむしろ本誌当りで活躍して欲しかった。誌友木内恒司氏が本誌旧号の挿絵で活躍されていたのを知った時は、正に我が意を得たりと感じた位だった。

(東一朗記)

〔告知板〕

誌面の都合により今月の「玉稿落穂集」は休載いたします。



おふんど談議

私のふんどし

④

松原三千代

× × ×

この東海中部地方では、女の腰巻のことも『ふんどし』と呼ぶようですが、こちらへ来て日も浅い私は、それに気付かず、雑談中こんな話になってしまいました。近所の奥さんが、日当りのよい部屋で縫いものしていたので私が声をかけました。

『おや、日向ぼっこでお仕事ですの』
『あら、寒くなったものですか、おふんど、を新調しようと思つてね。これどう？』
『素敵じゃないの、あなたがふんどしなさんなんて、知らなかったわ私、ちっとも』

『でもね、寒くなると、ずっと着物にしますの。着物ですとズロースやパンティじゃホラ面倒ですし、着くずれするでしょ。だから下ばきもおふんどにするんですよ』

『そうねえ。実は私もふんどしなんですよ。私なんか、夏も冬も洋服も和服も、いつも年中ふんどしオンリー。パンティ、ズロースなんて用なし。ふんどしの方がさっぱりしてキリッとして気持ちいいものですね』

『まあまあ、あなたのような若いモダン奥様が、いつもおふんどししていらっしゃるの。今や大はやりのコルセットにショートパンティかと思つてましたのに』
『おふんどもおふんど。色とりどり……』
『こんな柄どうかしら？』

『なかなか粋ですよ。これならずい分たくさん出来るでしょ。奥さん何型ですの？ 三角？ 今してらっしゃるのどんなの？』

『今？ 今はノー。早速これを今夜から』

『この柄だったら三角がいいんじゃない？ 六尺ならサラシに限るし。私は普段は三角か水泳型。今は赤の三角ですよ。私が二、三枚作ってあげてもいいですよ』

『ええ。これだけしかないんで、一枚できるかどうか。こうやって、前がゆっくり合うかどうかと思つてくるくらいなの。あなたのおふんどっていうのは、アラッ、水泳型って、あの男型のこといつてらっしゃる……』

ああ、しまった。早合点の間違いだった。この人のいうおふんどはふんどしには違いな

いが、それは腰巻のことでした。そして私はついに、三角ふんどしと、水泳ふんどしを見本に、その奥さんに差上げることになったわけです。それにしても、おとなしい淑かな奥さん方の口からきくおふんどしという言葉に、私はくすぐられるような快感さえ感じます。結局この地方では女の方たちはまわしふんどし、おふんどし、こしまき、おこしなどの言葉を使いますが、別に男用、女用の区別はないようで、男用ふんどしのことをおこしという人も少なくありません。

先日、私は三日ばかり旅行をいたしました。どうしてもふんどしだけでは都合の悪い旅行のため、やむを得ず、一番短いショートパンティを買って、それを穿いて出かけたのですが、旅行から帰ってくるまで気分が落着かず困りました。家へ帰って、先ず何より先に、裸になって、六尺ふんどしをキリキリと力いっぱいしめ、家の中を歩き廻ったり、鏡の前に立って前から横から後ろから、ふんどし姿を映してみとれたりして、やっと平常の気分を取り戻したものです。どんなにピッタリした短いものでも、とてもふんどしの着用感には及びません。まるで頼りなくて、股の辺りが底が抜けたようでウエストがたるんで力が入りません。そのくせ、お尻の辺りはモサモサして気持が悪いのです。多くの女性がよくま

あ、こんな間の抜けたゆるふん的な野暮ったいものをはいていられるものと今さらの如く呆れた次第です。あんな不恰好なダラシのないものより、先ずふんどしを颯爽としめられんことをお勧めいたします。ふんどしの味は一度しめたら、もう忘れることはできません。気分は爽快となり、運動も活潑になり、姿態の美しさも十分に発揮できるわけです。ふんどしの喜びは先ず、しめてみることで。女性のふんどし常用者が増加しつつあることがふんどしの良さをハッキリ物語っているではありませんか。

街のオモチャ屋さんで売っている、子供のコマまわしに使うヒモからヒントを得て、新しい型のふんどしを作ってみました。かりに『ヒモふんどし』と名づけました。太いコマのヒモを二十二本使い、その一本々々を輪になるように縫い合せて二十二個の輪を作り、別のヒモに順次通して行くと、丁度ノレンかウドンをぶら下げた形になります。このノレン型を前から股下をくぐらせて、お尻から後ろへギユツとしめ上げて、後ろでもう一度二十二の輪にヒモを通してウエストの脇で結ぶと、私の『ヒモふんどし』になるわけです。前側はもちろん、後側もできるだけヒモが重ならずに行儀よく並ぶように針を入れて仕上げるのが大切です。一本ずつのヒモから伝

わる感触といい、それが股下で一方所に密集し重なり合って圧迫する効果といい、この変った味は、六尺ふんどしや三角ふんどしには無い強い感動を与えてくれます。しかもこれは、私たち女がしめてこそびたつとしたふんどしになります。男がしめたのでは、隙間だらけで、強くしめればしめるほどその隙間からハミ出してしましますから、ヒモふんどしは、絶対に女性専用のふんどしともいえましょう。六尺ふんどしが最も着用効果を現わすのが男なら、逆に、女性は、ヒモふんどしで、女性だけの専用ふんどしを作り上げたということにはならないでしょうか。余談ですが、このヒモふんどしなら、用を足すにも、そのまま左右に開けばそれでいいわけですから、この点からいっても常時着用に最適であり、材料の範囲を拡張すれば、応用次第で面白いものができると思います。皆さまのご意見をきかせて下さいませんか。

私のふんどし愛用のことについては、今までも御報告している通り、夏のうちは赤の三角ふんどし一本で過しましたので、その姿をみたり、洗濯ものなどで、近隣や出入りの小僧さんたちはよく知っているのですが、今でも時おり、ストリップだとかパタフライだとかに比べられて耳に入ることがあります。けれども私のふんどしは、そういったものと

はまるで違うのです。彼女たちのしめているものは、外見だけからみれば、全くふんどしと変りはありません。女性のふんどし姿といえば、みかけはあれと大差ないことでしょう。しかし彼女たちのものは、隠すためのものではなく、また見せるためのものであり、それだけで、それ以外には存在理由はありません。ですから、誰もあれを『ふんどし』とは呼ばないのです。一方、私の、私たちのものは『ふんどし』なのです。ということは日常生活の中に生きていくということなのです。私のふんどしは隠す用も果すし、みられて美しさという点も考慮されており、そのほかに、感覚的に爽快さを持っており、緊迫感からは精神的緊張を呼び起し、日常使用する上の実用的ということも絶えず考えているわけです。この緊迫の美観と、日常の実用性をどうしたら最も良く調和させられるか。この点がまだいい解決法がみつからないのです。平たくいえばきつくしめるほど穿き心地がいいし、キリッとして、みた目も美しいのですが、あまりきつくしめると今度は、用を足す場合に、一々解いたり結んだりしなければならず、さりとて、しめ込んだまま、後ろ側でふんどしを左右へずらせるようにしておくと、それだけの余裕のために、きつくしめられないというわけですね。

x

x

x

今年の夏は海女の写真が大流行で、こんなに多くの写真雑誌や新聞に載ったことははじめてでした。これも女性のふんどしの美しさの魅力が大きな原因だと思っています。みにくいものであったり、不似合なものであったりしたら、決して芸術家や読者に迎えられない訳がありません。その海女の写真の一つ『フオートアート』誌十一月号に素晴らしいふんどしがありましたのでお知らせいたします。後ろ向きの海女の立派なお尻に集点を合せた大写真ですが、そのしめている水泳ふんどし型の自製品は、非常に参考になりました。ウエストに結び目がみられないので或いは尾錠でカッチリとめているのかも知れません。その横帯にはお尻の上の所に例えば羽織のヒモをつける『チ』または電車の吊り革の形の輪が、縦長く付いており、一方お尻をくぐって出て来たふんどしは水泳ふんどし型の細い布でお尻の割目の上端で終りそこにヒモを通してあって、そのヒモをさらに横帯の輪にくぐらせて

【伝言板】

○九雅節夫氏へ、編集者に対するお便り拝見。続稿は是非お送り下さるようお願いいたします。枚数は一回分二十枚から三十枚くらいが適当だと思います。現在目録までおられる第一部「折檻と拷問」約四十項、第二部「成熟と未熟」三十四項、第三部「臨床（医学）羞恥」約七十項、を先に脱稿して頂きたいと期待いたします。小説についても是非拝見したいものです。原稿をまとめて一個所にのせてもらいたいという御希望は結構だと思います。

ます。

て、ぐっと下に引張ると、ふんどしが食い込むようにしめ上げられることになっているのです。私はこの輪の型式を参考に、水泳ふんどしの布を長めにし、輪をくぐらせてからもう一度ぐっと下へ引いてお尻の上あたりでスナップ止めにしたら、十分実用化することができるとは思っています。まだ試作はしていませんが、用を足す場合にはスナップで簡単に着脱できて、便利になり、先にご紹介した『ヒモふんどし』とともに、これなら和服の場合でも、面倒なく操作できるとくに冬の厚着には好適な女性ふんどしの型式ではないかと思っています。（つづく）

○宝塚二三夫氏へ、御送稿がありがとうございます。

○宝塚二三夫氏へ、御送稿がありがとうございます。天は知っています。未完のまゝ、二月号、本月号と休載しました。枚数は短くとも構いませんから続稿御送り下さるようお願い致します。○白石稔氏へ、連絡先変更の後、御連絡ありませんが、原稿があるようでしたらお送り願います。○高原正夫氏へ、続稿がごきますなら掲載しますからお送り下さい。未掲載の写真はまだお預りしております。○日下絹子さん、鷹野めぐみさん

燃ゆる男装

藤山秀緒

覚悟は一つ

「あゝ、私たちのために……。申訳ない。私たちさえ居なかったら、こんなことにはならなかったろうに。」

暗い表情で、二人の若い女性が坐つています。一人は女ざかり、一人は花恥しい妙齡の娘。しかも二人は病身なのか、美しい中にもどこが弱々しいかげがあります。

二人は実の姉妹なのです。姉の妙子は陸軍の主計将校の許へ嫁ぎ、すでに一年以上になります。二人は身寄りのない体でしたので、姉が嫁ぐと、妹も姉の婚家へ世話になることになり、陸軍主計中尉香川一郎の宅は一郎の母を加えて四人暮らしの、豊かではないが幸福な家庭でありました。

しかし、この幸福は永つゞきしませんでした。母が亡くなり、妙子と、妹の奈緒子も相ついで胸を病んでしまったのです。

夫の香川は、二人に献身的な愛情をつくしました。乏しい給料の中で、彼は、いとしい妻と、その妹のために闘いつくしました。

彼は、そうした努力の中に生甲斐をさへ感じるのです。たゞ、彼は、そうした献身的な愛情のために、軍人として、してはならない事をしてしまったのです。

香川中尉の帳簿から不正が発見されたのはその頃でした。しかもその金額は、意外に大きく、事件は表面化し、彼は、そのまゝ拘引されてしまいました。

香川は、彼女たちには何も云わず、自分ひとりの胸に何事もおさめて拘引されて行きま

した。

のこされた二人は、その日の夕刊を見て、氣を失うばかりに驚き、相抱いて武人として最大の恥辱をうけている香川の身を案じるのでした。おそらく香川は、武人として、自決のほかに道はないでしょう。

あゝ、思えば、病気の二人の女をかゝえて生活の苦しさから、してはならないことをしてしまった。可愛そうな夫。と思うにつけても、二人は、私たちさえ居なければ、こんなことにならなかつたらうと、それがたまらないのです。

近所の人たちにもあわせる顔がない。お国への申訳。妙子は、自決を覚悟します。

「奈緒子さん。香川は、私のために罪を犯した。私は香川にも、お国にも、本当に申訳ないわ。いゝえ、罪を犯したのは香川ではない……。私なの。私なのよ。奈緒子さん。私は今夜死にます。夫に代つてお国への申訳をします。あなたは後へのこつて何かのことをたのみます。必ずとめないでね。」

妙子は、静かに云い切ります。奈緒子は、泣きながら、はげしく首を左右に振り、「おねえさま一人は行かせない！ 奈緒子も死にます。ね、一緒に死にましょう！」

可愛想な二人。病におかされ、いまた、国賊の汚名を着た人のために死ななければならぬ二人。二人は夜の更けるのも知らず、

いつまでも涙ぐんでいました。

縛つて！

時計が、さびしく午前零時を打ちはじめました。

戸じまりも嚴重に、香川家の奥の一室には御親影が飾られ、白布がしきつめられていました。そこに端座する二人の影。

あゝ、二人は香川の軍服を着けて、男裝しています。乗馬ズボンの膝について、深く頭を垂れ、御親影を拝しているのです。

「陸軍主計中尉香川一郎、一死以て罪を謝し奉ります。」

妙子の口のうちに唱えながら、水盃をとりあげ、唇をあてます。「夫に替って」と云ったのは、男裝して自決することだったので。

水盃を口にふくんで、妙子は奈緒子にさします。奈緒子が呑み終るや、発止とばかり盃を碎き、心の用意もとのいしました。

「では、すこしも早く。奈緒子さん……。」

「でも……。お姉様……。奈緒子には……。」

「いまとなって何と云うの！ 早く！」

「ハ、ハイ……。」

奈緒子が立上った、つゞいて、妙子も立上り、柱のそばへ歩み寄ります。

奈緒子は、涙ぐみ乍ら、妙子の両手を柱の後へ廻して縛り上げ、つゞいて大腿へ細引きを渡して股間をY字形にくくり、乗馬靴のか

ゝとのつけねをも固く柱にいましめてしまいました。乗馬ズボンを通して、Y字形の細引が肌へ喰入っています。二人は何をするのでしょうか。

妙子は軍服の上から太い革ベルトでウエストをしぼり、軍刀を吊し、略綬を帯びた姿で柱へ後手にしばられています。

そうです。妙子は「国賊」として磔になつて死のうというのです。

奈緒子も、香川の着替えの軍服に身を固め姉の刑を執行し、そして自分も自決するつもりであります。

妙子は、喰入る縄目をジツとかみしめながら、正面を見つめています。そこには、

「以一死謝大罪」

と最前書いた遺書がたてかけてあります。

妙子は、奈緒子に、目かくしをさせ、処きらず短刀を突き通させて、その苦痛によつて夫の罪を償うつもりです。

「奈緒子さん！ 自分の目かくしをなさい。」

凜然と妙子は命令します。奈緒子は、恐る恐る白布を自分の眼にあて、後でしぼります。

「さあ、私の腰から軍刀を抜くのです！」

手さぐりで奈緒子は妙子の腰の軍刀をぬき放ちます。

「あなたの体の前へ軍刀をつき出して立つのです。そして力一杯私を突くのですよ。突い

たら、すぐ引抜いて次の太刀をあびせるのです！ あたしが呻いても、かまわずに、突いて！ 突きまくるのですよ！ 私が呻きをとめるか、待って下さいと云うかするまで、つゞけるのです！ ……さあ、なにをしようの。早く突いて！」

「は、はい……。お姉様！ ゆるして！」

目かくしのまゝ奈緒子は、氣をとりなおすとねらいを定めて、軍刀を妙子めがけて突出します。妙子は眼をとじて、呼吸をととのえています。グサッ！

血に狂う奈緒子

「うっ……。」

妙子がうめきます！ 軍刀は右のあばらへ突立っています。

「おねえ様……ゆるしてッ！」

奈緒子は、軍刀を引抜こうとしますが、肉に喰入って抜けません。奈緒子は、妙子の大腿へ、乗馬靴の足をかけると、力一杯引抜くのでした。

奈緒子は、よろ／＼と倒れかゝり乍ら、再び氣をとりなおすと、小走りに体をぶつけます。グサリ。

「うゝ……ッ。……ッ、——」

妙子は苦痛のあまり、齒をくいしばって体をひねりつゝ唸えています。

二の太刀は乗馬ズボンの太股へ突立ち、ぐ

いと引抜いた傷口から、血汐がだらだらと滴り落ちます。

奈緒子は狂ったように軍刀をとりなおすと妙子の脇腹へ突込みます。

「ウーム……」

流石の妙子も脂汗をうかべ、永く呻きましたが、やめよとは云わず、

「く、く、くるしい……もっと、もっと。」

奈緒子は、ぐっと一抉りして刀を引抜き、眼かくしをはねのけて妙子の苦悶する姿を見つめています。

あばら、太股、脇腹の三ヶ処から血汐が吹いて白布を染めます。

らんらんと輝く奈緒子の眼。

四番目の太刀が妙子の肩先へ……。

「むう……ッ」

奈緒子の眼が輝くと同時に、太刀はわざと急処々々をそれて、苦痛の多い場処々々が血祭りにあげられて行きます。

腹部は何度かの突き傷のために切り裂かれ軍服の下から、臓腑がはみ出して来ます。

「グサッ！」

と突込まれるたびに妙子は

「ク、うゝっ……」

と押泳えた呻き声をあげ、そして喘ぎ乍ら

「アア、もっと。……も、もっと！」

と口走り、ぐっと扶られながら

「うゝ……ッ、ッ、——うっ……ッ」

と呻きつゞけました。

何太刀目か、大腿へ斬込んだとき、しばらくしていた細引を断ち切ったので、妙子は、ずるずると腰を落して不完全なあぐらをかいたような姿になります。

血に狂った奈緒子は、乗馬靴をしばりつけてあった細引も切って、妙子の両足をあげさせ、軍刀をとりなおしたとみるや、

「むうッ」

と自身に呻き乍ら、妙子の両肢の間へ突立てます。刀は妙子の下腹から腸を縦に貫通して胃に達します。

「ア、ム、ウウッ……。——ッ、」

此の世乍らの地獄です。文字通りの田楽ざし。流石の妙子も、休えかねて絶叫します。

両手をしばった縄がほどけ、妙子は胸を抑えて体を硬直させています。

奈緒子は情容赦

もなく、妙子のふ

くよかな乗馬ズボ

ンに足をかけて、

グーッ、と引抜き

はじめます。

「うろうろーウ

ウウー——ウーッ

！」

抜き取られた軍

刀は七分目迄唐紅に染まっています。血の海をのたうち廻る妙子の乗馬ズボンは、さながら朱をあびたようになり、奈緒子の乗馬靴の跡が、なまなましくしみ込んでいます。

燃ゆるかぎり

「奈、緒——。……と、とどめ……」

こわばる舌を喘ぎ、妙子は呻くように云って、胸をかきむしり、

「ウ、ーッ……」

と烈しく体をしごいたかと思うと、花びらのような唇から、どくどくと、どす黒い血汐を吐きはじめます。

その時。玄関のベルがけたましく鳴りはじめます。

「奈緒子は、ハッと我に返ると、先ず、最前



の目かくしを姉の口へあて、猿轡をかませ、呻きをとめておいて、小走りに次の間へ入りレインコートを引掛けます。返り血をあびた軍服姿で、人に遇うわけにはいきません。

ボタンをはめる間も、もどかしく奈緒子はギヤバのレインコートのベルトをきりつと締め、さりげない様子で玄関へ出て行きます。流石に電燈はつけず、ドアをひらいて表をのぞきます。

そこには、呻きを聞いて近所の人が呼んだものか、サーベルをさげた巡査の姿。

「夜分にどうも。お宅で誰か呻いているらしいというしらせをうけて来たのですが、異常はありませんか。」

「エ、あのう……。あの姉が病気で寝ていますの。それで……いま一寸発作が起こりましたんですが、もう、よくなりました。きつとその事では……。」

「あゝそうですか。それならいゝんですがね。此の頃は事件が多いので。いや失敬しました。」

若い女が応待したので、巡査は怪しみもせず立去ってしまいました。よく考えれば、この夜中に、フードをつけたレインコートを着て長靴をどきどきと響かせながら玄関へ若い女が出て来るこの方が、大変おかしい事なのですが、暗かったのが幸いしたのです。

奈緒子は、シット巡査の去って行くのを見

送っています。

あゝ、いまの人が、此の世で遇う最後の人なのだ、中天にかゝった月のかげ。これも見納めか。奈緒子はレインコートのポケットに両手をつゝこんで、空を見上げます。

妙子の呻く声。

ハツとして奈緒子はドアをしめ奥の間へ戻ります。

妙子は、断末魔の苦しみに、柱へすがって両肢を揉み合わせ、美貌を引きつらせながら喘ぎつゞけています。

「お姉様、いま、いますぐよ！ 気をたしかに！」

奈緒子は姉を抱きおこし、再び柱に最初の形で縛りあげます。もはや妙子は泳えかねた苦悶の形相です。

レインコートをぬぐいとまもない奈緒子は



一面に返り血を浴びながら、甲斐々々しく妙子の形をととのえ、吐血して唐紅に染まった口もとを拭い、見苦しくないように身の廻りを整理すると、あらためて軍刀をとり直します。

「お姉様。御立派でしたわ！ いよいよ是れ

で、とゞめをお差し致します。お心静かに御最期を……。」

奈緒子は姉に云いきかせるように、ゆつくり言葉をつゞけます。

「おねえさま。私もお後から……。では突きます。」

妙子は氣丈に、うなづいて、ニッコリ笑おうとします。しかし、もはや笑うことは出来ず、頬の肉が僅かにふるえたのみでした。

グサッ！

「ウーッ、ウウム——ッ、！」

妙子の断末魔！

固く縛りつけられた磔の姿。将校の軍服、

乗馬ズボン、乗馬靴。

あゝなんと異様な自決の風景でしょう。妙

子は心臓に一太刀うけて、はげしくけいれんすると、そのまゝがつくり頭を垂れます。

奈緒子は、ジッと妙子が死んで行くのを見つめています。再び奈緒子の眼は妖しく輝いています。

我もおくれじ

奈緒子は、妙子が息絶えるのを見届けると流石に気がゆるんだのか、よろよとその場へ坐ってしまいました。

あたりは血の海。

妙子の死体からも血が流れ落ちています。

「あゝ、お姉様。おしいつけとはいえ、こん

な姿にしてみました。すみません。私もこれから死んでお詫びいたします。でもお姉様はおしあわせよ。いとしい御主人を思い乍ら、妹の介錯で死んでおしまいになったんですもの。それにひきかえて、私は……。でもいゝの。私は一人で見事に死んでみせるわ。お姉様、見ていて下さいね。」

生ける人に云うような奈緒子のつぶやき。

奈緒子は、立上ると、ギヤバのレインコートのベルトをゆるめ、脱ぎながら白布の上に敷き重ねます。自分の最期の場を作るつもりなのでしよう。

彼女は、軍服のボタンをはずし、下着のシヤツブラウスの前もくつろげます。乳房が凝って、白い腹は波をうっています。

姉の血のりを拭いもあえず、奈緒子は軍刀を白布で巻き、静かに呼吸をととのえます。

あゝ彼女は切腹しようとしています。苦しからう。いゝえ奈緒子は和撫子なのだ。

勇ましく腹かき切って最期を飾るのです。

ハッ！ ハッ！

と烈しく喘いだと見るや、がぼと左の脇腹

へ軍刀を突立てる奈緒子。

「うつ……」

彼女は息をしずめて、一分、一分と刃を右へ引き廻して行きます。

切腹！

あゝなんとたる健気さ。自らの手で、自らの

腹を断ち切る大和撫子。

うめきません。きりきり……。

深く喰入る刃の光。

四寸ほどもかき切ったでしようか。突然、

「うろうむ——っ！」

体が硬直し、乗馬ズボンの両ヒザが浮立って、泳えかねたように烈しいうめき声が洩れます。

それを合図のように再び玄関のベルが。

もう彼女は出られません。三度、四度。ベルはけたましく鳴りつゞけます。

「早く死ななければ！」

彼女は、あせり気味に腹を一文字に切って行きます。流石の奈緒子も、切り開いた深傷の苦痛に、次第に呻きを泳えかねて来ます。

「うう……」

「香川さん！」（ベルの音）

「うう——ッ、……」

外には物々しい人の声。

「なにかあったらしい。え、きこえますか？

女のうめき声。なんとかしなければ——香川

さん！ 香川さん！」

見とがめられないうちに死にたい。奈緒子は必死となって腹を切り開いて行く。

「駄目です！ 返事がありません。ドアをこじあけてみましょう。」

警官がドアをこじあげようとします。

奈緒子は、レインコートを敷いた上に片ヒ

ザを立て、前のめりになりながら、見事に腹を一文字にかき切り、美しい頬を引きつらせて軍刀を引きぬきます。

「うっ——」

どうしたとした、と表は次第に近所の人々が集って、ドアはいま打ち破られる寸前です。奈緒子は、

「ウーッ！」

と絶叫しつつ、軍刀を鳩尾へ突立て、たえかねて、よろよると立上り、レインコートの上へ乗馬靴の両足をふんばり、腰をしごきつゝ血みどろの腹を縦に切り裂いて行きます。

「早く、早く！」

ドアはやがて、烈しい音を立てゝこじあげられました。

人々は我先にと呻きのきこえる奥の間へ殺到します。そして……

襖を開いた時、思わず、人々はアッと声をあげます。

室の中央に敷いた血みどろの女物のレインコートをふんまえて、さながら正面の御真影を拝するが如く、上体をかゞめながら立ちすくんでいる陸軍将校の姿。そして右手の柱には、同じく軍装の将校が血まみれになって縛りつけられているではありませんか。

立っている将校は、体をふるわせながら

「ク、ク、ク……」

と喘いでいます。

血染の男裝

「アッ！ 女だ！」

誰か叫びました。人々が、その声に、ワッと応じると同時に、その将校は崩れるように膝をつきます。

「アッ、妙子さんに奈緒子さんだ！ おまわりさん、二人は、こゝの家の人です！」

顔見知りの者が叫ぶ。

奈緒子は膝をつき、腰を浮かした勇ましい姿で、軍刀を腹に突立てたまゝジッと苦痛を休めています。

「医者だ！ 医者だ！」

人々は口々に叫ぶ。奈緒子は、きつと顔をあげます。

「あゝ……み、皆様……。オ、お騒がせして……申……訳……ございせん。……か、覚悟の自決……た、助かるような……助かるような切り方は……し、し、して居りません。く、くわしくは、遺、遺書を！ 遺書を！ い、い、いま、さ、さいごを……御……覧に……い、れ、ま、す……。ご、御機嫌……よう！……ク、ク、ううっ。」

ぐーっとならば軍刀を引きぬくと、つかがしらを床につき、刃先を上にして、のしかゝるように右の頸動脈をかき切るのです。皮に切り込み動脈に達する軍刀の先。

「アア、ううむ——ク、ク、ウウーッ！」

男のような烈しい呻きと共に
ピサッ！

と血汐がはね飛び、刀身は喉をかき切って左へ倒れ、奈緒子は、崩れかゝる体を両手で支えて、横坐りのまゝ右前へ俯伏せになります。乗馬ズボンの両股が、敷かれたレインコートを蹴り、はげしくけいれんすれば、厚地のレインコートもボタンがもぎ取られ、フードも裂けて、断末魔の苦痛を休える奈緒子の健気な努力と強い意志の力を、いままのあたりに見せています。

奈緒子は、紙のように血の気の引いた美貌を苦痛にゆがめながらも、衆人環視の中で、見苦しい死に方はすまい、と固く思いつめているようです。乗馬ズボンの両股も、ふみ開かず、両手も虚空をつかむことはせず、両の乳房を抱くようにして身体を硬直させて行きます。

「ク……ッ！」

最期のうめき。奈緒子は、ぐっ、ぐっと身体をしごいたかと思うと、苦痛をかみしめるように床の一角をにらみ、やがて血汐の中へ頬を落します。

遺書は翌日の新聞を賑わし、凄惨な現場は此の異様な自決の跡を見ようとする人々でいつまでもごった返しています。

(終)



(ポケット告白)

或るアブ・マニアの告白

東 一 郎

若し女に生れ代ることが出来たらどんなにかすばらしいことでしょう。無口で内気、人の前だと物も云えなくなる程の女性的な私。自分でも努めて、度胸を持って、さっぱりとした男性的な性質になりたいと何度思ったかも知れません。が一旦決心しても直ぐ崩れ去ってしまうのです。

とは云っても、女性の中には、男見たいにハキハキとサッパリとした性質の方々が多い様に見受けられます。戦後はとくに目立って来ました。

自然私は孤独を愛する様になり、物を書くことに興味を持つ様にもなりました。子供の頃から作文は好きでした。書くことによって自己満足して来たのです。

然し何と云っても、私は昔から女装して見たいと云う願望はありましたが、此ればかり

は中々に達することがむづかしい様です。従って常にイメージの中で描き続けて来たのです。

× × ×

子供の頃、私は小学校六年生になる迄は髪の毛を伸ばしていました。云々ゆる坊っちゃん刈です。習慣になっておりましたので、ついこの頃になってしまったのでしよう。

二三年迄伸ばしている同級生はおりました。が六年の頃まで、押し通したのは私のみでした。

ですから中学に入る時、当時は強制的に、丸坊主にされるのですから、私としては全く悲鳴をあげたものです。私一人で床屋へ行けば、逃げ出すことが分っていたので、父が一緒について来ました。長い毛がバツサリ切られる時は、全くうらめしくなり、泣きたくな

った程です。

家へ帰れば、母がクリ／＼になった頭を見て笑いこげます。私としては、笑う所か、半ペソをかいていました。

中学一年の頃は、私は背が小さいために、皆から馬鹿にされた方です。小学生の頃から泣き虫だった私としては、本当にいやでいやでたまらなかつた程です。

今思い出してもゾツとする教練、体が小さくて、更に丈夫でもなかつたために、強行軍の時は何時もビリでした。

が配属将校Nと云う人は、不思議と私に対しては怒りません。今から考えると、私は幼稚さんだったらしいです。他の同級生に対してはパンパンなぐるのに、私には決してぶたなかつたのです。

最もなぐられていれば、途端に伸びていた
 かもしれせん。

此の中学校の入学試験の際に、鉄棒の検査
 がありました。その係は此の配属将校N氏
 だったのです。あんまり小さくて気の毒に思
 ったのか、検査はしなくてもよいよ、と云わ
 れてホッとしたこともありました。

運動神経が鈍い私は、今日まで、スポーツ
 らしいスポーツをした事ありません。強い
 て云えばピンポンと云う所です。

全く此れでは余りにも女性的です。どっち
 かと云えば、部屋で静かに、本を読んでいる
 方が好きでした。ですから、外で飛んだり跳
 ねたりする子供達とも余りなじまなかった様
 です。

私が中学校へ初めて登校した時

「まあ、小さくて可愛らしい中学生ね」

と声を掛けたのが、近所の女学生でした。

何か馬鹿にされた様で、むっとふんがいはし
 たのですが、活発な彼女達に反撥する勇氣は
 更にありませんでした。

その頃、私達の学校では、バスで通勤する
 ことを禁じていました。もちろん歩くことを
 強制した訳です。然し体の弱かった私にとっ
 ては、バスでは約十分の所を、三十分近く掛
 かって歩くのは苦痛でした。

それで時たまに遅刻しそうになる時は、こ

っそりバスに乗ったものです。或る日、バス
 に乗ろうとしたら、上級生が引きずり降ろそ
 うとするのです。が私としては、バスに乗っ
 て行った方が好いので、しがみついていたし
 た。バスが、引ずり降ろそうとする上級生を
 地面に引っくり返して発車した時、私は肝
 を冷やしました。上級生のリンチが恐ろしか
 ったからです。

案の上、昼休みにその上級生から呼び出さ
 れました。そのお説教の長いこと、何時なく
 られるか、何時なくられるか、私はブルブル
 ふるえていました。然しその上級生は、今後
 絶対にバスに乗らないことを誓えばゆるして
 やると云いますので、私はそのことを誓った
 のです。それっ切り、何とも云わなくなり、
 上級生は私を釈放してくれました。あんまり
 小さくて気の毒になった故か、私には分らな
 かったのですが、何にしてもなぐられずに済
 んだのですから、その時は非常に嬉しかった
 ですね。

× × ×

性への目覚め、オナニーを覚えた時は、私
 は自己嫌悪に落入了りました。人にも云うこと
 の出来ない此の悩み。丁度その頃は探偵小説
 に興味を持った当時でした。「譚海」「講談
 雑誌」等で、美少女や、少年が殺される挿絵
 に、異常な興奮を覚え初めました。

それらの雑誌の挿絵を切り抜き、スクラッ

ブしたのですが、ふとした時、切り抜いた
 雑誌を父に見つかって散々に叱られましたの
 で、そんなことで益々劣等感を抱く様になり
 ました。

それにこりて、此度は、挿絵をトレースす
 ることを覚え、別に保存したのですが、結
 局は集めては焼き、集めては焼いたりするこ
 と繰り返して何にもなりませんでした。

此の頃、私は体が弱かったのでよく早引き
 をしたものです。或る日、家へ帰ったら、母
 も出掛けてしまっていて留守。私は腹具合が悪か
 ったので弱ってしまいました。鍵がかかって
 いて中に入れない。仕方なしに庭先きで用
 をたしました。どうやらお腹の調子もよくな
 った様子。

その時家で飼っていた犬、コロと云いまし
 たが、未だ湯気の出ているそれを、ムシヤム
 シヤ喰べ初めたのです。此れにはおどろきま
 した。何にもしなかった私ですから、びっ
 くりするの当然でしょう。何とも云えない
 妙な気持になったことを未だ覚えています。

やはりこの頃です。徴兵検査を逃がれるが
 ために、女装してある地方に逃亡して何なく
 突破したと云う変った小説を読んだことがあ
 ります。

題名も、作者も忘れましたが、私にとって

は非常に興味深いものがありました。
「今度来た人、お尻が小さくてまるで男見た
いね」

「本当、足なんかもすりりとして」

此の様な会話が あった様に記憶しておりま
す。此の作者も事実女装して、兵役が逃れる
こと出来たら好いなあと 思って書いたのに違
いありません。

× × ×

女装して見たいと云う気持はその頃からあ
ったのでしよう。やはりその頃、留守番して
いた時です。ふと妹のスカートが目についた
ので、穿いて見たことがあります。

柔かい布地が、私の足に、腰に感じます。
座って見たり、腰かけて見たり、股を拡げて
見たりして、異常な迄の興奮を覚えました。
二度とそう云う機会がなかっただけになつ
かしい思い出になりました。

先日妹が、ハイキングに行つてずぶぬれに

なつたので、ズボンとスカートに穿き代えた
のですが、スリッパを着用しなかったので、
気持が悪かったと云っていましたが、私とし
ては、むしろその様にして今一度穿いて見た
いと思つた位うらやましく感じました。

サトウ・ハチロー氏の「ユーモア艦隊」の
中に「おはじき艦隊」と云う一節があり、
男の子が女装してスカートをひるがえしてか
け出している挿絵があり、此の本田庄太郎氏
の絵は中々に魅力的でした。

「スカートは走りにくいねえ。足に巻きつい
て」と云うことが云われてあつた様です。

私もセーラ服を着て女学生の恰好をして見
たい。ヒダの多いフレヤースカートをなびか
せて。——が此れだけは、イメージだけの方
が無難の様です。髪が濃くて、ゴツゴツした
女はいないでしょう。女形にしても、やはり
何となく気持が悪いものがあります。男が女
に扮するのですから何処か無理があります。

特に手の恰好はやはり男のままです。此れだ
けはかくし様もないでしょう。

本当の女の気持は中々に微妙なものがあ
ります。女の心理を掴むことは確かにむづかし
いです。此れは誰でも第七のヴェールまでは
分らないからです。然し容姿は外国人よりも
日本の女の人々の方が美しいと思います。否
むしろ外人よりも綺麗な人が多いでしょう。

女の方が男になりたいと云う気持が強く
くことは当然でしょう。宝塚や松竹の少女歌
劇で男装の麗人が活躍する位ですから。最も
戦後の少女は声帯だけは男の様です。低くて
まるで男みtainな調子の人が多いですね。

私の女装して見たいと云う願望もイメージ
だけでなく、一度は実行して見たいと思つて
いますが、中々に機会がありません。

来世、若し人間に生れ代わることが出来る
のなら、何にしても私は「女」になりたいと
思つております。
(完)

二月号の口絵には、私の最も好む猿轡女優
のアップが発表され、本当に素敵でした。

私は誰でしょう？ の答は次の通りだと思
います。

- ① 松竹映画 弁天夜叉 高峰三枝子
- ② 大映映画 虚無僧変化 小町ルミ子

③ 松竹映画 喧嘩鴉 山根寿子

④ 東映映画 変化大名 三浦光子

①と②は速報版にて発表済でしたが、③と
④は詳しい説明がないような気がしますので
ここに書いてみます。

松竹映画 「喧嘩鴉」

高田浩吉と高橋貞二の兄弟分が喧嘩場へ行
った留守に、相手方の悪親分にかどわかされ
た(山根寿子)は、手拭の猿ぐつわをされ、
両手を二人の乾分にねじ上げられ、玄關から
土蔵まで引き立てられ柱に後手に縛りつけら
れてしまう。

東映映画 「変化大名」

市川右太衛門に囃になつてくれと頼まれた(三浦光子)は、わざと誘拐魔の出そうな淋しい武家屋敷の塀外を歩いていると、物影から現れた黒覆面の武士数名、やにわに黒布の猿ぐつわを嚙ませて担ぎ上げる。

さて、今月の速報は

松竹映画「この女に手を出すな」

情婦を絞殺したところを(山鳩くるみ)に見つかった龍崎一郎は、彼女を後手に縛り自動車に乗せホテルの地下室へ連れ込み、ワンピースを半分ぬがせ、あらわになった肩をなでまわす。

大映映画 「続、花頭巾」

裏切者として捕われた(大英輝子)は、屋根裏の小部屋に荒縄で後手に縛られ、引きさえられる。傍役だけにキッチリと緊縛されていた。

松竹映画 「よいどれ牡丹」

開巻劈頭、雑草の中に横倒しになった女の足。大谷友右衛門が抱き起すと、後手、手拭の猿轡の(浅茅しのぶ)が遠写でうつむいている。上の方は雑草の蔭になつていたので、縛り具合も顔もはっきり分らない。友右衛門が直ぐほどこしてしまうのでワンカット。

映画速報欄

△並に、二月号口絵「猿轡を

嚙まされた女優たち」解説▽

千葉栄市

同映画中頃のシーンでは、やはり(浅茅しのぶ)が永田光男の為に、しごきで胸の前を二巻き、後手に縛られ火のついていけるキセルを袷首に押しつけられ、唇をかみ熱さにゆがむ顔。この場面はやや長いが、友右衛門に又助けられてしまう。この映画の最後の方で、

(紫千鶴)が人質にされ、後手で縛られ駕籠の中に押し込まれているワンカットがある。

【追加】 (以下の分は、二月号速報欄として予定されたものですが、全通ストのため原稿の到着が甚しく遅延しました為、二月号に掲載出来なかったものであります。)

東映映画「風雲黒潮丸」まだら狼の巻

黒潮丸造船所に忍び込んだ謎の男は幻術をもつて小夜姫(丘さとみ)をさらい、後手、黒布の猿轡にて屋敷に監禁する、若衆姿の縛り。同じく南海の若武者の巻

再び捕えられた小夜姫は、後手に縛られ今度は白布の目隠し迄され、絶壁の上に引き立てられる。こずつかれ突きとばされるが、目を覆われている為、運ぶ足もよるよると痛ましい。

東映映画「浅草三四郎」

三四郎をおびき寄せる囃として誘拐された女スリお龍(三条美紀)は麻縄で手足を縛られて、なぐられたり蹴られたりする。

この映画は上映時間四十九分の四篇映画であるが、緊縄シーンが四分ほどある。女同志のプロレスもどきの格闘もある。三条美紀と日野明子の格闘は上手ではないが、女闘美に興味をお持ちの方には、珍重されるかと思われる。(以上)

【おわび】

二月号口絵写真「猿轡を嚙まされた女優たち」(私は誰でしょう)(何という映画の場面でしょう)四葉はクイズ懸賞として正解者にはキヤビネ版の焼増写真を進呈する予定でしたが、印刷の手違いにより、懸賞規定が脱落してしまいましたので、ここに千葉栄市民を煩して、その解説をして頂きました。

女同志の吊責め

岸 本 青 柳

終戦後メキメキ急激に繁栄振りを示した或る銀行の、預金係で相当の地位を占めている、川口新次郎が、今度四ヶ年振りに大阪市内の有力支店へ転任を命ぜられたので、鈴江夫人は夫君の代理で、町内へ挨拶廻りに行くことになった。鈴江は大した教養もないらしいが、生れた儘の従順なお人好しの美人であり、夫婦とも四十才前後で、主人は始終留守勝ちである。鈴江は大学生の長男と専門学校へ通う次女との四人暮らし、長女は既に明石に住む会社員に嫁ぎ二人の子供まで儲けて、これまた比較的安楽な生活を送っている。鈴江はいよいよ一家を挙げて転宅することに目取を決め、頗る心易いこれも他の銀行員の稲葉照夫宅を訪ずれ、婦美子夫人に転宅の挨拶を述べ、四方山の雑談に時を過すのであった。婦美子は世間には知られていないけれど、縛りマニアの一人であるので、話題も遠廻わしに自然、その方に持つて行くのであった。

婦美子「奥さんと愈々お別れするとなると急に淋しくなりますワ」

鈴江「そうネ、妾も淋しくなるので、時々寄らせて貰いましょうかしら」

婦美子「お大師さんへもお詣りなさいよ」

先に言い忘れたが、この人達は熱心なお大師の信心家であり、よく世話を焼いており、またお供物も人一倍努めて献げていた。

鈴江「そうですネ、妾も出来るだけお詣りさせて貰います」

婦美子「奥さんはお芝居や映画見物が好きですから、大阪へ転宅されたら、余計に観られることでしょうよ」

鈴江「妾もそれを楽しみにして居ますの」

婦美子「奥さんは映画やお芝居で何がお好きでしょうか」

鈴江「妾は何でも来いで、これと言うほどのこともありませんの」

婦美子「でも、何か一つや二つ位、その内でお好きなものがあるでしょう？」

鈴江「そうネ（と考え込んで）別段取り立てて言うほどのこともないけれど、まあ好きだといえどチャンバラが好きよ」

婦美子「旧劇と映画のチャンバラは私も好きなんだけど、悲劇物も好きよ」

鈴江「悲劇というと娘さんが継母や悪者に虐められる場面は可哀想じやございません？」

婦美子「娘さんの虐待されるのは可哀想ですが、でもなんとなく好きだわ」

此処ぞとばかりに婦美子は金閣寺の雪姫、八百屋お七、毒婦高橋おでんの捕縛、明烏等々の美しい女の縛られる芝居の筋書に特に力を籠めて、この春大阪歌舞伎座で見たという「番町皿屋敷」の観劇の模様を詳しく説明すると鈴江も、その話に引込まれてかつて自分

も京都で観たといつて、お菊の吊り責の有様を手振り身振りで話すのであった。

婦美子は鈴江の話する間無言で聞いていたが、興味を唆られたという風を装うて、婦美子「奥さんは色白で、妾より少し細いようですが、美人でいらっしやるから、お菊になつたら、さぞ似合うでしょうね」

鈴江「ホムム……美人なんて……でもあの時の役者の名は思い出せませんが、仲々よく出来て大もてでしたワ」

婦美子「そうでしょう、奥さんだったら大喝采、大入満員でしょうね、ホホホ」

鈴江「奥さんは何時もお口がお上手？」

婦美子「別にお上手でもありませんが、本当のことを言うだけ……お別れにあの芝居をしてみんなに観せたらねえ」

鈴江「オオ恥かしッ、そんなことすると、主人に叱られますワ」

婦美子「ではコッソリ二人限りで……」

鈴江「妾はお菊、奥さんは青山鉄山だったら面白いでしょう？」

婦美子「妾が脚本を書き抜いて来ますから奥さんと一緒に演って見ましようか？」

鈴江「まだ転宅まで一週間ほどありますから皆の留守の間に、この庭前でしましよう、丁度彼方に蓋をしている浅い井戸がありますから、釣瓶がありませんが、屋根があります、でも走り元はセメントでは、何だかねえ」

婦美子「それならセメントの上

に蓆を敷いたら可いじやありませんか、後ろに

松や紅葉や霧島のような植木も

……舞台が自然に出来て居るじやありませんか」

鈴江「そうねえあすこなら可い、でも吊られたら痛いでしょう。一寸の間だけよ」

婦美子「六ヶし

い科白を抜きにして、責め場だけなら可いでしょう」

鈴江「では釣瓶の代りに太縄を買って来ましよう、どうせ転宅に要りますから」

番町皿屋敷お菊責めの相談が纏つたので、改めて日を選んで実演することに決め、なお雑談を交わして、鈴江は帰って行つた。婦美子はその夜なるべく簡単な筋書を認め、その翌朝、鈴江の宅へ持参したが、折悪しく鈴江

立木に縛られた鈴江夫人



は留守だったが、正午過ぎ鈴江の方から何気なく婦美子を訪ね、いろいろ転宅の話を交わした上で、婦美子は昨夜書いたお菊責めの脚本を鈴江に読んで聞かせ、幸いその日は晴天であり、平常通り家人が留守だったので、早速実演することに相談一決、婦美子も鈴江の宅へ行き、表玄関と勝手口に錠を下ろし、奥の間で二人は実演の準備に取りかかった。

婦美子は鈴江の夫の紋付の羽織、着物、袴

を貸り受け、真ッ直ぐな紫檀のステッキを刀代りに腰に差し、髪は其儘で早速鉄山の武士姿をこしらえた。

鈴江は娘の錦紗の素い立縞で袂の長い、淡紫色の袷着て紅地の牡丹の広幅帯、赤の扱帯赤絞りの帯揚げを締める髪も態々半ば崩し、胸も少し捌けてお菊の姿となり、帯も帯揚げもダラリと垂らした。素より色が白いいので田舎芝居の役者顔負けという、食いつき度いほど可い格好が出来た。用意万端整うと婦美子

吊り責めされる 婦美子夫人



は繊弱い鈴江の両手を後ろ手に、雁字がら目に細縄で縛り上げ「キリキリ歩め」と叫ぶや否や、縄尻を取って低い縁側に鈴江を引き立てた。

鈴江「奥さん、余りきつく縛ったので胸や手が痛いワ」

と早くも弱音を吐いたが、それには構わず婦美子は、鈴江が後ろ手に縛られた身体を前かがみに庭前へ下りようとする腰の浮いたところを後ろから強かにその尻を右手で衝くと、鈴江はよろめきながら小走り

りに足を運んで井戸端の荒庭の上へ横尻に座って終った。婦美子は別の太い棕梠縄を井戸上の家根の横棧に振りかけ、井戸の蓋を取り除いてから、鈴江の背後へ廻わり

た？」

鈴江「ハイ、無調法いたしましたして誠に申し訳ございません」

婦美子「申訳ありませんで相済むと思うか、何枚割ったかキリキリ白状しや？」

鈴江「どうぞお許し下さりませ」

と膝頭まで俯向き、腰を折り曲げて平謝まりに細い作り声で謝まるのであるが、婦美子はこれには耳を藉さず、ステッキ代用の刀で五、六度鈴江の背中を叩き附ける。その都度鈴江は身体を左右に動かしては「痛い／＼」と連発する。婦美子は鈴江の後ろ手に縛られた両手の間へ刀を差込み、下から上へ、また上から下へと数回引き廻わし、更に仰向いたところを胸と細縄との間へ刀を突ッ込んで掻き廻わし、科白に力を寵め

婦美子「これでも白状せぬか、これでもか」

鈴江「お……ゆる……し……」

と微かな声で謝まり続けるが、婦美子は責め手を緩めようとはせず、愈々虐待の度を加えるので、鈴江は、後ろ手に縛られた不自由な身体を上下左右に頻りに揺り動かし、白綸子の長襦袢、紅のお腰とが自然に乱れ、雪よりも白い太股が、古びた蕨の上に鮮やかである。

婦美子「あくまで白状せぬとあらば、吊し責めにして白状させるがどうじや」

と太声で叫ぶと共に、井戸上に吊した棕櫚の太縄を、鈴江の帯と縛られた両手との間に結び付け、強く後へ引っ張ったので、その力で鈴江の身体は徐ろに立ち上り、井戸縁まで引き摺られたが身体は容易に浮かない。そこで婦美子は幸いこの井戸には水がないので、鶏舎の横に置いていた塵箱を二尺ほどの井戸底に入れ、その上に鈴江を立たしてから、再び棕櫚縄を力任せに引っ張り、その端を、支柱に結び、塵箱を取り除けると、鈴江の身体は「アッ」という間もなく宙吊りにされた。そのはずみに鈴江の身体は、二、三遍クルクル廻ったが、縛られた両手は帯の上に、頭は前かがみに俯向き眼を閉じたままである。

婦美子「これでもかッ」

と叫びながら刀で鈴江の腰、背筋、膝など手当たり次第に相当強くひっ叩き続けた。

鈴江「ウム……………痛……………イ……………奥さん早く……………下し……………て……………よう……………」

こうする間にもいよいよ宙吊の縄が身に喰い入り、痛さは痛し、胸がドキドキして呼吸も苦しくなり、真に吊り責めの地獄の苦痛に喘ぎ、額からタラタラ冷汗と眼から熱い涙を幾筋ともなく流れ出し、遂にシクシク泣き声を挙げる。

婦美子「そんな科白はないよ。これでもかッかッ」

と続けさまに鈴江のお尻をバタバタ殴打するので、吊り責めの極端な虐待に耐え兼ねて鈴江「も……………う……………かん……………にん……………」

と数度哀願する。婦美子は、その側で自分も後ろへ両手を廻わし、立ったままクルクル廻って吊責めの真似事をした後、約十分間を経てから、元通り鈴江の脚元へ塵箱を置き、棕櫚縄を解いて鈴江を抱えて奥の間に伴い、雁字がら目にした細縄を解いてやった。鈴江は紫色になった縄目の跡を示し、ハンカチーフで冷汗を拭きながら、

鈴江「奥さん、随分ねえ。痛かったワ、あのまま死ぬような気がしてよ。」

婦美子「でも可かったでしょう、妾も随分骨が折れたワ」

鈴江「エエ、それや何とも言えぬ気持だったワ。まだ身体中がズキズキうづいてるわヨ。こんなに貞子（娘の名）の着物が皺苦茶になつて」

婦美子「でも奥さんのお菊さんは逆も可い格好でネ、妾惚れ……………して終った！」

鈴江「奥さんは随分変つてゐるわネ」

婦美子「奥さん、あんなことはじめて？」

鈴江「勿論初めてヨ、お菊になる役者も随分辛かったでしょうねえ」

鈴江「妾、ほんとうに苦しかったワ、でも後ろ手に縛られて吊責めされるのも何だがこう可いものネ……………」

お茶を喫みながらの二人のお菊話は一時間余も続けられたが、その間に衣裳を元の簞笥に収め、次の機会を約して劇談が終った。

こうした鈴江、婦美子の二人女性の惨虐極まる吊り責めは、この二人以外は幸い誰一人として知る者がなかった。鈴江が転宅してから約六ヶ月の後、今後は鈴江が大阪から態々お土産品を持って、婦美子の家を久し振りに訪れ、鈴江が大阪で芝居や映画で相当責めの場面を味った数々を物語った。そして縛りマニアの婦美子の感情を弥が上にも咬つたのであった。そして一時間も経つか経たぬ間に、二人は連れ合つて近くの南山という山に登つて小さな詩堂の背後のコンモリ繁った、檜の森の中で用意して来た風呂敷包みを開いて、常着や縄類を取り出し、今後は婦美子は責められる番に廻わり、鈴江が婦美子を後ろ手に縛り上げ、詩堂の鈴の太い輪金に麻製の太縄をかけ、これへ婦美子を結び付け、手洗鉢を踏台にして吊し上げ、思う存分に鈴江が婦美子を責め虐んだのであったが、折悪しく麓の方からこの山に登って来る人の足音に驚いてこの吊責めを途中で取り廢めたのであった。

(終り)

未来幻想
マゾ小説

家畜人ヤブー

(第四回)

沼 正 三

第八章 起立号令

三 肉便器初使用

前号迄の梗概。現代から二千年後、アングロサクソン族を中心とする白人は八つの太陽圏を征服し、女権制下に宇宙帝国イースを作っていた。
本国星カールの首都アベルデーンから地球別荘に遊びに来たジャンセン女侯爵嗣女ボーリーンは、円盤艇に乗って航時遊歩に出たが、故障で二十世紀は現代の西独乙の山中に落ちた。
居合せた日本青年瀬部麟一郎とその恋人の独乙娘クララ・フオン・コトヴィッツは、円盤の中で、ボーリーンを気絶から救った。

すると人犬が飛び出して来て麟一郎を咬み彼は全身麻痺の状態に陥った。イースは白人の楽園で黒人を奴隷とし、尙ヤブーという黄色人種が類人猿扱いで、或いは家畜として、又家具として使用されている。

麟一郎の麻痺に対する緩解薬を取りにクララは二千年後の世界を訪問する決心をした。便所を借りようとしたら、ヤブーを便器化した肉便器が現れ、ボーリーンはこれに日本語で命令する。

かくイースの人々にとって *ashick, unck* の両語は動作(起立と胡坐)を意味するのみで、排泄行為とは無縁な語であるが、この事情は「言語を解する家畜」たるヤブーにとっても変らない。彼等はこの両語を特に語尾にOを附した語形で命令語として理解し記憶している。旧家畜語彙での原義などは百億匹のヤブーの誰も知らない。いや、大小便や飲食物の觀念なく単にCRにおける排泄と充填とを知るのみの彼等は、かりに原義を教えられても充分には理解し得ないだろう。

(ストウラーの神話でも分るようにある程度の概念はあるらしいが)。

この点肉便器達は多少特権的地位にある。彼等は自ら誇る如く、一見黒奴風の摂食排泄を営み、又職掌柄も人間の排泄を理解している。——が、大小便と飲食物という本来截然と区別せられるべき両

の事物が概念において混然一体になっている点で、やはり畜生は畜生、黒奴達とは全然違うのだ。

彼等は food と drink という二つの概念で事態を理解する。彼等が口から摂取する固体液体は、とりもなおさず人間の肉体から出る固体液体なのだから（それに彼等の排泄する液体も黒奴酒原料として drink の性格をもつ）、彼等は feces だの urine だのいう他の概念の必要を感じないのである。

彼等はこの両概念を食事の作法（ベロ星訓練場で模型人体を使って仕込む）と共に憶える。「神様は食べるとか飲めとかは仰言らない。坐れとか立てとか仰言る丈だ。坐れと仰言ったら food の時間——坐位で仰向くのだ。立てと仰言ったら drink の時間だ。立位で神様——臥るか腰掛けるか立つか、どれかの姿勢を取ってらっしゃるが——の股まで頸を伸し顔を近寄せて行くのだ……何を食い何を飲もうなど思ひ患うな。神様の思召次第なのだから……」こうやって仕込まれ、号令に条件反射しうる様になった彼等には ashiko は drink と同義になったに近い。アシッコと云う発音ですぐ尿を連想するのは、だから、土着ヤブーと肉便器だというわけである。

ともあれ、ポーリーンの放った ashiko の一語はこんな複雑な文化史的背景を持っているのだ。そして彼女には起立号令であるものが、St Bt（標準型肉便器）には drink の合図であり、麟一郎にはオシッコと聞え、クララには無意味だった。

声に応じてその St St は廻れ右した。ポーリーンが両足を踏み開いて待つ方に近寄りつつ、頸のとぐろをほどき、するすると伸す……と見る間に頭部は見えなくなる。初めて見るクララには、頸の伸びてゆく有様が悪夢の様に印象的だったし、頭部が急に隠れたのも魔法見たいに思えた。

メタリッ

金属ゴムとよばれる合金は特殊弱電流を通じると急激に伸張し、電流を断つと元に戻る。この性質を利用して、イース工業界では色々な応用品が作られているが、その一つが孔（ホール・ボルト）である。真中に針で突いた程の小孔のある径二耗位の平たい丸い金属片が布地中に嵌め込まれている。電流が通じると環状に拡がり、径三〇種の針金の環見たいになる。布地は伸縮自在だから、瞬間的に布地に大穴があいた様になるわけだ。この孔鉤が昔の男子ズボンで一番下の M 鉤のあった位置に付けられている。そしてコードを通じて St St の全身に弱電流が通じているので、その両手が使用者のズボンのどこにでも触れさえすれば、爪のない両指先が電柱として作用し、孔鉤を開くのである。手を放すと電流が切れ、即時に元に戻る。使用中うっかり手を放させると頸が締って扼殺——家具の一種だから「破損す」と表現されるが——の結果を生じる位復元力が強い。この孔鉤が黒奴服（後述のようにこれはコンピネーション・スタイルである。）以外のあらゆるズボンやパンツに付けられているから、イースの人々は排泄行為に当って自分の手を使う必要が全くないのである。下着の紐を一々ほどいて未開の人には二十世紀人のゴム紐のパンツが不思議に見えるであろう様に、二十世紀人にはこの金属ゴムの孔鉤は魔法の様に思えるのだが、慣れればあたり前の被服部品なのだ。

水平に伸びた細長い頸がピクピクと波うち、嚙下を示す。放尿に付きものの物音は少しもないが、隠れた部分でどんな作業が行われているかは、気配でクララにも充分想像がついた。

彼女は吃驚した。然し後から考えると不思議な位だが、その驚きの大部分は、若い女性が立ちながら放尿していると云う事実に対するもので、人体が便器になっていると云う本来一層驚くべき事実に対してではなかった。

それは、ポーリーンの態度の余りの平然さが、驚くべき事実だと云うこと自体を思い出さなかった為でもあるし、St Stの身体の中一番人間的な部分である頭部が隠れていて目に見える部分がひどく非人間的な姿態——殊に馬蹄肉瘤の凹みから水平に伸びた細長い頸がズボンの中に消えているのはポンプに継いだゴムホースを連想させた——を示していた為でもあるが、ポーリーンから聞かされたヤブー本質論に、何時の間にか彼女の下意識が説得されていたこと番大きな原因だった、先刻はクララはポーリーンにむきになって反が一对したが、それは偏見に愛人の為であった。最初ポーリーンの身体の下に緩衝布団代りになっていた畸形侏儒を見た時も、次に四這人間が人犬になって跳び出して来た時も、彼女は唯理性が彼等の人間なることを教えた限りに於いて、人間のこのような取扱に対する疑問を感じたに過ぎず、感情からの反撥はなかった。だからそれらが人間でなくヤブーであり、知性猿猴と云う猿の一種だとするポーリーンの議論は本来ならこの現性からの疑問を払拭して彼女を安心させたに違いなかったのだ。ただ、ポーリーンの結論は彼女の愛人麟一郎もそのヤブーだと云うにあったから、その限り彼女は反撥せざるを得なかったに過ぎない。

つまり表立って意識こそせぬ、彼女は肉足台や人犬に対して人間的 *syn=patry* (共感) は感じていなかった。そこへこの St Stだ、ゴムホースのような頸の畸形侏儒に対する同類意識は寸毫も湧かぬ。だから人体を便器にすると云うことは気にならない。人体という風に思えないのだ。むしろ気になるのはポーリーンの姿態だった。これこそ彼女のまぎれもない同類なのだから。

踏み開いた両脚を少し曲げて腰を一寸落した恰好は、米国旅行の折見たサニスタンドを思い出させた。腰を下せないのが妙に不安で到頭使わないで出て来たクララである(※)。

(※参考。「ポーツマスの新式小便所」にふるえあがつて逃げ出した婦人たちは、立ったまま両脚を開いて、スカートをまくり、体の下から、そんなに長い放射を垂らすのが、女性として非常に猥らなことであると考えたに違いないと思います。」「

——ボーヴォワールの著書から)

だから、ポーリーンが朗らかに、

「分ったでしょ。さあ、ashicko って云ってご覧なさい」

と勧めた時、クララの心中に在った躊躇の大部分は自分が取らねばならぬ姿態に在ったのである。

然しこの躊躇を吹き飛ばしたのは尿意の緊迫だった。他人が放尿したのを見るともう我慢できない。呪文の意味は知らぬ儘、

「Ashicko.」

見真似で足を踏み開いた。人間とは思ってなくても、人間同様の顔が伸びて来た時無理もないことだが、一瞬恐怖に伴う後悔があった。「人間だろうか?」という疑惑も改めて湧いた。「人間じやない。こんな細長い頸の人間がいる訳がない——」「いや、あの足台も元は正常な人間だったと云う話だった、畸形と云う丈では……」——「一体人間がこんな仕事をさせられたってするものか。それを喜んで頸を伸して来る此奴は、やはり人間でなく、ヤブーとか云う動物に違いない」

自問と自答を一瞬の躊躇の中に終ると、後は耐えて来た膀胱の緊張の緩みゆく快感丈が心を占領した。体の下に長い放射を垂らさないのが、サニスタンドになかった安心感を与えた。自分の排泄したものが自分の前に立つこの奇怪な動物の体内に納まってゆくと云う今迄考えたこともなかった事態が何か当然のことのように思われて来るのだった。姿勢もそれほど不自然でもないように思えて来た。何か擦った感触を覚えたかと思うと、首は早くも抜き出され、

頸が畳まれて凹みの埋まった肩の線の上に、チヨコンと載っていた。

思ったよりあつけない。だが、これがクララがイース文化を味った最初の記念すべき瞬間だったのである。彼女はSt Stを使用することを憶えたのだ。今後もう二度と再び彼女の身体から出たものが無駄に捨てられることはないだろう。彼女の姓、^{コトヴィツ}V. Kotowicki に因んで「Kotowicki」と命名された黒奴酒の銘酒が誕生する日も遠くはあ
るまい。

カルー星どころか地球別荘どころか、まだ一九五六号球面を離れもせぬ中から、クララの心は早くもイース文化に傾きそうに見える。彼女はヤブー家畜論を、知性^{シニアス・キレニクス}猿猴の实在を信じ始めたのではないだろうか。……勿論未だ彼女の麟一郎に対する愛情は変りはない。彼女に問えば彼女はそう答えるに違いないのだが、それは表面意識のことだ。下意識ではどうであろうか。先程ボーリーンのSt Stに話し掛ける言葉が日本語なのを聞いて疑^{ウタガハシ}ったのも、自分には同類意識のない畸形侏儒と自分の愛人との案外な共通性を曝露されたように感じ、将来の乗離の可能性を無意識に予感した為ではなかったろうか。そうとすれば、自身ではまだ気附かね、彼女の愛情にはそれを変質させる何物かが芽生えているわけだ。麟一郎よ、油断はできないのだぞ……

可哀想に、彼は先刻と同じ姿勢で這いつくばっている。女二人は彼の視界を去ったままで、彼は何も見ていない。ただ耳から聞いて着換えしたな、用便したなと思っっている丈だ。もし彼にSt Stの仕事振りが見えたのだったら、彼はたとえ全身不随のままでも、この球面に残りたいと思っただかも知れない。何故なら、彼は肉足台や犬に感じたと同じ同類意識をこのSt Stにも感じたであろうし、それだけにその仕事のおぞましさを見るに忍びなかっただろうから。

いや、何も見ていなくてさえ、彼の直感にはクララに伴われて行くイースへの旅に何か気味悪いものを感じ始めている。先程涙を流して喜んだ彼女の愛情への信頼だけが、彼女の内心に何が芽生えたかを知らぬ彼のその不安を救っているのである。

短い口笛の一吹きでSt StをSCに追い返したボーリーンの時、つと円卓上の立体レーダーをクララに指し示した。細長い直立円筒が立体盤^{ステレオ}の中央、丁度円盤の真上を示す位置に突如出現している。遂に迎える航時快速船氷河号がこの球面に到着したのだ。

第九章 二千年後の地球へ

一 円筒船「氷河号」

一時間余り前、タウヌス山麓で蝶の採集をしていた時に山中に円盤状の物体が落下するのを目撃し、少年らしい好奇心に燃えて早速山道を登って来ていた二人の中学生は、この時思わず立ち止って前方の空を注視した。

忽然と、全くいきなり湧いて出た様に、大きな円筒型の物体が空に浮んでいる。直径三〇米の円形底面に高さ一〇〇米の完全な円筒体、日本人なら茶筒を連想するだろう、窓も何もなく全体がオレンジ色に輝いて、地面に対して垂直に静止している。

「ヤッ、円筒だ」

「オロロンの時と同じだ。先刻のはやっぱり空飛ぶ円盤だったんだぜ」

一九五二年十月南仏オロロン市に円盤を伴う円筒が出現し、あとに「聖の糸」と呼ばれる不思議な蒸発繊維を残して去ったことは空飛ぶ円盤に関心持つ人なら知らぬ者はない事実である。二少年は益々興奮して早くその真下まで到達しようとした。円筒体の静止

した下の地点に先刻見かけた円盤がある様に直覺的に予感されたのだ。未知の物体、世界の謎、中にはきつと宇宙人が……知らず知らず駆足になった。

路が溪流に沿って廻り、山小屋のある山腹の広場の端に二人の少年を導いた。

「あッ、山小屋が……」

「円盤だ……」

山小屋は押し潰され、それにのしかかる様に一部分が破壊された円盤が坐っている。その真上凡そ三〇〇米の空に悠然と円筒が静止していた。

こちらは円盤艇の操縦室の中――

急にブザーが鳴った。ポリーリンがスイッチを入れると、立体受像台にドリスの半身像が現れて、姉に向い、

「壊れてる様だけど、昇って来れない？」

「うん、動けない。牽引線で吊り上げて貰うんだわね」

「分った、今青光線の用意させるから、一寸待っててね」

慌だしい会話をして像が消えた。

ポリーリンは、クララを顧みて、

「大気が青くなるけど、心配要らないのよ」

言い終って間もなく、室全体が青い雰囲気包まれ、まるで窓のある部屋で夕暮を感じるかの思いがする。と、エレベーターに乗った時のような上昇感と共に、卓上の立体リーダーに示されている氷河号の円筒状の船体がぐんぐん近寄って拡大して来るのをクララは認めた。

「ところでね、クララ嬢、貴女のことを皆にどう云おうか……」

ポリーリンは少々心許なような様子で、「前史時代人だと分ったら

貴女を乗せること承知しないと思うの。そりや、ゆっくり事をわけて説得すれば別だけど、すぐには承知しつこないわ。犯罪だもの。

だから、妾こうしたらと思うの。貴女もイースの人だけど、航時遊歩中に妾見たいに墜落したか、それとも故意に無断着陸したか、とにかく、この球面に下りた。ところが何かの事故で航時機が壊れて帰れなくなると同時に、その事故の衝撃で貴女は過去の記憶を喪失してしまった。名前がクララということ丈は憶えてるんだけど、外のこととは、姓名も生国星も経歴も、イース人だということさえも全部忘れてしまった。その事故の直前に捕獲してあったヤブーが忠実に貴女に仕えて世話をしていた……そこへ、妾が墜落して、貴女に救われた。妾は一見して貴女をイース人と認知したし、貴女も円盤を見て臍るながら、自分がイースのどこかの植民星で生れたことを思い出した。それで妾が貴女を連れ戻ることにした……どうかしら、このお芝居？」

「分りました。そういうことにしなければ乗せて貰えないのなら、仕方ありませんわ」

「貴女にとっては初めてのものが沢山あるでしょうけど、記憶喪失ということで、暫くは誤魔化しておけると思うの、……さあ、船艙の底に収まったわ。すぐ皆が来るわよ」

青い光が消え、円盤は静止した。

馳せ寄って円盤のすぐ傍迄来ていた一少年は俄かに空間が濃青色になって一寸先も見えなくなったのを感じて、思わず悲鳴をあげた。

あとに続いていった一人は突然目の前に真青な光の柱が立ったのに驚いて、立ち止まった。

その太い光の柱は三〇〇米上空の円筒の底面全体から下りて来て

いる。光線の束が垂直に地面に放射されて円盤をすっぽりと隠してしまっているのだ。……一分半位して、光柱は消えた。驚くべし、円盤は見えなくなっている。光柱の中にいた一人は上空を指した。「上昇して行つたよ。まわりは真青で何も見えなかったが手さぐりで円盤の端に触れた。それは上に動いて行つた……」

見上げると、真丸な円筒の下面に同心円状の黒い部分があつて、急速に丸く縮むのが見えたが、忽ち黒点と化して消えた。

「カメラの絞りと同じ構造じゃないかしら」

「うん、穴があいて円盤を通し、中に収めてから、閉じたのだろうね」

「今の青い光は何だろう？」

「円盤の上昇を僕等から隠すため……あッ」

「やッ、消えたッ」

全く消えたときより云い様がない。円筒は見上げていた二人の目の前で忽然と消滅してしまつたのだ。白雲のたなびく真昼の空が眩しかった。

——夢ではない。

茫然と佇立する二少年の顔を蜘蛛糸の様にふんわりした青い糸筋が廻つた。見廻わすと何本も四囲に漂っているのである。

「聖の糸だ」

「宇宙船だつたんだね」

「宇宙人に逢いたかつたなア」

後になって、彼等が円筒の忽然たる消滅を繰り返して証言した時にも、多くの人は天空高く飛び去って消える円筒を脳裏に描いて、二少年の言葉を快速飛行の見聞を誇張した表現であると見た。彼等にはそれが不満だった。勿論彼等は円筒が航時船であることも、聖の糸が青光線空間内牽引線であることも、ちつとも知らなかった。然

し彼等は円盤と円筒がこの世界のものでないことを直感していた。だから、彼等の報告に基いて現場を搜索した結果、二匹の馬の屍体や麟一郎の衣服が発見されたことから、宇宙船説が一転してソ連の秘密兵器説が有力となり、日独男女二人の不可解な失踪は東独又はソ連への逃避行か誘拐であるとして報道された後にも、この二少年だけは、自分達が宇宙船を見たことを確信していたし、それは正しかったといわねばなるまい。彼等の想像した様な宇宙人でこそなかったが、円筒の中にいたのはたしかにこの十二世紀の世界に属する人ではなかったのだから。

さもあらばあれ、船艙内に円盤を格納し終つた航時快速船氷河号は、直ちに一九五六号球面を去つて、未来世界目指し、時速二〇〇〇年の全速力で時間の中を進んで行つた。麟一郎とクララとは、こうして現代の地球を去つたのである。

二 三貴族登場

引上の際室温調整機が損じたのだろうか、室内は急に涼しくなつた。扉が外から開かれて、美少女が跳び込んで来た。ドレスである。ふさふさした金髪を被い隠せず軽快にチヨコンと冠りこなしたポロ帽の底の下に、殆んど黒いと思われるほどの淡い青色の円らな眼。完全な美しさと言ふには少々いかつい顔の輪郭、表情も精悍だが赤い唇は可愛らしい。横に太目縞の入ったポロシャツが胸の隆起を緊く抑えている。クララが一時間前に受像器で見た時と同じ服装である。ポロの練習着を着替する暇もなしに、氷河号に乗り込んだというわけなのである。先刻見なかった下半身は、両脚をジョッパズ風の乗馬ズボンに包み、長靴を穿き、右靴の胴に鞭を差し込んで柄が上に見えている。皮革は薄紅に底光りする見事なもので、洗靴奴の涙で洗う天馬皮革などとは知らぬクララにも、横に脱ぎ

捨てたばかりの自分の乗馬長靴がこれに比較しては乞食の靴見たいにみすばらしいことが気になった。服の布地のことは云うまでもない。「本当にこの方の勧めたとおりに着替えておいて良かった。あんな服、あんな靴だったら恥かしい思いをしたことだったわ」と、若い女らしい安心と満足を味うクララだった。

続いて二人の人が入って来た。男か女か、クララは思わず途まどった。着ている物からは女という印象を受ける。一人はキモノに似た前合せのワンピース・ドレスを着ているが、床に達する長いスカートに花模様があり、床を向いたまゝの麟一郎の視界の隅にこれが写った時彼はキモノを着た日本婦人と錯覚した位だった。もう一人は下はズボンだが派手な色だし、上半身に纏っているのも二十世紀人の通念からすれば婦人用ブラウスとしか思えぬもので、ドレッシングイナ感じが、クララが借り着している服のスポーティな簡素と比べて遙かに婦人服らしい。前者は金髪を弁髪のように編んで、束ねずに顔の両側に垂らし、後者は濃い亜麻色の髪を伸して後頭部で一縛りした丈だが、頭の上にトウク帽風の小型の帽子を乗っけて粋な姿だ。服装や髪形が婦人と思わせるに拘らず、顔や身体感じは男性的だった。二人とも良い体格で、殊に後者は一八〇センチはあろうという身体、その肉体の線や衣裳の下に窺われる逞ましい筋肉は明らかに男性のものに違いなかった。

顔も整っていた。金髪の方は一見してボーリオンやドリスの同胞と分る。細く濃い眉、長い睫毛も、恰好の良い尖った鼻、引き緊った口許の薄紅色の唇、肌は玉貝か乳白色の琥珀のようで艶もないのだが、やはり男の顔である。亜麻色の髪をした方は、単に美男子という点では前者に劣るかも知れぬがそれだけ個性的な顔立で、しかも若さに溢れている。濃い、多少迫り気味の眉、大きな灰色の明るい眼、鷲の嘴のような豪然とした鼻、肌は日に焼けて赤らんでいる。

前者のように女にして見まほしいという顔ではないが、然し二十世紀人の標準からすれば、勿論、稀れな美青年といえよう。前者には服装にふさわしい女性的な物腰があったが、後者はそうでない。もっとも軽く微笑んでいる表情の柔らかさは、クララの目には男よりも女のものに見えた。年はどちらも二十台に違いないが、後者の方が若いだろう。

男か女か、混乱した印象も、本来別々の要素が複合している丈のこと、半男半女のように肉体的な変態ではないから、男の服装の奇妙さを風俗の違いとして受け取ってしまった。それほど倒錯的な感じではなかった。態度こそ物優しいが、身体はとことんまで男性的なのだ。男も男、クララはこんな美男子が二人も揃っているのに出会ったことがない。殊に年若な男の態度には女性的な所が少なく、二十世紀の婦人であるクララはそれだけこの男の方に気を惹かれた。思わず上気して赤らむ頬を彼女はどうすることもできなかった。

三人はこもこもボーリオンを抱擁し、接吻して、祝辞を述べたがその度にそれぞれ良い匂がクララの鼻を打った。一人一人が違う香水を使っているのだろうか？ それとも体臭だろうか？ だが余り不思議そうな顔は禁物、イース人ということになってるのだから……

ボーリオンは三人一まとめに次々と紹介した。「クララ嬢、御紹介しますわ。こちら、妹の嬢ドリス・ジャンセンまだ十台嬢よ。スポーツきちがいポロの正選手、次のオリンピックで五種競技（二十世オリンピックで近代五種といわれたもの。クロスカンタリー、騎乗断郊、競泳、剣術、射撃）の選手権を取るんだって頑張っている人よ……その横が兄のセシル、結婚して今は伯爵スザン・ドレイバアの忠実なる夫君、家畜文化史を専攻してる学者よ。」

御主人の卿ドレイバアは国軍中堅将校で、遊星間戦争競技会（各

遊星が対抗して、ヤブーの兵隊を戦わせ、戦争術の優劣を争う競技、後に詳述する。のカルー代表軍にも選ばれたことのある人。ドレイパ伯爵家も古い家柄だわ。……それからそっちが卿ドレイパの弟の郎ウイリアム・ドレイパ（※）男の癖して武骨な荒事が大好きという、アベルデー切ったのおてんば青年よ。……こちらは嬢クララ今日危い所をこの方に救って戴いたの。姓のことはあとでいうわ」

（※）註。郎（オ）は既婚男子に対する夫君と区別して、未婚男子の姓名に冠せられる。勿論女権制確立後、男子の童貞が重んぜられるようになってからの新語である。女子の嬢、婦も昔からの慣習で用いられているが二十世紀での嬢、夫人に当る区別は、男子の郎、夫君である。爵位を離れていえば、スザン・ドレイパ嬢とセシル・ジャンセン郎が結婚して、スザン・ドレイパ婦と同夫君セシルになる。婦と夫君とが昔の氏と夫人に相当するのである。クララは一人一人と握手した。ポーリーンは語を継いで、「こちら、とても変わった体験なされたの。そのため今でも御自分の姓や生国星の記憶がなくてね」

「えッ、記憶がない？」

三人は異口同音に叫んだ。

ポーリーンは手短かに事の経緯を説明した。墜落のこと、クララに救われたこと、ヤブーを連れていたのでイース人と知って話したところ、相手は過去の記憶を全く喪失していることが分ったこと、タロがヤブーを噛んだこと……先程打ち合せたとおりだ。

ポーリーンが、クララはこの土着ヤブーをヤブーと思わず、人間扱いしていたのだという三人は吃驚し、無遠慮なドリスなどは失笑して姉からたしなめられた。

「何しろイース人としての生活の記憶をなくして原始生活していたんだから、そのつもりで彼女の身にもなってあげなくちゃ」ポーリーンは大声でそう云ったあと、後になるほど低くクララには聞えぬほどの声で三人に囁いた。「記憶が復活するまでは前史時代人と違くないの。でも盤盤を見て内部に入って来た位だから、目で見、耳で聞けば、それ文は記憶が戻るらしいわ。とにかく、彼女の反応ぶりが少々おかしくても笑っちゃ駄目よ。彼女も記憶の回復に一生懸命なんだから……とにかく平民じゃないわ、植民地貴族に違いないの」

三人はうなずいて、クララに対し、記憶の回復にできるだけお手伝いをしよう、と申し出た。彼等は彼女に無類な視線を浴びせたりすることは決してしなかった。然し、室の一隅に裸のまゝ四這っている、放浪の女主人に仕えていたという土着ヤブーに対しては好奇心に満ちた視線を向けることを辞さなかった。

クララは不快を感じた。彼女の大切な婚約者の身を、そんな無遠慮な視線に曝したくなかったのだ。もしその視線が麟一郎に対する敵愾心を、否定的評価を感じさせるものだったら、彼女は尚の事それに反撥していたかも知れない。然し、彼等の眼にはそんなものはなかった。軽蔑すらもなかった。彼等の示したものは唯純粹の好奇心だった。厩舎で新しい馬を見る時に彼女自身が示すような眼附で彼等は麟一郎を見ていた、それが彼女を段々不安にした。先刻クララの口から聞いた日本語のことがふと思ひ出された。妾は間違ってたのかしら？ 麟は本当にヤブーとかいう似而非人間 *Pseudo-mensch* なのかしら？ そういう疑が始めてクララの心に萌したのだ。

だから、クララがこのヤブーと婚約関係にあったと聞かされた三人が啞然と、先刻姉に釘を差されたドリスが、黙って咎めるような

眼附でクララの方を見た時には、内心は必死になって「妾の麟に対する気持は正しいんだわ——少くとも正しかった筈だわ」と自分自身に云い聞かせながらも、まだ表面は平気な顔でいたクララも、やがて、彼女が今迄に見た一番魅力的な男性であるウイリアムが美しい灰色の眼をみはって、麟一郎と彼女とを交互に見ながら、心なしか、目に憐れみの色を浮べたのを見た時には、思わず顔を赤らめて麟一郎への愛情を恥じる気持を感じたのだった。

三 腕送話器と頭蓋内臓受話器

「さ、着くまで、一時間あるわ、上階の船室の方に行きましょう」互に紹介の終わったところで、ドリスが云った。

「妾は麟を……このヤブーを離れるわけにゆきませんわ、丈夫な時ならともかく、全身麻痺状態にあるので……」

今度こそ瀬部氏とは云えない。記憶喪失を装うとは云え、イース人になり済まそうという手前、心ならずも、麟一郎をヤブー呼ばわりしたが、もと／＼この旅行は彼の麻痺を本復させるのが目的だったことを彼女は忘れていない。麟一郎はヤブーではないのか、と一抹の疑いこそ芽生え、彼に対する愛情も多少動揺し始めたのを自覚するクララではあるが、今、この状態にある彼を置いて自分だけが宴に招かれる様な心境には程遠い。愛情よりも憐憫かも知れなかったが、とにかく彼を見捨てようとは思わない。……が、皆はそれでは承知しなかった。

「あら、いくら大事だって、そうまでヤブーに義理を立てなくたって……第一、お客様の貴女をこの部屋に置いて、妾達だけ引き上げるなんてこと、できないわ」とドリス。

「傍に居ても居なくても、同じことですよ。どうせ注射するまで変化はないんだし、到着するまで、注射はできないんだから……」と

これウイリアムだ。

「一時間位良いですよ。心配なら代りの者に見させても良いんだしもう二十世紀の球面にいるんじゃないんだから……」あまり躊躇したらいース人と思って貰えなくなるぞ、云わんばかりに、ボーリンが云った。

代る代る勧められて、気持は動いた。前史時代人と見破られては何にもならぬ、心を鬼にして麟一郎を離れる方が却って彼を救う途かも知れない。そう思い直したが、どうも可哀想な気がして、迷っている所へ、セシルが、女にして見たい様な美しい顔を赤くしながら、口籠りつつ云った。

「尾籠な話で何ですが……貴女のヤブーは導尿処置してやる必要がありますよ。土着ヤブーは私達人間と同じ様な泌尿排泄をする訳ですが、麻痺させてあるとそれがうまくゆかないで苦しむんです。以前ネアンデルタールを捕獲して帰りの船中で膀胱破裂で死んだことがあって、それ以来、衝撃^{ショック}・牙で麻痺させたあとは導尿管^{カテーテル}を挿入するのが普通になってるんです。それに土着ヤブーを裸にしたまま放つというは肺炎になっちゃいますから、その方の処置もしなければなりませんし……」

良く気附いて呉れた、と蹲ったまま聴神経を緊張させていた麟一郎は心密かに感謝した。室温が艇の格納後急速に下降したらしく、肌寒さを先刻から感じていた。そして冷えるにつれて膀胱が次第に充満して来ているのだ。着替し起立^{アシツク}号令を掛けたクララは、自分は寒さも尿意も感じないので、そこまで気が附かなかったのだが、セシルは流石に専門家で土着ヤブーの生理を良く知っていたのだった。「セルシ、貴方の云うとおりだわ」ボーリンは早速賛成し、本当は自分も忘れていたのだが、取り繕って弁明した。「妾もね、そう思ってたけど、快速艇^{ヨット}では設備はなし、黒奴はおらずで……」

「この船には両方一緒にできる設備がある筈だから……」

「すぐ、黒奴にやらせるわ」ドリスが結論づけた。「クララ嬢、そんなところ、貴女は見ない方が良いわ、黒奴が慣れてるから……」

ヤブーの排泄に関する作業など目や手が汚れるからお止しなさいという意味で云ったのだが、クララはそうは取らなかつた。然し先程の自分の行動から考えて、麟一郎にも生理的必要があると思われた。導尿管を挿入する作業に立会うことは、躊躇された。ドリスの思ったのとは反対に、彼女は麟一郎の人格を認め、男性を認めているからこそ、それを見るのが恥かしかったのだ。身体を知り合った夫婦ならそうは感じなかつただろうが、淨い恋愛婚約の間でしなかつた二人である。……裸でおいては肺炎になるから、という言葉も彼女は常識的に彼に服を着せて呉れるのだと理解した。その言葉が何を意味するかを知つたら、彼女は、別の行動を取つたかも知れない。然しヤブーがすべて裸でいることなど全然知らぬ彼女がその真意を理解できなかったのも無理はなかつた。だから、病人を入院させる時のような気持で、

「それじゃ、お任せして、妾は場を外しますわ。御案内戴きましよう」

と返事したのを責めるわけにはゆかない。

ドリスは左手頸の腕時計様のものの龍頭を押して蓋を開くと、口の前に近寄せ、低い声で囁くように云つた。

「今ね、船艙に入れた円盤の操縦室に居るんだがね、お客様が土着ヤブーをお連れになつて、それが衝撃牙にやられてる。……いつもネアンデルタールに使う棺は積んでるんだらう？……じゃ、獲物置場からすぐ二人お寄越し」

これは腕送話器と云う黒奴使役用の間接小型指令器である。生体家具の発達した今日でも、貴族は家庭内に黒奴を養っている。昔な

がらの生活様式を維持した面が上流になると沢山あるので、どうしても生体家具だけでは用が足りぬ。例えば食事などは給仕人を後方に侍立させるのが貴族の家庭の習わしだが、この給仕人にはヤブーでなく黒奴を使うのだ。こういう白人家庭内で使役される連中は選抜された最優秀黒奴であつて、これを召使又は従僕と称し、黒奴の最高階級を形成する。

黒奴は半人間とて、ヤブーと違い多少は人権を認められているので、その肉体に読心装置を仕掛けることができない（又仕掛け得るほどIQの高いのも稀である）、そこで、彼等への命令伝達には超短波放送が用いられる。召使はすべて脳外科手術によって内蔵受話器を耳殻内部外聴道下方に装置され、固有周波数を与えられる。

指令器というシガレットケース大の送話器に命令を吹き込めば、極小型の放送局になつてるので直ちに電波となり、召使の耳の中で音波に戻つて命令として響き渡る。特定の受信者一人を相手にする放送だが、召使側には受信しない自由はなく、たとえ眠つてる時でも命令が耳の中で鳴り響くのをどうすることもできない。然し命令する主人の側では、各召使の周波数を憶えたり、発令毎にセットしたりする手間を面倒臭がつて、召使頭に直接指令器を持たせ、自分間は間接指令器で召使頭に命令するのが常である。間接指令器は召使頭達の耳の中の受話器を対象にその人数丈の周波数で足るので極小型にできる。これが腕送話器なのである。各召使頭は別に脳波追跡装置で輩下十数名の召使の現位置を常に掌握し、主人の命令を受けて、適当な召使を選んで作業させ監督する。別名を中継奴とも云う。普通職場単位に一組を構成するが、氷河号にも五十数名の黒奴船員がいるので、これが三組に分れているのである。ドリスは乗込むと同時にこの船の腕送話器を腕につけた、今それを使用したわけ

である。

「ね、クララ嬢、これで安心でしょ。さあ、皆、上の大広間にゆきましよう」

ドリスが先に立った。ポーリソンがクララの方を促がす様に見たが、クララは「私は後から……」と譲った。ポーリソン、犬のタロセシル、ウィアム……の順に続いた。クララは最後に一人で麟一郎に一言慰めと励ましの言葉を掛けてから一緒にゆこうと思つて残つたので、ドレイピア青年が立ち止つてにっこりと手を差し伸し、彼女を待っているのを見ながら、一旦は踵を返して部屋の隅に近附きかけたのだが、裸のまま四這つた麟一郎の姿が目に入ると、アポロのような美青年を待たせておいて、ファウンのような黄色い肌の男に構っているのは気がひけるように感じられ、俄かに思い返すと、言葉を掛けず廻れ右して、アポロと手を組んで出て行つた。

あとには肉足台のリングと並んで床の上に這いつくばつた麟一郎が淋しく取り残された。

——クララ、行かないで呉れ、僕を見捨てないで呉れ。心中必死に呼び掛けたが、唇一つ動かさぬもどかしさ。室内は益々冷え、尿意も迫つて来た。

第十章 矮人概説

一 皮膚 窯

軟かい肉質金属床なので足音は少しもしないが、蹲つたまゝ神経をとぎすまさせている麟一郎には人の近附いて来る気配が分つた。

クララが帰つて来てくれたのか？ と喜んだ時、扉が開いて

「これか」

「仲々良い肉附じやねエか」

「この部屋で脱がせて裸にしたらしい。見ねエ、乗馬服や長靴があるぜ。ヤブーの分際で馬に乗つてたつてわけだな……だが悪い皮革だ、こりや」

「ヘッ、生意気に鞭迄持つてやがつたんだ」

下品な言葉遣の会話と共に、クララの残した鞭を拾う黒い腕と黒い脛が視界の陽に写つた。黒人二人らしい。

「若奥様がお獲んなすつたのかと思つたが、そうじやねエんだつて？」

「うん、今来る途中で拝んだ中にお客様がいらしたろう？ あのお方の飼ヤブーよ」

「飼ヤブーたつて首輪してねエ……」

「馬鹿、これから登録しようてんじやねエか。畜人鞭で飼ヤブーに馴らそうてんだよ。見ろ、背中の中のつべりしてる……」

「その中あのお方のお手々で綺麗な模様がでてるってわけか、この辺にな」

ピシリ、麟一郎の背中に軽く鞭が当たった。黒人の一人が今拾つた乗馬鞭を戯れに試したらしい。

「アッ、お前、そんなことして良いのか、この土着ヤブーの背中は『鞭の処女地』なんだ。それを命令もなしに……」

「いや、今のは鞭つたんじやねエ、冗談当てただけだ」

「どうだか。とにかく今日俺は報告するからな」

「とんでもねエ、断じて鞭つたんじやねエ……」

ヤブーには自分達の話は分らぬものと思ひ込んでゐる二人は、無遠慮に話し合いながら、麟一郎を抱えて担架に載せ、手足を伸させて、仰臥させた。

目の隅に見える彼等の頭部を見て、麟一郎は西遊記の孫悟空を連想した。後頭部を一周した末、前額部で拝み合はつて短く上に撥

ねた孫悟空の金の鉢巻にそっくりの金属の輪を二人とも巻いていたからである。これは実は、彼等の耳内に存在する受信装置のアンテナで、前述の頭蓋内感受話器と共に召使族の肉体の一部に化しているのである。

担架は円盤艇を出て、船艙の高い天井の下に出た。目の玉が動かせないのではつきりとは見えないが、半袖シャツ半ズボンの白地の制服らしい背中には先刻タロの額に彫りつけてあるのを見た紋章胸の方には数字が見える。麟一郎には何とも見当がつかなかったがこれは各召使の固有番号を示す数字だった。鞭を揮った方が8番、もう一人が13番である。

高い天井が俄に低くなった獲物置場に來たのだ。更に寒くなってきた。氷点近いだろう。

「可哀想に、鳥肌立ててやがら」

「すぐ暖かにしてやるってことよ……オイヤブー」急に日本語になって、「手前も今迄ハ人間見テエニ着物ヲ着テタンダロ。面倒臭カ



ツタロウナ、サゾ。安心シナ、コノ棺ニ入りヤ、ソナ面倒ハ無クナルンダカラ……」

「手前ハ着物ノ要ラナイ身体ニナルンダ。有難エト思イナ、御主人

様の思召ヲ」

「ソノ中ニヤ飲ミ食イモ無用ニナルツテネ」

口々に毒ずきながら不気味な予言をする。担架から下される時に視野に周囲が写ったが、エジプトのミイラの棺の様なものを載せた寝台位の高さの台が数脚見える丈の殺風景な部屋だ。設備があると云うのはこの台のことか？ 麟一郎は知る由もなかったが、これは皮膚窯というものであった。

それより驚いたのは、黒人共の服で半袖シャツ半ズボンと云うのは、連結しているし、ズボンの下が割れて重ね合せになっているので、丁度下着のコンビネーションと同じなのだ。これは真空便管の先端器を使用するのに便利な為もあるが、主な狙いは、懲罰鞭打に際してすぐ臀部を露出させることができる様にしている。イス中どこでも召使族のお仕着せはこのコンビネーション仕立の服と定まっているのである。

が、よく眺める暇もなく、麟一郎は人型の窯の一つに入れられてしまった。内部は例の肉質金属で人体に合せて扶ってあり、殆んど隙間を感じない。足趾に何か薬を塗られ、蓋が閉じた。只さえ全身麻痺の身が耳目も奪われて、完全に外界と遮断されてしまったのである。

肉壁が段々膨張して来て全身の表面をビタリ蔽った。呼吸は何ともない。同時にその温度が上って体温と同じになった。入浴の様な快適さ。成程この中に入れば着物は要るまい、と麟一郎は先程の黒人の言葉を理解した。外から操作する仕掛があるらしく、その時そろそろと導尿管が挿入された。やはり設備とはこの窯のことだった。

膀胱の緊張が解けて楽になった時、彼はセシルと呼ばれた白人に秘かに感謝した。

と、気持の悪いことが起った。肉壁の膨張で僅かばかり押し開け

られた両唇の間から、何か細長いものが口の中へ入って来たのだ。しかも蠕動している。生きてるのだ。みみずか蛭のような長虫らしい。それが麻痺した舌の上を伝わって咽喉からそろそろと食道の方に入ってゆく。何という気味悪さ！

読者諸君には説明する迄もない。これは代謝細菌の幼虫だ。胃に入り、幽門に取り付いて急速に尾部を成長させてゆくことだろう。ヤブーの赤ん坊に生後直ぐ吞ませた時で十時間、成人ヤブーでは百時間が尾部の成長に費される筈である。……あと百時間の中には色々なことが起ることだろうが……

今度は肛門に何か挿入されるのを感じた。「又虫か？」と思つたが、今度はそうでなく細長い管らしい。浣腸だろうか？ 浣腸器にしてはひどく長いようだ。腸内奥深く入ってゆく。実は、これは腸内注入管(cenema)と呼ぶヤブー用の投薬具なのだ。ヤブーはポンプ虫を寄生させているのが原則で、肛門が口の役割を兼ね、顔にある口は摂食の用をなさないので、彼等に対しては経口的内服薬が使用できない。そこで、これを下から投与するのである。ヤブーに対する投薬は注射か腸内注入かのいずれかで内服は行われないのだ。

腹腔に何か暖かいものが溢れる様な感じがし、「何を浣腸したのか？」と怪しむ間もなく、身体中がはてり出した。弾力的にビタリ全身の皮膚に密着している肉質金属の温度が段々上昇して来たのだ。体温をとうに越し、摂氏四十度以上五十度にも達したろう。カッカッと脂汗が滲み出て、肉質金属に吸われてゆくのである。

——一体何事だ？ この黒人達はあの白人から、俺を保温器に入れて暖めてやれ、尿を取ってやれ、と命ぜられたのに違いない。この箱がその保温器なのだ。ところが、奴等は俺に抵抗力のないのの良いことに、玩具にして、気味の悪い虫を吞ませたり、悪戯の浣腸

をしたり、こんな高熱を加えたりして、俺を苦しめてるんだ。でた
らめな黒人達！ 先刻のあの親切な白人よ、あんたの命令を黒人は
守ってませんよ！ クララ、僕のこの苦しみを知ってるか？ 救け
て呉れー！ なんてこんな無意味な拷問を俺は受けねばならないん
だ？

真赤にうだりながら、麟一郎は心に絶叫した。クララを呼び求め
た。

だが、答はなしに、温度は却って上昇して行くのだった。もう撰
氏何度が分らぬ。心臓が破裂しないのが不思議だった。腹腔への液
体の注入も依然続いていることが感じて分る。

窯の外では黒奴二名が忙がしく作業していた。麟一郎には無意味
な拷問と思えたが、実は拷問でも無意味でもなかった。彼等は決し
て悪戯をしていたのではない。「新捕獲の土着ヤブー一匹が船艙に
入れた円盤の操縦室にいる。麻痺体。直ちに受領して処置せよ」と
いう召使頭からの命令を受けて後、獲物置場係の黒奴として為慣れ
た作業をしているのだ。先ず窯に入れ、導尿処置をし、ポンプ虫を
吞ませ、次に皮膚強化処置をする。今はこの皮膚強化処置の最中な
のである。

皮膚強化処置とは何か？ これこそポンプ虫寄生と並んで、ヤブ
ー化に必須の手続である。ヤブーは全裸体でいなければならぬ。然
し服を着なれていた土着ヤブーを裸にして放置すれば、肺炎になっ
てしまう。そこで、飼育所では生後直ちに施行されることになっ
ている皮膚強化処置が、土着ヤブーにも捕獲後可及的速かに施され
裸のまま気温の激変に堪えられる様にするのである。

これは高熱により非常な苦痛を伴うのだが、この処置は、ヤブー
を使用する人間にとって、必要にして有益であり、その限り、それ
がヤブー達にとって、苦痛を伴うかどうかは問題にされない。犬の

姿を良くするためその苦痛に構わず耳を削ぎ落してピンと立たせる
のと同じ論理である。その際不必要な加害は動物愛護の精神に反す
るが、人間に有用ならしめるために必要な限りは加害は許される。
動物はそのための苦痛を忍ぶべきなのだ。

では、この窯内の高熱は必要なのか？ 然り。必要である。

これを説明するためには血液媒剤 (coanguinin) という薬のこ
とを述べねばならない。血液中の異常成分はすべて肝臓で吸収され
てしまうのが人体の生理であるが、このコサンギニンという薬を加
えると、異常成分は肝臓で吸収されなくなる。一方皮膚表面を強く
熱して脂汗を流れさせると、毛細管現象が平温の時とは変化して来
てコサンギニンに媒介された異常成分を皮膚細胞に定着させる作用
を営むのである。

これは非常に応用の広い現象で、各種色素を与え定着温度を調節
すること、生体表面の細胞を自由に染め分けることができ、電気
焼筆はこの原理に基いて発明されたものだし、水中や気圧の異なる遊
星大気内で作業させる為の鉄皮畜人も、生体のまゝ皮膚細胞を特殊
金属化して作られるのだ。……が、この種血液媒剤の利用の詳細は
後日クララが皮革工場を視察する日まで保留し、ここでは麟一郎の
受けている処置の説明だけに止めよう。

彼の腸内に注入されているのは皮膚強化剤を血液媒剤に溶かした
薬液である。ヤブーの皮膚から精製する有機化合物に皮膚素という
ものがある。これを陽イオンで処理して繊維にした皮膚繊維は断熱
性に富み、服地強化用原料として重用されるが、逆に陰イオンで処
理すると細胞膜を冷熱に対して強くする皮膚強化剤になる。定着温
度摂氏八〇度で約四十分かけてこれを皮膚細胞に沈澱附着させると
丁度デルマトコン混織の衣服を皮膚の内側に着込んだ様になって、
極暑極寒に耐えられるようになる。断熱性に変化が生じるのみで肌

色、肌触り、触覚能力等には何の影響もないが、デルマトコンに丈は（イオン処理が反対なので）陰陽相引く反応を示し、長くデルマトコン布地に触れると皮膚剝離を生じる。ところがイースでは服地



にはすべてデルマトコンを混織してあるから、デルマトロームによる皮膚強化処置を受けたら、もう服を着ることはできない身体になってしまうわけだ。そこで、この処置は、どんな衣服も着る必要のない動物であるヤブーに対してなされるに止まり、白人、黒人には施されないことになっている。

とまれ、麟一郎は今の処置を受けているのだ。見よ、温度計の針は摂氏八〇度で止った。あと四十分、この航時快速船が二千年後の地球球面に到着する直前まで、彼はこの窯——それは正に古い瀬部麟一郎を葬る棺桶だった——内で身を焼かれねばならないのである。腸内ではポンプ虫の尾部が伸び始めただろう。

二 ソーマと矮人

円筒船最底部では麟一郎が苦悩の余り声なき悲鳴をあげてクララに呼び掛けていた頃、最上階の応接用大広間ではクララが愉快に談笑していた。壁には抽象派の様な画が掲げられ、隅には不思議な大輪の花を咲かせた

鉢植の木があり、花の異香は彼女の鼻を快よく刺戟した。その枝には丸い鳥籠が懸り、紫と黄との混った派手な模様の羽色をした鸚鵡が首かしげつつ、動かぬ目で彼女を見ている。奥の壁に懸っている電蓄からは妙なる器楽の音、独乙生れて音楽の素養の深いクララも初めて耳にする美しい交響曲だった。

五人は丸く輪になって腰を下していた。犬のタロはポーリーンの足許に長々と横わっている。初め異様に感じた男達の派手な服も、慣れれば、龍騎兵の制服の赤いのも同じで、ちっともおかしくなくそういうものとして美しかった。

案じていた様な気ずまりはなかった。ポーリーンは主人役として^{ホステス}気を配っていることは勿論だし、卒直明朗なドリスは、年齢も同じ位のクララと大に意気投合して、自分から「貴女とは古くからのお知合見たいな気がするわ。貴女はきつと貴族よ。一目見て分ったわ。私達もクララと呼ぶんだから、貴女も名で呼んで頂戴——ねえ皆、それで良いわね」

と云い出した位の打ち解け方だ。セシルは古代史通を以て任じる丈に、二十世紀球面に放浪したというクララには特に関心と好意を持ってようだし、ウィリアムに至っては、明らかに好意以上のものを示し始めて、ひどく親切だった。先刻船艙を出てこちらに昇る途中、廊下で船艙の方にゆく二人の黒奴に出逢い、彼等が上下座して一行を避けるのに答礼しようとした時には、手を組んでいた彼がぐっと引き止めてくれた。そして人間が半人間に答礼する必要はないことを彼女に思い出させてくれた。無知からするそんな妙な言動の度に、彼女に矯正され、記憶を回復するのだった。「知識の上ではこの人達との間に二千年の距たりがあるわけだけれど、まるで親友の家庭に招かれた様な寛いだ気分です」そうクララは思った。

声を掛けずに来てしまったのが気がかりになっていた麟一郎のことも「もう服を着せられて寝かされてるに違いない」と考えて一たび安心して後は、念頭から去ってしまった。代ってウィリアムの男性的魅力が次第に彼女の心を領し始めていた。

彼女は円盤の墜落を見、中にポーリーンを発見した顛末を話したが、意識的にか無意識的にか、彼女一人の行動を述べ、麟一郎の名に触れなかったから、聞く方には、ポーリーンを正気づけたのも彼女である様に聞えたことだろう。セシルは二十世紀球面での彼女の生活や記憶喪失の原因になった事故について聞きたがったが、ポーリーンが

「クララは、まだそれを話すことができるほど、気持が落ち着いてないわ。記憶が回復してから、彼女が充分自分を客観視できる様になってから、聞く方が良いんじゃない？」

と止め、ウィリアムも、

「そう。それより、クララの生国の遊星を捜すのが先決だよ。僕、捜しますよ、クララ」^{ポイン・アラネット}

と真剣な顔で云った。

「ありがとう」皆様のお力添えで、生国星に帰れましたら、どんなに嬉しいでしょう。地球での事故のことは今全然お答えできません。放浪中のことは話せます。いずれ詳しくお話する機会が来ると思いますけど、今は疲れますから……」

クララがそう云うと、ポーリーンは、
「ソーマ (soma) を飲みましょう。元氣と一緒に記憶の方も回復するでしょうよ」

とドリスに合図した。

ドリスが、心得て、^{リスト・マイク}腕送話器に囁いた。

「ソーマを持っといで」

配膳盆を捧げた召使が入って来た。鱗一郎を処置している黒人と胸の数字が違う以外は全く同様のなりかたちである。これは胸番号2番だ。と、交響曲の快い響を破って、突然、横の方から

「ソーマ、ソーマ、ソーマ、の、じかん、です、ソーマ」

金切声がクララの耳を驚かした。鵲だ。

ソーマ、とは何かしら？ 飲物らしいが？——と思った時、何処からひとりで一台の丸型茶卓が滑る様に動いて来て、丸く坐している五人の中央にピタリと静止した。卓の中央にマツチ棒程細く鉛筆程長い棒が立ち、それを右手で横桿見たいに握り、左手では背中に担いだ大きな袋の口を抑えた高さ十四種ほどの人形がその横に立っている。卓上装飾用のサンタクロースだ。白い顎髭は植えたのだらうか。赤い三角帽子、赤い外套、白毛皮の縁取、そして黒い長靴、このまゝの寸法で全体を十二倍したら、まるで本物だ。

黒い召使が卓上に五つの空コップを配る。

サンタ人形は、右手に握っていた棒を放して、つと前に進み出て来た。動作に少しも人形らしいぎこちなさがない。何という精巧な自動人形だろう、とクララは感服した。

「妾は二つ、お客様には三つが良いわ」

とボーリオンが云った。人形は白髭を揺がせつつ一礼すると、背中に背負った白い袋から、丸い錠剤を取り出し、二人のコップにその数だけ入れた。

「妾二つ」とドリス。

「僕も」とセシル。

「僕は要らない」とウィリアム。

コーヒーに入れる角砂糖見たいに各人の好みによるらしい。人形は一々お辞儀して、注文の数文粒を入れてゆく。待っていた様に黒い召使がポットを傾けて、湯気の立つ緑色の液体を注ぐ。馥郁たる

香気が部屋一面に漂った。

「ソーマのこと、思い出しましたか？」ウィリアムは一口二口啜りながら、「別名を人類愛の蜜ヒューマニティ・ハニーという奴です。ミミル星の巨樹イグドラシルに年に一度数万の花が開く時、空中矮人達エアロービギミズに花の蜜を集めさせて……あゝ、記憶が戻った様ですね。で、お好きですか？」

「ドレイバア郎が心配してるわけはね、クララ」ボーリオンが笑いながら云った。「彼は貴女の生国星を捜しに、貴女と一緒にイース中廻るつもりでいるからよ。彼はソーマーなしでは一日も暮せない男なの。だから、貴女がこれを嫌い、と云ったら、彼は閉口する訳よ。尤も好きと云ったら、旅行中一日に五度もつき合って飲まされる覚悟でなきやア……」

クララは、こわごわ一口啜ってから、ぐっと飲み干した。西独が連合国に占領された当時、米国から入って来たとして飲んだことのあるココカラに一寸似て、遙かに微妙な漂渺たる趣のある味だった。「飲んで見て、はつきり思い出しましたわ。ソーマーの味。妾、好きでしたし、今飲んで見て懐かしくて……今でも好きよ」

傍の美青年を顧みて微笑みながら云った。

「ソーマに祝福あれ、貴女にも」

目を細くしてウィリアムは叫んだ。

「二十世紀人ならココカラに似ているといったでしょう」

今度はセシルの方を見て、クララは云った。

「ココカラ？」他の人には分らなかったが、

「そう、前史時代末期にココカラという飲物が流行ったのでしたね。私は文献で知ってるのですが、貴女が放浪中それを味わえたとは貴重な経験でした。そうですか？ ソーマに似てますか？……」セシルは古代史の知識をひけらかす機会を喜ぶように、「然し、ココカラはソーマほど日常生活に入っていないんじゃないですか？ 味

の点を離れて云えば、ココアとかコーヒーとか紅茶とかの方の近いんじゃないかな？ お茶の時間という言葉がソーマの時間と云う言葉に取って代られたと国語学者は言ってますからね」

「おっしゃるとおりですわ。それで妾はソーマがどんなに日常的な飲物だったかを、やっと思ひ出しました」苦しい返事だった。

この時卓上の人形が少し動いて、髯が揺れた。

「この人形は随分精巧な機械仕掛けですのね」

皆が妙な表情をしたのに気が附いて、又何か間違ったのか知ら、と思った時、ウィリアムの日に焼けた手が人形を驚嘆みにし、彼女の目の前に持って来て、掌を開いた。

「機械じやありませんよ。(薬味)袋持ちとか薬味サンタとか云う食卓矮人の一種ですよ。ソーマーを飲む時薬味錠を入れるのに使う道具です。思ひ出しませんか？」

白い大きな掌の上で、赤く塗られた人形は立ち上って、向き直ると最敬礼をした。その動作、白い頸髯と目尻や額の皺との見事な調和から醸し出される豊かな老顔の表情……人形にしては精巧すぎる。生きているのだ。小人なのだ。これを食卓矮人と云うのか？

先刻は空中矮人と云う言葉を聞いた。その時は蜜蜂の様なものかと思っていたのだが、こういう小人を *Penny* と称ぶのだろうか？

ガリヴァ旅行記に出て来る小人島の住人達と同じ様な人間の縮小体……二千年後の世界には何と空想的な生物がいることだろう。この人達がそこから来たという遠いシリウスの世界には、こんな小人が住む星があるのだろうか？

「ええ、段々思ひ出して来ましたわ。矮人……他にも色々使うんじゃないくて？」ハタタリだったが、

「勿論、矮人達の用途は無限ですよ」

ウィリアムの声を聞きながら、このサンタクロースの扮装をした小人の髯のある立派な顔の肌色が黄色味を帯びていることにクララは氣附いて、ふと心を曇らせた。

美青年の手が小人を卓上に戻すと、彼はチョコ／＼と中央の棒の所に走り寄った。と、円型茶卓はひとりでに——いや、槓桿を握った小人に操縦されながら、走り去って行くのだった。

「ここにも居てよ」ボーリーンが鸚鵡の籠を下げて来てクララに見せた。「これは鳥籠奴隷って云うの、今雌しか見えないけど」

鳥籠の底は大抵汚らしいものだが、これはピカピカしている。籠の底に鳥の羽色に合わせたらしい紫と黄とに塗り分けた中世騎士の甲冑の様なものを着込んだ同じ大きさの小人が見えた。ままごとの魁位のシヤベルで今し方鳥のお尻から落ちた軟かな糞を掏って横の穴に入れ、掃除をしている。籠の底が二重になっているらしい。鳥の糞といってもこの小人にとっては一寸した一堆積で、大作業だ。

……と底の隅に別の穴があき、同じなりの雄がもう一匹出て来てはねつるべの様な仕掛けを使って、下の蛇口から出る水を桶に入れウン力みつつき上げて、上方の水容器へ満し始めた。

「雌雄でこの鸚鵡に仕えている奴隷だけれど」その鸚鵡の飼主が説明した。「主人が気が荒くて、いつ嘴や爪でやられるか分らないから、甲冑を外せるのは、自分の巢に戻った時だけなのよ。どう、思ひ出すでしょ？」

鳥糞を落す二重底の中に巢を営んで、主人たる鸚鵡に隷属しつつその身辺の世話をする鳥籠の奴隷……仕事振からは知性を具えた人間の縮小体に違いないが、それをこんな所でこんな風に飼うとは……クララは度胆を抜かれて、返事の声も出なかったが、その驚きを面白がるかの様に、ドリスは、長靴の胴から抜き持った天馬鞭で、今しも第三樂章にかかった交響曲の美しく流れ出す壁の電蓄を指し

示しながら云った。

「あの携帯用管弦楽団だって、そうなのよ」

「あの電蓄——ラジオかしら……」

「まあ、ラジオだと思つてたの」

とドリスは笑つて、いつの間にか例の腕送話器を使つていたらしく、丁度この時、腕力の強そうな召使が入つて来たのに命じて、その箱を下させ、クララの前に持つて来て開かせた。大型のトランクに似て把手が附いている。蓋が開かれ……

「ほら、小伶人達」

「あらッ！」

驚く様を見せまいとしていた彼女も、思わず、大声をあげて、又一座を微笑ませた。電蓄でもラジオでもない。箱の中には、礼服を着た小人の楽人五十人位が、それぞれ席につき、楽器を持ち、指揮者のタクトに従つて、整然と演奏をしているのだ。天井蓋が開いて五人の顔が上から覗いたのにも、傍見一つしない真剣さだ。トランクの中に詰った小人達の管弦楽団……

「どう？ 思い出した？」

ドリスはクララに目で笑い掛けながら、鞭の手真似で召使にそれを元通りにさせた。蓋が閉じられ、黒奴の太い手が把手を握つて箱は横にぶら下げられる。思わず、

「あッ、横にして良いのかしら」

中の小人達が下の方にずり落ち押し潰されはしないかと心配したのだが、

「底に引力板が張つてありましてね、どう傾いても、平気なんです」横からウィリアムが説明してくれた。「この船だつてそうです。宇宙船は皆床に引力板を使つていゝのです」

「そうでしたわね。引力板という言葉に記憶がありますわ」とクラ

ラは苦しい受け止め方をした。

「矮人のこと思い出した、すっかり？」とボーリーン。変なこと云い出される前に説明するつもりらしい。

「多少は。でも彼等がどこの星で生れたのか伺いたいわ、そんな小人島の様な星が……」

「まあ、思い出したじやない。釣堀の本当の名前を。その調子」

ドリスが喜んだ。

「そう、矮人族の最大生産地は小人島の牧場よ。ほんとによく思い出したわね」

星の命名自体がガリヴァーの古典に基くことを知らぬボーリーンは、クララがイース人でないと分つてゐる丈に、どうして分つたかと、この適中が不思議だったが、これ幸と語を継いで、

「矮人牧場という丈なら、外にも星はあるけど、小人島には野生矮人がいる。貴女が憶えてたのは、きっと前にそこで矮人釣をしたことがあつたのね」

「クララが貴族だということは、今や一点の疑もないね」とウィリアムは嬉しそうだ。

「この小ささは何から？」とクララが訊くと、

「縮小ヤブーが変種として固定したものです」

「縮小……元は人間なのが、縮んだ……」

「人間じやありませんよ、全然」

「あら、妾、『元はヤブーなのが』って云うつもりだったの……ヤブーが縮んだんだつたわね」

「そうです、十二分の一に」

縮んだといふことの方に気を取られて、クララは無心に訂正したが、何時の間にか人間とは別のヤブーという動物の存在を認めて喋つてゐるのを自分では意識しなかった。

「そうだ」ドレイパア青年は何思ったか、急に顔を輝かせてドリスに向うと、「先刻のこと、矮人に決めさせよう」

「良いわ」とドリス。

「一体何のこと？ 何を決めさせるの？」

ポーリーンが訊くと、青年は赤くなつて

「いえね、アベルデーンで、貴女の次にクララ嬢の歓迎招宴をする役を、僕とドリスで取り合っているんですよ」

「矮人決斗で決めるのなら、生き残った方をクララに贈物するわ」

未来のジャンセン家当主として、母に次ぐ処分権を持つポーリーンが云った。

「僕の選んだのが残ったら、僕はこの頃手に入れた珍品を持参金代りにその矮人に持たせよう——置物の船だけど」

「妾のが勝ったら」ドリスが負けずに云った。「妾の既の中で、好きな馬を一匹クララに選ばせるわ」

「旧馬に乗っていたクララに畜人馬を思い出させるには絶好の思附ね」とポーリーン。

「僕も何か贈物を考えなくちや」

金色の編髪を揺りつつ、ドレイパア夫君が云った。

三 矮人種の歴史と現状

千六百年程前、シリウス圏が征服され、テラノヴァ星のトライゴンからカルー星のアベルデーンへと大遷都が行われた頃、前後して畜人制度完成期の三大発明の一といわれる生体縮小機が案出された。

完全気密の吊鐘状大水晶瓶の中に動物を入れてから水晶発振器を動かし、特殊の放射線を注ぐと鐘が縮み、それにつれて中の動物の身体が縮む。しかも生体各細胞の分子が一定割合で体外に呼吸にな

って排出されてゆくので、縮小された動物にはもとの個性性が維持されている一方、この呼吸を他の個体の呼吸と分離して保存しておけば（換言すれば、気密鐘を毀しさえせねば）、逆装置によって、もう一度原形に復させることも可能なのである。こうして生体を任意の寸法に可逆的に縮小しうるに至ったのだ。

これは遷都後の輸送業務にとって大福音と思われた。つまり多数を輸送する際は一旦縮小し、到着後復元してやれば良いのだ。

すぐ人間には試みず先ずヤブーについて試験してみたところ、縮小中は僅かだが宇宙線疾患罹患率が增加することが分かったので、結局人間への使用は中止された（もつとも、後章で述べる様に、後に白人にも縮小刑というものが制定された。）が、この疾患による損失を見込んで、輸送能率向上から経済的に採算は取れたから、黒奴とヤブーが専ら縮小機にかけられた。然し二分一以上の縮小率だと雄の生殖能力が消失することが証明せられた結果、黒奴縮小率は二分の一止りと定められた。（但し黒奴が半人間と云われるのが、これに基くというのは俗説である。）

ヤブーに対しては黒奴と違って全然人権的な顧慮の必要がないから、積載数を少しでも増そうと縮小率は次第に高められたが、十二分一以下になると知能が著しく減退することが分かったので、十二分の一というのが最高の縮小率となった。これによって輸送能力は実に十二の三乗即ち一七二八倍することになったのである。

ところが、こうして色々縮小率を変えて縮小ヤブーを輸送していると、面白い事実が分つて来た。縮小されてる間は縮小率に応じて時間の経過が加速されるらしいのである。三分一物にとっては普通の四ヶ月が一年にあたる。十二分一物は一ヶ月に一年分年令を取る。肉体と同時に人生も縮小されるのだ。

この性質を利用して、生体縮小機は生長促進機として応用される

に至った。例えば畜人犬は（第三章既述の通り）短脚ヤブーを天井の低い室に入れて生後二ケ年飼育し、その間基礎訓練として四つ這の癖を附けたものであるが、これを十二分一形態で飼えば（鐘を天井の低い特殊の形のものにする必要はあるが）二ヶ月に短縮でき、二ケ年後に逆装置に掛けられ、繁殖力こそないが、立派な二歳仔として以後の犬訓練に堪えるのである。

こうして縮小機は広く使用されるに至ったが、輸送中の事故で鐘が割れ、中の呼気が散逸した為、到着先で原形に戻せず、仕方なく植民星人の玩具とされた縮小ヤブーが、偶然本国星貴族の目に触れその頽廢した獵奇趣味に投じて「生きた人形」として珍重されたことから、それまでは輸送や生長促進のための一時的手段に過ぎなかった縮小形態は、一転して自己目的として存在を主張するに至り、呼気を保存せずに初めから人形用として生産された縮小ヤブーが出現するに至った。

玩具としての恒常的需要が生じると、一々縮小機にかけずに済む様、縮小ヤブー自体の再生産が要求されてくるのは自然の成行である。然し前記のように、性能力は二分一形態までしか維持できないので、玩具向きの小型のものについては当初再生産は不能だった。ところが、縮小機の發明後殆んど五世紀を経て後、遂に生殖能力を持つ十二分一縮小ヤブーが発見されたのである。

ヤブーの中に純血種と称せられる血統がある。地球征服者、ク將軍は、旧ヤブー首長一族を捕虜としテラノヴァなるトライゴンの宮廷にもたらし帰って王に献じ、爾來彼等は宮廷用として王室飼育所で繁殖させられ、性能の優秀な純血種ヤブーとなった。

ヘレン三世が王女クリスチーナの十二歳の誕生祝に、十二分一縮小ヤブー二百匹を「生きた玩具の兵隊」にして「矮人中隊」と名附けて贈物した時も、勿論このサラブレッドを材料にしたのだが、そ

の中隊員中に性能力を維持し続けている者が一匹発見された。突然変異であつたろうが、サラブレッドからこれを生んだのは偶然とは云えまい。これはアダムと名付けられた。

彼は、性能力の続く限り、毎日何回でも雌の縮小ヤブーを相手に子孫を作らされた。彼の相手はイヴ一号とか百号とかイヴ号数で呼ばれたが、イヴ同志は母娘直系が多かつた。つまり彼は変種作出のため、娘、孫娘、曾孫娘等と屢交配を強制されていた訳だ。かくてアダムの後に残された一群の小人族はヤブーの一大変種として公認されたが、これを矮人種と称ぶのはクリスチーナ王女の玩具の兵隊「矮人中隊」に因んだ命名である。

彼等は二十四日で母胎を離れ、一年半で成熟し、六歳まで繁殖し十年で老衰死する。肉体的にはあらゆる点で十二分一になつてゐるが智能その他の精神的能力は普通のヤブーと少しも異ならない。立派な知性動物だ。

矮人種の作出はヤブー文化史に一時期を劃した。始祖アダム・イヴからの系統図が判つてゐる上、世代の交替が早いので遺伝学、優生学、育種学の実験用動物としては最適である。しかも肉体は人体の完全な縮小体である。医学、生理学、病理学でのモルモット代用としても、手軽で、結果が早く出る等、生ヤブーを使うよりずっと便利な点が少くない。……が、歴史的に見れば、一番大きな収穫はその機械工学的利用に在った。読心能矮人は命令脳波エネルギーが少しでも（つまりOQの低い平民でも）動かせる。そこでこれを機械の要処要処に生体家具化して備え附けた完全自動装置が生産（これは平民の仕事である）過程に使用せられることになった。有魂計算器を代表とするいわゆる有魂機械こそは第三次機械自動化による第五次産業革命の基礎となつたものである。巨大なビルのような体積を誇つていた人工頭脳がこれにより一挙に千分の一の大きさになつ

た有様は、二十世紀人の読者に対しては、真空管ラジオがゲルマニウム・トランジスタの使用によって小型化したことに比喻するの
 が一番分り易いであろう。とにかく、矮人種は読心装置と結合することによって、真に革命的な意義を担うことになったのだった。

然し、勿論こればかりではない。一々縮小機に掛けて生産された時代には高価な贅沢品としての「生きた玩具」でしかなかったものが、小人島の大牧場（※）で量産されるようになる
 と、広範な実用的用途が拡げて来た。

（※）註。大気が稀薄な為、人間には住めぬような星でも矮人は呼吸量が少ないので生存できる。そこで、そういう遊星の一つ（リゲル星第六遊星）が矮人飼育用に選ばれ、人間は気密円頂閣に住みながら、外の罅隙内に屋外飼養場を施設して矮人族を収容飼育繁殖させることになった。これが矮人牧場である。
 牧場に事故があつて放牧中の一部矮人が逸出したことが



あり、いつか罅隙外で食を漁りつつ野生化した連中が多数蔓延り住むに至って、小人島の称を生んだ。生態学的研究の宝庫と云われるこの星をイース貴族達は釣堀とも称ぶ。人間の住めぬ大

気層だから気密帽や宇宙服を着けねばならぬ点で海底に潜るに似ているので、野生矮人の捕獲は、^{ハンティング} 獵でなく釣と云われたのである。^{フッシング} 矮人釣りは、貴族以外味えぬ楽しい消閑の一つだった。さてこそクララは貴族に違いないとの信用を勝ち得たのである。

客間でクララが見聞した食卓矮人（薬味サンタはその一種に過ぎない）鳥籠奴隷など、いずれも従来の生体家具では用をなさなかった微小領域を矮人利用化によって新たに活性化したもので、この類の応用は殆んど無限だった。机矮人（1）香水瓶奴隷（2）浴槽矮人（3）靴底矮人（4）肉襠褌（5）……更にソーマの原液を花から集める空中矮人（6）に至っては、従来のヤブーでは考えることもできぬ微小作業を蜜蜂や蝶と同じ様に遂行する。この種の機械と同一化したものも各種存在している。

（註1）机の上に住んで、文房具の運搬と操作とに使役される。

（註2）鏡台の抽斗に住んで香水瓶を背負っており、主人の意に応じて香水を吹き掛ける。

（註3）潜水兜を冠り十二匹一組になって、浴槽に安臥して主人の身体を湯の中に潜って行って洗うのを仕事とする。蛙矮人と云われる。

（註4）血液媒剤によって強度に鉄皮化した上、四肢を切断し、胴体だけにした奴を、足蹠の土踏まずに当る様に横にして靴底に入れたもの。絶間ない圧迫と足蹠の脂を皮膚から吸収する関係で、普通矮人の三分の一の三年位しか平均寿命のない消耗品であるが、使う側から云えば、弾力のある踏心地の好さは格別で、歩き疲れがないし、脂を吸い取らせるので足蹠の美容にも良い。

（註5）diapoo, mens-pigmy のことは第八章註13で触れたか

ら省略する。

（註6）超小型空中車（一般の空中車と異って、廻転翼利用である）に下肢を切断した矮人を生体糊で接着固定したもの。室内でも使用しうる。用途は甚だ広く、花密採集丈でない。

この際、原種ヤブーに比べて矮人の長所だったのは世代交替の早いことから優生交配による品種改良が、急速に行われ得たことである。先刻ウィリアムが賭けた「置物の船」とは、「生きた七福神を載せた宝船」なのである。布袋の大きな腹、福祿寿の長い頭、皆そっくりそのまゝの形で、しかも生きているのだ。すべて育種的に作出した畸形矮人なのである。例えば福祿寿の長い尖がり帽子のような頭部にしても、放射線で突然変異させた畸形矮人中から尖頭児を選んで交配し、変種を確立したものだ。染色体手術法の発明前にこうして原種人からは統々珍奇な変種が作られた。肉体文ではなく、例えば音楽の天才をやはり交配によって純血血統として確立するもの何でもない。この血統の小伶人を特に一年間（人間の十二年にあたる）訓練し、一人前に仕込んでから、超小型ピアノに附属させて自動演奏具の中に仕込んだり、一組にしてトランクに入れ携帯用管弦楽団を作ったりするわけだ。これらは、高級玩具として、先に列記した実用具とは又別に、広い需要をよび起した。玩具だからといって馬鹿にする間違いで、現にトランクの中に住む五十人のどの一人でも、二十世紀の地球世界なら大演奏家として通用するに違いない天才なのだ。楽器は小さくても性能が良いから、そのまゝの形でも二十世紀人の演奏家にひけをとるまい。

音楽に限らず何か特技を持たされた矮人が、このようにどんどん生産される。その特技として武術を選ばされたものが後節に紹介しようとする小決斗士である。決斗士には生ヤブーをそのまゝ転用しうる関係で、畜人決斗は古来からイース人士の愛好する娯楽だ

ったのだが、これが矮人化されたことにより、矮人決斗という極めて手軽な形式で室内遊戯場に持ち込まれるに至り、殊にアングロサクソンの伝統で賭博好きな貴族達は、一寸した賭でも「矮人に決めさせる」ので、短日月の間に広く普及したのであった。ジャンセン家の財力は、屋敷内ばかりでなく、氷河号のような持船の中にまで立派な小決斗士の組物を備えているのである。

この小決斗士を手兵として戦争するのが、先に触れた「神々の競技」である。然し、あまり横道にそれぬ中に、この程度の予備知識で満足して、我々はクララや麟一郎の所に戻ってゆくことにしよう。(※)

(※)註。本節では、極小ヤブーのことに触れなかった。これは智能劣弱化を厭わず縮小した身長五糧半の三十分一物だ。一寸法

師とよばれる上等のものは主人の頭部諸孔の管理が任務で、眼係(睫毛を刈り揃え、目糞をとる)、鼻係(鼻毛を刈り鼻糞をとる)耳係(耳垢をとる)、口係(常務は歯垢の除去。臨時には爪楊子の代りもする)等がある。トンネル虫と呼ばれる下等のは粘液環境内作業を天職とするが、vagina-scraper, glans-knocker, semen-drinker など各種がある。しかし矮人のような生殖繁殖能力がなく一々縮小機で作るのだし、複雑な作業もできぬから文化史的意義では矮人種の重要性に及ぶべくもないのである。麟一郎は摂氏八〇度の熱を満身に受けて焦熱地獄に喘ぎ続けている。クララは彼のその苦悩も知らず、美しいイース貴族等と共に今しも遊戯室へと歩を運ぶところである。二人はこの先どうなっていくのだろうか？

(以下次号)

「お願い」第八章三節から小見出を附することになりましたが、不統一ですから、二月号以前の分につき、各節小見出を次の通り補います。(尙第四章改題)。何卒御訂正下さい。

十二月号	一月号	二月号
第一章 一 ポーリリン・ジャンセン	第四章 (標題を改め) 救援要請	第七章 一 着更
第二章 一 クララと麟一郎	一 自己紹介	二 廢物再生摂食連鎖
二 畸形侏儒	二 有翼四足人哀史	三 肉便器の歴史
二 錯覚	三 天馬ボロとドリス	第八章 一 家畜語Ⅱ日本語
三 世界語	四 八太陽帝国イース	二 ASHICKの諸義
四 読心家具	第五章 一 舌人形の初夜	
	第三章 一 無縫の天衣	
	二 全身麻痺	
	三 畜人大タロ	
	四 狩猟犬訓練	
	五 肉足台の使用	
	第六章 一 白色唇人形	
	二 女王への土産	
	三 約束	
	四 接吻	
	二 半人間の奴隷と知性ある家畜	
	三 畜人論の成立と意義	

刺青の朝

鳴山能平・作

文化十年、弥生の空は拭った様な濃藍一色
夜空にきらめく星もなまめいて見えていた。

今しも京橋槍屋町の人絶えた路を、ほろ酔
い気嫌で踏んでいるのは、筆屋清長である。

清長の名は此処四五年前より江戸一番の刺青
師として西は大阪、北は蝦夷松前までも名が
通っていた。華美を競う鳶の者や遊び人ばか
りではなく、何処そこの旦那衆といわれる人
でさえ、清長の刺青には魂が籠っているとい
って、二の腕へ彫るちよいとしたいたずらに
も、高い金を払ってわざわざ清長へ頼む始末
であったので、自然と金廻りも良くなり、妻
子のない独身者の気楽さから、使う時は派手
に使うので、芸人、職人仲間からも御大尽と
立てられていた。

その清長が、自分の家の前で急に酔が出た
ものか、駕籠一挺を従えた男にどんとぶつか

った。そこは酔った勢い、何だかんだ三分の
理窟を言い合っている中に、見廻りの町方役
人の提灯が見えると、その男と駕籠かきは逃
げるように姿を消してしまった。不思議に思
った清長が駕籠の垂をめぐって見ると、こわ
如何に、後手にひしひしと縛られた上、手拭
のむごい猿轡の女が身を跳いていたではない
か。

その夜は、行き懸り上、役人にも一言断つ
て家へその女を泊めた清長は、朝、その女の
類稀な美しさに眼を見張ったが、それ以上に
清長を緊張させ、あっと叫んで身内の顫えさ
え覚えたのは、女の唇が綻びて、自分の身体
に刺青をして欲しいと言った時だった。
「冗談じゃねえ、聞けば堅気の娘御が、死ぬ
程痛えおもいをして一旦身体へ疵をつけてし

まったらもう泣いても喚いても、とれるもん
じやアねえからの。」
と清長は、まだ軽い微笑を浮べて娘に対す
る余裕があった。

「はい。」と娘は頷いたが、次の瞬間、その眼
は覚悟に輝いていた。見ると白魚の手が往来
して、娘の帯がきゅッと鳴って艶やかに、床
の間の桜が一輪散る間、とめる暇もあらばこ
そ、朝の光に、統の様な娘の玉の肌が清く浮
き出したのである。触れれば指が滑り落ちる
程に張り切った乳房から一度流れた起伏の線
は腹部から腰へ、股から脛へとやわらかに投
げているではないか。

あまりにも突飛な娘の行動ではあったが、
清長の視線は、咲き誇る李の花弁を、下から
静かに撫で上げた様な乳房に、白い肢体に吸
着けられてしまった。

「ううむ俺の覚悟は決った。然し、その前に
あんたの気持をきいて置こう。」

「昨夜の様に、親方さんに助けられたからよ
いものの、いつ何時、女一つのか弱い身で、
変った事が起るかも知れませぬ。たとえどの
様な事が起っても、私の身体は一人の恋しい
男に捧げたもの。その男の名前を肌にはりと
う御座います。」

「その愛しい人の名と、彫る場所は？」

「はい新二郎命と、此の太ももへ。」

「新二郎か、果報者よ。選りに選って太もも

へ彫るとは。清長の針は痛えことにかけちや江戸に二つとねえ代物だよ。その辛抱が出来るかね。これぼつちも音を上げちや、針が狂いますぜ。」

娘は領ずいて、我と我が口へ猿轡を噛ませると、木馬の上へ、またがったのである。此の娘は、どうして此の木馬の使用法を知っているのだろうか。そんな詮索より、猛然と湧き起る仕事への情熱が先であった。

洗い晒しの白布へ、焼酎を浸して、二三度娘の肌を擦った清長は、手を触れば、そのまま手の形が附きはすまいかと、怪しまれる迄に透きとおった真白の肌を、眼そのものが吸われる様な心地に我を忘れて居ったが、これではならないと思ひ直して、

「このももに新二郎命か。自慢じやねえが、江戸一番と人もゆるし、おのれも自惚れている清長だ。まして、こんな美しい肌へ拙い物が彫れる筈はねえ。安心しているがいい。乙女の願いを神かけて、人の力の及ばぬ奥の、



奥の奥迄も表わしてやるぜ。その代り人一倍痛えからの。そうだ、猿轡だけじゃ、小一つ時、とても辛抱出来るものでねえ、手をこうして縛って置くぜ。」

と、二の腕迄も後手に縛り上げ、創造の興奮に、歓喜した清長が、今、娘の肌へ、一針おろそうとした、その時だった。

「御免なせえ。」

と伝法口調の勇ましいのが、ずかずかと、案内なしで上ってきたのである。

「何、何を、無礼な、人の家に無断で上ってくるとはさあ、出ていって貰いましょう。」

清長は赫つとなった。製作への感興が壊された事は、彼にとって何よりの不快事である。

「やかましいやい。べら棒め、何が無礼だ、盗人たけだけしいとは手前の事だ。おう、何の恨みがあつて、人の女房をふん縛って、なぐさみ者にしやがるんだ。」

「えっ、女、女房ですって、あの娘が?。」

「そうよ、昨晚、どこかの悪党に拐かされて大騒ぎをしていたんだが、まさか江戸一番の彫物師、清長の家に裸にされていようとは思わなかったよ。」

「ま、まって下され。すると貴方は、新二郎殿か。」

「おや、抜けく〜と此の亭主の名前まで知つてやがる、さあ、此の野郎、俺の女房をどう

してくれる。もう勘弁ならねえ、江戸一番の名声ある筆屋清長を相手どって恐れ乍らと、お白州迄訴え出ようじゃねえか。」

「いや、それは違う、何だか話が少しからまって来た。あの娘は、自分で進んで、わしに刺青を頼んだので、わしは何にも……。」

「うそをつきやがれ、此の色魔野郎、鬼の様な男でも、思わず痛えど口走る刺青を、何で女が進んで、親にもらった大事な身体へ、取返しの付かねえ事をするものか。」

「いや、いや、うそでは御座らぬ、然らば、あの娘へ聞いて見ればしかと判る筈じゃ。」

「あの娘、娘って、おう！ あの女は俺の女房のお蘭てえんだ。たとえ猿轡をしていても、あの眼付は、女房のものと、通りがかりの表から、ちらっと見ただけでも判ったんだ。」

つかつかと木馬の傍へより、

「可哀想に、ひでえ目に……。」

と自ら、縛しめ、猿轡をとく、とたん

「お前さん、口、口惜しいよ、すんでのところで、此の男に無理無体、刺青を身体にほられて汚される所……。」

とすがりつくのを、

「良いから、ほれ先ず着物を着ねえ、三月弥生とは言え、風邪を引いちや、いけねえ。」

「あいよ。」

さも羞かしそうに、さっきは大胆に脱ぎ捨てた腰のものを、長襦袢を身にまとう。

清長、暫くあつ氣にとられていたが、やがて蒼白になり全身を細く震わした。

昨夜突き当った駕籠の脇の男は、正しく此の若者である。

夫婦で組んだ美人局。まんまと一ぱい食ったのである。

やがて陽が、八百八町をかなり上空から照らす頃、清長の家を出た一組の男女は、びつたりとより添うて足取りも軽く、言葉もはらずにいた。

「お蘭。」

「あい。」

「お前が諸肌ぬいで木馬にまたがった時は、亭主の俺も迷ったぜ！」

「あら、うまい事、でも、小判で百両ありや、当分二人の世界だわね。」

「お前と二人の娑婆だとなりやア、地獄も浮世もありやしない。しつぽりと濡れて太く短く。」

「ほんに、どうせ此の世は一度きり、化けて暮すも一生なら、我が身に返って思う存分、お前さんに、今度は本気でいじめられて見度いのさ。」

その頃、清長はゆすりとられた百両よりも、あのあでやかな肌の色を、陽の光に映えた、陽春の空気の中に悩ましく忍んでいるのであった。

(おわり)

山口幸一先生

奇クという聖福音書にも比すべき雑誌のおかけをもって、先生のような救世主にめぐりあえたよろこびを、どうか御推察下さい。

先生の文章を掲げられた号を読み初めまして、一週間がほどはもう夢うつつの有様で、

することなすこと何一つと手につきません。

思えば思えば罪な予言者です。先生というお方は。禪美への妄執を忘れようと死物狂いの努力を続ける私に、先生はこれでもか、これでもかとばかりに、それへの憧憬をあふり立て燃え上らさせるのです。はつきり申しま

す。私は片腕一本を十九の年に事故で失った世に醜悪なる不具者であります。禪美享樂の主体たり、客体たる適格を後天的に喪失した男なのです。考えても見て下さい。ギリシヤ彫刻なら知らぬこと、やせこけた隻腕の三十男が、六尺ふんどしを締めて夜更の街を彷徨

するそのグロテスクな
さまを。

たださえ人眼憚かる
趣味は、これあるがた
めに、更に一層高嶺の
花と諦めねばならぬ、
この苦衷、かかる私に、
先生はまたまた、強烈

な打撃をお加えになりました。それは十二月
号所載の御文章「少年期」です。遅ればせな
がら、あの号を開いてみた時、私は息がとま
るほどの衝撃を感じ、しばし化石の如く立ち
すくんでいた程です。特に、あのふんどしを
締めあげた二人の少年が、土俵から真逆さま
に顛倒するときの緊迫した描写は、ヘミング
ウェイやカミュの乾いた文体を偲ばせまし
た。あの一文が、今に「若きヴェルテルの悩
み」の大書簡小説にまで発展完結する日を、
楽しみに待っている次第です。

その外、読者通信の谷津様以下多数の六尺
ふんどし愛好者の熱と真心のこもった名文を
読むにつけ、こういった方々と晴れて、ふん
どし姿の対面のならぬわびしさを、如何にし
て慰めればよいのでしょうか。悶々の情、お
察し下さい。

私は、現在晩学ながら、東京のCH大学に
籍を置き、はかばかしからぬ勉学を続けてお
ります。山口先生には、どうやら関西方面に

禪 美 悲 願

加 藤 千 春

お住いの様子、お目もじの上、苦しい胸の中
を打ち明ける機会のないことを、まことに残
念に思います。もし先生のお手もとに東京方
面在住のふんどしファンで、自分の住所を告
げても構わぬという篤志家がいらつしやいま
したら、この迷える仔羊を救済のため、その
方々の御住所をお知らせ下さいますなら幸い
です。せめても同好の士と文通を交すことに
よって、この喝きをいやすことができればと
世にもいじらしいことを考えているのです。
敢て奇ク誌上を拝借して先生に懇願する次第
です。何卒よろしくお願い致します。

話は変わりますが、今、私は一つの楽しみが
ございます。東京では、毎年正月、恒例の寒
中水泳が催されますが、特に盛大なのは、江
戸川区及び葛飾区主催のそれです。今年もそ
れが近くなり、今から胸をわくわくさせなが
ら待ちわびております。といいますのは、こ
の寒中水泳では、禪姿の青年が出場者の中に
必ず何人かまじっているからです。概して水

泳パンツなどの中性的スタイルの多い中で、
赤ふんをキリリと締め上げたアニ風の男な
ど、ひととき目に立つ存在です。そういった
いなせな青年が跳び込みのため、小松川橋の
上にすつくと立つた雄姿は、老若男女すべて
の観衆の眼を奪わずには置きません。Tの字
型に尻たぼへ喰い込んだ赤ふんどしが、異常
なまでにどぎつく且つはあざやかです。

こういった日本人としての気骨を失わぬ人
たちが、だんだんと少なくなってゆく現在、身
体を張って禪美宣伝につとめてくれる若干の
若者に、私はいつものことながら深い感謝を
捧げるのです。このような会の益々盛んに催
されんことを希望いたします。それから、一
月号の「六尺ふんどし愛用生」氏の「ふんど
し会」結成の御趣旨は、同じ星の下に生れ合
わせた者の一人として、心から賛同します。
結成のあかつきは、私の特殊事情を御賢察の
上、会員の末席を汚させていただければ幸甚
に存じます。

以上、牛のよだれか、長崎の長ふんどしの
如き、起承転結を心得えぬ駄文を草し、御多
忙中の先生をお悩ませしたその罪、正に死に
値します。平に御容赦下さい。

先生の御健康、ならびに世のふんどし愛好
家の皆々様の壮図を祝しつつ。



ある女給の体験 (2)

日下絹子

私はお店の二階で光夫さんにひどい目に合
つてから、もうお店へ出る元気がなくなりま
した。それでも何かお店から云つて来はしな
いかと心配したり、また今ごろはお店で光夫
さんが私の事を店の人たちに喋っているの
はないかと想像したりして不安で少しも落着
いておられず、身も世もあらぬ思いでした。
しかし三日、四日と経つにつれ何の異状も起
らないと知りほっと安心しました。

でも私の給料がはいらなくなると一家三人
は食べて行けなくなります。五日目に職業安
定所へ行って頼んでみますと係の人はいろい
ろカードを調べて下さいましたが、なかなか
好い所はなく、自分で就職口を探すといつて

も知人やツテのない私にはどうしていいのかわかりませんでした。化粧品や品物の外交の口がありました。人の御機嫌を取って、商品売り捌くといったようなことは、何だか恥かしくて私にはとても出来そうにありません。とうとう思い切つて新聞広告をたよりに麗人募集とあったKサロンを尋ねて見ました。

出て来たボーイさんに、来意をつけると支配人室に案内されいろいろお話を聞く事が出来ました。勤務時間は夕方五時から十一時半まで、固定給は一日二百五十円、お客様の御指名があれば指名料四百円をお店と折半して二百円の払い戻しが受けられる仕組、ですから

月に二十日位くとしても固定給五千円と最低十回くらいは御指名があると両方で合計七千円、売れっ子の人は月三万円は軽いとお話でした。そんなに頂けなくともせめて一万円もあればと思ひ大分気が動きました。しばらく待っていると、かおりさんというこのお店の一番古い女給さんに紹介されました。かおりさんは三十五六くらいかと思われましたが、和服のよく似合う大柄のきれいな方で、半年や一年で姿を消す人の多い戦後の女給さんとは違いこのお店ではただ一人の戦前派で支配人さんも一目置いていらつしやる事が後でわかりました。かおりさんに聞かれるまま身上話をいたしますとすっかり同情され、

「あなたなら、このナンバーワンになれるわよ、何も心配いらない、困ったことがあったらなんでも相談にいらっしやい」

と親切にされ着るものもない私は、同じ様な体格だからとドレスまで借りる事になりました。

いよいよきょうから新しい職場へ勤めるのだとちよつと緊張し、早めにお店に行きました。もうマネージャーは来ていて、お店の掃除をしているボーイさん達の監督をしています。したが、私を見て自分の室に呼び入れました。そこでお客にはいつも笑顔で接すること、お客と一緒に坐わる時は横に体をふれる様にして着席すること、借金や家庭のことなどの話題をつとめてさける様になど女給としての基礎心得を聞かされました。

そのうち次々と女給さんが出勤して来ました。私はかおりさんの後について更衣室で皆に紹介してもらいました。さゆりさん、みのりさん、龍子さん、ひとみさん、しのぶさん、みさおさん、ゆかりさんとよく似た名前でも一度や二度では憶えられません。私は今日からあけみとなりました。

ドアがさつと開いてボーイさん達が最敬礼するうちボツボツお客さんが来始めました。お店の中はまん中が少しホールになり周囲に多人数用、五六人用、三人用、さし向いなど大小十数の部屋にくぎつてあります。ボーイ

さんがそれぞれに案内してから女給を呼びに参ります。私は少々上り気味で、はきなれない高いカガトのサンダルでよろめきながらかおりさんのおしりにくつついて歩きました。それでもお店が閉る頃になるとすっかり疲れ終電に急ぐ足がガタガタして自分のものではない様な気がしました。駅までよく妹が迎えに出ていましたが、夜更けた街を二人でコツコツ足音を合せながら帰り道にフツと無精になしなくなるがありました。

お店は薄暗い青い照明で全体が深い海の底の様に感ぜられ、私達は海中を泳ぐ人魚の様で、四五日は全く足が地につかない感じでした。だが、だんだん周囲がわかつてくるにつれ、表面の華やかさとは対照的に裏面では生きんがためにはげしい競走が行われているのを知りました。女給のうちには会社の事務員や幼稚園の保母さんとしてほかに職を持っている人もあり、またしのぶさんや龍子さんの様に最近ほかの店から来た人もあります。この人達はすっかり女給稼業が板についている感じで、お客とのお話を傍で聞いていると言葉や身体からキビキビした弾力を感じ私などやって行けるかしらと不安になります。また新しい人も古い人もそれぞれかなりの馴染のお客をもっています。自分を指名してくれるお客が少いどうしても肩身が狭く、私も早くお客を掴まねばとあせります。それより衣裳を

整えねばなりません。このお店は年増の人が多く半数は和服ですが若いひとみさんや、久美さんなど昼会社に勤めている人は、そのまの服装で押し通している人もありました。

私も当座のしのぎにユカタとドレスを一着つくりました。涼しくなるまでにお金をためて、とはかないプランを立てました。

最初男の人から腰のあたりに手を触れられるのが気持が悪く、じつと横を向いてこらえていた私も、そのうち陽気なバンドに警戒心が麻痺したのか、それとも私が生来浮気っぽく出来ていたのか、お客に手を廻して抱きつかれても何ともなくなり、時には自分の方からお客の膝に腰を下す様にもなりました。

やがて私は市内にアパートを探して住むことにしました。ほとんど外食しますので食事代もかさみ、その上、衣裳に追われて、いつの間にか私もほかの女給さんと同様、お金に關しては血眼になりました。

その間わずか一カ月程に十四貫近くあった私の体重は十二貫少しにまでやせました。お酒飲みの御機嫌を取るのに、いつも気を張っていないければならないからです。

かおりさんはお店でもやはり指名が一番多く、しかも大会社や銀行の重役さん、映画や劇団の方が多く、話を聞いていても大変センスがありました。なじみになってくると大抵お店へのツケにされますし、お客の借金は係

りの女給の責任ですから同じ社用族でも大きい会社程あとが楽でした。中には遊んで飲んだ上に会社からピンをはねるチャッカリやさんもありました。

私達の間にも目に見えないお客の争奪戦を演じています。たとえ昨日まで自分のお客でも、お金ばなれのよい人はすぐ同僚から狙われます。もちろんほかのお店には絶対取られたくありません。そのためお客からの呼び出しにも勇気を出して応じなければなりません。お客がサロンの女給を呼び出すのは、よからぬことをするのに定まっているようでした。

中にはしのぶさんのお客で、いつも三人連れでくる若い自動車ブローカーがありました。が、アメリカ兵から直接自家用車を買って日本人に転売し、しかも税金がかかりませんので大層景気がいいらしく気前よく札びらを切ってお店に取っては第一級のお客であり、私達もよく試運転ナンバーのついた車にのせてもらって深夜の郊外をドライブさして貰ったことがありました。が、しばらくして自動車サギで警察に捕った記事が新聞に載っていました。

「ああアいやになっちやうな」二三日気が抜けた様に元気がなかったしのぶさんの気持がよくわかりました。お店の女給さんは殆んど関西の人ですが、皆つとめて東京弁を話しま

すので関西弁のニガ手な私には好都合でした。

きつとその人はしのぶさんのパトロンだったのでしょうか。どんなに多くのお客を持っていたても余程チャッカリしてないとお金なんかは残りませんし、未亡人や私の様に家族を養わねばならない人は、どうしてもパトロンが必要になります。といって僅かばかりのお金で二号さんの様な束縛された生活は絶対いやですから次々とパトロンを変える人が多いのです。クリスマスだ、新年だ、節分だ、カーニバルだとその度にお店からカードを割りあてられ、これをさばくのに一苦労しますが、パトロンがいればずい分楽です。でも私自身はいまの言葉でいうウェットの方で簡単にパトロンを掴むなんてことはとても出来ませんし、若しそんな人が出来れば身も心も捧げてしまう方ですから、とても商売にはなりません。たとえ水商売であってもそのうちに足を洗って、サロンなどに出入りしない尊敬出来る男の人と結婚したいとはかない望みを持ち続けていました。

丁度五月の初めだったと思います。お客様が来た事をボーイさんに告げられ、何気なくボックスにはいつてハッとなりました。あの服飾店の光夫さんが、ちよつとハニカム様にボックスに坐っていました。一時はあんなひど

い方はないとうらんでいましたが、やはり光夫さんは私にとっては最初の男だったのです。複雑な気持を押えてもう度胸を据えておビールをすすめました。土地の夕刊新聞にプロ女性の横顔という連載記事として市内のキヤバレーやサロンの女給の話がのりましたがその時私もかおりさんやほか二三人とともに小さな写真入りで趣味や希望が書かれたためどうもそのあけみというのが私らしいというのでやって来たとの事です。私は光夫さんの顔を見るのがきまり悪い様な思いましたし、彼もあまり飲めないらしくコップのビールをもて余し気味でした。

服飾店の方が最近隣りの市に支店を出し、目の廻る程いそがしい、というような話でした。

「また来るよ」

といってチップを奮発して帰りましたが、次の日は私からお願ひしてアパートまで送ってもらいました。オースチンとか云う小型の自家用車を器用に運転している横顔は以前よりずっと威厳がある様に見えました。

このアパートは、大半が夜の勤めの人占め女給専用の様で隣の事には無関心なのが何よりです。

ある晴れた日、かねて彼に誘われて約束していたドライブに出かけました。魔法ビンにコーヒーをつめ、サンドイッチをバスケット

に入れすっかり仕度が出来た頃、彼の車がやってきました。東海道を走っているのだそうですが滋賀県の草津町をすぎた頃から、それまですばらしい舗装道路だったのですがすっかり道が悪くなり、トラックがすれ違うたびにヒヤヒヤしながら、更に東から南に方向を転じて走りつづけ鈴鹿峠にさしかかりました。

その麓にすばらしいつつじの名所がありました。すこし時季が遅かった様ですが、それでもなだらかな丘陵一帯が何百本とも知れないつつじに蔽われているのです。私達は茶店でお菓子を買いゴザを借りてどんどん奥へ進みました。どこかで団体客が騒いでいるらしく、大勢の声で炭坑節が聞えて来ましたが、ちようど背丈ほどのつつじがおいしげって、人間はすっぽりつまれてしましますので、どこに在るのかわかりません。花の中に適当な場所を選んでゴザを敷き、はしやぎながら、さんざん食べ散らかし二人とも少し疲れて来しました。五月の陽の下でゴザの上に寝ころがり両手足をのびして背のびしますと、あたり一面むせる様な緑のカーテンに次第に甘酸っぱい思いに浸っていました。その時、彼が私の方へ静かに寄り添って来しました。

今まで心の隅にあった彼へのシコリがいつの間にかなくなりムンムンする草いきれと彼の言葉が私の耳をくすぐり心をゆすりまし

た。私は何のためらいもなく彼の胸の中に顔をうめしました。

太陽が大分西に廻り、もう帰らなければと思ひながら立去るのが名残り惜しい気がします。私が腹ばいになってタバコを喫っていましたと彼は私の膝を枕がわりにして寝そべっていました。急に上体を起し、

「絹子、そのうちにおやじを説き伏せるよ」と云うなりもう一度勢いよく私のお尻の上に頭をのせました。

もし光夫さんと結婚出来れば、もう経済的な苦勞とは永久にお別れになるでしょう。私からお願ひすれば妹の学資も出してもらえなくても知れない、この好運を逃がしたくないと心に決め、あれこれ未来の夢を追っていると彼が自分の頭の下に両手を敷きましたので、お尻のあたりがくすぐったくて反射的に寝返りをうったとたん、彼の頭がドスンと下に落ちました。

「ごめんなさい」

と詫びると一緒にあわてて立上りますと彼も起上って頭を落した罰に私の臀部を一つぶってから二人とも茶店の方に歩き出しました。

あまりお酒が好きでない彼に、私は無理にお店に来てもらいたくありませんでした。それで時々午後や夕方に電話で連絡して待合せ

しました。その為私はお店を休みがちになりましたが、お店に出た夜はよく看板時になると車でお店の前に待っていて呉れて、一緒にアパートに帰りました。

以前私が服飾店に働いていた頃から光夫さんには何か冷たい近寄り難い感じを持っていた。こんな職業に飛び込んで「もう男なんか」とタカをくくっていた私も再び彼の前に出ると少し身のすくむ思いでした。お店に来る男たちはすぐ悪ふざけをしたり、誘ったり致しますが、大抵は二三回付き合えば気軽にサッパリした人が多く気易さを覚えます。こちらも冗談をいったり時にはからかったりしますが、彼の前では冗談が云えなくなってしまう。

と云って例えば映画なんかでも特別むつかしいのを見るという程ではなくよく時代劇も一緒に見ましたが、話をすると何んでも知っていてどこまで知識があるのか見当がつかない事があります。その上私の経歴やあの恥かしい事件など何んでも彼には知られているし一度肌を許すともう絶対に頭が上りません。それだけに彼と一緒にいるとどうしても気づかれしました。

そのうち彼は度々アパートに泊って行く様になりました。

ある日、朝早く管理人の所に彼から電話があり、頼みがあるから至急うちまで来てほし

いと云われ、朝から呼び出しなんて珍らしい
と思ひながら出かけました。彼の話と云うの
はきよう同業者の方の定期会合がお花の学校
を借りて開かれるそうで、その席でこれから
の仕入や販売のため服装やアクセサリーの流
行の研究や紹介に各店主が若い女性のモデル
一名を連れて行く事になっており、彼が頼ん
で置いた親戚の娘さんが急に都合が悪くなっ
たので私に頼むのだそうです。

そんな経験もない、しかも心臓のよわい私
なんか、とても駄目と一旦は断りましたが、
普通のファッション・ショウではなく、ちょ
っと身につけるだけでモデルも皆素人だとの
事で仕方なくついて行きました。会場では二
三十人の専門店の主人や店員さんがそれも殆
んど男の方ばかりで、商店連合会から派遣さ
れたデザイナーから今年の秋の流行の話があ
った後、ある織物会社の専属のモデルさんが
会社の製品のナイロン製肌着をつけて出まし
たが、私達はレースの手袋だの、ネックレス
やブローチや色んな型の帽子を交替でつける
だけ、もちろんピアノの伴奏もありませんで
した。

帰りは二人であちこち寄り道しましたので
服飾店に帰った時は隣分おそくなっていまし
た。店員さん達が帰った後、彼は上気嫌で、
「本職のモデルより君の方がスタイルがよか
った」とおだてます。私は女学校時代、背が

ひよろ長く「もやし」というニックネームを
付けられ、ブルマ姿になるのに劣等感を感じ
ましたが、いまはすこし肉がついてスタイル
に自信がありました。

「でも歩き方がわからないから駄目だわ」と
いいますと「これから少しずつ練習しろよ」
と云い、早速やって見る事になり、体の線が
見える様にと、ブラウスとスカートをぬぎ、
ゴムのコルセットも取って、パンティとブラ
ジャーとストッキングだけになりました。彼
は部厚い本を二冊私の頭の上にのせました。
それを落さない様に歩くのです。五六歩進ん
だ頃に上の本がズルズルと滑って目の前に落
ちて来ました。も一度やり直しましたが本が
前の方にずり落ちる様な気がして両手を少し
上げて平均を取り、へっぴり腰で進みますが、
どうしても五六歩以上進む事が出来ません。

後で見えていた彼は私がもうあきらめたので
「今度はもっとやさしい運動を」と奥へ行っ
ていろいろ道具をもつて来ました。新しいハ
イフラットのサンダルを取り出して私にはか
せ、陳列してあったレースの手袋をさせ布製
の紐を出して私の両手首を背中逆X型に組
合せて縛りました。こわくなって「どうする
の？」とききますと、こうしておいて体が左
右に揺れない様に歩くのだというのです。

彼が縄尻を握って「さあ歩いて」というの
で前進しましたが手が後に行っているのだと

うしても足と一緒に胴体がゆれてしまいま
す。

「だめだなア」彼はがっかりした様に嘆息
をつくとき長さ一尺五寸、幅一寸ばかりの薄い
板片をもって私のお尻をぶちました。

「ひやあー」と悲鳴を上げて逃げましたが板
片は障子か何かのサンらしく薄っぺらくてし
かも軽いので少しも痛くありませんが

「ばちんッ!」とお尻で大きな音がするのが
恥かしく、歩く練習も忘れて逃げ廻りました
が縄尻を掴まれているのですぐ引きもどされ
さんざん引っぱたかれました。

やっと縄を解いてもらった頃、ぶたれた臀
部のあたりがタキ火にあたった様にあったか
くなり、間もなくたまらなくむず痒くなって
来て、ボリボリ掻かねばなりませんでした。

その頃よくお店に来るお客で数軒のバーや
喫茶を経営している人が、当時はやり出した
ヌード喫茶をやり出したので私に来て仿いて
くれないかと誘いました。固定給を三万円出
すと云われて随分まよいました。しかしその
人が以前私にしっこくつきまわった事や数人
の妾をもっている事を聞いていますのでフン
切りがつかない状態でした。それにあまり店
を変ったりしたら光夫さんが変に思うと心配
でしたのでしばらく考えさせてもらう事にし
ました。その光夫さんから呼び出しのあった

日、かねて、欲しい欲しいと思っていた支那服が出来て来ました。私の体には特別よく似合う自信がありました。

いつもの様に映画を見て彼の家へ伺いました。閑静な高級住宅街の中の生垣にかこまれた大きなお家でした。私の記憶にかすかに残っている幼い頃すごした東京の家がこんなでした。戦争さえなかったらとフト思いました。彼の両親は二三日前から問屋の招待で北海道旅行に出かけ、家には二人の女中さんだけでした。

お菓子やコーヒーを御馳走になり、電蓄をかけて畳の上でダンスをしました。

彼がソファにかけた折に私は彼の膝の上に腰を下しました。彼は私を抱き上げてびったりに肌に密着した服の上から、まるでムキ出しのお尻をビシヤ、ビシヤたたきました。

「どうして、そんなに尻ばかり叩くの」というと女はお尻の温度で性質がわかるといいます。そして「お前は冷血だよ」といいますので「そんなことないわ」と自分のお尻に手をやると、なるほど私のお尻は冷たい感じでした。とうとう私は冷血という事になってしまいました。

彼は私を膝から下すと、

「くくっしてしまうぞ」と麻縄を取り出しました。又、しばられるのかと思うと、以前、女学校のと看時間がきているのに試験問題が解

本誌の旧号（復刊号）の在庫

復刊第1号（30年10月号）二百円（送16）
 復刊第2号（30年11月号）二百円（送16）
 復刊第3号（31年4月号）二百円（送16）
 復刊第4号（31年5月号）二百円（送8）
 復刊第5号（31年6月号）二百円（送8）
 復刊第6号（31年7月号）二百円（送8）
 復刊第7号（31年8月号）二百円（送8）
 復刊第8号（31年9月号）二百円（送8）
 復刊第9号（31年10月号）二百円（送8）

けず、思わずお小水をもらしそうな変な気持ちに襲われたと同様の気持ちで体に縄がかけられるのを感じていました。

お腹にも一まきされて、「さあ立って」と縄尻を引かれ、血が上って耳まで真赤になって立上りました。

その途端急に縄尻を引かれて、よろめきやつと立直るとまた引かれますので私は強く引かれても後に倒れない様、かがみこんで、車でも引いている様な姿になりました。どこで引っかけたのか片方のストッキングが十センチばかりデンセンにかかっているのを見て、取っておきのフルフアッションだけに一層悲しくなりました。彼が片手にスリッパを持っているのを見てぶたれると思ってお尻をすばめました。

復刊第10号（31年12月号）二百円（送8）
 復刊第11号（32年1月号）二百円（送8）
 復刊第12号（32年2月号）二百円（送8）
 ○以上の通り復刊号は各月号共若干保有しておられますから御入用の方はお申込み下さい。三冊以上まとめてお申込の節は送料は当方にて負担いたします。
 ○休刊前の旧号は29年8月号より30年5月特大号までは、各月号若干残部がありますから売切れにならない中、お早くお申込み願います。

それから私の臀部にはあられもないバツが加えられたのでした。

（未完）

女体切腹構成案図譜

中康弘通氏案

北原純子女史画

キヤビネ版印画紙密着焼付

八枚一組千円（送共）

時代物

現代物

(一) 女武者の最期

(四) 女剣士の腹切

(二) 腰元の自害

(六) 女剣士の切腹

(三) 遊女の自決

(七) オフィスガール

(四) 武家の姉妹

(八) 農家の娘

（詳細解説は本誌、九月号、並に十月号にあり）



(研究発表)

相 撲 美 論

— 禪 を 中 心 に —

東

郎

醜悪なるものが、むしろ美しいと感ずる場合がまゝある。その典型的なものが「相撲」ではないだろうか。彼等は極端に云ってしまえば片端の集りで、従ってノーマルな人達から見れば、変型的な体軀の持主であり、変則な社会生活を営んでいる。此の世界に封建色が相当に濃いのもその故であろう。

しかし私達が相撲を観ている場合、彼等が片端であると云うことを忘れる程、逆に美しいと感ずるのは、もちろんその堂々たる体軀にも依るだろうが、彼等が締めているマワシに魅力をはくからではないだろうか。

もう大分旧聞に属するが、二十九年一月二十五日附の読売新聞文化欄に、草野心平氏が「今の力士、昔の力士」と云うテーマの元に興味ある記事を書いておられたので、その一節を引用して見たい。

観客はみんなオーバーやコートにくるまっ
ているのに、土俵際ではチヨンマゲをのっけ
た裸が、ほてったような色つやをしてならん
でいる。相撲とりは裸だという概念はあるの
だが、それにしてもこれはなんという化けも
のだろう。

この化けものの感じは不動岩が土俵に現わ
れていよいよはつきりした。するとだんだん
どの相撲もグロテスクに見えてきた。

けれども十両後半の取組をみているうちに
化けものぶりになれてきた。すると今度は逆
に、われわれ観客の方が変に思えてきた。

われ／＼がパンツ一枚の裸になって土俵の
上でシコをふんだら、どんなものだろう。

その方が、どうやら、もっとグロテスクだ
ろう、などと思っていると、現在土俵でたた
かっている連中のフォームが美しいものに見
えてきた。

私は彼等のフォームが美しいものに見えて
きた原因として、マワシを挙げたい。が、又
反面マワシの締め方がゆるい問題になって
来る。

三十年一月二十一日附朝日新聞「きのうき
よう欄」に門田勲氏が「ユルフィン」と題して
取り上げている。

聞くともなしに聞こえた大相撲初場所の実
況放送で、もとの天龍が解説をしていたが、
いまの相撲のマワシのしめ方を慨嘆していた
のが、相撲の格別の興味のない人間にも面白
かった。

しめ込みも以前は字の通りのしめ込みで、
しつかりとしめていたものだが、このせつは
ただグルグルと巻きつけただけ、というのが
あるそうだ。手を掛けて引っ張れば、ズルズ

ルと胸の辺までズリ上ってしまつて、相手が力の入れ様がなくなる仕掛けらしい。

キンコン一番などというよりも、ユルフンの方が身の安全となると、なるほどこいつは当世かもしれぬ。

全くユルフン問題は困つたものである。何とも事実であるから致し方ないとしても、今少し男らしい勝負を望みたい。

× × ×
相撲のいでたちについて、三十一年六月十六日附毎日新聞ポスト欄に詳細に書かれてあつた話題を取上げることとする。

相撲の開祖、野見スクネと当麻ケハヤとは衣服を着てクツをはいたまま相撲している絵を見ますが、裸でシメコミをした相撲はいつごろからですか。(仙台市、山岸卓治)

日本書紀の十一代垂仁天皇紀を見るとスクネもケハヤも衣服を着てクツをはいたまゝで、二人相対しておのおの足を上げてけ合い、スクネ、ケハヤの脇骨をけ折り、その腰をふみ折りて殺す」と明記し、いまでも残る蒙古相撲によく似たケリ合いのたたかいで、今日の相撲とはまったく違います。

いまの相撲と同じものと思われるのは二十一代雄略天皇紀に「宮中の采女(うねめ)諸国から集めた女官」を裸体にし、トクビコン

(しめこみ)をしめて相撲を取らせた」とあるのが最初の歴史で、三十五代皇極天皇紀(六四二)に「諸国の健児に相撲を命ず」とあるのが男子相撲の最初と思われます。

此処に相撲の歴史について検討することもあながち無駄ではあるまい。女子相撲の最初等は興味深いことと思われる。

マワシそのものについての定義も引用して見たい。此れは雑誌「相撲」増刊、相撲通になるまで、昭和二十八年版に依つて見ることにする。

△ 褌 (まわし、締めこみ) V

相撲風俗のうち、第一に取上げるべきは、土俵を戦場とする力士にとって、はだか一貫威風堂々たる勇姿を一そうとよめる要具に褌がある。重々しくかきりと、力士の腰に七重八重巻く褌は、紫繻子のつやつやしい色が照り映えて力士の形貌をなお逞しく見せるのである。

褌のことを今は「締めこみ」といふ、「まわし」とも称し、「みつ」ともいっている。

—— (中略) ——

すはだかにまとう唯一のまわしの役目は、まことに重要であり、たくさん意味をもっている。第一にはいうまでもなく自分の急所を隠し、かつ保護するばかりでなく、動物本

能からいっても裸身の弱味を感じる心理を、腰に固く頑丈に結ぶまわしによって毅然と斗志を湧かす拠りどころにもなるわけである。そして相手方も自分も戦う上にたゞ一つといつてよい手掛かりになる。

—— (後略) ——

△ 化粧褌 (化粧廻し) V

土俵入の時に用いる化粧廻しは今から二百年前の徳川時代の中頃、正徳、享保の頃「紀州まわし」というのができて、取りまわしと化粧廻しの区別ができたといわれている。

—— (中略) ——

人気力士ほど化粧廻しの数が多いのは、むかしも今もかわりなく、毎日／＼取りかえても場所中締めきれなかった話があるほどだ。何しろ相撲社会の中でこれほど誇りがましく華美を競うものは他になく、観客としても三十六俵の緊迫した激突の間に、風流美麗な土俵入の姿は全く目の保養になる景色である。

—— (後略) ——

何と云つても横綱の手数入りはすばらしいものだ。吉葉山の不知火型は全く溜息が出る程だ。相撲美の極地であらう。

此の「手数入り」については、横綱の土俵入りのことで、呼び出しの先づれにつれて、行司にみちびかれながら「露はらい」を前駆



サジスチンの半生記 (四)

—娘時代— (一)

鷹野めぐみ

に「太刀持ち」を後衛にしたがえて、土俵に入るとある。

その型は「攻め」と「防ぎ」とがあり、前者は不知火型（吉葉山）、後者は脇をかためた、いわゆる防ぎの型を示す雲龍型（千代ノ山）とがある。

今や人気の絶頂にある。若の花関は私は嫌いである。別にひねくれる訳ではないが好き嫌いは誰しも違ったものを持っているからだ。私は名寄岩関、吉葉山関が好きである。勝っても負けても淡々とした態度に、その美しさを見出す。ふてぶてしい感じの型よりも真面目な土俵務めの型が好きだ。吉葉山関は気が弱いと聞く。其処に人間としての好きも

あるのではなからうか。横綱になつてからの吉葉山関の態度は微妙なものがある。しかし名寄岩関のクソ真面目さは、引退する迄ボロボロの「まわし」をつけさせ、フアンの激励に応えさせて来たのである。

男女を問わず相撲ファンが多いのは、古風ではあるが昔乍らのチヨンマゲ姿の中に、マワシに魅力をはくからであらう。

以上私は「相撲美論」として、一応相撲ファンなら誰しも知っておられる事項のみについて記して来たが、あえて引出したのも、文中にも述べて来た様に決して無意味ではないと思つて再録したのである。

此処で結論として、三十一年一月十六日附

読売新聞紙上に北条誠氏が書かれた「蔵前の風」の一節を引用する。

——相撲もすべて変つた。制度こそ昔のまゝだが、風習も変り、観客の人情も変つた。私をはじめ国技館でみた力士のうち、何人がいま余生を静かに送っているだろうか。

すべてはうつろい……相撲もまた新しい時代とともに、着々変貌し……しかし変らぬものは、土俵というもののきびしさであろう。そこに「相撲」のふしぎな生命もあるようだ。実力世界の勝敗のいさぎよさが、あらゆる時代の心理をこえて、脈々と流れるのであるか。

(三二、一、一三、大相撲の初場所の日に)

女学校を出て二年間は、私は家でぶら／＼遊んでいましたが、勇一は夜間の商業へ通い乍ら昼は父の会社へ勤める様になっていました。兄は大学へ行き妹はまだ女学校へ在学中でしたが、その頃（昭和二十四年頃）が私は勇一を奴隷の様に扱った時代でした。私はもうすっかり女性として成熟して羞恥の気持は勿論あったのですが、勇一に対しては少女時代から一緒に主従の様に暮して来た故か、何をさせても平気だった様です。それには勇一の方も又私に羞恥心を起こさせない程、男として私に接するのでなく、奴隷として私に接してくれたからかも知れません。

休日など、私は勇一を自分の部屋に呼んでわざと彼を棚の下などに四ツ這いにさせ、私はスリッパのまゝその背に乗って踏み台代りにして本を探したり、足の指の爪を切らせたりしたものです。勿論、靴を磨くのは勇一の勤めの一つでした。

一度こんな事がありました。暑い時でした。余り身体がだるいので、二階の私の部屋のベランダで藤椅子にもたれてウト／＼していた事がありました。その時ドアがコツ／＼とノックされて、

「お嬢さん、居られますか」と勇一の声が聞こえました。私はその日曜日の朝、勇一に買物を頼んでいたもので、それを買って持って来たのだなと思いましたが、返事するのもうっ

とうしいので黙っていました。私はガーゼのハンカチを顔にかけて寝たふりをしていました。ドアが開いて勇一が部屋を覗いている様子でしたが、ベランダの私を見つけて入って来た様子です。

「お嬢さん、本を買って来ました」

勇一が又低く云いましたが、私はスヤ／＼と軽い寝息までたてゝ知らぬ顔をしていたのです。すると勇一が私の足許にうずくまったかと思うと、私は投げ出してゐる素足の先にフツと熱い息を感じて柔いぬれたものが私の足をぬらしました。私は「勇一が足に接吻している！自分の足を舐めている！」と感じました。私は何か得体のしれない快感ともつかない気持で身体中が熱くなつてしまい、どうしようかと咄嗟に思案しました。

勇一の執拗な唇は私の足の指から指の股へそして足の裏からくるぶしへと上に少しずつ上ってくるのです。私はくすぐったさに辛抱し乍ら勇一のしている事に吹出したくもなかったのです。そつと私の唇をぬすまずに足に接吻するなんて面白い男だと思ったのです。そんな事を考えている裡に勇一はそつと私のスカートに手をやって脛に唇をふれようとしてました。私はわざと「うゝん」と眼をさましたふりをして顔のハンカチをあくびをし乍ら取りました。咄嗟に勇一は私の前から飛びすさろうとしたらしいのですが、私の起きるの

が早くてぶざまな姿でその場へ尻餅をついて転びました。私はわざときつい顔で

「何してたの？」ときめつけると、

「す、すみません、い、いま本を、本を買って来ましたので」と赧くなったり青くなったりして彼はその場へ正座しました。私は黙って勇一をにらんでいましたが、

「中へお入り」と勇一を部屋に入れてガラス戸はあけたまゝカーテンを引きました。そして、

「勇一、私に背いたらお父様に云いつけてやるから」と云って、和裁に使う長いものさしを手にししました。勇一は何か口の中でつぶやいて私の前に両手をついて何度も頭を下げています。私は男を思う通りに責めさいなむ快感がむら／＼と身体中を駆けめぐりました。

「さあ、キッスをおし」

私は勇一の前に平然と立って片足をさし出しました。勇一は困った顔で、今にも泣きそうな様子でしたが、そつと又、私の足の拇指の先に唇をふれました。私は足の裏で勇一の頭を蹴りつけると、

「仰向けにねるんだよ」と又、足で肩先を蹴って転がしました。そして仰向けになった勇一の胸の上に馬乗りに跨って腰をおろし、ものさしの先を勇一の首にさしつけてこづきましました。

「勇一、お前、私のドレイになれる？」

私が勇一を見下し乍ら云うと、

「は、はい、一生、お嬢様のドレイになりま
す。お嬢様のドレイに……」と熱っぽい声で
云いました。私は「ふん」と鼻先で笑って
今度は交互に勇一の頬を平手で撲りつけまし
た。それから勇一は完全に私の責めの玩具
となって、もう私のどんな気儘な云い付けで
も、易々ときくようになりました。そして、
かつて秋子の時につかつたじようごを使うま
でになったのです。

その夜は兄達の何かの宴会に私と友達、
それがあとで兄の奥さんになる女なのですが
貴美江さんらと、したゝか飲んでしまい、酔
って帰った時に私が二階へ上ろうとして、ふ
と勇一の事に気がついたので。彼はそっと
廊下の隅で私を見て立っていました。そして
私が眼をやるにこっと頭をさげたので私は
黙って手招きして二階へ上りました。私はフ
ラ／＼と足許をよろつかせ乍ら、今考えると
勇一はよく／＼私のドレイ？　として徹して
いた様で、男の力で私に挑みかゝる様な事も
しないのでした。そうでもする男ならきつと
今頃、結婚していたかも知れません。私は部
屋へ入ると勇一に、ペランダの上になれる様命
令しました。夜空に星がキラ／＼と美しく輝
いているのを見乍ら私は、

「勇一、此の間、お前、私の命令することだ
つたら何んでもきくと云ったわね、今夜のむ

か」と云うと彼は「はい」と眼を輝かして答
えました。私は酔いに任せているのか酔った
ふりなのか、とにかく勇一の口にじようごを
咬えさせていました。その後、私が酔って帰
ると、（と云うと如何にも酒ばかり飲んだみ
たいですが、それほどありませんから念
のため、）そんな時はいつも勇一にそれを強
制する様になりました。結局、勇一は父のす
ゝめる女性と結婚する事になり、現在は結婚
して幸福になっていますが、時折二人にしか
判らない微笑を交すのです。いずれその話は
おい／＼書く事にして今度は兄と貴美江さん
と私の三人の話をすゝめたいと思います。

私が勇一を責め苛んで楽しんでいた頃、私
は貴美江さんと兄の三人で、兄の部屋でトラ
ンプをやった時の事です。兄は貴美江さんの
明るい性格とスタイルの良さにすっかり惚れ
こんでいましたから私を通じてその日の遊び
となったのでした。此の時、兄がトランプで
負けてばかりいて口惜しさを私にむけたのか
ポカンと私の頭をぶったのです。私は、
「まあひどい、よくもやったわね」と云うな
り立ち上って兄の後から襲いかゝって首をし
め乍ら引き倒しました。

「あッ、こいつ何をする、おてんば娘」

兄は起き直ろうとしましたが、私の奇襲が
早く、いち早く兄の胸の上に馬乗りになっ
ていました。

「まあ、めぐみさんたら」と貴美江さんが笑
いました。兄は私に組みしかれたまゝ、

「おてんばな妹を持った兄をみて下さい、い
つも此の始末なんです」と貴美江さんをみて
笑い、私が兄の顔を両腿の間にはさんでもじ
つとしています。

「貴美江さん、兄のおよめさんになったら毎
日こうして、いつもお尻にしいていないと駄
目よ。男なんてすぐつけあがるから」と云う
と、貴美江さんもおてんばなくせに結婚と云
われたためか「まあ」と顔を救らめました。

私は勝ち誇った様に悠々と跨ったまゝ

「貴美江さんも乗りなさいよ、少し苛めてこ
らしめないとかせになるワ、レディの頭をぶ
つなんて、貴女、いつも撲られるわよ」と云
うと兄が、

「冗談じゃないよ、僕はそんな男でないよ、
お前だからやったんだよ、女の人なんかこそ
んなことするものか」と云ったので、

「まあ、私を女だと思ってないのね」と云っ
て兄の顔の上にペタリと腰をおろしてしま
いました。

「貴美江さん、一緒にやつつけよう、さあ早
くののよ、私の後に」

私は恥ずかしがっている貴美江さんを冷や
かす様に云って笑い乍ら、私のお尻の下でも
がいている兄の顔を、お尻でぎゅう／＼と押
さえつけていました。

（娘時代未完）



(浣腸レポート)

『浣腸』に関する告白

島

直 樹

(世界性学全集「女性の冷感症」河出書房版八第十一章「告白」Vから)

八才のとき弟が生まれますと間もなく母は肺炎カタルにかかって、一年ばかり南方で保養しなければならなくなりました。母親の不在は私を早熟な子供にしました。そして私はわけもないのにほとんどいつも不機嫌でした。母は南方から帰ってまいりますと、そのことでひどく私を叱りましたがなんの役にも立ちませんでした。悪い性分を矯めるなんて、とても出来なかったのですもの。しかし強い罪悪感がおこってまいりました。それから私の不幸がはじまったのです。私は嘔吐をとまなかった激しい頭痛に悩むようになりました。わけても体操をした後にはひどく起りますのでとうとう体操を免除されました。血を見たり手術の話などを聞いたりますと、身体じゆ

うが妙にむずむずしてまいりまして我慢ができませんのです。羞恥心も度外れにひどくなり、大、小便にさえもそれを感じました。たぶんそれは私にとって性的な所為を意味していたのでしよう。病気になるますと診察をうけさせるために、お医者さまは口をすっぱくして、なつとくさせなければなりませんでした。ですが恐ろしいことのうちでも、一番恐ろしかったのは、母のしてくる浣腸でした。病氣をするたびにいつも真先に浮ぶのは「ああ、また恐ろしいことをされるのか」ということです。弟がほんとうにおとなしく浣腸されているのを見まして、従姉が仰天したことがありました。母は答えました。「ええ、うちの子供達はお腹に刀だって突き刺せます

わよ!」。その時私は、母に対する激しい憎悪の湧き上るのを感じました。同時に浣腸という観念が興奮もさせました。何でもかでも平気でさせる弟が憎らしかったことも覚えています。——中略——

自慰をしますときは、たいがい若いお医者さんに浣腸されているのを想像するのですが、まれには、私の熱中している青年が優しくして下さるところを心に浮べながら、おこなうこともございました。——中略——

私はとても性的な人間で、お産までが一種の性行為なのです。二番目の子も病院で産みましたが、こんどの助産婦さんは実に美人でした。この人に沐浴や浣腸をされますと、ぞっと総毛立つほど性的に興奮するのです。

—中略—

先に申しました通り、お産は私を性的に興奮させまして、痛みを感じています一方、快楽もあつたらしいのです。沐浴ではおまけに、美しい助産婦さんに身体を擦ってもらいますと、ひどく興奮しまして一時夢中になり、何もわからなくなるほどでした。私の同性愛傾向が表面に現われましたのも、浣腸器の幻想が又、力をえましたのも、実にそのときでした。それに分娩は、私にマゾヒズム的空想のあるのも発見させました。お医者の手にゆだねられましたからです。男性であり、そして医者である一人の人物——ああ、これがわたしの理想でした！。産褥にいます間に付添の看護婦にも恋をしました。そして怖れていましたくせに、浣腸ではいつも悦びをおぼえました。もっともそのころ、はっきり意識していませんでした。ただ、ただもう怖いのと無性に恥ずかしかっただけでした。——中略——

私は非常にはげしく自慰にふけりました。でもそのときの空想ははまったく違ったものでした。いつでも想像しますのは、入院して、いましてこれから浣腸されるというところからはじまるのです。私は泣いたりわめいたりひどく恥ずかしがったりするのですが、とうとうつかまえて縛られてしまうのです。私をつかまえていますのが若い医者だとか、

或は縛られお医者に浣腸されていますとかいろいろ変えて空想にふけりました。でも、たいていはつかまえていますのが看護婦で、お医者か私に浣腸をしています間に、その看護婦が腫洗滌をしてくれるのですが、一口に申しますと、責苦にあい痛い思いをし、強制されているというシーンなのです。これは私の幼い頃の追憶でした。なぜならば、すぐ便をしませんように、浣腸のあとでいわれているとさへ想像するのですから。丁度、子供達が、浣腸液がすぐ出ませんように肛門を指で抑えられますように。浣腸器の先端にワセリンを塗るのも、やはり一つの役を演じていました。この空想は本当に完全なものになってしまいましたが、どんなこまかいところを抜かしてもいけないのです。それに、たいていは同じ部屋に他の患者さんもうと想像するのです、そうしますと一層興奮するのです。さもなくば、最初に他の患者さんのされてい

るのを見ましてから、自分も同じことをされる。つまり二重の体験を想像するのです。おわかりのことと思いますが、多人数というところが大きな役を演じていたのでした。それは多分、私達が極く小さい頃みんな病気になる一人一人順番に浣腸されましたためでございます。この幼時的なもの産褥についていきました時の出来事とが一体化しましたわけなのです。——中略——

たしか二、三度病気になるまで、夫に浣腸されなければならぬと空想したこともあったようにおぼえています。この恥ずかしいのを無理にされるといことが、自慰の際、非常に重要な役を演じていました。この癖は益々ひどくなりまして、たとえば、私の好きな義妹といったような他の女が、こういう状態にあるところを想像するほどになりました。今日では、なぜ坊やに小さい頃浣腸をしなかったか、その理由が自分でもよく解りますが、私にとりまして浣腸は一種の刑罰でした。しかも、どうしてもそれから逃げる事が出来なかったのです。——中略——

私にとりましては、暴力行為ともいえます手術のために、色々な過去のことがよみがえってまいりました。不幸にも、例の浣腸と結びつきました自慰の空想も出て来たのです。しかし今度は、お医者か浣腸をしている間に看護婦が私のお腹と乳房をマッサージする、つまり身体にさわっていると想像するのです。古い同性愛の傾向が又、目覚めたのです。

病院で浣腸されはすまいかと心配して、いますくせに、看護婦がそのかわりに下剤しかくれませんと、失望したことなども思い出します。でも又、このようなことを想像しながら自慰をしているとは、自分でも全然意識していませんでした。

第五章『冷感症婦人の心理』

性感帯としての肛門Vから

IK夫人は、結婚のはじめの幾年間は非常に精力が弱かった。即ち、真のオルガスムスを味わったことは一度もなく、一種の前快感を感ずるだけであつたが、それとても決して

満ちたりたものではなかつた。オルガスムスに達するには、肛門自慰によるほか方法がなかつた。その際指を用いており、この自己満足形式は子供の頃からだと信じていた。自分でも母親から頻繁にされた浣腸が、この異常の原因になつたのではないかと、私に尋ねたくらいである。―後略―

以上シユテークルの著書の中から、浣腸に関係ある部分を抜書きしてみたが、実に興味ある記録で、われわれ浣腸マニヤの心理を、心憎いまでに描いたと思われる箇所が沢山あり、この記録をもとにして一篇の作品が書ける気がするが、これ以上の説明、批評は後日にゆずり、紹介だけにとどめたいと思う。

〔レポート〕

女装の好きな男

△内外タイムス12月5日附「読者の作る欄」 僕のアルバム (滋賀雄二) から▽

H君は岡山県N市に住む理容師で、二十八才の独身者だが、女装が三度の飯よりも好きという変わった男。

彼は肌が浅黒く、小肥りの体格で、目が大きい。素顔の時は平凡なありきたりの青年なのに、女装すると見違えるほど肉感的な女性に変化する。女装用品はカツラ、衣装など一揃い持っている。

店に来る客の中で美男子を見出すと、満点のサービスをしながらかモーションをかける相手に反応があると、終業後に打合せた場所へ行く。H君は完全なソドミアでウールニング(女性的立場)である。ソドミアと

変っているのは、必ず白粉を塗り、カツラをかぶり、女の衣装をすることである。

近所のS氏という踊の師匠から日本舞踊を教わっているが、踊りよりも女の動作をしたり、女装して踊ることに興味が強い。S氏は、H君の踊りは少しも上達しないところぼしている。

N市の夏祭があると、H君はこの時とばかり、白粉を塗り前髪をカールして額にたらし、艶やかな振袖をまとい、写真のように美しい女に化けて街に出てゆく。そして誰はばかるところなく大っぴらに女になり切り、夜の更けるまで踊り狂う。

しかし、お祭は一年に一回しかないからH君の女装欲はとても満たされない。しかも彼は両親の経営する理髪店を手伝っている次男坊であるから、家の中でいつも女装していることはむずかしい。そこで、お客の中から適当な相手を物色して女装遊戯をするのだが、小さな町のこととてすぐ評判になつてそれも永續しがしない。

彼は解決策として、このN市にある某劇団に臨時加入し、旅回りの巡業の際に一緒に出かけて行く。この一座で彼は女形となり芝居に出たり、歌謡曲のレコードに合わせ、あまり上手でない日本舞踊を舞台で踊る。芸者姿の粋な写真は、巡業中に撮影したものである。

(東京S・K生投)

〔ローカル・レポート〕

虐待された女中

佐原

弘提供

(昭和32年1月8日付、朝日新聞東京版)

女中さん、幽霊のよう

主人夫妻に 殴られたり火攻め
の二年間

女中に住み込んだ娘が主人夫妻に丸二年間いじめぬかれ栄養失調と全身打撲で幽霊のようになつていた……と母親から戸塚署に届出があり、同署で暴行傷害、不法監禁容疑事件として捜査に乗出した。

いじめられたという女中さんは戸塚区上倉田二二九、角津満智子さん(四七)の長女珍子さん(三二)、主人は東京都港区麻布西町一七、斎藤アスベスト株式会社社長斎藤栄一郎氏(三三)良子さん(三〇)夫婦。

母親の届出によると去る二十九年十二月に住込んで間もなく、珍子さんが客の金を盗

んだことがあつて後「給料から天引きで返す」と話がついたにも拘らず行儀が悪いといつては夫妻に棒や衣紋掛けで殴られたりけられたりの虐待を受けた。また裸にされて乳房やももをマッチの火で焼かれたり、つまみ食いをするというので口にパンソウコウをはられたこともあつた。しかし珍子さんは盗みの犯人として警察に届けるといふ夫妻のおどしで逃出すことも出来なかつたという。

去る三日、主人からの連絡で母親の満智子さんが引取りに行つた時にはやせ衰えて幽霊のようになつており、いま戸塚共立病院で手当しているが、栄養失調と全身打撲で重体という。戸塚署では聞込みにより大体事実であると分つたのできよう八日、斎藤夫妻に任意出頭を求めて取調べる予定。

(昭和32年1月8日付、東京新聞)

口にバンソウコウ

女中虐待で訴え

食事もさせず半殺し

【横浜】娘が奉公先の主人夫妻から連日のように肉体制裁を受けいまひん死の床にある」とその母が警察に訴えたことから、たいへんな人権じゆうりんが明るみに出た。——訴えたのは横浜市戸塚区上倉田町二二九駐留要員角津吉松さん(五七)の妻満智子さん(四七)で被害者は長女の玲子さん(三二)。訴えられたのは港区麻布西町一七、斎藤アスベスト工業所斎藤栄一郎副社長(三三)と良子(三〇)夫妻。去る四日事件を知つた戸塚署は内偵を進めていたが八日斎藤夫妻を暴行傷害、不法監禁の疑いで任意出頭させて調べることになった。

訴えによると玲子さんは去る二十九年十月から斎藤家に女中として住み込んだが、その年の十二月来客の財布(約六千円在中)を盗んだことから夫妻の虐待を受けるようになった。その当時は盗んだ金の弁償として月三千円の給料を二カ月間もらえなかつたが、夫妻のリンチはますますひどくなりとくに昨年中は十数回にわたつて棒で全身をなぐられ、裸にして胸や腹に燃えさしのマッチを押しつけられたりした。逃げ出そうとしたこともたびたび

あつたが、そのつど「お前の泥棒事件を警察に訴えれば、すぐ捕まるんだぞ」と脅されていたという。

昨年十月以降は口にパンソウコウをはって食事さえ与えられないことが幾日も続いた。二年間で給料もわずか六千円ぐらゐしか与えられなかった。こうして玲子さんは去る十二月二十二日発病、骨と皮ばかりで実家へ送り帰された。驚いた満智子さんが三日玲子さんを戸塚共立病院に入院させたところ、玲子さんは全身打撲と過度の栄養失調ですでに重体と診断された。

この時はじめて娘の口から実情をきかされ、同署に訴えたという。

母の満智子さんの話 暮に突然病氣との電報をもらい、かけつけてみると顔かたちまで変り果てた娘に会い驚きました。手紙はときどききていたのですが、すべて奥さんの検閲を受けなければならず、ほんとうのことは書けなかったのだそうです。

(昭和32年1月12日付、夕刊読売新聞)

火ばしなど押収

〃女中暴行〃の専務宅搜索

【横浜発】神奈川県戸塚署は十二日朝九時東京麻布署と協力、石川刑事ら十名を派遣、東京港区麻布西町一七番藤アスベスト会社専務斎藤栄一郎さん(三)方を不法監禁暴行傷害の

疑いで家宅搜索、火ばし、えもん掛など押収した。

調べによると斎藤さんの妻良子さん(三〇)がさる二十九年十月女中として雇入れた横浜市戸塚区上倉田二三九駐留軍要員角津吉松さん(五三)の長女玲子さん(三三)を行儀が悪いといつて二年間にわたつて不法監禁、数十回にわたつて火のついたマッチ、棒切れなどで暴行のうえ絶食させ、ひん死の重傷を負わせた疑いで同署は十四日良子さんを同容疑で取調べる。

(昭和32年1月13日、朝日新聞朝刊)

証拠品を押収

会社重役方の女中虐待

女中虐待事件を捜査中の戸塚署は、十二日朝石川警部補ら八人で東京都港区麻布西町一七番藤アスベスト会社専務斎藤栄一郎氏(三三)方を暴行、傷害の疑いで捜査し、虐待に使ったとみられる棒切れ、フロバタなど証拠品多数を押収した。

調べでは戸塚区上倉田二三九駐留軍要員南津吉松さんの長女玲子さん(三三)が二十九年暮から斎藤氏方に女中で住込んだところ、棒などでなぐられたり、裸にされてマッチで胸や足を焼かれるなど二年間いじめ抜かれた。去る三日母親が引取りに行ったときには栄養失調で重体のうえ左腕骨折、左眼失明というひどい状態だった。

同署では暴行したとみられる斎藤氏の妻良子さん(三〇)が七カ月の身重なので近く在宅取調べする予定

(昭和32年1月13日付、内外タイムス)

ついに玲子さん失明

妊娠七ヶ月の主人取調べ

〃女中虐待事件〃

『二年間女中奉公していた娘が奉公先の夫人に虐待された』と去る六日横浜市戸塚区上倉田二三九駐留軍要員角津吉松さん(五三)妻満智子さん(四七)が戸塚署に訴えて問題になった『女中虐待事件』について同署では傍証固めと裏付け捜査を急いでいたが、娘の玲子さん(三三)の奉公先だった東京都港区麻布西町一七番藤アスベスト専務斎藤栄一郎氏(三三)の妻良子(三〇)が虐待暴行を行ったとの傍証をつかんだので、十二日午前九時同署員十名は同氏宅の家宅搜索を行い良子を不法監禁、暴行傷害の疑いで在宅取調べを行っている。

一方戸塚共立病院に入院応急手当を受けている玲子さんは五百CCの輸血を続ける重体で左眼はついに失明、手足など身体中は傷だらけで無残な姿になっている。またこの事件を重視した横浜法務局人権擁護課でも人権擁護の立場から調査に乗り出した。同署で調べた玲子さんの臨床申立によると、玲子さんは二十九年十二月斎藤さん方へ女中

として住み込んだが食事が悪く腹がへり、客の金六千円を盗んだのが見つかりせっかんされたことから暴行が続き、給料から弁償することで一応解決した。しかしその後も良子はささいなことからなんくせをつけ、洗濯板、棒切れ、えもん掛けで全身を殴り裸にしてマッチで手足を焼くなど虐待したという。

このため玲子さんは栄養失調になり同家を逃げ出そうとすると『逃げれば警察に知らせて指名手配する』と脅かされ逃げられなかった。その後玲子さんは十二月二十一日ついに倒れ、五月三日斎藤家から玲子さんの母親満智子さんに『引取りに来い』の電報があり、初めてこの虐待事件が明るみに出たもの。なお良子は妊娠七カ月の身重の身体である。

(昭和32年1月13日付、神奈川新聞朝刊)

奉公先の現場検証

女中虐待事件、証拠物件を押収

既報、戸塚区上倉田町二三九駐留軍要員角津吉松さん(五三)の長女玲子さん(三三)の「女中虐待事件」を追及中の戸塚署は県警本部の指揮できのう十二日朝玲子さんの元奉公先東京都港区麻布西町一七斎藤アスベスト会社専務取締役斎藤栄一郎氏(三三)方を不法監禁暴行傷害の疑いで家宅搜索、暴行虐待に使用したと思われる火バシ、洗たく板、えもん掛など証拠

物件多数を押収するとともに同家の現場検証を行った。この事件の容疑者として栄一郎氏の妻良子(三三)を前記疑いで調べる予定だったが妊娠七カ月という状況から同日は在宅のまま

当時の事情をきいた。こんどは押収した証拠物件などについて検討したうえ、ちかく良子の任意出頭を求めて調べるという慎重な捜査方針をとっている。

(女性切腹レポート)

少女の切腹

中原 弘 通

(「救国維新」紙より) 本稿は、救国維新という救国国民運動総連合の機関誌に掲載されたものですが、筆者の御厚意により、ここに転載したものです。V

昭和二十年八月九日未明、十九歳の少女

下りに掻き切っていた。

A子は原爆でやられた広島から似の島の向う連絡船で切腹した。目撃したB子の報告によると、A子は呉から父母を探しに来た

しかも制めようとするB子の手を静かに振り払い刃を返して更に左脇腹へ切り廻し見事に逆十字の切腹を遂げてしまった。

が見当らず、同じく家族を探していたB子と知り合い同行したのであった。然し船内に充つる惨憺な被災患者の様子に、原爆の

一時間ほど後、似の島へ着いた船に乗り込んで来た軍医と、B子とに看護られて、A子は息を引取ったのである。

惨禍を痛感したらしく「これではとてもうちの人たちが無事の筈はないわ」と半ばあきらめながら涙を噛みしめていたがやがて船が棧橋を離れると一人船首に向ったB子がただならぬ不安を感じて随いて行った時には既に、船倉に入り、日本剃刃に手拭を巻いて、鳩尾の辺りから右脇腹へ斜め

私は切腹の歴史を永く調べて来たが、一読者から此の悲痛な少女の最期を知らせて貰い、感銘の余り何の感想も加えずここに発表する。願わくは今日の所謂太陽娘と呼ばれる人たちにも読んで貰いたいと思う。父母をたづねあぐみて広島にあはれ乙女は腹切りにきと

電気責に関するノート (続)

甲 斐 仁 参

女は人の気配にハッと目を開いた。臉が真黒に限られ、血の氣のない頬に、乾いた唇に長い恐しい拷問の跡が刻み込まれて居た。

「目が覚めたかい。」

男が酒臭い息を吹きかけてのぞき込んで居るのを見た女は慌てゝ股をすぼめようとしたが縛られた膝はビクともせず、感覚の鈍くなつた足先がバタバタと悲しく空を蹴るだけだつた。男は赤く濁つた目でそれを見ながら鼻の先で「フフン」と笑つた。

「相棒はジョージだろう、どうだ。」

女はギクリとして深く二重に刻まれた臉を開いた。

「ち、違います。」

「慌てなさんな、顔に書いてあるぜ、マダムは御氣に入りのジョージが裏切つたてんでやきもち嫉いて大變だぞ。」

「……………」

「三時はもうすぐだ。他の奴等は皆売上げ持つて帰つて来たぞ、あとはジョージ様だけ、おまけに奴の持つて来る金はチヨイとまとまつて御座いとね。まあいいさ、では恋しい御方が御迎えに来るまで、たつぷり可愛い御声を聴かして頂くか。」

男はニヤニヤと笑いながら火箸のような棒を取り出して、柄についた赤いコードの先を器械に挿し込み、女の左足に又あのクリップ状の金具を取り附けた。スイッチが入れられボルトメーターは五〇を指した。

「サ、サブ許して、何でも云います。御願います。ねえ、許して……………」

男に図星をさされて、もう一縷の希望も無くなつた女はこれ以上責苦に耐える力も消えて居た。

「もう遅いつてさ、何も聴く事は無えんだ

よ。」男はゴムの手袋をゆつくりと嵌め、涙を浮かべて必死に歎願する女の縛られた手首をその棒でスツと撫でた。

「ヒエーッ」

しっかりと握つて居た指がはじかれたように開かれ、苦悶にビクビクと震える。次にピンと固くなつた桃色の乳首に触れた棒は太腿をなぶり、右足の裏をその先でぐいとこすつた。

「ヒエーッ」

女は夢中で足をはね上げた。ギョツと折曲つた足の指は反射的にそり反つてヒクヒクと動く。

「フフ、そんなに嬉しいかい。今度は穴めぐりと行きますか。」

男は左手でしっかりと女の髪の毛をつかむと耳の穴にその棒の足を突込んだ。恐ろしい叫び声が低い天井にぶつかった。

「今度はここか。」

男は苦しうに喘ぐ鼻腔に棒を挿し込んだ「ウツツ……………」

女は目をつり上げ、顔をのけぞらせた。鼻がもぎ取られ焼火箸を脳天にまで突刺されたような責苦に女の頭脳は錯乱して来た。男は嬉しそうに呟く。

「次はここか」

「ギヤッ、た、助けて、ジョージ、ジョージ、早く助けて。」

「ふふふ、とうとう恋しい彼氏の名前が出たか、ここはどうだ……。」

「ヒヤーツ、キヤーツ、死ぬ、死ぬ、く苦しい、は早く助けて、早く、ギヤーツ。」

「ふふふ、もっともつと苦しめ。」

細い棒が、繰り返し繰り返し何度も肉体のあちこちを蹴り廻し、女は血を吐くような声を立てながら白い裸身を台の上でのたうたせられた。縛られた台をギシギシきしませ、身体中にブツブツと汗の玉を吹き出させながら……。

男は少し疲れたのかスイッチを切り棒をはずすと、今度はジャラジャラと音をさせながら太い鎖を隅から引ずり出した。それを脂汗に光った女の腕にからませ、グッシヨリとぬれた腋の下から乳房の上を一巻させ、腹部から尻に、更に右の太腿へと蛇のようにからませた。女は冷く重い鎖の感触にガチガチと歯を鳴らせて怯えた。男は先刻女が縛られて居た椅子に腰を掛け、鎖の先についたコードをたぐってプラグを器械に挿し込み、テーブルに肘をついてつまみをもどし、スイッチを入れた。

「ふふ、今度はゆるゆる可愛がってやる……。」
男は、台の上で喘ぎながら次に襲って来る苦痛を逃れる術もない可愛想な女を見下した。

「も、もう勘忍して、ジョ、ジョージです。」

ジョージがその紙を呉れたんです。どんな事でもします、だから、だからもう勘忍して。」

「もう遅いよ。」

男は無慈悲に笑ってつまみを廻した。

「ウーッ。」

全身にまきついた鎖が突然真赤に灼けてギリギリ喰込むような苦しさに、女は身をくねらせて悶えた。今迄身体の部分々々に加えられた責苦が今度は一度に全身を襲う凄まじさに女の意識はすぐ遠くなりそうになる。男は上手につまみを廻して電圧を上下させ、気絶する一歩手前で女を苛み続けた。それは丁度猫が捕った鼠を蹴り、キイキイと悲鳴を上げてもがくのを楽しむのと同じだった。……。

戸が荒ら荒らしく開き、先刻のマダムが目を怒りに釣り上げ、カッカッとハイヒールの踵を響かせて入って来た。

「今電話があったよ。レポでジョージを捕まえたって。この小娘何て図々しい奴だろう。」
「へえ、マダム、こいつも今、泥を吐きやがって、ジョージだって云ってました。」

「今更何だい。おまえも何して居るんだい。この娘ったら嬉しがって居るじやない。早く天井からぶら下げるんだ、早く。」

マダムはシレッタそうに床を踏鳴らした。男は慌ててスイッチを切ると鎖はずし、台に縛られた女の縄をほどくと、両手を頭の上

で縛り直して引ずり起した。マダムは片隅からフエンシングの剣のような細い鋼鉄の鞭を取り上げヒューヒューと素振を呉れて居た。

男は手早く女の両手にもう一本の縄を通すと椅子に乗り、低い天井に何個も取りつけられた鉄の環の一つに通すとぐいぐいと手繰った爪先立ちで万才でもするような恰好に吊り上げられた女はワナワナと震えながら、俯向いてしっかりと目を閉じて居た。涙が頬を伝った。男は壁に立てかけてあったエボナイトの板を一枚女の足の下に敷き、今度は右の足首に例の金具を取りつけた。マダムは鞭の柄に附いたコードの先を器械に差し込むとスイッチを入れ、七〇ボルトまでつまみを廻した。

「リエ、裏切りの罰だ、覚悟おし。」

マダムは叫ぶと、背なかに鋭い音を立てて鞭を振り下ろした。

「ギヤーツ。」

あまりの痛さ、苦しさに女は恥も外聞もなく片足立ってそり反った。一撃で背の皮が裂けて鮮血が糸を引いた。続いて二回、三回、休む暇なく鞭が鳴り、背なかも、胸も、尻も太腿も見える赤い血の色に彩られた。鋼鉄の鞭はそれだけでも凄まじい痛みを与える。その上に電氣を通される苦しさは、灼熱した鋸で生きながら八つ裂にされるような責苦だった。鋭い鞭の音と、女の絶叫が交叉し、エボナイトの板の上には脂汗と血が点々とした

たった。鞭の下で死声を上げながらはね上って居た女はやがてその力も失ったのか、鞭が身体を引裂くたびにビクビクと筋肉をひきつらせ、かすれた、悲しい声を立てるだけだった。

十分も経っただろうか、地下室の戸が再び開かれ、髪を乱し、ネクタイも引千切られた



若い男が二人のガッシリした男に両腕を掴まれて突飛ばされながら入って来た。男はこの陰惨な光景にハッと目を見張り、唇をビクビクと震わせた。吊られた女は朦朧とした目を男に向けると

「ジョーシ……」
と一声叫び、ガックリと首を垂れて悶絶し

た。美しかった容貌は地獄の責苦と、涙と汗で別人のように憔悴し、大理石のようだった裸身は無惨に傷けられ、紫色の鞭痕と流れる鮮血と、苦痛にしほり出された脂汗に見る人の目を覆せた。

◇
「ジョーシ、よくもおまえは私を裏切ったね。」

マダムが怒に目を血走らせて男を睨んだ
「マダム、それは違う、誤解だ、俺は何も……」

答える男の鼻先にマダムは先刻の紙切を突附けた。

「誤解だって？リエは泥を吐いて居るよ、これは何だいッ？集金の途中でランデヴーは一寸しやれ過ぎて居やしないかい？」

「……」
「さあ、早くこの男も裸にして吊り下げな。」

マダムは、血ぬられた鞭をヒューと振った。あっと云う間に男も女の前に同じ恰好で吊り下げられた。男は観念したように天井をジッと見詰めて居た。

「ジョーシ、お前の女を私が代りに可愛がってやる、よく見るんだよ。」

マダムはサブに目配せした。サブはバケツの水を柄杓で叩きつけるように女の顔に浴せた。女は既に死相の顕われた顔を起すと薄く

目を開いた。意識が戻らない方が幸福だった。そこには恋しいジョージが捕われて吊下げられて居た。サブが黒いコードを附けた金具をジョージの足につけて居る。ジョージはきつく目を閉じて仰向いて居た。

「見るんだ！」

激しくマダムが叫んで吊られた男の背中に鋭く鞭を振下ろした。

「ウッ」

爪先立った男の身体は前にぐらりとよるめいた。

「ジョージ」

女がかすれた声を立て目を閉じた、苦痛、悔恨の涙が新たに臉にあふれた。

「恋しい御方同志だ、二人繋いでやろうじやない。」

マダムの声にサブはクリップが両側に附いたコードを取り出し男の足についた金具と取換え、片側を女の空いた左足に取附けた。待ちかまえたようにマダムの鞭が男の背に鳴りジョージとリエは同時に悲鳴を上げて飛び上った。これを見て居た三人の男はドッと笑った。続けてピシリピシリと鞭が鳴る。

「まるでマンボでも踊って居る見てえだ。」

一人が云った。

「何をボヤボヤして居るんだい。早くお前達も踊らせて御覧。」

マダムの声に男達は鞭や錐を持ち出し、そ

れについたコードの先を器械に差し込んだ。床には何本ものコードが散乱した。

「踏まねえように、気をつけるよ」

サブが怒鳴った。

◇

男達も一度に二人の憐れな生贄に襲いかかった。鞭が交叉し、鋭い錐の先が肉体を貫いた。……

(以下省略するが、男―女―負の電極、女―男―負の電極とコードで繋ぎ、正の電極の鞭、錐、その他の責道具で絶命するまで責められる様子が書かれてある。)

血の狂躁曲は終わった。魂の抜けた二人の男女の身体は人間とは思われない凄まじさで、ダラリと吊り下って居た。突然マダムは高いキンキンした笑い声を立て、血のしたたる鞭を投げ出した。鞭の先が女の足にガツチリと喰込んだ金具に触れ、ピシピシと青白い火花を散らしパツと器械の赤いランプが消えた。てんでに血のついた責道具を持った三人の男達はゾツとしたような顔で笑い声を立てて居るマダムをソツと伺った。

×

×

×

五、「愛情生活」二十七年二月号に「南方植民地に於ける怖るべき拷問」と題する記事があり、フランスの婦人記者、アンドレ・ヴィオリスの著書「印度支那S・O・S」からの再録がある。原典を確めて居ないし、記事自

体も簡単で如何なる方法なのかよく解らないが、二十数年を経た今日でも、恐らく似たような事が半ば公然と行われて居そうな気がする。

『1、交叉した針金に鞭を結びつけて電流を通す。この鞭で撃たれると被疑者は余りの痛さに耐えかねて救いを求め、白状する。』

2、被疑者の片手に針金を結びつけこれを廻線に繋ぐ。スイッチが入られる度に、二度あるいは三度到底辛抱ができないほど激しい振動が伝わる。

これ等の拷問は、ビン・ドン警察署(シヨロン市)で一九三一年の一年間特に、毎日必ず行われていた。

婦女子も又、これらの拷問にかけられる……

×

×

×

六、昭和二十九年六月一日発行「現代読本」の中、A・G・ホブキンス著、風間草子訳、「アメリカ警察の拷問」の中で次の記述がある。

『たまたま、拷問の相手がニグロとなると、もっと気楽にやれるようだ。これも主にニグロに対して行われるものだが、テキサス州のダラスではずっと以前から、「電気猿」といって容疑者を真夜中の暗い森へ連れてゆき、電流を二つに分けて、その蓄電池の一方の線を容疑者の脳天に通じさせるといふ拷問を行

っていた。

警察官の間では、この拷問のことを、背中にチクリとお見舞いする、といっているが、電氣猿という言葉は、電氣が通じたとたんビリリとしてロケットのように手足を動かす所からそう呼んだものだろう。然しこの言葉をきいただけで震え上り、被執行人は何でもかも自供してうのであった。この電氣猿は一九二五年頃から次第にすたって来た……

七、本誌二十八年一月号「読者座談会、交悦に伴う責めの衝動心理」に河合為造氏が満洲で特高が女を電氣責にするのを見て述べて居られる。

大多数の読者各位は御存知の事と思うが、最近の読者の方々の為、一寸引用させて頂く「……その時は四月頃で未だ未だ寒かったのに、二十五才の満人の娼婦（女房）を素ッ裸にして、天井を通っているスチームの鉛管に、手足を一緒に縛ってぶら下げてあったんです。奴さん、今面白い事をしてやるから見てなと云って、二三米程のコードを取り出すと、一方の被覆をむしりとして裸線を出しソケットのついた方を電源に差して、女に近ずくと、電流の通じた裸線を、いきなり中……なんだのです。唖呀々と泣き叫ぶのを尻を抱えて離さない。これをやられると、どんな女でも飛び上るそうです。」

八、本誌二十八年十二月号「鶯の谷渡り」沼田扶二世作に「玉はさみ」の記事が出て居るが同様の方法による私刑の記事が、二十八年十月号「りべらる」の日本の悲劇第一話、獣軍看護婦に載って居る。

「……二人の女が私の両足を持って……をひろげた。大の字の恰好。……なんということだろう。電球が……。スウィッチがひねられた。パツと灯がともった。……十秒、二十秒、三十秒……。一分たつと、チクリ！と痛み以上の熱さが、私の意識を恐怖のどん底で、うんと呻って呼びました。」

「ああ」私は遂に絶叫した。断末魔の苦しみだった。熱い！私はもがいた。手足をみんなが押えつけた。私は失心した。失心したあとで受けた刑罰は知らない。私はぐしやぐしやになったドロ沼の底に沈んで行った。」

この方法は電氣そのものの性質を使用したものでなく、むしろ火責の範疇に入るものであろうが、電球の破損と云う危惧感、及び間接的ではあるが電流が通される無気味感が伴うので便宜上ここに収録した。その他、電氣鍋、電熱器等、電氣の発熱作用を間接に利用した記事は純然たる火責そのものである。ここでは省略する。

九、電氣按摩、つまりリレーの作用を応用し

たものは「操り責」の一種になるが、ここで一寸触れて見る事にする。

1、五年程以前未だ新橋附近に街娼が群って居た頃、今は故人となった有名な芸能人がその一人と一夜を共にした際、彼は前戯に電氣按摩を使用したと云う事をその女から聞いた事がある。

2、「Swedish Morement」なる秘密映画で、日本では見かけない形の前記道具を前戯に使用するシーンがあった。

3、前述方法を長時間行う私刑が、ある娼家で行われた事を娼婦の体験談として聞いた事がある。

これ等は詳述する事は出来ないが、簡便な傷痕を残さぬ責道具として、一部に利用されて居る事は否めない。本誌三十一年新年号に於て沼氏がその手帖で述べて居られる、「一方的なF技巧が、自発的でなく為される場合奴隸的奉仕の色合が濃くなる。」と云う事はサディストの立場から云えばそのまま逆転して「一方的なF技巧を、強制的に施す場合、加虐的な色合が濃くなる。」のであろう。この意味でマッサージは奉仕でなく加虐的な感じを与えるのであろう。

附記

有名なアメリカの電氣椅子は死刑なので、ここでは省く事にした。尚前回記載の「りべらる」は昭和三十年一月号であった。

(映画速報欄)

嵯峨美也子

邦画もシネスコの

縛り映画へ

日本映画にもシネマスコープ時代がやってきた。まず第一に着手するのが、東映スコープで取上げられた題材が、大友柳太朗主演の「鵬城の花嫁」(監督松田定次)。この中に素晴らしい縛り場面がある。江戸の豪商井筒屋美し姉妹娘おきぬとおみつが、赤柄組の長野五郎左衛門らに邸におびき出される。そして、「この女達に頭をまるめさせて詫言をさせる。」ということになり、盛大な断髪式を行う。これが東映スコープ、イーストマンカラーの見ものである。庭の真中に立てられた杭に背中合せに、おきぬとおみつが縛りつけられている。その周囲には猿の三次らの無頼

漢浪人者達がタキ火にあたり酒を飲み、五郎左衛門ら赤柄組の面々は、縁の上で盃を片手に面白気に見入る。

突然、音楽が始まり、雅楽面をつけたお小姓八人許り、長剣と短剣を交互にもって踊り出す。二人の身辺をかすめる長剣、二人の鬘がバラリとほどける。愉快気に見入る五郎左衛門等。縛られた二人の美女の周りを剣を交互しつつ狂的に踊る面の踊り子等。楽しむように盃を重ねて眺める五郎左衛門。

鬘をバラリとさせ、ぐったりとした二人が危いとき、大友柳太朗扮する若様、松平源太郎が助けにくる。そして大立廻り、二人が救われるのは定石。この作品は、前にもカゴで連れ出され猿ぐつわをはめられ、縛られるシーンもある。

東映のアグフアーカラー新諸国物語「七つ

の誓い」第三部で、千原しのぶの桜姫と加賀

邦男のトカチの火刑シーンがある。(既出)

最近、新東宝の作品に縛り映画が多いが美空ひばりの「鬼姫艶録」では築紫あけみと花岡蘭子が縛られる。(既出) また「龍虎の決戦、桂小五郎と近藤勇」でも築紫は、勤王の志士の恋人になって捕えられ、後手縛りを見せながら引かれてゆく。明智十三郎が勤王のスパイとして捕えられ、相当きびしい拷問を受ける。これが築紫だったら……。

築紫と共に縛られ女優のベテランは宇治みさ子である。「妖雲里見快拳伝」で大塚信乃の恋人浜路でよく縛られる。助ったらまた縛られるという縛りの連続である。牢屋の中へ縄付きで押し込められ、牢の中でも縛られている。つらいことだ。「このいましめをほどいて下さい」と哀願するところも中々可憐である。

手帖雑報欄

沼正三

一三七 榎本正人の漫画「人類の末裔」(文春漫画読本14)他、星人の家畜たる人類という主題については手帖第八十三、四項で詳説したし、家畜人やブーもその変形だが、これは、そのものズバリの人類家畜化小説的漫画物語である。人類が水爆で滅亡した時唯一

人残った男がウエルズの火星人を範にしたらしい吸血宇宙人類の家畜となり、繁殖させられ、労働家畜になり、更に今迄の食糧動物に代る彼等の食用家畜になる。残念なのは、宇宙人との混血で下半身がタコ見たいになってることだが、他は先ず満足すべきもの。是非

一見せられよ。

一三八、ヴァージル・パーチの漫画「肉体ポートの具合はどうだい」(同誌)

男の身体をポートにして女が漕ぎ廻している。女を馬に譬えた時代が去った如く、舟に譬えることも難かしくなってきたのである。昭和初期の雑誌に、「痴人の愛」を踏え「海辺のナオミ」と題して、海水着の美女が、木馬型のゴム製浮袋の馬に乗る代りに肥満した男に跨って水上遊歩している図があったのを

思い出す。ヤブーの近稿参照。

一三九 川島郁夫「銀色のばら」(探偵実話二月号)美貌の人妻が云いよる青年を殺すのに、先ず盥に湯を汲ませ、彼女の足を洗わせる。それから、云いなりになるのを利用して後手に縛り、盥に顔を突込んで溺殺する。自分の足を洗った水を使う点マゾ的でいただけ。

一四〇 野田開作「艶説一寸法師」(あまとりあ選書)お伽噺の一寸法師は公卿の奥方の性的玩具となっていたとし、彼女にそう使われることに彼自身も被虐の喜びを感じたと見たもの。ヤブーの第十章三末尾のトンネル虫と同じ小人妄想。分析的には子宮内願望の現われである。

一四一 クラフト・エビング著平野威馬雄訳「変態性欲心理学」(世界性学全集)原著は「性的病心理」として手帖に度々引用した立派な本だが、この訳は無責任非良心極まるもの。単なる誤訳といえないデタラメさなので、昭和日本にこんな学術書翻訳を罷り通らせたくないから、ヤブーを書き上げたら、徹底的にそのインチキぶりを曝露する一文を草することを約束しておく。

一四二 「ドイツ文学辞典」の「ザッヘル・マゾッホ」の項 改版した『岩波西洋人名辞典』よりは詳しいが、いずれにも代表作「毛皮のヴェヌス」の名が逸しているのは大欠点

である。これは「カインの遺産」に含まれるのだが、それをあげた丈では不充分。極端に云うなら、毛皮のヴェヌス丈あげても良い位だ。これは性科学者の我田引水でなく、文学史的にそうだし、後世への影響も然り。ジョイスのユリシイズ中のマゾ場面「毛皮のヴェヌス」の語があるのを邦訳者がマゾッホと註するのを知らぬのも、こういう辞書の不備から来る。尚「コロメアのドンファン」という作のポーランドの地名コロメアをカロメアと誤ったり、舞台の帝王(マゾッホの場合は女王)を意味する「偽りの帝服」を「にせの毛皮」と訳しているのなど、原著(梨園生活を材料とする)への無識を示している。ドイツ文学辞典と銘打った本にしては物足りない

一四三 サンデー毎日新年号特集「清宮様」この号は天皇崇拜心理に結びついて好評だった由だ。私のような貴婦人崇拜者にも嬉しい。天皇家の女性は今迄国民にとって蔭の人であり過ぎた。美しく成長されて派手に国民に君臨される「日本のマーガレット姫」に、文字通り「日本の女王」になられる日を期待したい。

一四四 週刊新潮一月七日号記事「ブッフエンワルトの赤い魔女」收容所長の美貌の妻。マスチフ二匹を連れ馬に乗って駆けるのを愛した女性。囚人中いれずみある者は指名で殺してその皮を剥いで、ランプのシェードや手

袋にした。わざと囚人に肉体を見せびらかした奴を無礼者として処刑し、自ら二十人を射殺した。少女を徴用して性的に使用した(勿論C技巧A技巧のこと)。応接間には、乾し固めた犠牲者の首が四つ飾られていた。イルゼ・コッホという有名な女性だ。

一四五 マルキ・ド・サード「二つの試練」(『世界風流文学全集仏蘭西編第三巻』)

これは幻想の中に残酷を美化した珍重すべき文字で、殊に美女の驕奢に犠牲者の死が捧げられている点たまらない。巨人や黒奴の小人に奉仕させたあと焼き殺して平然としていたり、海戦の惨烈な状況に快哉を叫んだりする。家畜人やヤブーで私の描いた矮人決斗の幻想なども、系譜的にはここまで遡りうるであろう。

一四六 アポリネール「月の王」(『同全集仏蘭西編第四巻』)狂気の王の方が正しいと思われるが。この中にも幻想の饗宴の残酷場面がある。生きた牛を炙りながら食うのだ。又空気が掛ながら、一寸生体家具を思わせる様な便利な家具もでてくる。アポリネールはカドの後継者を以て任じた人だ。

号外 尚、手帖第二十五項で紹介した『山椒魚戦争』が三一新書と云う叢書中に入って再刊されているのを知ったから、新しい読者のため紹介しておく。家畜化小説として読むに堪える。雑報一〇二号の『青い小さな葡萄』も単行本になった。

続・潰滅の前夜

土 路 草 一

(晦冥の悲歌)

滝 れい子・画

△「潰滅の前夜」前篇（私は悪いことをしません）は本誌三十一年七月号並に八月号に掲載済△

△前 書△

図に乗ったと申しますか、「家畜人ヤブー」「黄色オラミ誕生」など、家畜化小説が本誌を賑わし始めましたのに刺激されて、私も続篇を書いてみる気になりました。

前記の作品は二篇共、マゾヒズム小説であることに、私なりに不満を抱き、サディズム愛好の一人として、女を虐めてみました。

併し、沼氏のような該博な蘊蓄もなく、真木氏のような大らかな文才のない小輩は、前篇との連がりを無理にこじつけ、ストーリーを無視して、責めの晦冥に沈んでしまいました。

只、私の空想の産物がサディストの方々の、共感をいささかでも得たとすれば、私として、これほどの光栄はありません。

(筆者)

(一) Y国視察団来訪

歸雲の間に、ぼつりと見え始めたゴマ粒のような点が、小豆大からみるみる拡大されて、やがてロッキード・エレクトラ・プロップジェットの機体が蒼空の中で、きらきらと反射した。

「間もなく、香港経由、パンアメリカン機が到着致します。」

ターミナルビルのマイクから日英両語のアナウンスが流れると、待期していた新聞記者連が一齊にざわめいた。

縦横に銀河のように走っている舗装道路、緑も鮮かに展がっている芝生、雄然と白銀の翼を陽に映えて上空を圧する巨体、そして耳底を聳する爆音。

行き交うは、パリのトップモードの陳列であり、金、緑、赤、黒の髪の色^{（ヘアーカラー）}の氾濫である。ロビーでは、ブロークンなイギリス語が投げつけられ、軽快な制服の足取りはアメリカニズムだ。東京国際空港（ハネダ・インターナショナル・エア・ステーション）は、絶え間なく激しく変動する世界の空気を反映する巨大な三面鏡であった。

管制塔の指示を待つのか、機影は爆音を遙か後方で響かせて飛行場上空を鮮やかに旋廻した。

やがて、コバルト空の一隅で陽雲をきつて下降姿勢をとると滑走路に向って突込んでくる。車輪が地に触れる。白い小さなパラシュートが、後尾で幾つか開いて、巨大で、スマートな、空の支配者は、ゆるやかに誘導されて停まった。

タラップが架けられる。柵が置かれて、緋のカーペットがくるくると繰出されてゆく。外相代理、貿易庁係官、日Y親善協会の役員。それに華やかな振袖姿の歓迎隊が圍繞する。機体の扉が開いた。報道陣のカメラの砲列が見構える。Y国工業視察団の来日である。

団長が気ぜわしように現われた。五十才近い贅肉を頬に垂らした小柄な男である。

タラップの途中で、ポーズを注文されると忽ち相好を崩して、片手を挙げ、愛嬌を振りまいた。随行は五人。中でも紅一点の女の随員は素晴らしい美人だった。

カールした額の下の瞳には多少陰があったが、彫刻を思わせる高く通った鼻、豊かな双頬、それを引締めている意志的な唇、支那服に似て、ピッタリと線を出しているY国服に包まれた成熟した肉体。

まだ、二十才になるや、ならずである。団長は、秘書ですと紹介したが、見る人に依っては彼女の方がリーダーのような印象を与えたのは皮肉であった。洗練された優しい物腰で、ステートメントの指図から、記者の質問に応えている団長に適当な言葉を与えたりして、終始にこやかに振舞った。

そして、潮時を見計ると大使館差廻しの黒いビュイックを連れ、風のように立去った。

「何者だい？ あの人……」

残された記者達にも、皆目見当のつかない相手だった。

(二) 謎の女登場

「見たことがあるわ、あの女」

痛々しく、左腕に繻帯を巻いて松葉杖をついている相木研一を見上げて、多穂子が云った。

「何処で？」

姿こそ衰えたが、消えていない不屈の意志を瞳の奥にきらめかせて、反問する。

「今誰だったか、急に思い出せないの、でも、あの顔には見覚えがあるわ」

その答えに研一はちよつと失望したようだったが、黙って痛む足をひいた。

「危いわ」

咄嗟にやさしく肩を寄せて、男の身体を支えようと多穂子は、共にターミナルの出口へ歩を運んだ。私の為に！ 多穂子はいたいたしく跛行している恋人の身体をシカに受けていると、胸の中に熱い固まりが湧いてきた。

あの時、多穂子は恋人の研一を信じてはいたけれど△機関の諜報員であるという彼の身分を知らない身としては一抹の危惧の念は消え去らなかつた。

特に、急に窓を遮蔽された時は、昂ぶる動悸に腰を浮かした。それを叱責するような隣席の男の眼に無情な酷烈を感じとって、ぞくぞくと身内を粟立てると、今度はピストルの乱射音である。坐席に突き伏せられて、シートに頭をつかえたとき、車はぎぎつと急停車するなり半廻転した。車が何かに乗り上げたのだ。反動で床へ転がり落ち、したたか背を打って気が遠くなりかけたが、意識の底で自ら励まして、縋りつく思いでノックを掴むと全身の力を預けてドアにぶつかった。

運のよかったことには、車は半廻転の衝撃から完全に立直ってはいなかった。ドアからそのまま舗道に投げ出されて二、三回、ごろごろと転がったが、運動神経の鋭い若い身体は無我夢の中でも、起き上る態勢になっていた。ピュンと耳朶を不気味な弾丸の音が掠めていった。多穂子の心は急速に萎んだ。駄目だ！ 膝の力が抜けてよろよろ二、三步のめった。その時、いきなり突転ばすように研一の身体が被って、耳元で消音拳銃の発射音がブスツと鳴った迄は知っていた。死線のきわに使い果した精魂は其処から記憶は断れて、気がついた時はベッドの上だった。

後で、研一が腕や脚の創傷にもめげず、多穂子に覆い被さって、狙い射ってくる弾丸を防いでくれたことを都田から聴かされて、莞爾としている研一の胸に取縋って、人前も構わずぼろぼろ大粒の涙を流して泣いた。

だが、その都田も彼等を追跡することが出来なかった。肩胛骨を拳銃で射ち砕かれた重傷の爲である。彼等の車はボデーばかりか、おそらくはタイヤ迄も、弾痕を印している筈なのに、神宮の森から影のように消え失せて、パトロール・カーの嚴重なる捜査網にも査として、その行方は知れなかったのだ。

本拠はこの近くに違いないのだ。そう思い至った時、突然研一の頭脳は外苑の蛸のような丸い建築物を思い浮べた。何の脈絡もない偶然の想像だったが、職業からきた第六感と云えば云えるだろう。

白昼堂々、情報局と偽って人を連れ出し、その車には遮蔽幕迄設備している。多穂子から訊き出して相手の態度、話の内容を検討し

てみても、其処には、何か、強固な、組織的な匂いがする。それと大東京の各地に突如として降って湧いたような放射能の混乱と恐怖。果して何者の仕業であろうか。

研一は負傷した身体が残念だった。出来れば、あの資源幹旋会支部を徹底的に探って見たかった。しかし、現在のところ上司に報告するだけの確証がある訳ではなかった。何とか早いうちに、確実な資料を握りたい気持ちで一杯だった。今日も、抜打ちと云っているY国工業視察団の不意の来日に、不審を抱いて、顔振れだけでも見て置きたいと、多穂子に無理をいって傷む身を病院から抜け出して来たのだった。果して、一行中に混った見識を持つらしい美しい女性、そしてその謎の女を、多穂子は見知っていると云うのだ。

研一の胸に不思議な闘志がむくむくと盛上って来た。

(三) 地底の檻

地底には昼もなく、夜もない。

壁全体、或は天井全体から発光する螢光光源が終日、輝いているだけである。

家畜にも昼夜の別はない。許されれば泥のように眠り、起されれば全身から汗を淋漓と滴たらせて苦悶する。地上の世界では今、太陽が舗道の敷石を灼いているのか、月が蒼白く公園の樹立にかかっているのか、この地の底では解らなかった。

家畜それぞれは又、捕獲されてからの時間を頭に刻むことは出来なかった。それは永い時間のようなでもあり、短い一瞬の悪夢のようなでもあった。苦痛だけを計算してみれば、人間の一生を描いても得られない程の数や量であつたろうし、救いだけを描いてる者にとつては、かりそめの悪夢としか写らなかつたかも知れない。が併し、秒針を刻む時計があつたにして

も、それは苦痛の分秒を数える苦痛しか与えなかつたろう。





飼育者達は昼夜の別を有している。

一走の時間眠り、一走の時間仕事をし、走められた休日と休息を持つ。勿論、全部が同じ時刻に寝み、同じ時刻を遊ぶ訳ではなく、四六時中動いている機構の中では、言うまでもなく交代制に依ってではあったが……。

彼等は眠って了ったら、所定の時刻迄は絶対に起きてこなかった。だから本来、捕われの家畜達にも苛酷な生活の連続に違いはなかったが、起床、食事、就寝の時間は規定されてあった。もっとも、そんなものは飼育者達の都合に依って勝手に組替えられたり、担当者個人の気儘の為に一片の反古にされて了うのも度々だった……。

例えば、その日の激しい調教が済んで、既に放りこまれた家畜が、吐息をついて疲れ切った身体を藁の中でまどろもうとしても、別の飼育者が急に面白い遊戯の思いつきから遊び道具にしようと考えば、即座に引ずり出して弄ぶことが出来た。

主人に奉仕することが調教の一大目的であってみれば、調教師は家畜達の体力を考慮の上黙認した。地上では、令嬢と呼ばれ、御嬢様と侍づかれていた高貴優雅な娘が、白磁の肌を曝して、後手に頂垂れ、小突き出される。

眠りと云う唯一の快樂迄奪われて、鉛のような足をよるめかしながら、哀憐の訴えを縋りつくような眼差しに見せて、人種の違った無頼漢達に翻弄されるのだ。

御法川伶子は、淡い寸刻の夢から胸が強く痛んで甦った。眼を開けると、助手が乳房をぐりぐりと踏みつけている。裏金のとがり肌を刺して、痛さに思わず顔を顰めると、

「膝立ち！」

命令が飛んだ。

躊躇を許されない家畜は、迅速に白い上半身を膝で折って、両腿を揃えて起きると主人の足下へ次の命令を待つ忠実な犬のように、両腕を後へ廻し上体をやや前へ傾けて蹲った。額に溢れる理智の光り、口元に漂う天性の魅惑、湖水のように深く澄んでいた瞳こそ潤んで曇りを見せているが、天稟の麗貌は訝々と黒髪の下に輝いていた。

太陽から遮ぎられた柔肌は、ぬけるように白さを増し、苛酷な勞働が脂肪を適度に落して、均齊のとれた肢体を、更に一段と引締った美しい品物に仕立てていた。鞭の柄がF三八七号の円い額を下から叩く。顔を上げて伏目になる。飼育者と視線を合わす罪になるのだ。だから常に口元位迄しか見ることが出来ないし、その上へ視線が行くときは眼を瞑らねばならない。

助手はほつれ毛が垂れている額を、ぐいと突くと、観念して仰向いた家畜の口へ鞭の柄をこじて差込み、轡の具合を調べた。

「よし！」

ぽんと頬を叩いて

「大野闘士が来ている。仕える」

F三八七号は檻から出されて、厩の脇に設けられてある洗濯室へ入れられる。

小さなボックスが幾つもあって、上部と脇三方から激しい勢で水が迸り出るのだ。伶子は緩められた手鎖姿のままで、銀色の生毛の覆っている全身に水を浴びた。身体を洗うといっても、縄をよじったタワシがあるきりだった。

自分の身体を自分自ら洗うことの出来る、僅かばかりの貴重な時間。よしそれが、縄のタワシであっても、それを最大限に活用して自分の身体を美しくしておきたいというのは女心であった。彼女は助手の眼を意識しながらも丹念に全身を洗った。

檻を出ると正式の家畜装具が装着される。例のベルトに後手錠、僅かな間隙の足鎖、鉄打ちの首輪。美しい畜生は、冷たい足鎖の音を灰色の壁に響かせながら、紅い乳首を大きく振った。

己れの所有者であり、異国人であり、人間である、嘗ての給仕大野六太の下へ、自由を奪われた、ソフトタッチな剃身で、獣並の動物として、女秘書御法川伶子は、じやれつきに行くのである。

(四) 家畜の訓練

額でノックして応答を確めてから、F三八七号はノックを口で廻した。

伏目になって、六太の位置を探し求める。例のドタ靴は、机の下にあった。

壁際に、白い、爪先立ちになって伸び切っているすなりとした女の足が、ピンクの爪をまるで、それだけが独立の生き物であるかのように壓撃している。家畜が吊し責にされているのだ。どういう罪を犯して、こんな苛酷な刑罰を女の身で受けるというのだろう。

呻きと錯乱の呼吸を無感覚になっている耳で聞き過して、伶子は驚るように膝行すると六太の裾の切れたズボンを豊頬で押し上げるようにして、毛脛に幾度も幾度も接唇をし、頬ずりをした。

六太は満足そうに微笑んで

「よしよし、靴下を脱れ」

F三八七号は白い歯で靴紐を解くと、踵を啜えて靴を脱がし、脂臭くなった靴下の締めゴムに唇をかけると、くるくると捲きとっていった。そしてスリッパを揃えると足の甲から指へ接唇を繰返した。

主人に好感を与え、愛撫されることが家畜の務めであってみれば、犬が鼻面をこすりつけるように彼女も又、教えこまれた動作を繰り返さねばならなかった。表情を押し殺していることが、一つの抵抗かも知れないが、主人の足指が垢で埋まっていると、踝が汗脂でべ

とついで、いようと自分の唇で吸わなければならなかった。

「仲々、家畜ぶりがよくなったな、だが、まだまだ良畜とは云えないんだぞ」

家畜は、こっくりをして、又煩ずりした。

「よしよし」

六太は足裏で、伶子の豊かに波打っている髪を撫でた。

伶子はその時、名状出来ない気持が走った。ほんの一月程前まで、愚鈍な給仕として追い使っていたその六太に今では逆に自分が家畜として訓練され、その家畜ぶりを褒められ、足で頭を撫でて貰ったことが、ほのかな喜びとなって胸を走ったのだ。勿論、以前だったら、そんなことは夢にも考えられないことなのだが、一度、人間を剝奪され、家畜としての苛烈な日々の生活を体験した者にとつては、このかりそめのやすらぎが、又となく嬉しく思ったとしても不思議はなかった。

「顔を起せ」

家畜は美貌を上げる。感じとったのか、主人は一瞥して

「嬉しいのなら笑ってみろ」

伶子の心は惑乱した。だが習慣づけられた家畜教義は、自然、笑みを頬へ浮かべた。淋しい弱りはあったとしても笑ってしようと、もうそれは生れついて持っていた卑屈な媚びと変りはなかった。笑が唇迄綻びた。

人間としてではない、家畜としての喜び、伶子の血も家畜としての思考を脳髓へ叩き込まれ、了ったのか。

「じゃ、喜んでみる」

伶子は途惑った。その意味が解らなかつたのだ。

「馬鹿！ 犬や猫がこうやったら、どんな顔をする」

六太は伶子の前へしやがむと髪を撫で膝で支え、白く透けている咽喉を、手荒く擦った。まるで猫の咽喉を撫でるように……。

擦られる痒みに思わず身をひこうとするF三八七号の頬に、激しい平手打を呉れて

「そら、眼を細めて、気持良さそうに……」

六太の言葉に乗って、麗しい動物は半眼になり、身体力を抜いて頭を主人の膝に預けた。上体がかしいで、腹部から脚が床に伸びる。Y国の闘士は面倒臭くなったのか、膝を外すと手を足に代えて咽喉をこする。

片方の足指で家畜の鼻面を押えたり、唇をいたずらしながら

「もっと喜ぶんだ。此処で笑うんだ」

と今度は眦を突く。難しい注文だった。

F三八七号は緩なす髪を床に着け、そのスイートな智貌を痴呆にして、この主人公に仕えなければならなかった。

二十二才の清楚な乙女の豊かな肉体は、その理性を喪失しては、まさに一疋の獣の姿を表現して横たわる。

年若い、にきび面のY国人は、その白い肌の後後に組まれた掌から腰部へと食欲な眼が、アラを探ぐってその視線を走らせる。

よし肉体は痴呆を粧っていても、誇り高い日本人の娘として育ってきた二十二年の才月は、心の中まで変化させなかった。先程の喜びを庄する屈辱が反抗の沸りを起す。

耳朶が羞恥を染めて屈辱に思わず目頭が熱くなった。

「やい！ 咽喉を鳴らすんだ。ごろごろでなくともいい、お前の鳴き方で鳴らすんだ」

伶子は遑る汚辱に声が噎れた。

「うっ、うっ」

「それで鳴いているつもりなのか！」

スリッパが顎を蹴上げ、煽肩に鞭が降る。F三八七号の頭脳は急速に猫の生態を描く。

「あう！ ああう！」

唇を半ば開いて、白い歯並の奥から哀愁の鳴声が洩れた。

「よし、手間をとらせやがって、よく覚えとけ、そら、こうして鳴くんだ。」

伶子は耐えていた屈辱感が鳩尾から胸元へせり上って来た。

『六太さん、許して下さい。お願いです』

そう言ったつもりが、嚙の舌を震わして

「あう、あうう、ううっ！」

鳴声が噛み殺した泣声に変わり、家畜の演技は脆くも崩れて、涙が一筋、糸をひいた。……が、それは罪に価することだった。猫と同列の動物が、猫と同じ動作を命ぜられて悲しみを見せると云うことは、己れをまだ人間だとしていることになるのである。

家畜には臉を濡らす自由さえ、咽び一つ泣く権利さえ、与えられてはいないのだ。

六太はそれを見逃す訳がなかった。

「伶子！ 悲しいのか、家畜の仕草をすることがそれ程口惜しいのか、ちよつと褒めてやるとすぐつけ上りやがって。いいか、犬や猫はお前の先輩なんだ。行動の先生なんだ。その先輩の動作をして涙を流がす、出来損い奴！ まだ家畜の心が持てないのか、そんなさまで、よく餌が咽喉を通るな。俺達は伊達や酔興に高い餌をやってお前を飼っているんじゃないんだぞ、馬鹿牝め！」

蹴転がされて、すべすべとした黒いなめし皮が白い皮膚に響をたてて炸裂する。びしっ！ びしっ！

マトモに、その痛打を全身に受けながらも、伶子は夢中で起き上って、給仕の足下に躰り寄った。だが、顔面を又足が突き飛ばす。F三八七号は怯まず、又打ち拉がれながらよろめき、ズボンに頬を寄せる。幾度もまつわりついて、接唇と頬ずりを交えた辞頭を繰返す。家畜心を逸脱した許しを請うには、こうするよりほか仕方がないのだ。そして許されなければ当然、激しい刑が肉体を責めるの

だ。

六太は面白半分に蹴りまくった。

秘書の清純な隆起が弾む、肉付きのよい腰部が床でひしやげ、太腿が宙を蹴く。

六太の心にも感情の変化が走った。

意識の隅には、まだまだ彼女に対する劣等感が抜けきっていないかった。目下だったと云うコンプレックスが反動的に知的な美しいものへの虐待というポーズをとっていたと云えるのかも知れなかった、が、今、その高貴だった筈の女が哀願を全身にこめて、自分の足下に平伏しているではないか、それを見ていると、完全に一匹の飼育物として手中に収めることの出来た優越感が湧き上ってくるのであった。

日天産業の社長秘書として務めていた頃は、潑刺と社内を歩き廻り、社の自動車を乗り廻し、社員達から美の女神と崇められていた女なのだ。シックなスタイルと育ちの良い聰明な魔貌で婦人雑誌の口絵を飾り、男達から憧れの対象にされた女性なのだ。

今、その衣裳を脱されて、只一個の純白で、豊かな肉体を黒い冷たい鉄枷で拘束され、可愛いがっていたつもりだろうが、又或る一面、それだけ蔑視していた薄のろ男の足下に猫のようにじやれついで許しを願っている。その惨めな姿体から、どうして、あの日の颯爽としたビジネスガールを連想することが出来よう。

六太の心に、改めて新種畜物の逸脱を責める憤怒が湧き上った。

「この牝豚め！ 知的で聰明？ こいつが？ 笑わせるなっつてんだ。足筋でも切りとって、四つ足にした方が似合う豚カスめ！」

鞭が、一しきり降った。人間心を出したミルク色の肌は激しい汗で銀蛇とくねり、転々と悶え、足掻いた。

「おい！ 伶子……」

と云いかけて

「そうだ、伶子なんて名がいけねえんだ。俺が後で呼名をつけてやるう」

F三八七号は歇んだ鞭の雨に、はつと胸を撫で下す暇もなく、

「伏せ！」

と命ぜられて、直ちに腹這いの姿勢をとった。だが、次に起ることにおびえている背で再び声がした。

「這え！」

家畜は両腿を鎖の範囲で屈伸させて、蛙のように壁に向って匍匐前進した。

赤い実をつけたような乳首が、ザラザラした床に擦れている。

「跳べ！」

飼主は鞭の柄を胸の高さで水平にする。家畜は上体を起すと脛を躍らせた。

空間にすれすれな孤を描いて、どさりと肉塊がコンクリートに崩れ落ちる。痛さが骨の髄を砕いて呻きが唇を鳴らす。しかし、それを辛くも耐えてその儘、伏せの姿勢を保つ。

「跳べ！」

無情な弄言が続いて要求する。

家畜は奥歯を嚙んで、跳躍の力を絞る。又、にぶく肉体のぶち当る音がコンクリートの床の上で響いた。

「それっ！」

六太は紫煙を輪にしながら、せせら笑って伶子の必死の躍動を見守っていた。

(五) 新入 家畜

壁際には入って来た時の儘の姿で、家畜が吊られている。呻きの声も低く、ぜいぜいとかすれた息遣いも弱い。足もはや、反復する力がなく、膝頭ががくがくと生気を失くしている。

「品物ってのは新品程丈夫なものだが、お前達の新品だけは弱くて駄目だな」

お蚕ぐるみの都会女の躰が急激な責苦に耐えられないことを伶子に云って、六太は新入荷畜に一鞭入れた。

「あ、ああっ」

新品家畜は咽喉を絞って呻めいた。

「こいつはお前の知合だ、昨日獲ったばかりだから、まだ餌もやってないし、眠らせてもないんだが、もう脈が細い。潰し肉用かな」
伶子の背を冷たい汗が一筋流れた。

多穂子？ 多穂子ではないか？

居たたまれない疑念と焦慮に半身を起そうとする。俯伏せの姿勢では見上げることが出来ない。だが飼主は邪怪に首輪を踏みつけたままである。

「勝手に動いていいのか！ 出来損い！ よし、同類を見せてやる、立て！」

F三八七号は敏捷に肢を立てた。

「あっ……」

それは日天産業のタイピスト飯田妙子であった。整った美貌ではないが、親しみの持てる愛くるしい容貌の純情な乙女は、円い鼻に牛のように輪を通して吊られているのだ。

どのくらいこんな姿勢で吊られていたのだろう、額一面に脂汗の玉を浮かべ、黒水晶のような瞳は虚ろな哀しみを籠め、鼻腔からは半透明な液体が唇へ流れ出ている。

小柄だが、凝脂ののった肌は、弾力を潜めて滑らかな光沢を帯びている。処女特有の締って膨んだ胸の双丘は、忙しく上下を運動し、腰から脚へなだらかに描かれたシルエットは極度な痛みに痙攣を搏っていた。骨が細いと云うのだろうか、むっちり肉付いた肩から胸はまるみを帯びたように豊かだった。普通突き出て見える鎖

骨をも包み隠して、餅肌だった。

六太はその胸と首の間へ鞭を当てた。

びしっ！

風が鳴ると妙子は呻いて、煽肩を振った。脳髓に突き抜けた痛みで、苦渋の顔が更に歪み、困憊した躰全身で恐怖する。

「もう一日以上、餌も水も与えて貰えない。眠ることも出来ないどころか、手錠に猿轡で喋ることさえ出来ない。おまけに、ずっと責められ通し、苦しみ通し。妙子、家畜の癖に人間生活をした罰かな、

はははは、これが家畜調教の第一課だよ」

びしっ！ びしっ！ 往復鞭打である。新品は臍腑から絞り出すような甲高い絶叫を轡の下で挙げた。

「ほれ、まだそれだけの声が出るじゃないか、まだまだ大丈夫だぜ」と正面に俯垂れている、ミス日天の額を小突いて

「これの今の動作を見たらう、あれが家畜の初歩の姿だ。素直な家畜にならねえとこれ以上の刑が待っているのだぜ。その苦しみをよく噛みしめて置くのだな」



伶子は、多穂子ではなかったことにほっと安堵はしたけれど、己の哀れた姿を晒したところと純真無垢な妙子の痛ましいまでの苦悶の表情に、石を呑んだような重苦しさが胸を圧した。

他の家畜達の喚きには慣れ始めたのに、妹と同年配の友人には深い憐憫が渦巻いた。思わず、蹲まると加刑者の足に、熱心に許しを懇望していた。

併し、これが順日を出でず、ライバル意識を有すようになるとは、なんと皮肉なこと

だろう。同類に一步でも遅れたり、主人の寵を失したりしたら直ちに刑が倍加されて肉体を責めさいなむ毎日なのだ。情誼や友情の一片すらもない畜生の世界なのだ。己れが出来ただけ苦痛から逃れようとするには、楽な使役を得ようとするには、友人であろうと、尊敬していた人であろうと、蹴落し踏みつける酷薄な生活態度を持さねばならない。又それが調教方針の一つでもあったのだ。

六太は、足下の伶子をちらっと見て、にんまり笑うとタイピストの乳房を掴んでひねり上げ、ビリウドの悲鳴を揚げさせてから縄を緩めた。

六太は机の下から黒いサンダルシューズを取り出してくると、二匹の愛玩畜に履かせた。見ると、土踏まずから踵へかけて、ぎっしり水盤のように針が植っているのだ。家畜は踵を靴底へ下せば、針は足裏を容赦なく刺すのだ。彼女等は常に爪先立で歩かねばならない。

「肢体矯正靴だ。来い！」

F三八七号は首輪を索かれてよろめいた。そして、立直ろうとして踵を下した途端、鋭い痛みが足の裏に起った。針に何か薬液が塗布してあるらしい。泌み入る激痛が背筋を廻って凍らせた。

「もたつくな！ 特別な御慈悲で日天の友達に会わせてやる」

誰だろうか？ 口をきくことは、器具で封じられている。眼で確かめるより仕方がないのだ。

明朗な仲好しは、畜類の契りを鎖で結ばれて、縛れながら足と膚に憐痛の色を漲らせて、廊下を歩いた。

(六) 女 諜 報 員

秋風。

灼けつくような炎暑つづきの地球の異常気象も、流石に十月の声を聴くと、ひんやりした風をその表面に吹き送ってくる。寛の水に

花卉が浮き、野山の樹枝は実で攪り、葉が色づきを始める。

変り易い空からは、時折、時雨が軒を鳴らして煙り、しとど舗道を濡らす。其処此処の幸福な子女達は湿った庭石に、飛沫く銀系に、そぞろ感傷のせつなさを流す。幽冥の門が近くに開いていることも知らずに……。

大東京も、その日は朝から雨であった。

放射能が都内の水道の蛇口から流れ出すに至って混乱は收拾のつかない喧噪の坩堝を招来したが、それは一時的な現象であつたらしく飽きっぽい都会人には、次々と報導される新しいニュースに関心が移っていった。

米ソの軍縮提案。日ソ復交交渉の妥結。

世界は急速に、平和への足取りを示し出したかのように、ジャーナリズムは書きたてた。

併し、放射能や原水爆戦争の恐怖が去ったわけではない。地球の南と北では、無警告の水爆実験が依然として続けられていたし、中近東では常に国境線で小競合が行われていた。

情報局は、めぐるましい謀略戦の渦中で、決して放射能撒布者の追求をやめてはいない。寧ろ、八千万の人命の為に、必死の搜索を継続していたし、相木研一にしても、不審なビル建物への挑戦を諦めたわけではなかった。

そして、その建物の会議室では、例の顔振れに、先頃飛来した工業視察団の一行を加えて緊張した討議が展開されていたのである。

「水爆攻撃の暫時延期は、先程話したように国際情勢の変化に基くものである。チトーとフルシチョフの握手は、ルーマニア、ユーゴー間の停戦協定となつて成立し、日本政府はソ連との国交を復活した。国際連合は次の施策として、東西両ドイツの平和選挙を打出し、ヨーロッパへ使節団を送っている。今、此処での軽拳は戒められねばならない。我国がそれ等を無視して東京攻撃を敢行したとす

ると世界は驚々たる非難を浴せかけるだろう。そればかりではない。国連軍が行動を開始し、我が同盟国は逆に鋒先を向けてくるかも知れない。我国は孤立、世界を敵とする危険を孕むことになる。それとアメリカ軍の動向である。ルメイ戦略空軍司令官が、去る八月の議会で言明した極東空軍の縮減が来月から実施される。ボーイングB52の改良型が完成し、航続距離が著しく伸びた。それ故、長距離爆撃機の基地をアメリカ本土周辺に置いた方が冗費節減と連絡の緊密という点に有利であることと、イギリスの要請に依ってNATOの増強を計らんとする内情の為だ。手始めに日本、朝鮮、続いて沖縄、硫黄島から引上げが行われる。我国に対する奇襲攻撃にとって、敵基地が遠ければ遠い程時間が稼げる。この撤退を待った方が賢明といえよう。これが第二の理由だ。第三は、十一月に行われる大統領選挙である、この間隙を狙うことを考える必要がある。……」

議長の重厚な声は、部屋そのもの迄引締めて、納得を求める眼が、鋭く、一人々に射込まれる。

「だが、早速廻しに行った攪乱工作、即ち、放射性物質の撒布は、日本の情報局を痛く刺激してやった。彼等は今、躍起になってその根源の搜索に奔走している。多少のことなら治外法権を楯に隠れることも出来るが、それでは彼等に、我々の仕業と教えるようなものであるから、なるべく自重が望ましい。今後は暫く極めて慎重に事を運んで貰いたい。それで高木君」

と議長は声を柔らげて、前列に位置していた飼育課長を呼んだ。

「家畜のことだが、一部、本国へ送りたいんだ。テスト品と医学実験用の要求があったんだ。それに今後、攪乱手段として家畜収集を東京だけでなく、全国的に広範囲に行うよう命ぜられてもいるので、場所が狭くなるからな」

と云い含めてから、謎の女性を引合せて、

「この女は、君も知っているだろう、V事件の立役者、リーレ・ルホーターさんだ。今回、君の仕事の視察と家畜の受領を兼ねて、日本の情報を探りに来られたのだ」

V事件とは、半年程前、第二次大戦後、Y国の領土となったV地区に起った反政府暴動のことである。学生のY人殺殺に始まったこの事件は、青年男女の結束に依って燎原の火のように燃え広がった。幾人かの監督要人が殺され、官舎は破壊された。

丁度、滞在中であったリーレ・ルホーターは直ちに諜報活動を開始した。彼等の同志と偽り、彼等と行動を共にしながら、次々と情報をキャッチして、破壊と殺人を未然に防いだ。

それだけでも彼女は政府部内で名が売れたが、もっと彼女を有名にさせたことは、反逆者に対する処置である。些かでも容疑のある奴は拉し来たって、眼を抉り、腕を切り落す残酷至烈な訊問を行った。彼女は平然と顔色も変えず、自らの手で昨日の友人の耳を削ぎ、爪を焼いた。そして罪の軽重を問わず、反政府的な志のある奴は、牛馬の如く屠殺した。

秋霜烈日。情け容赦の微塵もない大量処刑は、革命者を震憾させ、忽ちのうちにこの反政府的暴動を鎮圧した。この功は政府内に一躍、彼女の名を高めたのである。

絶世の美女で、二十才の色気をふんだんに発揮し、社交に優れた腕をもつ諜報員は、それを踏台にして乗し上がらないわけはなかった。たちまち、政府高官の人気者となり、強い政治的発言力を有するに至った。

「よろしく願います」

高木の方が、先に頭を下げた。

「私こそ、よろしく……」

女は軽く会釈しただけだった。男だったら傲慢に見えたらう。併し、婉然とこぼれんばかりの笑を籠めて、高木を凝視している彼女

は、役者が一枚上だった。高木の心に、上級者の位置を認めさせると共に、本国から挺身する者の威厳を植えつけることを忘れなかった。会議は、工作手段の討論に入った。

窓の下を、相擁した相合傘が通る。声高に笑いさざめく、ビニールのレインコートの群がゆく、青春を制服で包んだ女学生が、ハンカチで秋雨を避けて駈ける。

この中の一人でも、自分達に降り罹るかも知れない残酷な相談が、すぐ傍の建物で行われていると想像することが出来たろうか？
驕ては、恋人と引裂かれ、レインコートや制服を毛りとられて、弾ませている青春を暗い、果知れない泥沼で、呻吟せねばならなくなるとは、考えてもみたものがあつたらうか？……

(七) 家畜命名

「課長。これに名前をつけたんですが、彫ってもいいですか？」

伶子は廊下の途中で、片膝立になって、高木と話している六太の声を聴いていた。

「何んて、つけたんだ？」

「ペロと云うんです。僕のやった肉を、ペロペロ舐めていた恰好がよかったものですから、……それに、チンペロのペロでもありますし……」

「そっちは？」

高木は妙子を見て云った。

「まだ考えていないんですが、ボタッてのはどうですか？ ボタ餅みたいな肌ですからね」

六太は、真面目くさった顔で応えた。

「ほほほほ、ペロにボタ。いい名じやないの……」

Y国の美人が傍から妖笑を交えて、冷酷な言葉を入れた。

「本国から来られた視察の方だ」

と、六太の不審を解いてやりながら

「上手に彫れよ」

「何処、彫るの？ 此処へ並べて？」

女視察者は、手に持った燭やかな竹の筥で、F三八七と墨してある伶子の肩を突いて云った。

家畜の眼前で、赤と黒のタータンチェックのブリーツスカートが飄々として、ヘリオトロップの快い香りが、ふわりと漂った。伶子には忘れかけていた匂いである。たまらなく憧れに似た執着を誘った。どんな女なんだろう？ 顔を上げることが許されない家畜は、形のよい、ナイロソストッキングに包まれた脚とグレイのパンプスだけを凝視していた。

「いいえ、胸です」

乳房の谷間より、やや上部を六太は叩いた。

「大分、仕込がきついとみえて鞭痕があるけれど、いい肌してるわね。それに肉も適度に締まっているし、骨組みもいい」

女視察者は、鑑賞の眼を、伶子の肉体の部分々に注ぎながら、鞭で弾力を試した。

「上物でしょう」

と高木は鼻を蠢めかしてから、視察者の意図を計って

「仰向け！」

と美貌を鑑賞者の展覧に呈するのだ。

家畜の双眸に臍脂の上衣と真珠のネックレスが映じて瞼が閉じられた。

眉間が突かれ、唇を軽く打たれた。

「いい面だわね」

Y美人の声音が、凋れ変ったようだったが、

「後でゆっくり見せて貰うわ」

と高木を促して、靴音が去って行った。

二匹の肉塊は、装備室の定着機に、膝で折った上体を反らせて固定される。

六太は墨と刺針を持ってくると犠牲者の傍へ寄ってきた。

「ペロ。いい名だろう、視察の方も褒めて居られたんだぜ。呼びよい名だ」

飼育人は、下書した家畜の胸を、おもむろに撫でて、墨を含ませた針を純白な筋肉へ突き入れた。伶子は、頭を後へ垂れ、眼を瞑っていた。臉が開いていたにしても、人間感情を磨滅させられた心情で、白痴のように虚脱していたに違いない。

誇っていた均齊の曲線。自愛した絹肌の光沢。これが、もう自分の物ではないのだ。飼主の手で、勝手に焼かれ、思うように切り取られても、只黙々と捧げ尽してゆかなければならないのだ。

疼痛が疼き、唇が噛みしめられる。

ペロ！これが名前、ペロ！これが私を代理する名称なの、御法川伶子は何処へ行ってうの、あの誇りと良識の女、御法川伶子は、永久に去ってうのだろうか？

激痛が貫いて、四肢が固張る。乾いた荒い息が、肺腑を膨らませて、吐き出てくる。

もうどうでもよい。どうになとなれ、人間を抹殺された環境に居て、口惜しがること自体が、益々自分を哀れにするのだ。捨てちまうのよ、そんなもの。精神を肉体を執着するから悲しむのよ、そうよ、家畜になるの、本当に、心から……、そうすることだけが、私に喜びを知らせてくれるんだわ。

苦悶の蓄積に、狂乱した脳髄は、哀れな順応の理念を強いる。

衣服を纏い、手で好きな物を口へ運び、明るい笑声を上げていた地上の生活。人間の日常であったものが、復盆の希いに代り、不帰の憧憬に変じ、そして今は、人間すら喪失しようとしている。

私は、家畜だったんだ、人間として生きていたことが間違いだった

たんだ、だから、こんなに苦しめられる。人間を忘れるのよ。完全な、最良な家畜になるのよ、それだけが、私の苦しみを取除いてくれるのだわ。

六太に依って首輪を引かれ、髪の手を掴まれて、ぐいと鏡に正面させられる迄、伶子の頭脳は惑乱を続けた。

が、姿見に写る、胸の、暗紫色の太い字と鼻腔に通された赤錆の鉄輪が網膜に灼きつくくと、家畜の思考に関係なく、人間の悲しみがどつと襲いかかり、睫毛に露が滂沱と溢れ出た。

愛玩畜ペロと彫られた胸の上に、飼主の鞭が厳しい音をたてても、ペロは嗚咽を耐えようとせず、慟哭を続けた。

(八) 『畜体検査書』

演舞場に、二十数個の肉椅子が、十坪程の低い穴の舞台に向って、円形に設置された。膝を折った白い動物達の、嬌やかな腕を、後へ思いきり振り挙げ、別々に開いて、二本のパイプ棒に固定してある。足下のハンドルが、そのパイプを上下させる。

客の体軀に応じた高さを作る為である。

或る家畜は床で可憐な頬をひしやげ、或る畜生はふくよかな腿を引攀らせる。

リーレ・ルホーターは、中央の来賓席に華美なスカートを畳む。「御存知でしょうか？ その椅子……」

隣から高木が、Y美人を支えている肉塊を指示す。主客は腿の下になっっている黒髪を掴み上げる。

和歌緒鮎子。庶民的な美貌を以って、当代随一の人気を保つ映画女優である。無理に引かれた後髪に、丹花の唇が半ば開いて、舌袋が皓齒の内側で躍った。

「ええ、映画館ではね」

「こいつ、少し意地っばりな処がありましたね」

高木が鞭を鮮烈に鮎子の臀部へ斬ると、冷語を若やかな耳朶へ叩き込んだ。

「国の偉い方なんだ。お前の賤しい躰で、お受け申上げていることを光榮に思え、いいか、お前の骨が一本や二本折れても、出来るだけ、坐り心地のよいように、お支え申すのだ。」

此処では、日本の男女から圧倒的な支持を得ていた純情型も、一匹の獣類。Y国人を支える為に、背や腕が折れようと構わない一個の消耗品なのだ。乗せている相手が女性といっても、極限な姿勢では相当な重量である。脇腹が荒く蠕動し、娜やかな肩の附根が戦慄し、桃色の爪がパイプを握りしめて懸命に泳いでいる。

賓客は、深々と脚を組み替える。

氣息奄々、女優の背髄が軋んで、脆弱な背面が弓のように反る。端麗な腮から、匂やかな苦澁の汗がグレイのハイヒールの踵へ点々と雫する。

視察団長の椅子は、ミス・ユニバースに入選した有名なファッションモデルであり、高木のそれは、コンテストのミスである。それ等、時代の尖端を行く生活人は、前世紀人さえ知らなかった什器の暮しに転落させられて、磨かれたフェースを、整った肢体を、器具として使用されていたのだ。

Y女性には、膝の上へ御法川伶子に関する一件書類を展げた。

先ず『血統書』に陰のある眸を投げたが、やっばりと頷いて、頁をめくった。

『畜体検査書。』それには伶子の身長、体重、バスト、ウエスト、ヒップの尺度から腕の長さ、手は勿論のこと、足の指の太さ、爪の大きさに至るまで克明な記載があり、附随して、それ等部分々々の写真と切りとった髪の毛、爪、皮膚、及び血液、涙液、唾液、其の他をビニールに包んで添付してあった。

「色調Aってのは何ですか？」

質問に答えて高木は

「皮膚の色です。日本も東北系と九州系とでは肌色が大分違います。A B C Dと四段階に分けて感光器で計ります。Aは一番高い白さを表わしています。それに、伸度と云うのがあるでしょう？これは皮膚の伸縮度を示す数字です」

続いて血沈、血圧、レントゲンと内臓説明があり、能力検定の個所では、肉体各部の屈伸限度、走行耐久力を速度と距離と時間で表わし、負荷の耐久度は重量と回数、それに索引力、跳高、呼吸停止時間等々、実に微細に互って調べ上げてあった。

『調教日誌』では、起床時刻、給餌の時分と量、その日の鞭の回数と刑の原因及種別、課した労役の種類及時間、動作の良否等が列記され、調教師の馴致報告で終わっている。

リーレ・ルホーターは、読み進んでいた瞳をあげて、書類を閉じた。暗くなつて、正面に鉄格子の嵌っている、穴の舞台へ、強烈なライトが放射されたからである。

高木は、軽いが丈夫そうな金属の竿を客に渡して

「その手元の捲取を緩めて貰うと糸が出ますから……」と竿の説明をした。何のことはない、少し太い釣竿なのだ。不審そうに見返えす美眸を

「待って下さい」

と制して、手を挙げて指図した。

穴舞台には七、八匹の家畜が放飼されていた。

(九) 家畜釣りショー

伶子達は、穴の底へ跪づいて、肺臓を鳴らした。

妙子にしても、新しく捕獲されて来た日天産業の宣伝ガールやビルのシヨップガールにしても、四十時間を超える被虐の連続に困憊の極に達していた。快い安らぎも得たいが、それより欲しかったの

は水と食物だった。殊に水に対する欲望は胸を掻き走った。

灰色の壁に、幻覚が水を映す。或る者には水道の蛇口が見え、或る者には清冽な清水が流れた。咽喉は灼けつき、口は干上って、もう唾液さえ出さなかった。一掬の水に、総べてを放擲する心情。それが、昨日迄曝したことの無い嬶やかな肉体を、コンクリートに仆して息づいている家畜達の心情なのだ。

妙子がライトの眩しさに、眼を剝いた時、するすると上部から紐で吊られた。小さなポットが下って来た。思わず、腰を浮かしかけるとポットは少し傾いて、水が一筋の糸となって床へ垂れてきた。

「あっ！」

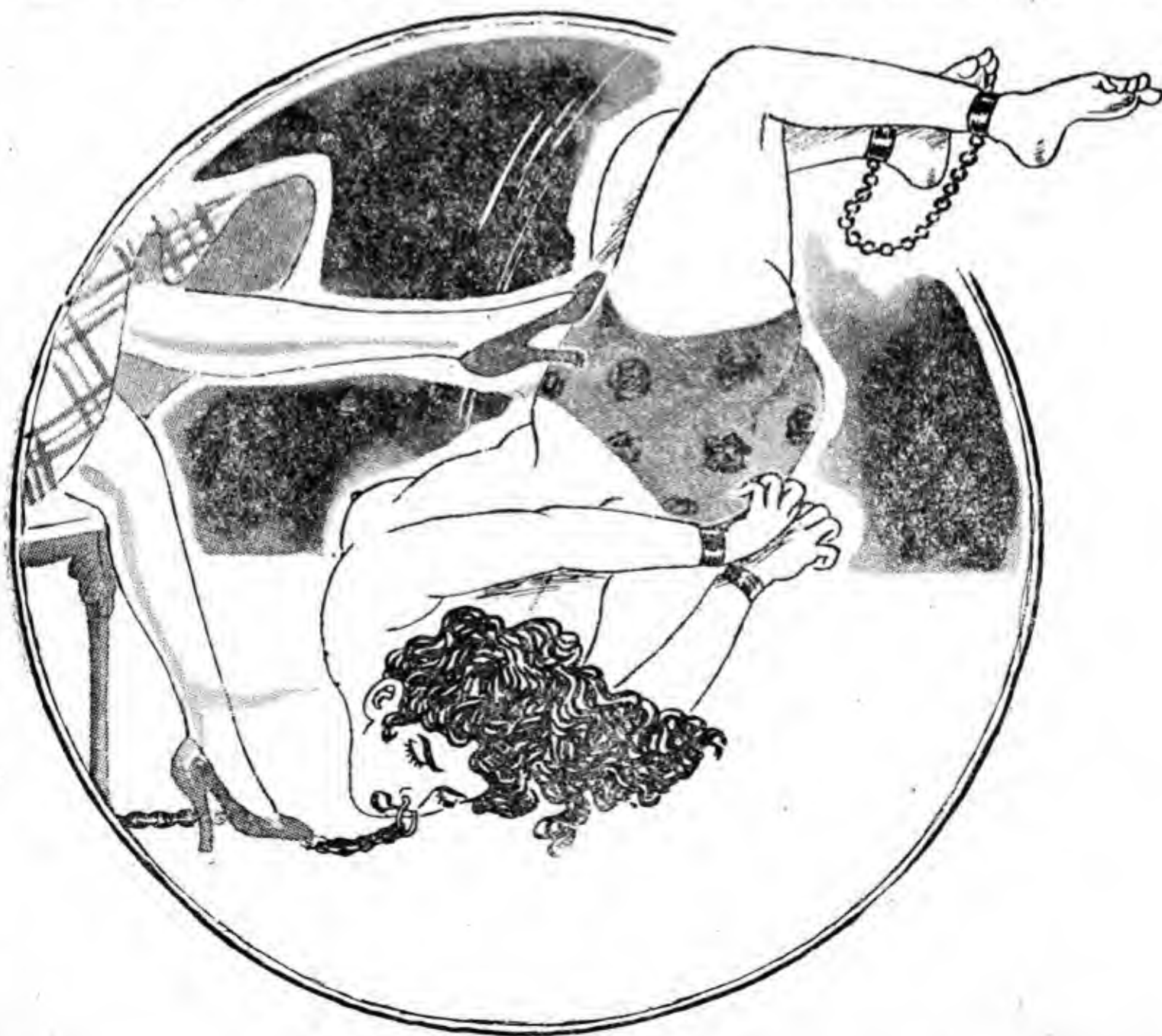
可憐な動物達の脛は、瞬間、床を蹴ると、頭上のポットを圍繞して、唇をびくつかせていた。それぞれ紅を刷き、形を競っていた魅惑ある唇を、からからに干割って……。しかし、それは小さなポットだった。一杯に堪えられていたにしても、其処にいる家畜一匹々々に預ったら、一含みの量にしかないであろう。

ポットが、すうーと上る。一齊に失望の色が眼を怨ずる。ポットが、横に移動する、白い群も肩を寄せ合って縛れる。再び下りてくる……

家畜は、瞳をきらめかせて一寸でもポットに近づこうと背伸びする。

又、左へ、そして右へ。だんだん下ってくる……。豊かな畜生達は、互に肉体をぶちつけ合いながら飢渴のダンスを踊る。

一しきり家畜たちを翻弄したポットは、今度は急速に



下りて来る。

「わあっ！」

餓鬼の一群は、争って他を押しつけて首を突き入れる。黒髪がポットの周りで轉めく。幾つかの頭が弾き出される。咽喉仏がもどかしげに動いた。宣伝ガールは、馬のように鼻面を差入れて舌を伸し水気を吸った。が、口辺を僅かに濡らしただけで、みるみるポットは乾いて、コンクリートの床に転がった。一旦唇を湿らされた渴慾は、反って胃の腑を沸らせ、夥しい渴となつて渦を巻いた。

ぐしやっ！ 格子から投げこまれた赤い水菓子が床で潰れた。一見すると、ボンボンと云う甘い水を砂糖の衣で包んだ菓子なのだ。はつと凝視する家畜達の面前に、ぶらんぶらんとボンボンが垂れ下る。

宣伝ガールが突進した。脇から駆け出した友達のシヨップガールを肩で突き飛ばして、誰にもやるものか、と、猛然と跳躍する。

今までは恋を囁くことしか知らなかったであろう紅唇を、餓狼のように引開けて。

が、一瞬、菓子は手繰り上げられる。空しく、虚空を噛んで、重心を失った肢体は惨じめに転倒する。落胆と打痛に胸を喘がせて、寄せた眉根の前に、小馬鹿にしたように又、菓子が浮んでいる。飢餓本能が奔騰して、人間の嗜みは泡沫の如く消し飛ばされた。憤然立上ると驀進した。馬が、鼻先に人蔘をぶらさげられて走るように……。

いつの間にか、一匹に一ヶ宛の菓子がそれぞれの鼻先にぶら下つて良識ある肉体に、悲しいロックアンドロールを踊らせていた。伶子も、その内の一匹だったが、彼女には演技があった。飼育された経験から其処に罠のあることを推理した。照りつけられて、ライトの後方は見えなかったが、気配は、家畜達の哀れな踊りを観覧しているらしい。狡猾なY国人達は又、それだけで満足するような種族

ではないことは短いながら極端生活で学び取っていた。

だが、知っていたからと云つて、不貞くされて、菓子を追わなかったらどうなる？ 飼ひ慣らされた習性は、やはり餓鬼のピエロにならなければならなかった。哀れな名演技を尽くして、観客の喝采を浴びねばならなかった。

家畜ボタは、渾身の力を振るつて、小柄な肢体を跳ねた。

ばくっ、甘い菓子は、見事に歯に喰まれた。ああ、食べられる。ボタは努力が報いられて、全身の力が抜けた。水気が口中を駆け廻るかに思えた。その瞬間。口中が凄まじい痛みに襲われた。

美味そうな砂糖に包まれた内部は、精巧なバネ仕掛の器械だったのだ。噛まれた力で留金が外れ、バネが猛烈な勢いで撥ねると要所へ小さな針を立てた。針の長さは、六、七耗で傷は大したことはないが、それが植わっている圧え金が、上下歯の内側を烈しく圧迫して刺さり、犠牲者の口は、顎関節の極限で開き、塞ぐことは勿論顔を振ることさえ、出来ないのだ。

シヨップガールは、釣糸をぐいと引かれた。

「あっ！」

哀れな悲鳴を挙げて棒立ちになる。

前後左右。釣糸は自在に魚達を泳がせる。人魚達は、灰色の釣堀を足の指先に必死に力をこめ爪先立ちになって、喘ぐ。水気のない瞳で咽喉の筋肉を痙攣させながら……。

先が鉤になった細身の鉄棒が数本下りて来て、家畜達の髪や首輪に引掛ける。女釣師は、暫く伶子を操つて楽しんでたが、舌袋を留めている口中の金具に、鉤を掛けると、手元の歯車を廻した。家畜ペロは眼を閉じた儘、色調Aの肉体を、新巻鮭のように身動きもせず、吊り上げられていった。

鉄格子の上部で、白い肌の魚達は、痴愚の如く腮に涎を流し、魚尾を跳ねる気力さえ無く、伸びきって揺すれていた。

家畜釣りのシヨは終わった。客席がざわめき紫煙が立籠めた。

観客達は芳醇な酒に舌鼓を打ちながら、家畜達の渴を顧りみようとしない。傍には冷えきったコーヒ―茶碗が打ち捨てられてあるのに。

(十) 伶子の驚愕

グレイのパンプスに、鼻鎖を鼻先で踏みつけられて、伶子はお辞儀をしてるように尻を高く持ち上げて伏せていた。

靴皮が匂って、縫目の糸が白かった。頬に当たっているコンクリートの冷さが、十月の冷気を肌へ送って、身震いが出た。

「これ達の既暖くしてあるの？」

Y美人は、その様子を見て訊いた。

「どうしてですか？」

怪訝そうに管理人は問い返した。

「寒くないかと思つて……」

「憐憫ですか、貴女らしくもない」と笑つて

と笑つて

「犬や猫が冬になったからといって着物を着ますか？ そりや猫は炬燵へもぐりこむか知れませんが、犬は返つてはしゃぐものです」

「でも、皮膚が荒れないの？ それより、肺炎などで死なれちゃ餌代が丸損よ」

「皮膚は覆うから弱くなるんです。常に晒して置けば、それだけの抵抗力を増すものです。眠る時は薬に埋めますから大丈夫です。それでも駄目な奴は仕方ありませんね。調教方針は心と共に牀と家畜にすることにありますから、弱い奴は医者の方針は心と共にして潰して貰うんですよ。それに、これからの気温では皮膚が荒れるどころか、却つて締つてゆきます。じつとさせとけば別ですが、どんどん動かすのですから汗も適度に流れますし、体温も調節

がとれてくるんです」

高木は己れが釣り上げたテレビスターに

「腰立ち！」

と命じた。ポリウムのある肢体は臀部を床に着け、両足を眼の高さに挙げて、平均体操のように腰で重心をとる。

「動かさない時、こういう姿勢をとらせるのです。これだと永いこと姿勢を保つ為には力を四肢に配らなければなりませんからね、さもない時は、膝立と伏せを反復させたり、足を伸ばして頭を足先へ持つてゆく動作を繰返させとくのですよ、そうすれば寒がりません」
テレビスターは彫像のように動かなかったが、背や腿の筋が引牽れてくるのがその表情からも読みとれて、呼吸が次第に速やまってきた。

女客は頷くと笑つた。

ペロや女優達は来るべき厳冬に戦慄した。地底だから、樹枝を震わせる木枯しこそ吹かないが、冬そのものが生命を左右する責となるのだ。今では衣服は手の届かない高貴なものとなり果てたのだ。ペロはいきなり脇腹を蹴られた。鼻鎖が踏みつけられた儘なので、鼻筋が張つて思わず

「むむっ」

唸り声を吐くと、どすんと横臥した。

「今度は右へ臥るの！」

女調教者は反対側の腹を打った。

ペロは食いこむ鼻輪の痛みに、又苦悶を咽喉で絞つてコンクリートへ肉塊を叩きつける。

「もう一度」

こんどは蹴られなかったが、家畜は痛みを耐えながらふくら脛を蹴き、鈍い音を床に響かせる。

「早く！ よしと云う迄繰返すのよ」

と高木へ向って

「どう？ こんな芸も面白いでしょう。ふふふ」と口辺を妖声で囁いた。

伶子の鼻から粘液が流れ出す、秒針の正確さにも似て、反転を回復する。理智の額が汗の粒を湧出させる。

ちらつと人気女優の充血した顔に、白く乾いた涙の痕を見た。だが、暗澹としたフエースである。お互いがお互いのことを考える余地のない苦しみの中で、二匹は二匹なりに家畜としての至情を尽して只、命ぜられるままに身体を動かしていた。

踏みつけていた靴が退った。虐待されていた嗅覚がヘリオトロップを嗅いだ。

「ペロ！ いい身体になったわね。あの時は痩せて、背ばかり高か

ったのにね」

「えっ？」

伶子は、驚きを洩して顔を挙げた。そして家畜の規範を無視して、憂愁の眼差しを美しい瞳に合わせた。

「思い出せないのかい？」

リーレ・ルホーターは、にんまりと微笑んだ。

「あっ！ 貴女は？」

と驚愕の声を舌袋に籠もらせて、伶子は芙蓉の眦を瞪った。

伶子の見知っている彼女は果して誰であろうか。高木は舞台へ向って、次のショーの合図をしていた。

(未完)

スクリーンで縛られた女優たち

△ 本号の口絵参照▽

千葉栄市

一、東映映画 「薩摩飛脚」

かねてより武器蔵に監禁されていた(花柳小菊)は、薩摩へ運ばれるため途中で暴れぬようにと後手に縛られた上、白布の猿轡までかまされ蔵より引出される。

☆

二、東映映画 「人喰い狒々」

狒々のいけにえのため(若水美子)は、大きなマナイタの上に縛りつけられ、悲鳴をあげぬよう口には白布の猿轡をはめられた可憐な花嫁姿のアップ。

☆

三、東映映画 「風雲将棋谷」

将棋谷の秘密を知る(長谷川裕見子)と(清水元)は黒頭巾達に、後手白布の猿轡でさらわれ蹴道人の前へ連れてこられる。猿轡のため物言えぬので恨みをこめた美しい瞳。

☆

四、松竹映画 「黄金弁天」

夫伝七に瓜二つの謎の男を尾行した(月丘夢路)は矢場の佝僂男(沢村国太郎)に発見され物置の中へつきとばされ、俯伏せに倒れる。両手を細引で後手に縛られ「私をどうしようって言うんだい」と叫ぶ口へ松葉散しの古手拭で猿轡をされてしまう。



【読者通信】

北原純子様へ、私は画も文章も深い事のわからない無学文盲の読者です。昨年の十二月号の読者通信の欄に、貴女の御投書が掲載されていましたが、其の一節に「私は病身なので何時も臥っていて」という所がありました。御病身故に、あの様な素晴らしい画や文章をお書きなさる事が出来るのでしうか。それにしても御健康になつて永くたのしく暮して下さい。貴女の御病気が如何なる種類のものか存じませんが、誌上で御一報なさいますれば、素晴らしい民間療法をお知らせ致します。実は僕も民間療法で健康体になれたのです。民間療法と申しますと時代遅れの感があり、今どきの若い人は一笑に附してしましますが、実は古

い民間療法には、近代的医学も驚く様な不思議な秘法があるので如何に非科学的でも時代遅れでも病気が直つて健康体になればよろしいのではありませんか。純子様是非くわしき御病気の御状態を御知らせ下さい。当方は民間療法の智識に精通しています。一日も早く御健康になられる様御願ひします。
(新津市 高崎勉)

前略、中康、田谷様始め賤機、岸田、瀬川、兵藤様など切腹グループの方々、如何がお過しですか。私は昔「切腹曼陀羅図絵」を書いた法谷です。あれ以来、ずっと読まして頂く側に廻つて居りました。が、復刊以来の奇巧に、切腹の記事が少ないのは誠に残念に思い、再び少しづつ編集部にお送りして見るつもりです。どうか皆様方も又、前の様に素晴らしい記事をお寄せ下さい。それにしても藤山様、貴女様は実に素晴らしい。飛行服以来、貴女のかかれる女性割腹の凄惨な陶酔美は毎号の白眉です。どうか今後も、悲壮な美しさに満ちた切腹絵巻を続けて頂きたいものです。私が、これから書いて見ようと思う物語りのいくつかは、貴女の氣にいられる様なストオリ

があるかも知れません。貴女の甘美なプレイに利用して頂けば幸いです。
(法谷四郎)

北原純子様、二月号の拙文「花嫁受難に寄せて」お読み下さいましたでしようか。甚だ失礼な事のみ書いて申訳ないと思つて居りますが、あの文でお願いしました事に就いて、御感想を伺わせて頂きたく切望します。尚、画帖又は色紙、掛軸等で、彩色の花嫁受難振袖姿の縛り美人面等を、描いて下さる御気持又は御計画はありますか？ 誌上発表が困難なら直接御作品を頒布して頂きたく存じます。何卒御返事を賜ります様。本田由郎様、貴兄は賣場演劇について非常に詳しく御研究の様子で、いつも敬服しております。今後は事後報告の記事だけでなく、同好者の鑑賞に間に合う様、予告又は速報して頂けないでしょうか、私は同好者による観劇会及び素人悦楽演芸会等を計画中ですが、貴兄の御協力が頂ければ幸甚です。御返事をお待ちして居ります。其の他同好会の皆様の御通信を御願ひします。何率よろしく。

○ (東京 笛地佐渡)

K・K一月号、十二月三日にいただきました。御無理を申上げて大変すみませんでした。出来れば再び直接購読したいと思つておるのですが、中々に思う様に行きませんので、何分共今しばらくの間はお許し下さい。さて一月号はちよつと低調でした。毎号読みごたえのあるものばかりにすることは無理だと思ひます。細く長く継続するためには致し方のないことと思ひます。本号で光つておりましたのは、北原純子さんの「花と朔風」弓鬼崇氏の「魔海の業火」でした。北原さんのは第一回目より中々迫力があります。次回が待たれてなりません。嘗ての松井籟子さんの如何にもゆつくり過ぎた作品よりは、はるかに実感がこもつております。二十七頁の挿画は、魅力的です。弓鬼氏の「魔海の業火」は海洋文学としても中々に素晴らしい作品だと思ひます。氏自身海員の方だと思ひますが、何かたどたどしい感じではあります。その生ま生ましい描写が、余りにも暗過ぎる傾向であるにも拘わらず、一応とにかく最後まで読ませる何かがあります。海員文学としても成功しております。京洛生の「大奥裸女血斗」は、短文ながら

佳作でした。中々に好きな書き方でした。藤山氏の「続々、乗馬ズボンの女腹切」は、少々鼻についた感じがしますが、今回ばかりは挿画の方がすぐれていた様です。読者通信で近藤一氏から過分のおほめの言葉をいただき、冷汗の出る思いです。私としてはこれがせい一杯でしたので、全く赤顔の至りです。又、兵庫T・T生から御注意いただきありがとうございます。今後共何分よろしく御教示下さいませ。尚、裏表紙のカットは、外国物は何か単調で物足りません。再び麗筆な北原さんの作品をお願いします。

(東京 東一郎)

☆読者通信について☆

○本欄は皆さまの交歓室として開放しておりますから御遠慮なくドシドシ御寄せ下さい。○本名住所等の秘密は固く守りますから御安心下さい。○只今手紙の転送は致しておりません。○本欄に住所氏名を發表される方は通信の末尾にお書き入れ下さい。發表してはいけない方は御記入しないで下さい。○本欄を通じての文通は各人の責任に於て直接して頂きたく本誌にての幹旋は致しておりません。

年か二十九年の本誌に多分この事件と思われる事が一寸紹介されていたと思いますが、二十五年の暮下関在住の十九才位の娘さんが、自分の家の家具類が税務署から差押えられたのを悲観して、その夜十一時頃、階下三畳の間で刺身庖丁で割腹、畳を朱に染めて苦悶中を家人に見えられ「早く殺して」とうったえたが直に病院にかつぎこまれて、生命危篤の重傷と西日本新聞に報道されていました。②太宰府近くの山中の石地蔵の前で三十五才位の女が、心臓を刺身庖丁で突かれて死んでいた。検死の結果自殺と判定された(西日本新聞)③福岡市の西にそびえる山のふもとに池で、二十二、三才位の男がカミソリで割腹した後はおぼろしくわがつかみ出し投身して死んだ(新聞名不明)④三十一年十月頃福岡市の人妻が精神に異常を來たし、発作的に自宅の表の板の間で

出刃庖丁で腹一文字に掻き切り、死んでいたのを家人に見えられた(朝日)この他、小生が海外で終戦当時経験したことを御知せしめます。(福岡 千原桐男)

○

鷹野めぐみ様。奇巧を読み始めてから三年程になりますが、今まで一度も読者通信になり、他の方に手紙など書いた事はありませんでした。が、どうしてもあなたにだけは書きたく思いましたので、ペンを取った次第です。あなたの書いておられます。サジスチンの半生記を興味深く読ませて頂いています。今後の続編を期待します。さて、ぼくは二十二才になる大学生ですが、自分がマゾヒストであると知ったのは奇巧のお蔭です。それからというもの、女王様の出現を期待しましたが、今日まで一人だつてぼくの願いを叶えて下さる女王様は現われては呉れませんでした。しかし、あなたの記事を読んだあなたこそぼくの理想の女王様だと思ひ、思い切つて手紙を書きました。新年号の読者通信に、平常は女らしさを失わず夜の時間に於てのみサジズムを発揮してゆきたいと書いていられたのを拝見し、強くその記事にひかれ

ました。ぼくも以前よりその様な女王様をあこがれていましたのであなたこそぼくの女王様となるべき人だと思ひ、あなたに白羽の矢を立てたのです。めぐみ様、どうかぼくの女王様になって下さい。あなたの奴隷になつて思う存分いじめて頂きたいのです。あなたの命令には絶対服従致します。足をなめるといわれればなめますし人間便器にもなります。この様にすべてあなたの思いのままに扱ふ事が出来るのです。あなたから見れば、ぼくはどんな男であるかと思われ、かもわかりませんが、決してあなたの期待に反する様な男でないと自負しています。あなたとぼくの距離は相当離れています。あなたがあなたの御命令があれば、どんな事をしても御足下に飛んでいきます。又こちらへ来ていじめてやろうと思われたならば、少なくとも御援助をさせて頂くつもりです。もし交際とまではいきませんが、逢う機会があれば文通だけでも致したいと思ひますので、御住所をお知らせ下さい。女王様、どうかこの哀れな奴隷の上に幸福を与えて下さい。様々お願い致します。まだまだ書きたい事はありますがこの辺でペンを置きます。

小生三十才の男ですが、幼い頃より切腹に興味を持ち、いくらかの体験もあります。これは別の機会として、最近五、六年間に当地方で行った切腹の事実を御知らせ致します。①これは御誌の二十八

(西宮 Y・T生)

○ 京都の益田愛子さんへ。KK十二月号一六二頁のあなたの文を読みました。私は人を打ったり苦しみたりするようなことは全く好みません。だからサディストではありません。けれどもただひとつ、花やかな和服姿の女の人が後手に縛られて正座している姿に、この世での最高の美を感じ、少年の頃から限らない憧れを抱き続けて来ました。どこも着くずれることなく、長袖、胸高帯、あくまでも上品に盛装した女の人であること、正座以外の姿勢をしていないこと、必ず後手高手小手にくぐられたとらわれのポーズであることが私の願いです。裸体は余り好きではありません。私は女の人の清潔な着物姿に心ひかれるのです。一度そのような美しいポーズを見せて下さいませんか。私は着物をきちんと着た女の人が、両手を後に廻されて、くぐられて行く過程の感触を味わうことと、そのあとの縛られてからの夢のように美しい姿や表情を眺めるといことが好きなので、それ以上の苦痛を与えたりすることはいたしません。それ以外のことに対して興味を持っていないからです。又、男性に対して

も全然興味がなく、むしろ醜悪さを感じるだけです。現在二十八才K大学院の学生で、来年からある大学に赴任することになっている者です。学問研究に追われていること、大学講師としての赴任が控えていることのために、私はまだ独身でおります。和文、英文、仏文など、どれも結構です。お返事を下さい。お手紙は必ず封書で下さい。家の者に私の性癖や心の秘密を絶対に知られたくないのです。(京都左京区下鴨蓼倉町十五、上野方 Y生)

○ 偶然にも奇クの復刊を知り思わず万才を叫びたくなりました。おくればせながらお目出度うをいまして貰うと同時に、関係者の御努力に感謝します。私は休刊までの奇クは全部取揃えています。又、フオトもある程度分譲して頂いて大切にしまっておりま。此の二年間、淋しく味気ない私の生活に奇クが再び姿を現わした事は、何と幸いな事でしよう。貴のフオト新種も数々あるとの事です。順次分譲して頂き、私の生活をより豊にしたいと思っております。又、豊かな女体に加えられる貴に

のた打つ女の美の極致をゆっくりとたんのうきして頂きます。京都の益田愛子様、十二月号の貴女の文を読み、私の胸は一人で高鳴りどうする事も出来ませんでした。私は現在二十八才の独身ですが、女体の責めには深い関心を持つものだからです。奇クの以前からのファンで、古川裕子様や羽村京子様の告白に感激し、又陶酔した事もあります。奇クの分譲フオトに胸を躍らせ楽しく過していたものだったのです。それが奇クの姿が消えたので、毎日淋しく暮らしていましたが、二年も経た今日、偶然奇クの復刊を知り、直ちに買求めた十二月号で貴女の告白を見つけました。それは偶然か、或は又何かの縁か知りませんが、貴女に会いたいと云う私の気持ちを、とうとう押える事が出来なくなりました。今度も又、私の胸の中では、貴女に対する緊縛と責めが始まっています。全裸にされ縛られ転がされた貴女を鞭打つ光景を、或は縄尻をとって引廻す貴女の姿を、私は胸に画いて居るのです。若しそれが現実ならどんなに幸福だろうと、ふっと夢からさめた様に時々考えるのです。随分失礼な事を書きましたが、私の

妄想としてお許し下さい。でも貴女と交際したいとは、本当の心からの願いです。若しそれが駄目なら文通だけでも出来れば幸せと思います。京都は私にとって懐しい土地なのです。月に一度は訪れる京都が、余計私を貴女に会いたいと思わせる役目を果たしているのかもしれないですね。

(東京 S・T生)

○ 私は昭和二十七年末より昨年の休刊まで、一号も残らず読ませていただき、又、本年五月に奇クの再刊を知り、続けて読んでいます。愛読者です。読者通信の頁は、全国同好者の動行を知る最も良い頁として、残らず読んでいます。しかし昭和二十八年頃とくらべて現在の奇クは読者通信はもとより口絵を初め本文は、以前の男性サジストに対する女性マゾヒズムが世の中が恐妻時代になるにつれ、奇クもその影響を受けたのか女性サジストに対する男性マゾヒズム化して来た事は、僕達男性サジストにとって悲しむべき事と思う。その中であって松井頼子、高村民子、宝塚二三夫諸氏の記事は、僕達サジズムの渴をうるおしてくれものと感じています。又、本

読者通信欄に同好の方の投稿を期待している一方、女性マゾヒズムの方の投稿、出来れば我々との文通をのぞみます。最近の口絵に北原純子女史の画が二枚程度しか載っていないが、四馬孝氏、瀧れい子女史の絵も毎月二、三枚づつでも載せて下さい。写真は休刊前とくらべて批評の余地がない程落ちていますが、以前までといかなくとも毎月四、五頁の緊縛写真又はその他に二度ほどありました。写真解説「縛り終るまで」「縛り方各種」の様な参考になる写真を辻氏の解説と共に載せて下さい。但しこの時のモデルは、ヌード又はパタフライをつけた程度が良いと思います。最後に京都の益田愛子様、私は現在四国にいますが、京都は私にとって深い縁のある地です。私は当年二十七才の独身です。貴女と文通したく思うのです。貴女の便りを待っています。ではとめどもなく奇巧を見て感じた事を書きましたが、悪しからずお許し下さい。又、女性マゾヒズムの方の便りをお待ちします。

(愛媛 T・K生)

三木恵子様。貴女の連絡場所又は住所をお知らせ下さい。私は常

に旅行に出る者ですが、お便りあり次第参上致したく存じます。

(広島県尾道市土堂町八三四

平野 茂)

先日お送りした画は如何でしたでしょうか。私はエキゾチックな感じのするハレムの踊りや女奴隷などの出て来る幻想的な砂漠映画に興味を持っています。数年前、見たアメリカ映画「アラビヤ・ナイト」をはじめ「砂漠の鷹」「アリババと四十人の盗賊」「スーダンの塔」「大城塞」最近では「バグダットの黄金」「四十人の女盗賊」でマリイ・ブランチャードがテントの中で柱に鎖で繋がれた場面などには異常な興奮を感じ、誠に焼き付いて未だに忘れられません。そこで女奴隷が鎖に繋がれ口に猿轡を嵌められ、諦め切った姿でハレムの柔いソファに身体を横たえている処と、お仕置台に鎖で繋がれた女奴隷の哀れな姿を描いてみました。

(増田進一)

奇巧の昭和二十九年からの愛読者である。諸兄諸姉の御仲間に入りたく思い、思い切つてペンをとった次第である。確か復刊第四号だったと思いますが、大阪市の田

中さんが書いておられたと同じ様な趣味を持つ者です。それは例えればサイコロをころがして奇数が出たら私の思う通りに、偶数が出たら相手の女性の意志に従うという即ちお互にその時と場合によりサジ的立場に立つこともあり、又、マゾ的立場に立つこともあるという他愛のない遊びである。その内容も病的なものではなく、お尻に口づけさせられたりお馬になったりお馬にさせられたりする軽い遊びです。私は五尺五寸四分十五ノ二、孤獨で内気です。相手の方の年令、職業、容姿は一切問いません。私のこの様な他愛のない遊びに興味を持たれる女性、又は御相手して下さる女性の方、本当は直接お手紙下さったほうがいいのですが、取敢えず来月号の読者通信でお呼びかけ下さい。お待ちしております。

(京都 藤村大造)

二月号拝見しました。前号の内容から推して、次号はと期待していたものが見られなかったりして残念に思うものもあります。多くの方々の色々の希望に答えるために、それもいたしかたありません。中々、甲斐氏のお説まことに興味深く同感でありました。ごく最近から貴誌を拝見し出したばかりで大きなことは言えませんが、リアルな真面目な告白や研究はもとより、以前の貴誌に見られたであろうようなよき創作も、許される範囲内でもっともっとと発展させていたいただきたいと思ひます。創作といいますが、昔は乱歩の探偵小説を愛読しながら「パノラマ島奇談」「大暗室」更に戦後の「影男」などの現実ばなれした夢の様な世界の中にも、何か心を満たしてくるものを見出したりしま

四馬孝・傑作集

『美しき女体家畜飼育室』

――潰滅の前夜――より▽(詳細解説は本誌九月号、十月号にあり)

(大中判印画紙) 焼付 八枚一組 八百円(送共)

した。そんな一面だけからみてもあの「潰滅の前夜」は、私なりに何か心の中にたまっていたものをばあつと発散させてくれる様な気で読ませていただきました。一月号の通信で土路氏は大変謙遜しておられるようですが、氏の文章、表現はとてすぐれた立派なものとして敬服しており、心に刻まれております。現実的なブレイも確かにとりあげられるべきでしょうが、これからでも許される範囲内で、そんなイメージを取り入れた「ホリ」の深いものが、どしどしとりあげられることを心から希望しております。そんな意味で先月号の通信の中の茨城H・U氏の御氣持にもうなずいております。古くから貴誌を知らなかったのは大変残念で、せめて「アリスの人生学校」「被虐の家」など、ひとときでも貸していただける方はないものかと思ったりしています。大変勝手なことばかり書きました。貴誌の御発展を祈ります。

(東京 大村生)

○ 我等に最大の幸福を与えて呉れる奇クに対し、深甚な敬意と謝意を表明します。さて二月号を愛読した感想を申し上げます。巻頭写真

の内「猿轡を噛まれた女優達」には最も興奮しました。和装女の責めの写真を毎号掲載される様熱望します。丘与志夫氏の「私は街の道化者」の文と画、白金紅次氏の「お妾アバート」の文と画、笛地佐渡氏の「私の縛り美五原則に就いて」の各篇は、殊に非常な趣味を唆られました。特にお妾アバート内の和装女の責めは良く実感が現われており、二、三回繰り返し熱読しました。この責めの細説は到底、拙作「女教員の責め折檻」など、その足許にも及ばぬことを痛感しました。同号中には他にも傑作が多数ありますが、充分愛読しております。今後とも「お妾アバート」のような文と画との統出せられることを切望して居ります

(和歌山 岸本青柳)

○ クリスマス・カール鳴り響く、クリスマス・イヴ、此上なきプレゼントとして貴誌を御恵与下さいまして誠に有難うございました。「電気責に関するノート」早速読稿送らせて頂きます。又、続けて色々の「責に関するノート」送らせて頂きますから、拙劣なものですが御誌面の都合で御掲載頂ければ、小生の喜びこれに勝るものは

御座居ません。本誌愛読者の皆様は、小生の足もとにも及ばぬ素晴らしい御自分のノートを御持ちですから、こんな記事は今更云われなくても良く知っていると御叱責を受ける事とは思いますが、もし御見落しのもので御興味を引かれるものがあれば幸甚です。皆様の御高評と御教示を御待ち致します

(甲斐仁参)

○ 六尺揮愛愛好者様、奇ク一月号で貴男の御返事に接し心から喜んでいきます。F・Aこと加藤千春の筆名で今後ともよろしく御教導下さい。「ふんどし会」結成の趣旨、全く賛同です。是非名簿の中にお書き加え下さるようお願い致します。さて諸兄には、六尺の結びこぶしについてお悩みのようですが私はそれを却って楽しんでます満員電車の中で美少年を見つけると、わざとその前に尻を向けて立ち、電車が揺れるのに乗じてふんどしの結び目を押しつけてやります。その時少年の顔に現われる反応をたしかめるまでの勇氣は私にはありませんが。……それから毎朝の用便後、如何に注意しても揮が汚れますが、その防止法をお知らせ下さいませんか。これが最大の

悩みです。最後に直木賞を受けた作家、今東光氏は昔から赤禪を愛用している由、朝日新聞十二月十日付六頁「素描」欄で読みましたお耳に達しておきます。(東京都神田駿河台局止 加藤千春)

○ 先日、某地へ出張の折、その市内の映画館に、十月号の古苗氏の締めつけられた女優たちを紹介されていたアメリカ映画「俺達には天使じゃない」がかかっているのを知り、その晩、最終回の上映にかけつけました。場末のむき苦しい館でしたが、映画のジョン・ベネットのホルセット締め自縛の場面は、彼女の苦しそうな声まであって、なか／＼真に迫っております。大いに満足した次第です。古苗氏の御紹介に感謝すると共に、このような場面集をも口絵としてとり上げて下さることを編集部へ御願ひしたいと思ひます。(阿川準)

○ 一月号の編集余滴に「流腸」の記事を載せてほしいとマニアから云われたり、或はその表現の難かしさについて編集子も云々されておりますが、たしかに流腸の記述は難しいですね。現在僕は灰色のノート2を書いています。時々

読みかえしてみても、浣腸なんてとっても馬鹿／＼しいような、吹き出したくなるような、そして何か淋しいような、丁度、プレスリーの「ハートブレイクホテル」を聞いていて、あれに近いもののようない感じがします。僕はノート2で、五月号のノートに書いた歴史とは角度を変えて、もっと浣腸の本質的なものについて調べて行く積りです。僕のじよ述が下手で読みにくいのに、岡山市の江根間さんから貰われて、恥しく思っています。ASさんにお答えします。モリエールの器具という本は、一八七八年出版のもので発行所はパリDamascène Morgand & Charles Fatout 原標題は L'instrument de Mo liere. Tradaction du Traité de clysterius de Regnier de Graab (1668) 一二八頁本です。残念ながら現在入手はちよつと困難でしょう。参考までにこの本には、浣腸器に関するエウモラスなカットが多数入っていますからいづれ奇巧に紹介させて頂こうと思っています。最後に僕は、浣腸に美しい夢をもたせるようなものを、浣腸愛好の方々から誌上に沢山発表されることを希望しています。(矢崎英一)

○ 私の今年の希望は、昭和十一年生れの女性で奇巧の愛読者と、文通或は交際する事です。なんとすれば、私は昭和八年生れで、相性の点で一致するからです。もつとも奇巧愛読の女性ならば、どんなでも構いません。心から信頼出来る方と、お近づきになりたいと念願して居ります。私は都内某官立大の学生で、色白、中肉中背で奇巧的感覚を愛しますが、アブノーマルの範囲には入りません。私がもし女性でしたら、進んでモデルになり、伊吹さんや春日さん等のように、或はもつと素晴らしい恰好で撮影をされてみたいと思ひます。私の唯一の願ひは、奇巧愛読の女性の知己を得、出来得れば相互ブレイや写真撮影を行つて、奇巧の一助に供したいと思ひています。個人的な御迷惑はおかけ致しません。都内の奇巧女性の方のお便りをお待ちします。必要金額は当方で負担します。奇巧的趣味を広い基礎の上に、暖くスムーズに育てて行きましょう。なお昨年末K・K生という名義でお便りを戴き、小生は既に帰省後であり転送されて来たのが一月一日でした。余り簡単な文面で小生甚だ不安で

す。小生は同性とのブレイは致し兼ねます。但しモデルとして撮影なさるなら、如何なる姿態にも応じたいと思ひます。K・K氏宜しく御了承下さい。では今年こそ奇巧女性の方の知遇を得られる事を望んで止みません。(東京都北区志茂町繁山方 園田晋策)

○ 池田文子様、十二月号読者通信欄の貴女の手記を拝読させて頂きました。「三角」のグループが五人も集り、互にその楽しみを語り合う欲びは容易に想像出来ます。私が女性のブロースマニアであるだけに、一属共感を呼ぶのでしよう。私には現在この悩みを打合ける友として一人もなく、唯、奇巧にそのなぐさめを求めております。女性と男性の性こそ異なれ、類似的な悩みと楽しみを持つ貴女と文通したいと思ひます。御迷惑でなかつたら御便りを下さい。読者の皆さんの中に共通の悩みを持つ女学生の方が居られるならば、是非交際させて戴きたいと思ひます。(名古屋昭和局止 関口喜良)

○ つのに引きかえ、男性のサジストの方の発言は非常に少く、我々愛好者には大変淋しく思ひます。奇巧の東京、友の会を結成する事に賛成の方、場所と時間とを決めて集ろうではありませんか。東京の奥田様、文通致したく思ひます。東京の近藤様、貴方の奇巧購入先の神田神保町の某書店は、私の奇巧購入先でもあります。乱筆乱文にて失礼。(A 生)

○ 毎々御願ひして居りますが、サドに関する読物の掲載は不可能でしか。近頃の御誌は購入するばかりで、読む気が起らないとはひがみでしようか。たまたまサド小説があつても名だけの内容物です。人間というものは、次々と強烈なる刺激を求めるものです。以前の御誌によつてサドを充分楽しましていただき、此れ以上の刺激を求めていましたのに、最近の貴誌には以前よりぐつと悪くなつたと痛感します。固定した読者を集めるのに懸命になつていられる様子ですが、貴誌愛読者の中にはサドが一番多いのではないでしようか。サドであれば私と同等の意見を持つて居るのではないでしようか。次に私の掲載していただききたいの

◎次号の本誌は三月上旬発売です

本誌は毎月上旬発売の予定です。三ヶ月分、半年分予約の方々は出来次第お送りいたします。毎月お申込の方は、中旬頃までに誌代のお送りを願います。

は、女同志のリンチ小説、即ち女
グレン隊、特飲街その他に於ける
一女性を、数人の女グレン隊によ
ってリンチされるといったもので
すが、これは御社は到底実現して
くれないでしょう。それで数人の
女達が一女性をいじめるといった
内容のもの、もう少し詳細に言え
ば、一女性を数人で組伏せ、馬乗
りになって尻を叩き足を広げると
か、其他、色々の方法を用いて苦
しめはすかしめる。そして復讐す
るといった小説もの。これも衣服
をぬがせるのが一番良いのですが
これもむづかしいでしょうから、
服はそのまゝでも良いと思います
十二月号に美女決闘場面アイデア
として可成りくわしく書いてあり
ましたが、これは是非実現してほ
しいと思います。その中で、一人
はプロレスを学び、一人は角力を
学んで決闘するといったものは、
是非長編小説にしてほしいです。
最後に最近公開される映画（エミ

ールゾラ原作ルネ・クレマン監督）
「居酒屋」というのがありますが、
その中で女同志の大喧嘩をやる場
面が出ていますが、これなんか良
い参考になると思います。以下そ
の解説を一部書いてみます。『彼
女は急いで共同洗濯場へ出かけた
しかし間もなくそこへ子供二人が
訪ねて来て、ランチュ（女の夫）
が荷造して出ていったことを知ら
して来た。彼女の家の通り一つ距
つた向いの家の女と一緒に出てい
ったのだ。そればかりかやはり洗
濯場へ来ていた女の姉ヴィルジニ
イが、底意地悪い笑いを投げかけ
たからたまらない。ジェルヴェー
ズが洗濯オケの水をヴィルジニイ
に思い切りぶっつけたのがきっか
けで、二人は取組み合いの大喧嘩
をはじめた……』このあたりの凄
さは、活字で説明するよりも写真
でとくと御覧下さいとなっていま
すが、写真を送ることが出来ない
のが残念です。ジェルヴェーズは

ついに相手を組み伏せて、洗濯棒
で相手のぶよぶよした尻を、力の
限り殴りつけて溜飲を下げたもの
の、服は裂け全身は濡れネズミの
まゝ子供達の手をひいて街を横切
って帰る彼女の前に、希望のかけ
らもなかった。以上がこの映画の
一節ですが、これをなんとかして
類似の小説を掲載してほしいので
す。最近の御誌では全然魅力があ
りませんが、以前を夢みて淡い希
望を持っています。

（奈良 大谷善一郎）

福岡T・O生氏、下関久野さん
私はふんどし愛好者の一人で、近
くに同好者を得たことを非常によ
ろこんでいます。特に六尺ふんど
しをぎゆうとした緊縛感、たと
えようのないものです。元来六
尺ふんどしは、日本人の生理的な
生活と歴史的に結びついたもので
す。最近では、これを日常身につ
けている人はありませんが、これ
は日本人の性的な目覚めを遅らせ
或は脱腸になる人が多い原因では
ないかとさえ考えられます。私は
最初六尺ふんどしをひとりで締め
て、鏡に写したりしていました
が、最近では銭湯で極く普通にし
められるようになりました。現在

晒のふんどしをつけていますが、
好みとしては豆しぼりの巾の狭い
ものをしめてみたい。しかし銭湯
では人眼をひきやすくなるので、
その勇気が出ません。又、ふんど
し一本の素裸で責められたい欲望
もあります。この様な傾向は、海
軍の二等水兵時代に極く自然に習
い性となつたものです。同好者の
方々と通信もし、お会いもしたい
と思つてはいるのですが、都合がよ
ろしければ住所をお知らせ願いま
す。それから編集部の皆様への御
願いとして、山口幸一氏の文章は
幼い日の郷愁のようなものを感じ
させて、好ましいと思つていま
すが、同時に、もう少しリヤリテイ
ーのあるものを載せて下さい。た
とえば徴兵検査の場面の具体的描
写や軍隊内の生活、検身の場面等
を素材にとり入れた実録に近いも
のを載せられたらどうでしょうか
それから女性のふんどしフアンが
多いそうですが、ちよつとグロ？
で私には全く興味がありません。

（下関 U・T生）

○「雪ちゃん」事件の概略だけを述
べさせていただきます。『お雪は
毎朝の行事の様になつてゐる母の
訪れを、恐れているかの如くさつ

きからそわそわ落着かなかった。その恐れている母の近づく足音と共に、おののく様にはつと戸口の方を見た。ガチャリ、鍵をはずす音と一緒に、開けられた戸口からにぶい光線が差込んで来た。「お雪出ておいで」冷たい声が室の周囲の厚い壁に当ってキンキンとひびく。室といつても物置小屋である。入口一杯に空樽が積み重ねられ、出口との間は完全に遮断されて居り、なんともいられない臭気が室中に充滿している。お雪と呼ばれた娘は一体どんな女であるか其れから説明せねばならぬだろう。お雪は本名を滝本雪江といつて十七才になる娘である。では其の娘がなぜ母を恐れ、物置小屋に押しこめられていたのであるのか？これには訳がある。雪江は妾の子である。学校に行かせるからと実父に引取られたが、実父は情けなどとは爪のあか程も持合せ様な父ではなかった。まして、本妻に至っては計り知れる。二人は世間の目をはばかり、雪江を前記の物置小屋に檻禁して終った。女中には「寝小便するから」ととりつくろい「若しこのことを他人にしやべれば承知しないぞ」とおどかし十年間、雪江を檻禁して、高窓か

ら差込む日の光で昼を知り、真暗になつて夜を知った。身にまとつた着物もつんつるてんになった。綿入れ一枚、冬には凍え死なかつたのが不思議で、真夏はいかばかり暑い思いをしたことである。食事の樽のすき間より差入れる握飯一個と沢あんが日に二回、其の後に茶わん一杯に水でこねた米糠を食べさせられた。これは脚氣にならぬためと無理に食べさせられた。こんな虐待のため、十七才といつてもやつと十二、三才の発育にしか見受けられない。さて、毎朝の行事である身体検査(寝小便)からはじまつて、若し粗そうでもしていれば、身の毛のよだつ折檻が始まるのである。以上が私の書こうとする「雪ちゃん」事件の前置きである。では其の内に投稿します。お楽しみにお待ち下さい。(屋行燈生)

二月号、お年玉として御送附下さいましてありがとうございます。表紙の素晴らしには全く目を見張りました。嘗ての旧号時代を思わせるかの感あり、内容も又ポリウム充分で、相当に読みごたえがありました。毎月、変化ある扉カットの新鮮さもKK誌独得の

ものです。二月号は体験告白特集となつた様ですが、とにかく息もつかせず読ませる何かがありました。南氏、甲斐氏、鷹野さん、藤山さん、菅野さんの手記は、夫々事実の訴えであるから、尙更に強く身近かに感ずるのでしよう。藤山さんが女の方であるとは全く意外でした。そういえば、少し詳しく過ぎる位女性の切腹を書いておられました。男の方ではこれ程詳細には書けないでしょう。岸本氏の提供された写真は、本文に発表されたものとしては意外に鮮明で決してアート版に劣りませんでした。このところ読者通信も、ふんどし愛好家のページで埋まつた傾向です。私もふんどしに魅力を感じない訳ではありませんが、少々片寄り過ぎた様子。スカートマニアの一人として、同好の方はどしどし本文に発表していただきたい女性自身の方の御意見を知りたいと思つてゐる次第です。(東 一郎)

鷹野めぐみ様、毎号貴女様の御実験記拝読するのが何よりも楽しみです。そして今までサド女性の方と御交際願つた経験のない僕には、貴女様に奉仕した少年達が羨

ましくて堪りません。日常は真面目な二十七才の独身青年です。一度お試しに御命令頂ければ、場所、日時を問わず参ります。お手紙お待ち申し上げます。(世田谷区野沢町一ノ二五五柳浦方中野行雄)

二月号拝見致しました。新年号二月号と、拙作を発表していただいた編集部の御好意に厚く御礼申し上げます。さて、二月号は女装愛好家にとつては、誠に楽しい作品で埋まつていたと思います。先ず第一に告白手記「我が異常性の記」(南時夫氏)は、いわゆる女装マニア心理の一つの新しい理論として、成程とうなづけます。しかし私の場合より見れば又、異論もありましよう。女装愛好はマゾでなくサジであるという点に対して、恐らく今まで「奇ク」誌上で発表されたその種の記事或は作品では、女装して女性に虐められたという人が多いいと思います。これは南氏の「女性である自己を男性である自己が虐める」という本質的と、サジストとは反するのではないでしょうか。しかし女装マニアはとにかく男娯行為を嫌い、求める相手が女性であるという点では、南氏の意見も一理あると思

います。だが更に女装によるマゾとしての、男としての社会的な無意識の特権意識（男性優位）或は潜在的な肉体条件を破棄する事によるマゾヒズム。大宰治の表現によれば、即ち「自虐」の精神があるのではないでしようか。勿論、南氏の意見は女装愛好者を一率にサジストと結論づけているのではないでしようか。これをそのように結論づける事は危険でしよう。次に女装の「女らしさ」として、和装より洋装である方がいいとの点に、和装愛好の立場より一言。たしかに洋装の下着類が、男性のそれと本質的に違うという現実的な女性感覚があるでしよう。しかし、それは和服の場合でも、お腰長襦袢、上衣をしめる数多くの紐帯、そして胸部圧迫の巾広帯の女性感覚は更に甘美なものと思えます。（だから女装しても帯をしめなければ女装の味は半減します）その上、洋装より和装の持つ利点は、色彩感にあります。原色の強烈な匂いは、まさに「ああ、この恍惚境」といえるでしよう。第三にフェチズムに関して、女装しようとする意志の働きはフェチズムにより発すると考えます。その代表選手としては越野義夫氏の

作品をあげましよう。街を歩いて、美しい女の着物をみたり或は洗濯場に干されている女物の着物をみて、「美しい、着てみたい」その心理には多かれ少かれフェチズムがあります。谷崎潤一郎の「秘密」の主人公の如く、あの美しい女の着物を着て歩く特権を有する女性に、羨望の念禁じ得ないのは敢て私のみではなく、女装愛好者の誰しもが持つ理想であると思います。だから女装愛好者というマニアは、サジとマゾとフェチとの妖しく織りなすエクスタシーを言うのではないでしようか。いずれにしろ南氏の作品は、私達に一つの新説を提供してくれ、楽しく拝見致しました。第二「きものシリイズ、お妾アパート」いつもながら作者の読者を引きずり廻す技量は、到底私の如きの遠く及ぶところではありません。本当に面白い作品でした。しかし一読後の残念感は一しおでした。何故なら私も同じ構想を持っていたからです。題も同名で事件も類似、所は山の手のアパートでの出来事。夕涼みしている私の顔の上に女性の下着が降り、届けた私も受取る女子大生も一言もなく真赤な顔……同じ構想でも書こうかと思いましたが

丁度十枚ばかり書き始めたところで氏の作品拝見、あれ以上のものは書けませんので諦めました。尙編集部及び堀田氏の御忠告、有難くお受け致します。私も形式よりも内容とは思っていますが、如何せん未熟なもので読者の皆様に御迷惑おかけ致しました。シナリオというものは、あくまでも映画化されてこそその本領があるので、即ちその表現はあくまでも視覚的に無駄な辞句は一切省略せねばならず、その点フアンタジックな利点はあっても、一つの描写には不利なものです。一〇〇枚の原稿よりもスクリーンの一カットの方が、より以上の表現をしている事は事実です。まあ今後書き続けますからよろしくお指導下さい。最後に女装愛好の皆様及びこんな男を恥しめ處めてみたいと思われまます御婦人方、御便りお待ち致します。（東京都豊島区集鴨三ノ一八 瀬川方 丘与志夫）

○ 設立の御企画を御持ちの御方が多いので、小生感激に耐えませんが。この際、煽情的な興味本位なものを排し、それぞれの趣好、専門により多少の差違はあっても、同好者が大きく団結し、研究を進めて秀れたものを奇ク誌上に発表し、奇クの発展と共に生長させたいと考えて居ります。小生は経済的に恵まれません、当分は暇がありますので、創立の走り使い等致したいと思ひます。小生のアドレは二月号の読者通信の最後にあります。甲斐はペンネームなのでA号生宛御手紙下されば幸甚です（甲斐仁参）

○ 多くの女装マニアの方の通信拝見して嬉しく思います。都下H町の見田様、一度お会い致したく御尋ね致しましたが、わかりませんでして残念です。貴兄と同じマニアではないにしても、誌友としてお話をしたく存じます。又、森本様、笛地様、私も女装マニアですが、是非共御手紙の交換や女装写真の交換などお願い致したく存じます。一、二月号では私の好きなグラビア写真や告白記事が多くなり喜んでみます。同好者より女装の貴写真の掲載を望む声が多い様

静岡の無声様、東京の大林生様始め読者の方々、良き新年を御迎えの御事と御慶び申し上げます。雑文にて皆様の御目を混乱させ申し訳なく、御高評恐縮致して居ります。笛地佐渡様始め読者クラブ

ですが、次号にはぜひ共お願い致します。女装愛好の皆様方の御便りをお待ちしています。(東京都下福生局区内本町九一 三光堂方野原多津)

○ H・共田様、お便りありがとうございます。ごさいます。意外にも共田様からうれしお便りを頂き、天にも昇る気持です。でもなんだか信じられなく、夢でも見ている様な錯覚さえ起しそうです。共田様の提案事項は、永年イメージに描いていた様な内容なので、大変満足に思っています。では、来るべきその時を首を長くしてお待ちしています。(藤田 修)

○ 月岡映子様、奇ク九月号に続いて二月号に放たれた「私の裏面の生活」は私をどんなに喜ばせてくれた事でしよう。全く五体の血が逆流して来る様な思いで拝見致しました。この種の女性の意見の数少ない、否、皆無に等しい時、敢然として発表して下さいた事は、

代理部分讓品総目録

新作発表!

御入用の方は八円切手封入の上御申込み下さい。お送りします。

本当に嬉しく心強い限りです。一月

月号の読者通信で「女性の輝美について」は女性の方の意見発表が多いのに、おしめに対しては意見発表がないのは不思議である」とありましたが、全く同感です。この種の発表は男性のみの特権でないのですから、もっと女性の方からの発表があつて欲しいですね。月岡さん、もっと女性の同好者の先輩をつけて下さい。そしてこの種のグループを作つて、楽しく語り合いたいですね。二月号の手記の終りにおいて話して居られましたが、私もこの種の蒐集をして居ります。交換願えませんでしょうか。絵画、フォト両方を持つて居ります。文通願えませんでしょうか。秘密は絶対厳守致します。当方の心配無用、いつお便り下さつても結構です。きつと月岡様に喜んでいただけるフォトがあると居ります。吉報のある事を御待ちしています。又、月岡様の住所をお知らせいただければ、フォトを御送りしても良いと思

つて居ります。

(S・A生)

○ 小生は、ここ数年間外地に居り最近、帰国した者です。帰国直後偶然に古本屋にて奇クを見つけ目下バックナンバーを揃えるのに苦心して居ります。現在まで約三十冊ばかり揃える事が出来ました。小生の最も愛読するのは、二十九年一月、五月に載つた乗杉貴代子さんの「ダイアナ夫人」で、これこそ全く小生の永年胸に抱いていた女性像です。「ダイアナ夫人」の未亡人の巻は、今迄掲載されていない様ですが、如何がしたのでしようか。今からでも是非載せて下さる様御願ひいたします。(ダイアナ夫人とその夫、山田大典氏との関係?) 余りはつきりして居りませんね。夫人は大典氏に関する限りは案外従順で貞淑な奥さんだったのではないかと、一寸不満(?)でもあります。尚乗杉さんと文通いたしたく思いますが可能でしようか。勿論、沼正三氏の手帖や、ヤブーも愛読して居りますし、真木氏の「オラミ」も大好きなものの一つです。同氏の旧作も愛読して居ります。森本氏の貴重な労作の「残酷なる女性達」を単行本で出せないものでしょうか。

——ヘーゲマンやカムの絵もいれて——。天泥氏の二十八年十一月号に載せられた手記は、短いながら優れたものと思います。馬場氏は、三十一年四月号以後ちよつともお目にかかりませんが、非常に残念です。鷹野めぐみ様、大いに期待して居ります。乗馬をなさる由ですが、どうかダイアナ夫人に負けない様に上達なさつて下さい。映画等の時評は「緊縛もの」のみ巾をきかせ少し憤慨です。原氏、春木氏、更に九雅氏の御活躍に期待します。又、大谷氏の「なめくじ」を愛読しました。以上くどくどと述べましたが、どうかお許し下さい。(東京 麻生保)

○ 奇ク新生満一年余、二度目の正月を迎え、其の間の充実は全く目ざましいものです。幾多の困難を克服これ迄に成りましたのも、一重に皆様のお蔭と厚く御礼申し上げます。本年も一属の御健斗を御願ひ申し上げます。(柳沢吉保)

○ 小生、廿三才のコプロラグニス、職業は喫茶バーテン。自分では言うのもおかしいですが、腕は一人前です。顔は老けて見えるので三十才位に見えます。皆より、リ

チャード・ウイドマーク（アメリカの映画俳優）に似ていると言われますが、若い女性の方で小生を便器として使用してみたい方、居られませんか。勿論、奇巧の読者である以上、責任は取ります。責任を取るとは、絶対に相手の方の秘密を守り、兎角、御迷惑を掛けない事を天地神明に誓います。誌上にて結構ですからお便り下さい。それから昭和三十年、四月特大号（第九巻、第四号）中の沼正三氏の手帖速報欄に「ソドムの百二十日」というのがありましたが、あの本の日本語訳は不可能でしょう。希望者もいると思います。何か何とか訳して発売して頂けないでしょうか。それが無理なら、訳して連載物として発表して頂き度いと思ひます。奇巧の発展と読者の御健康をお祈りします。

（東京 横山幹生）

○ 十月号F・A様。読者通信にて貴兄のお手紙よみました。よく「六尺ふんどし愛用生」です。あなたも、この方面について興味をおもちのようですね。御住所がどこかわかりませんが、東京近辺の方でしたら、お逢いしたいと思ひます。又、その外の方でふんどし

に興味をお持ちの方、お便り下さい。連絡先は二月号の百六十七頁にあります。（横倉輝男）

○ 毎日寒い日が続きますが皆様いかがお暮しですか、小生だいぶん前に少年矯正院体験記を書かしていただきましたが、その後同傾向の方がより詳しく又興味深く書かれますので毎月そのような記事がないかと奇巧を待ち遠しく思っております。こちらでは奇巧がなかなか手に入らず二月号も一月十七日に入手した次第です。那須不二夫様、十二月号のT市AK様、新年号の香川YO様、ぜひおつき合ひさせていたきたいのですが、連絡先教えて下さいませんか。うか、又同傾向の方ぜひお便り下さい。（嶽 収一）

△編集部より▽

○ 読者通信は出来るだけ多く掲載しておりますが最近印刷するのに不適當な文句を含むため没となるものが増えて参りましたので御注意願ひます。○ 執筆、寄稿家、投稿家の住所本名はお知らせ致しかねますが、御自分の住所氏名を誌上に発表されるのは差支えありませんから御利用下さい。

編 集 後 記

○ 本誌は復刊以来満一年有余、冊数にして十三冊目を迎えました。復刊号は必ずしも満了すべき出来ばえだったとは申せませんが、とにかく毎月刊行して刊行出来たということは、読者の皆さまと共に喜び合いたいと思ひます。

○ 清新で貴重な原稿も続々と机上に山積されていきます。編集企画に対する野心も漸次実現してゆきたいと思つておりますので、今後の内容については御期待下さつて失望されたいだけのものは揃えてゆきます。自画自賛ではありませんが、これだけの内容のものを毎月継続発行ということは、類似誌が続出しない点から考へてみても大変なことだ。貴重コレクションとして保存されても将来その稀少価値は増しても減ることはありません。将来一般市販になれば別ですが、目下のところ、極めて小部数しか印刷していませんので本誌の蒐集は誇つて賣つて然りであります。

○ 本号では土路草一氏の「続・濃蔵の前後」を玉稿落穂集はじめ三、四の原稿と入れ替へて掲載してみました。二回に分載の予定でしたが、次号でも原稿が編輯の模様です。一回に纏めました。本稿の反響如何で更に続編を構想中なので執筆したいとの筆者の言葉です。

○ 口絵では四馬孝氏、栗原伸氏の力作を得ましたが、この他にも休刊前本誌にて活躍した画家、或は新鋭画家の執筆希望の申出が続々とありますので、口絵に挿面に覇を競つて頂くことにしましょう。ようやく本誌も軌道に乗つて、場合によつては増頁も考へておりますから、創作はじめ告白体験といった面でも、従前の寄稿家の奮起が望まれます。

○ 南時夫氏の「我が異常性の記」は前月号のハ女装愛好Vに引続いて、本月号ではハフェチズムVに就いて書いて貰ひました。来月は完結としてハ女性のしほりVに關した長枚数のものを予定しておりますから御期待下さい。毎月出来るだけ広範囲に亘つて各種の傾向のものを網羅するよう努めておりますが、その月の都合により少々の偏向は御辛抱願ひたいと共に、そういった点のアドバイスはドシ／＼お寄せ願ひよう歓迎します。改むべきは躊躇なく改めますから。

○ 好評の「家畜人ヤプー」は愈々中盤を迎えて益々その重厚さを増して参りました。九雅氏の「特異な角度から」にはじまる各種の文獻紹介は、マニヤにとつては貴重な羅針盤になることでしょう。女中虐待事件の通信はこれ以外にも提供がありました。誌面の都合で掲載できませんでしたが、掲載洩れの十数篇と共に次号廻しとします。（三二・一・廿六）